

ナザリックらいふ！～愛され上司のすゝめ～

失望されないルプスレギナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転移したナザリツクに重役出勤（遅刻）したオリジナル至高の41人の一人が愛され上司を目指しながらアインズ様を支える話。

頑張った結果NPC達の忠誠心メモリグルグルはご愛嬌。

目次

プロローグ

処分されて異世界 | 1

皆様方の反応 | 7

ナザリツクと対面 | 13

メモリぐるぐる | 18

懺悔、あるいはプレイスタイル | 24

愛され上司への道

再起動ルプスレギナ、その後アルベドとの対話 | 31

一難去った後 | 39

牧場視察 | 45

アインズの狙い、その補強 | 53

効果への後押し | 60

今後の展望 | 69

人事異動 その① | 75

人事異動 その② | 82

人事配置決定、そして首脳会議 | 89

王都編

王都潜入 | 96

成長途中、そして拾い物 | 105

ロコモコの実力 | 113

智の化け物その片鱗と、残滓 | 123

ドア越しの思戦 | 131

ロコモコの仕事 | 139

一夜の決着 | 145

主会議、アインズ様いじる

渾身のおねだり

尽き果てるまでの心

ナザリツク整備編

プレアデス月例会議

リア充量産体制

模擬戦、必要な敗北

諜報部隊稼働中

ルプスレギナのある一日

教育方針

セバスハーレムなう

誰がための幸福か

立国編

その一歩

戦闘準備

蒼の薔薇戦

戦闘終了

ある詰ませ方

作戦の間

秀の証明

主の道筋

事、動く

漆黒という英雄

手のひらの上

共栄圏

341

333

325

315

307

298

289

282

274

266

258

249

240

228

220

212

204

194

187

180

170

160

154

プロローグ 処分されて異世界

「あー……クソ、痛てえどころか感覚無くなってきたぞ」

這々の身体で家に帰ってこれた、奇跡としか言いようがない。

とはいえ同僚たちから逃れきれたとも思えないしいずれすぐここに来て、改めて処分されちまうだろう。

これだから中間管理職ってやつは嫌なんだ、まして管理する側の管理職は。

いつでもトカゲの尻尾扱いされるなんてことはわかってたし覚悟もしてた、自分で誰かをそうしたことだってある。

だからこれは単純に順番が回ってきただけのことで、処分を下す側の人間だと錯覚していただけ。

「つたく、たまらねえ、よな……」

胸ポケットに手を這わせてみてもそこに期待していたものはなく、どうやら最後の一服も出来ないらしい。

「死ぬ、か」

現実感はない。

やっぱり他人事にしか感じられないのは、ここが自分の生きている世界だって認識が希薄だからだろう。

今の立場になってしまったことで、余計に生きる意味を見失ってしまったんだから。

「あーそういや……今日、だっけか」

ゲーム如きが生きる意味だったと言ってしまえば笑われるだろうか？ いや、多分モモンガさんは領いてくれるだろうな。

DMMO—RPG、ユグドラシル。

今日は、そのサービス終了日だったはず。

結局、変に立場ある位置に出世してしまったことで、出来なくなっ
てしまった。

仕事が落ち着けば必ず戻ってくるからという約束。

これじゃ結局果たせそうにもない。

「はっ、他に考えることはねえのかよ、俺ってやつは……」
なんと身軽なことか。

俺って存在は、死の淵にいてもなお、空っぽな人間で。

何かが抜け落ちていく感覚があることを不思議にすら思う。

「間にあう、かねえ……？」

何もねえ俺だ。だったらしつかり空っぽになりきろう。

戻るって約束、それ位果たして気持ちよく死のう。

そうして俺は。

「――！」

ログイン処理中、乱暴にドアが開かれた音を遠くに聞きながら、意識を暗闇に落とす。

笑い話だと思う。外にいるってことを実感した瞬間防護服を慌てて探そうとしたことなんて。

気がつけば外に居て、防毒マスクも何もない状態で。

ブラックジョークで済まないだろう、あの世界に生きていた人間ならきつと誰しも笑えない。

それでもすぐに笑えたのは横たわっていた大地で、自分を包んでいた草木のお陰だった。

「あー……何で生きてんだろ、俺」

ありえないくらいに澄んだ空気を、生で吸い込んで。

味なんてあるはずのないそのせいで無性に泣きそうになって。

「んで？　ここ何処だよ」

確かユグドラシルにログインしようとしたはずだ、成功したかどうかはわからんが。

それでもこの生きているって感触。こればっかは流石にゲームじゃ再現できないわけで。

「まああのクソリアルじゃなきゃなんでも、何処でも良いけどさ」

現状把握なんて出来ていない、それでも不思議と心は落ち着いている。

風の感触、地面の感触、全てがあたりえないからこそ、現実感がなさすぎて冷静になってしまう。

「つて……えっ？」

何気なしに伸ばした手。それに違和感を覚える。

さて、俺は俺のはずだけど。

この手は一体誰のものだ？

「っ!？」

慌てて立ち上がる。

周囲を見てみれば、木々たちに囲まれていて。

「か、鏡！ いや、水たまりでもなんでも——!」

慌てて自分の姿を確認できる何かを探す。

色々とおかしい、俺は、俺のはずだ。だって言うのにそうだと信じられない。

身体が軽い。特に力を入れて走ったつもりは無いのに、景色を置き去りにして。

危ないと思った瞬間木にぶつかっただけど、痛みを感じるわけでもなく逆に木をなぎ倒してしまった。

わけがわからない。

それでも頭にあるのは自分の姿を確認したいっていう気持ちだけ。

「あ、あつた!」

見つけたのは水たまり。

「嘘じゃん?」

水面に映った自分を見て、思わず呆然としてしまう。

「ロコモコじゃん……」

ユグドラシルで活動していた時の自分^{アバター}。

それがゲームでは浮かべられなかった驚きの表情で見返してくる。

「ありえんじゃん?」

いやいやいや。

え? ここつてばユグドラシル? マジで?

んなわけねえよな? 自分の感情をトレースして表情を作るなんざ無理だぞ? 思わずコンソールを呼び出してエモートしようとし

てしまうけれど、コンソールは出てこない。
どういうこと？

わけわからん世界にユグドラシル仕様で飛ばされたとか？ いや
そんなファンタジーやメルヘンじゃあるまいし？

「い、いや！ 待て、ロコモコだって言うなら——！」
種族人狼^{ワウルフ}は獣形態になることが出来る。

コマンドやらショートカットやらが無いから勝手がイマイチわ
らないが、とりあえず念じてみたり？

「うそん……」
なれちやつた。ロコモコ狼形態。
これで確信が一つ。

ここはまさしく異世界だ。どうやら俺はユグドラシルプレイヤー
のロコモコ^俺として、やってきた。

「ファンタジーやメルヘンじゃ……って、まあユグドラシルは大概
ファンタジー、か」

元の姿に戻りながら呟く。
確信を得たことで絶望が一つ。

「これじゃ、モモンガさんに謝れねえじゃん……」

確かにリアルじゃなけりや何処でもいい。生きていなくてもいい。
でも俺はあの間際、望んだことはそれだけなんだ。ただただモモン
ガさんに一言謝りたかったんだ。

嘘つきになつてごめんって。

「こんなの、ねえよ」

一体何が起こっているのかなんてわからない。
けど、もう謝罪も贖罪も出来ないって事実が、重く肩にのしかかる。

「ちくしょうっ!!」

八つ当たりとわかっている。
でも我慢が出来なくてそのへんの木をなぎ倒し尽くす。
望んでない。

こんな転移なんて望んでいない。

俺が、俺が望んだのは——

「ロコ、モコ……様？　ですか？」

「ああ!？」

「ロコモコ様！　ロコモコ様だ!！」

誰だよちくしょう苛立っている時に!

……つて、あれ？　見覚えあるぞ？

「……もしかして、アウラ、か？」

「はいっ！　アウラ・ベラ・フィオーラ！　御身の前に!！」

うえっ!?　狂喜乱舞してたと思ったら急に傳いて来たぞ!?

つーかNPCだよな？　なんで喋ってんの？　あれ？

俺に向かつて地面へ膝を付き頭を下げたままのアウラ。

なんかめっちゃうずうずしてるけど、いや、そうじゃなくて。アウ

ラがいるってことは。

「ここ……ユグドラシル、なのか？」

「それは、その、上手く説明できません……ごめんなさい。ですけど、

あの、ナザリックは無事です!！」

ナザリックが、無事……?？」

「っ！　モモンガさんは!?　モモンガさんもいるのか!！」

「はいっ！　ナザリックに居られます!！」

そうか……そうか!!

「アウラ!！」

「はいっ!！」

「連れて行って、もらえるか?？」

「もちろんです!!」

言うやいなやすぐさま立ち上がって。

「フェン！　おいで!！」

「お、おー」

地面を踏みしめて現れたのは上位魔獣のフェンリル。そういや
ビーストテイマーだったな。

「えっと、失礼になるかも知れませんが、よろしければどうぞフェンの
背に」

「……いや」

それに乗るなんてとんでもない。

「そ、そうですか……」

しゅんと落ち込むアウラだけど、待て待てそうじゃない。

「俺は、人狼だぞ？ 乗るよりも、一緒に走りたいな」

「あ……」

そう言ってみればアウラは目を再び輝かせて。

「はいっ！ ではご案内しますー！」

「ああ、頼む」

フェンリルの背にアウラが乗って、俺はまた狼形態になって。

一緒に森を、駆け抜けた。

皆様方の反応

伝言^{メッセージ}によってアウラからモモンガへと連絡が入った瞬間、精神沈静化が発動するより早くその場に膝を付き、流れない涙を心で流した。

モモンガが突然膝をついたことにアルベドが慌ててどうされたのかと問えば、噛みしめるような沈黙の後至高の41人の一人である口ココが発見の報せを口にした。

モモンガは万感の想いだった。

アインズと名を改めてから今に至るまでで、初めてと言っているだろうか。モモンガとして得られた喜びは最早言葉に出来ないものだった。

対象的にアルベドは複雑な思いだった。

ギルド、アインズ・ウール・ゴウンに対してではなく、モモンガ個人へ忠誠を誓い愛情を捧げたアルベド故に。

モモンガを苦しめる要因であるだけなら良かったのだ。

いずれあらゆる手段を用いてかつてのギルドメンバーの痕跡を消す。いや、自分で埋め尽くしてしまおうと考えていただけに、口ココの復活とも言える帰還は誤算だった。

「すぐに、ナザリック全てへ報せろ」

「はっ！」

守護者を始めとしたナザリック主要メンバーへと伝言を飛ばしながら。

——もしも、またアインズ様……いえ、モモンガ様を苦しめる存在となるのなら。

最大限、そうあって欲しくないと思いつつも、静かに心の中で決意を改めた。

その報せはナザリックを歓喜で震撼させた。

エ・ランテル等、現地存在に紛れ情報収集を行っていた者たちは途中であろうと仕事を投げ出しすぐさまナザリックへ帰還し、ナザリック内にいた者たちは感涙しながら迎える準備にあたっている。

「……デミウルゴス」

「みなまで言わなくていいよコキュートス。私も、言葉がないのだからね」

報せの真偽は確定していない。

しかしアウラの至高の御方達への忠誠を疑うことはない。

仮に万が一どこるか億が一。

偽報であったならナザリックにアウラの居場所は無くなるどころでは無いだろう。

誰かに操られた上での偽報であつても同じこと。

それはアウラ自身もよくわかつているし、わかっていることをよく理解している守護者達であるからこそ、十中八九至高の御方、その一人の帰還だと信じる事が出来た。

ぱたぱたと慌ただしく一般メイド達が準備に奔走するなか、デミウルゴスは静かに涙を流し、コキュートスは身を震わせる。

「ほ、ほんとうなの!? ロ、ロコモコ様が!」

「アウラを疑うのかい?」

「そんなことないっ! で、でも!」

いつもの口調をすっかり失ってしまったシャルティアがそんな二人へ詰め寄る。

喧嘩友達のような間柄であるシャルティアであつてもアウラの忠誠心を疑うようなことはない。

ただただ圧倒的と言える希望、救い。

それだけに信じたいが、簡単には信じたくないという二律背反を抱えてしまっている。

「わかる。わかるさ、シャルティア。私も、コキュートスも……いや、ナザリック全ての存在がそうだろうとも」

「アア、今マサニ、ナザリックノ思イハ一ツ」

早く迎えたい。早く真実であることを知りたい。

「お姉ちゃん……」

マールはそういつた思いをもちろん抱えながら、姉のアウラに対して嫉妬とも言える感情を覚えていた。

自分が真つ先にお会いしたかったと。

とはいえそれはもう少し全員が落ち着いていたなら感じる思いだろう。

先にその考えに至ることが出来たのは、姉が嘘をつくはずがないという信頼のお陰で、他の守護者含めた全員よりも幾分冷静だったから。

「皆、わかっているとと思うが」

「わかっているでありんす。わかっているだけに、もし私が無礼を働いてしまいそうであればその時は」

「ウム、ソノ時ハ即座ニ首ヲ刎ネル。逆ノ時ハ頼ムゾ」

静かに頷きあう守護者達。

無礼失礼が原因で再び身を隠されてしまうことなど何よりの恐怖だった。

神にも等しい御方たちの前で目を汚してしまうことも心苦しいが、それでも失礼を働いてしまった自分を許せないのだ。

つまるところ、守護者達は今日も平常運転。

何よりもあのロコモコである。

絶対に、無礼、失礼はしない、したくない。

ギルドメンバー達が創造した自分たちへ愛情を向けてくれた方には、絶対に。

「ルプー！ ルプスレギナ！」

「っ!? は、はいっす！」

ナザリック入り口でロコモコを出迎える栄誉を賜ったのはプレアデス、ユリ・アルファとルプスレギナ・ベータ。

ユリの声で夢見心地とでも言うべきかの状態から我に返るルプスレギナ。

「緊張する気持ちはわかります、ですが決して粗相のないように」

「わ、わかっているっす……！」

そしてルプスレギナを慮るかのようなセバスの声と姿。

こうして出迎えるのはナザリックにロコモコの装備が保管されて

おり、リング・オブ・アイنز・ウール・ゴウンも所持していないだろうからという理由。

そして何よりナザリック地下大墳墓は、アイنز・ウール・ゴウンは健在であるということもロコモコへ示したかったから。

自失しがちなルプスレギナに対してユリが声をかけるのはこれで何回目か。

普段なら呆れを通り越してこの場を辞させるどころか処分を検討するだろう状態。

しかしセバス、ユリ両名ともルプスレギナの気持ちはよく理解しているだけにこうして言葉だけで済ませている。

「……はあ。ルプー？ ロコモコ様に呆れられるわよ？」

「それはだめっす！ でも、でも……！」

ルプスレギナにとってロコモコは特別なのだ。

自身を創造した獣王メコン川を敬愛していることはもちろんであるが、何より自分を生み出した際に獣王メコン川はロコモコの意見を大いに参考にしたというのは周知の事実。

つまるところルプスレギナにとってロコモコは第二の父でもある。

それだけを考えても他のものより緊張する理由としては十分だが、何より接する機会が多かった。

さもすれば獣王メコン川以上に。同種だからという理由もあるのだろうが何かと世話をしてもらっていたのだ。

間違っても普段通り、気質通りになんて対応出来ない。

元よりそんな失礼をするつもりは無いが、自分のことは自分がよく理解しているだけに気が気ではない。

「む……連絡がありました。もうすぐ到着なさるようです」

「はい」

「ひっ……」

一つ深呼吸を入れて落ち着きを凶ったユリに対して、ルプスレギナは息を詰まらせる。

頭を駆け巡る言葉はもはや意味をなしていない。

再び会えて嬉しい気持ち。

絶対に失礼はしないぞと旗する気持ち。

そして獣王メコン川に対して抱えている愛情とは違う種の愛情を
持て余す気持ち。

「ロコモコ様！…ご帰還！」

「お帰りなさいませっ!!」

アウラの声が響き、自然に臣下の礼は取れた。

そして口から勝手に言葉が出た。

頭を下げているため、まだ顔は見れない。

見たくない、見たい。

葛藤するルプスレギナの心。

「あー……こういう時どうすんだ？ ええっと、なんだ。皆、顔あげて
くれよ。頭下げんのは俺の方なんだしさ」

「し、失礼いたしましたっ！ しかし、ロコモコ様が頭を下げられる理
由な——」

セバスとユリが慌てて頭をあげ言葉を口にしようとして、何故か途
中で止まる。

漂う沈黙。

そんな中、未だにルプスレギナは顔をあげられない。

早く顔をあげなくては、至高の御方が言っているのだから。

そう思っている、まるで縫い付けられたかのように動けない。

「ルプスレギナ」

「は、はい」

声は、ルプスレギナの頭上から。

ロコモコの影が頭へ差し掛かり、そこでようやく顔をあげられた。
「ただいま」

「あ——」

そうして直視した。

憧れ、焦がれ、帰還を誰よりも待ちわびたその人の笑顔を。

「——んきゅ」

「つてうお!? ルプス!? おい!?!」

ロコモコが笑顔を向けてくれた。

そう理解した瞬間、ルプスレギナは意識を容易く放り投げたのだっ

ナザリツクと対面

なんと言うか、なんと言うかである。

ナザリツクまでの道中、表情豊かに話しかけてくるアウラと相對してもなおいまいち信じられなかったが、どうやらNPCは自我だろうか、そういったものを得たらしい。

しかも向けられる感情がおおよそ敬意のようなもので、こそばゆいっただけ無いです。

ルプスが卒倒した理由はわからないけど、その様子を見て折角握手で身体を起こしたばかりのセバスとユリが再び平伏しだした時はマジでどうしようかと。

「モモンガさんに、色々聞かなきゃな」

「アインズ様もロコモコ様と同じ気持ちでございましょう」

目の前の扉を開ければその人がいる。

後ろに控えているのはセバス。ルプスはユリが何処かへ連れて行った。

と言うかアインズ様って。

多分モモンガさんのことを指してるんだろうけど、改名したのか？

理由を聞いても謝られた後、直接聞いて欲しいなんて言われるし。

うーん。

正直に言えばやっぱり引け目を感じている。

引退を明言したわけじゃなかった、けどサービス終了その瞬間まで結局顔を出せなかった嘘つきだ。

こうして何の奇跡か再び会えるわけだけど、それでもここはかつてのよく知るユグドラシルじゃあない。

「さあ、ロコモコ様」

「ああ。そうだな、俺らしくもない、か」

よっし、踏ん切りついた。

セバスにありがとうと言えどもつたいないお言葉ですなんて言われるし、多分どうあがいても今の所まともに話が出るのはモモンガさんしかいないっぽい。

そう腹を括って、扉を開けた。

「ロコモコ、さん」

「あぁ、モモンガさんだ。」

よく知っている、よく見た、その姿。

「……約束破りには、なってねえっすかね？」

「はい。でも、ギリギリですよ？ 次からは、だめですからね？」

気づけばどちらともなく近づいていて。

「はは、やっぱり骨の感触なんすね」

「ええ、アンデッドですから」

笑って握手を交わしていた。

「顔をあげよ」

玉座の間にナザリック大集合。

こうやって見ると迫力満点だ、なにせ多種多様にも程があるが様々な人間を除いた種族達が俺達に頭を下げている光景。

かつてのリアルじゃどうあがいても見られないわけだし。

「知っての通り、我が心腹の友。ロコモコさんが帰ってきた。まずはそのロコモコさんの話を聞いて欲しい」

うひい、一斉に頭が上がって視線がこつちに！

やばい、めちやくちや緊張するぞモモンガさん。よく今までその魔王

王ロール崩さずやってきましたね、流石ギルマス。

「最初に何より皆へ感謝をしたい。ありがとう」

言いながら頭を下げた瞬間場が騒然とした。

大丈夫、モモンガさんからある程度聞いてこれくらいは予測済みだ。

「こうしてアインズ・ウール・ゴウン、ナザリックが健在であること。モモンガさんはもちろん、皆のお陰だ。よく、やってくれた」

そこまで言ってみれば多くの目から涙が溢れる。

……いや、ほんと。忠誠心マックスも良いところじゃん。

「そしてその涙へ謝罪したい。急に姿を消してしまって、済まなかつ

た」

再びざわつく玉座の間。だけどまあ感謝も謝罪も素直な気持ちからなわけで、ここは譲れない。

「本来であれば、その涙はここに残り続けたモモンガさんにのみ捧げられるものだ。俺に対して向けて良いものじゃない」

「そのようなことっ!!」

声を上げたのはデミウルゴスだった。見れば他の皆も同じ気持ちなんだろう、同意の気配を感じる。

「ありがとう。だがいんだデミウルゴス。モモンガさんはギルドへ尽くし、俺は途中で途切れた。それは事実だ。理由はあるが、それは生まれから今までよりこれからも忠義を尽くしてくれる皆に対する言い訳でしか無い」

そう言えばデミウルゴスも他の者達も、何かを言いたげに、けど何も言えず唇を食いしばっている。

漂う沈黙を破ってくれたのはやっぱり我らがギルマスで。

「ロコモコさんは、敵と戦っていた」

「っ!」

モモンガさんに事情は話した。

仕事でしくじったこと、処分されそうになった中、最後にユグドラシルへログインしようとしたこと。

その上で、俺をどうするかはこの場で決めて欲しいと。

「敵は、強かった。それこそ、私ですら勝てないだろう存在だ。そんな強大な相手に、ナザリックへ迷惑がかかるからとたった一人孤独に戦っていたんだ」

「そ、そんな……!」

上手いと言う。

確かに、どうあがいても俺じゃ……いや、俺たちじゃ勝てない敵だ。社会の仕組みになんて、リアルで負け組と言われたやつどころか、たっち・みーさんのような勝ち組であろうと勝てない。

「そして今、絶望的な戦いからロコモコさんは帰ってきた。……私は、そんな英雄とも言える彼を再び迎え入れたい」

モモンガさんからちらりと視線が送られてきた。

——これが俺の答えです。

なんて伝えてくれる。

「だがこれは私の我儘だ、そう従えと命令したくはない。故に問おう、ロコモコさんを迎え入れることに異議のあるものはいるか？」

「異議など!!」

「そのような不屈き、不忠者はナザリックに存在しません!!」

「アインズ様万歳! ロコモコ様万歳! ナザリックに栄光あれ!!」

うわお……すんげー嬉しいけどなんと言うかカルティックで複雑だな？

いや、まじで嬉しいけど。

ああもう、モモンガさんもそんな目で見ないで下さいってば。

骸骨だろうとわかりますよ? それなりに付き合い長いんですから。

「重ねて、言いたい。ありがとう」

一歩前に出て感謝の言葉を。

そうすれば一層の歓声があがる。

「だが聞いてくれ、俺はやっぱ俺が許せない。皆の捧げる忠義に足る自分であるとはまだ思えない」

「そのようなことはございませぬ! むしろ我々がロコモコ様の敵へ共に立ち向かえなかつたこと、お許しください!」

あー……うん、なるほど? モモンガさんが困ってたのはコレか。

ならやつぱり、そうだな。

俺が出来ること、出来そうなことは。

「良いんだ。これは俺の我儘だ。皆の忠義はやはりモモンガさんに捧げられるもので、今はまだ俺に向けるべきものじゃないんだ。故に、これから俺も皆と同じようにモモンガさんを支えるもの一人として働く」

「いゝっ!」

大丈夫ですってモモンガさん、多分これが一番上手く回りますよナザリック。

「その働きを見て、いつか俺が皆の主、その一人に足ると確信できた時。そして俺が俺を許すことが出来た時、改めて皆の忠誠を受け取りたいと思う。だからどうか、共に居ることを認めて欲しい」

「あ、頭をお上げ下さい！ ロコモコ様!!」

うんうん、慌ててる。慌てるよねそりや。

モモンガさんが教えてくれた話と、この皆の様子を統合してなんとなく掴めた。

モモンガさんを絶対的支配者として君臨させつつけるためには、中間管理者が必要だつて。

居なくてもまあ問題は無いんだろう、主を疑うという発想を持ちえないのだから。

それを俺にも向けてくれるのは嬉しい。そしてだからこそそれを利用しよう。

他のギルメンがやってくるかはわからない。

サービス終了時にログインしていたことがこの世界へ転移する理由なんだとすれば、望みは薄いだろうが。

やっぱり俺はここが好きだ。

大切な仲間が居て、仲間が遺したNPC_子達が居て。

俺の人生の中で唯一楽しかった時間が詰まっている場所だからこそ。

「ここに誓おう。今このときより俺はアインズ・ウール・ゴウンの矛であり盾。アインズ・ウール・ゴウンとはモモンガさんと皆だ。ナザリックに存在するもの、全てを守り、全ての敵を打ち払うと！」

「」

一瞬の静寂。

そして。

「アインズ・ウール・ゴウン万歳！ ナザリック万歳!!」

静寂を割れんばかりの歓声が切り裂いた。

「……うらぎりものー」

モモンガさんの恨めしそうな声をかき消しながら。

メモリぐるぐる

これからのことについて話をすると玉座の間から出ていった二人を見送って、少しと言うには長い時間が経過したにも関わらずその場を動こうとするものは居なかった。

「……」
ロコモコの宣誓に身体を震わせ、動けないのだ、誰一人として。

「皆、いつまでもそうしている場合じゃないわ。各自仕事に戻りなさい」

そんな中、アルベドは守護者統括として口を開いた。

「アルベドー」

まさしく無粋だろうその言葉。

いきり立ち、アルベドをにらみつけたのはシャルティア。他の者も、デミウルゴスさえも眉を顰めその無粋を咎めたい意を示している。

「気持ち、わかるわ。だけどロコモコ様はナザリックに尽くす私達に感謝を告げられた。ならば足を止めることこそ礼を、忠を失する行為ではないのかしら？」

「う……」

アルベドの言に氣勢を失い言葉を詰まらせてしまったシャルティアではあるが、確かに尤もだとも思えた。

「そのとおりでございませぬ。ではそれぞれの役目へ戻ることにしませう」

そういったのはセバス。

プレアデスを引き連れてその場を辞そうとするが。

「……っ」

セバスもプレアデスも、第一歩が上手く運べなかった。

ロコモコの言葉は未だに脳を痺れさせ、膝を震わせていてまるで無重力の中を歩いているかのように地面に足がつかない。

「くっ」

崩れ落ちそうな身体へ活を一つ。

まさしくここで倒れてしまえば忠を失することだとセバスとプレアデスは歩き示し、その場を辞した。

そしてその姿に倣うよう集まった者たちは持ち場へ戻り始める。

あるものは未だ涙を止められず、あるものは身体の震えを止められないまま。

それほどの言葉だったのだ。

ナザリックへ尽くすことはまさしく幸せである彼ら彼女らだからこそ、その働きを認められ、あまつさえ至高の御方自らが守るというロコモコの言は。

「それはモモンガ個人へと全てを捧げているアルベドにしても同じく。

あの場で支配者然として振る舞われたのならば憎めた。表向きは従う振りをして、裏で排除を考えることが出来た。

——悔しい。

認めざるを得なかった、認めたくなくなった、信じたくなった。

もう二度とモモンガは裏切られないと。

モモンガからすればこれから一緒にギルドをもり立てましょうと言いあつた直後に。

あ、俺もモモンガさんに尽くす側になりますね、てへぺろ。

され裏切られているのだが、アルベドの目から、価値観からすればロコモコの態度や言動はまさしく求めていたものだった。

「……幸せだねー」

いつしか玉座の間に残ったのは守護者のみ。

しみじみと、噛み締めながら言葉を零したのはアウラ。

「ダガ、自分ガナサケナイ。ロコモコ様ヲ、アインズ様ヲシテ勝テナイト言ワシメル敵ガ存在シテイタニモ関ワラス、ソノ場ニ立テルコトスラ出来ナカツタトハ」

「うー……く、悔しい、です」

落ち込む様子を見せたのはコキュートスとマール。

知らされていなかった。それはつまり戦力にならないと思われて

いた証左であると思っている。

「確かにその一面はあるだろう。だけど、あのロコモコ様だよ？ 恐らく、だからこそお一人で立ち向かわれたんじゃないかな」

「……どういうことでありんす？」

コキュートスとマーレ、二人と同じく自身の不甲斐なさを呪っている中、デミウルゴスの含んだ言い方を問うのはシャルティア。

「至高の御方に遠く及ばない我々として盾にはなれるでしょう。強大な敵、そのただ一撃を防ぐ程度の存在にはなれる、なれることを誉れとも思う。そう我々が思っていることを理解している、いと慈悲深きロコモコ様だからこそ一人で立ち向かったのじゃないかと思うのだよ」

「えっと、つまり……？」

「ロコモコ様は決して私達を盾にすることを良しとしない。だけど私達はその場にいたら考えるまでもなく盾にでもなんでもなろうとするでしょう？ それを嫌われたからこそ一人で戦われていたのよ」

デミウルゴスの言葉を噛み砕き言い直したのはアルベド。

守護者達に理解の色が差し、再び喉元にこみ上げる想い。

「本当に、ロコモコ様、優しい。優しすぎるよ……うう」

「わ、私、より一層の忠誠を誓うでありんす！」

「それはもちろんだがね。ロコモコ様はあるはずの無い罪に苛まれておられる。忠勤に励みつつ、どうかその念を晴らして差し上げなければ……」

感動を胸におきつつ、頭を働かせ始めるデミウルゴス。

それに倣い考え始める守護者達の中、アルベドは思う。

(さて、私は何をどうするべきか)

今アルベドの胸を大きく占めるのはロコモコに対する期待。

結果的にアインズ、モモンガが幸せで在るのならばそれに勝る喜びはないのだ。

そのためになら、その一点のためだけにならアルベドは何でもできる。

(なんて、ね。まずはやっぱり、ロコモコ様のご帰還を喜ぶことにしましょう)

頭を抱え続けている守護者達の顔を見て、ようやくアルベドはただの守護者、その一人として至高モモンガの幸せの御方が手に入ったことを喜んだ。

「ごめんなふあいっす、反ふあんふえーひへふっす」

セバスとソリュシヤンを除いたプレアデス。

猿轡をされ、首からへ私はロコモコ様に無様な姿を晒しましたと書かれた看板を下げたルプスレギナを背にテーブルを囲んでいる。

「一般メイド達とも連絡を取ったけど、当面の間は私達がロコモコ様の警護につくことになりました」

「ほ ふあー！ ほ ふあー！ …… ごめんなふあいっす もめんなふあいっす」

反ふあんふえーひへふっす！！

「ソリュシヤンはセバス様と既に別の任務についているからダメ。ナーベラルもアインズ様と同行、警護の任があるからダメ。となると私か、シズ。エントマになるんだけど……」

「無視しないでほしいっす！！ふひひなひへほひっす！！」

後ろから聞こえるルプスレギナの声にこめかみを押さえつつ。話を進めようとするユリだったが、シズのなんとかしてといった視線とエントマのなんとも言えない顔を見てため息を一つ。

「ルプスレギナ。ほんとに反省してる？」

「してゐるっす！！ひへふっす！！」

「本当ならこの程度じゃ済まないのよ？」

「わかってるっす！！わふあっへふっす！」

「……はあ、ロコモコ様に感謝してよ？」

やはりため息をつきながら猿轡を外した瞬間。

「ぷはあ！ はいはいはい！ 私が立候補するっす！ やるっす！

絶対！」

「……やっぱりもう一回」

「もおー。反省してない」

「めちやくちやしてるっす！ もう海より深く！ だから私がロコモ

コ様の警護担当になるっす！！」

ユリの呆れた視線へシズとエントマを加えてなおその役目は渡さ

ないと必死なルプスレギナ。

事実必死も必死だった。

予定というより妄想では、完璧なメイドとしての自分を見ていただくはずだったのにも関わらず、笑顔を賜っただけで失神KOされてしまったのだ。

汚名返上の機会を逃してなるものかと気概を超えた何かを迸らせている。

「言っておくけど、一般メイド達ものすごく渋ってたからね？」

こちらに來られたばかりで不測の事態に備えるためって説明して尚だからね？」

「ロコモコ様、人気……だから」

「わたしもお、やりたいい」

ユグドラシル時代より、ロコモコはNPC達を可愛がっていた。

確かにゲーム時代を考えればあくまでも雰囲気作りとしての意味合いが強かった存在ではあるが、大事な仲間が作った彼女たちをとても大切に思っていたが故に。

加えて一般メイドやプレアデスだけではなく、ロコモコはギルドで生まれたNPC全てが対象であった。

ユリは口にしなかったが、役割を超えて自分が警護役に付きたいと志願してきたものすら居る。

「言うまでも無いことだけど。ぼ、私もだからね？　ロコモコ様のお付き、したいんだから」

恩返しへの念が強い。

自分のような存在に、等という謙った思いが無いとは言えないが、ロコモコに対して——不忠ではあると思っっているが——親愛の念を抱いていないNPCはいない。

「で、でも！　それでもお願いするっす！　どうか、どうか私にやらせて欲しいっす！」

ついにルプスレギナは地面に手をついた。

恥も外聞もなくここまでする。

メイドにあるまじき姿ではある。しかし彼女がここまでするのは

ロコモコに関して以外に無いだろう。

仮にこれがアインズ当番であるならば、誉れと捉え出来得る限り最大の忠勤に励むことは間違いない。

しかしこれほどまでに固執はしないだろう、理由を言えば残念に思うだろうが交代もする。

「わかった。なら、カルネ村での任務は一旦私が引き継ぐ。その代わりと言うまでも無いけど、二度目は無いからね」

「仕方ないね……良いよ」

「しかた、ないい」

「くっ!! ありがとうっす! もう絶対失敗しないっす!」

顔をあげたルプスレギナの目は輝く。

(この生粋のサディストをして、今ならボクの靴を舐めるでもなんでもしそうね)

そんなことを考えたユリは、背中にゾクリと奔った何かに首を傾げながらも喜ぶ妹の頭を撫でた。

懺悔、あるいはプレイスタイル

「ロコモコさあん……?」

「いや正直すまんかったっす」

骸骨だから表情に出ないわけだが、モモンガさんのジト目が簡単に想像できるし言いたいこともわかる。

「悪いとは思うけど、多分あれで正解なんすよ」

「んん? どういうことですか?」

まだ詳しい事は分からないけど、あいつらは間違いなくアインズ・ウール・ゴウンというギルドに忠誠を誓っている。

モモンガさんはその象徴として凶らずともギルドという枠組みに向けられていた忠誠を一身に背負うことになったわけだ。

「頂点はモモンガさん、これを崩したらまずいっすみんな混乱しちゃう。最悪、派閥が生まれてロコモコ派、モモンガ派なんて二分化が生まれかねない」

「あー……なるほど」

俺自身ギルマスであるモモンガさんこそがてっぺんに相応しいというか、そうあって欲しいという思いがあるし、なりかわりたいなんて欠片も思わない。

だからこそ最初の場面でそう宣言する必要があった。

「だからあんな形で宣言したってわけでもないっすけどね。ずっとアインズ・ウール・ゴウンを守り続けてくれたモモンガさんこそがてっぺんに居て欲しいって気持ちはもちろんっす」

「なんだかこそばゆいですけど、わかりました。けど、俺を支えるってどうするんです?」

「まあここまでは直感で判断した事なんでなんとも。とりあえず、うちの現状つつうかそういうの教えて貰えませんか?」

ギルドというカナザリックごとこの世界に転移して、NPCたちがあんな感じになったってのは先に教えてもらったけど。

こつちに来てからどういうことがあったのかはまだわからない。加えてこの姿だ、再会したとき急に冷静になったモモンガさんを不思議

議に思っただけ聞いてみれば、精神鎮静化が発動したってモモンガさんは言っただけ、そりやつまりユグドラシルのプレイヤーではなく、アバター自身になったということだ。

要するに俺も正真正銘ロコモコになったって言う事でもある。

流石に取得したスキルだなんだは覚えているけど、どういう形で発動するかははまだ分からない。

そんなことを考えながらモモンガさんの話を聞いた。

現在セバス、ソリュシャンが王国で情報収集していること。

モモンガさんがナーベラルと共にこの世界の冒険者となり活動していること。

シャルティアが精神支配を受けて一時モモンガさんと敵対したこと。

かいつまんで纏めればそんな感じだけど、正直色々驚いた。

「なる、ほど」

「って感じですけど、どうですか？」 キツイの担当 ロコモコさん

「それやめて下さいってば」

「じゃあ鳳雛のが良いですか？」

「やめれー」

思わず苦笑いしてしまったけど、懐かしいな。

かつてメンバーからそんな風に呼ばれていた。ぷにつと萌えさんが考案した誰でも楽々PK術、そのメイン実行担当だったからだ。

おかげでまあ色んな事を覚えられましたよ、ほんとに……よく使われたよおのれぷにつと萌え。

頭が良いわけでもないし、ぷにつと萌えさん程作戦を考えたりできるわけでもないのに相方というかセットでみられて、よく臥龍鳳雛とか言われてたっけな。

「ともあれ、俺が来るまでにあつたことは把握したつす。苦勞したんすね」

「実のところそれほどでもないんですよね、NPC達が優秀なおかげで俺がした苦勞なんて精々みんなから凄い人って思われるのを維持するくらいのもんです」

「いやそれが一番大変だから」

「……わかつてくれますか」

「わからないでか」

まあそこが問題って程じゃないけど心配な点なんだよな。

「現状アルベドやデミウルゴスの解釈というか、深読みに助けられているって面は強いっすね」

「作ったギルメンに文句を言うべきなのか、感謝するべきなのか」

上手く回ってるのならそれでいいとも思うけど。

ともあれ齟齬、あるいは勘違いってのは本来ならマイナスに働き得るもんだ。聞く限りアルベドやデミウルゴスなら勝手にプラスへと昇華するだろうが、そうならない場合の方が多い。

そしてそこに俺の仕事がある。

「モモンガさんに俺の仕事は言いましたっけ?」

「え? ああ、確か探偵でしたっけ浮気調査専門の」

頷いて返す。

リアルでのくそつたれな仕事は探偵だった。

浮気調査だなんだだったらまだよかったがそうじゃない。

社会の不穏分子となり得る存在を調査する探偵だった。

「少し嘘ついてました」

「嘘、ですか?」

「はい。俺は間違いなく探偵です。けど浮気の調査なんかじゃない、社会不穏分子を事前に発見し、できるなら排除するって役目を負った探偵です。ユグドラシルを始めたきっかけは仕事の一環だったんです」

モモンガさんが固まった。さて、どういう反応になるだろうか。

「そんな、たかがゲーム、ですよ?」

「たかがゲームだからこそ、調査しやすいんですよ。ねえ、鈴木悟さん」

「っ!!」

身構えられた。いや、まあ仕方ないよね……って、落ち着いた?

ああ、精神鎮静化か。

「心配しないで下さい。少なくともギルドメンバーに関しては何も問題なかったです。DQNギルドだなんだ言われてたのにも関わらずね」

「……信用しろと?」

「信用、信頼してもらうために今話をしてるんです。もうかつてリアルと呼んだ場所は既に異世界、今更新たな事実を発見したところで報告出来ないしするつもりもない。何より俺自身が処分された身ですから」

墓場まで持つて行くなんて選択肢はあった。

「ただど隠し事をすれば、隠し通すために偽りを重ねて行かなければならない。」

それはもう、嫌だ。

「あの頃が大事な思い出だったのは本当です。誓ってもいい、もしもあの頃俺のあずかり知らぬ場所でギルメンの誰かに処分命令が下されたのなら、俺は自分の命を賭けてでも防いでいました。その覚悟があった」

「……」

ギルメンの情報をなんとなく掴めないように工作したりもした。

結局そのせいで昇進した後処分が決定されたってのはまあ、笑い話だろう。

「もちろん信用できないと結論を出してもいい。その時は出来ればモモンガさんに殺されたいです、正直ここに今いるのはモモンガさんといつかまたユグドラシルでって約束を果たすためで、それはもう叶った。思い残すことはないっす」

間違いなくこれは本音だ。

ユグドラシルじゃあないけれど、それでもこうしてかつてのリアルじゃない場所でモモンガさんと再会するって約束は守られたと思う。「ナザリックの皆には、調査を頼んで遠地へと向かってもらったとでも言えば良い。建前上、モモンガさんが大きく信頼しているからこそ頼んだと言えば不自然な事もないですから」

そこまで言っつて口を噤む。

言いたいことは言った、むしろ少し喋り過ぎたくらいだ。

出来ればまたモモンガさんと一緒に遊びたいって気持ちはあるけれど、モモンガさんの、親愛なるギルドマスターの決定に従おう。

「はあ……ずるいですよ、ロコモコさん」

「まあ、自覚はあるっす」

「アンデッドになった弊害か鈴木悟が希薄なのか。それでもあの頃を大事だと言ったロコモコさんに嘘はないってわかる。というか元よりギルメンを疑うなんてしたくもない」

モモンガさんは……いや、俺もだろうユグドラシルに偏重している気があった。だからこそ仲良くなれたって部分もあるけれど。

「俺も……正直に言えば。シャルティアと戦ったことで、あの頃と決別したつもりだったんです。仲間は今もうここには来ない。ならば自分自身こそがギルド、アインズ・ウール・ゴウンとしてかつての日々を背負いこの世界を生きる覚悟を決めたつもりだったんです。だから皆にもあの場で確認したし、もう少し突っ込んで言えばロコモコさんが言った手段をとることも考えてました。ですけど——」

そこでモモンガさんは俺をまっすぐに見つめてから。

「——話を続けましょうか？ 過去、その内実がどうあれ。やっぱり俺は、こうしてまたロコモコさんと一緒に遊べるのが嬉しいらしく、その気持ちは何より大きいみたいです」

「……ありがとうございます」

本当に、ありがとうございます。

ああ、俺もNPC達のこととは言えないな。大概忠誠心すごいわ。

あー泣きそう。

いや、泣いてる場合じゃねえ。

「それにしても、最終日にログインしたんですよね？」

「ええ。ログインしきれたかどうかはいまいち覚えてませんが、それがどうかしました？」

「いや、何で時間差が出来たんだろうなって思いました。最初から一緒に転移していたなら変に悩まなくて良かったのになーなんて思っただけです」

「そういやそうだな。」

「やっぱログイン処理しきれてなかったのかね？ それが時系列に影響を及ぼしてこの世界でのスタート位置がずれたとか？」

「ってことはやっぱ処分されたんだな俺、なーむー。じゃなくて、元同僚なら空気読めつての、ちゃんとログイン出来たら今頃何も気負わず新しい世界満喫できてただろうにクソが。」

「とと、まあそれを言っても仕方ないか。うん、モモンガさんも似たような結論に辿り着いたっぽい。」

「じゃあ切り替えるっすよ」

「はい。アレな探偵だったってことがどうしました？」

「アレって……いやまあわかるけどさ。」

「中間管理をするっすよ、俺」

「中間管理？」

「そう、中間管理。」

「現状その役目の多くは守護者クラス、多分メインはアルベドが担っているんだと思います」

「そうですね。アルベドとデミウルゴスがそれっぽい位置です」

「それ自体に問題はないっす。もちろん二人が深読みする事を含めて」

「え、問題ないんですか？」

「はい問題ありません。」

「モモンガさんが上手くこなしていると言うべきか、アルベドやデミウルゴスが優秀と言うべきかはわからないが。」

「結果的にモモンガさんが納得できるなら重大な問題とは言えないし、フォローも容易だ。」

「問題なのはあの自分を殺してまで尽くすほどの忠誠心です」

「それは……」

「ある意味理想の会社形態だということとは間違いない。究極的なトップダウンという構図として。」

「しかしNPCが意思を持った以上その理想形を維持することに問題が生じた。」

「ストレス、ですか」

「そうっす。恐らく全員モモンガさんの命令なら何でも忠実に実行する。どれだけ自分の意に添わなくとも」

中間管理にアルベドやデミウルゴスがいる。

能力としては問題ない、しかしその強すぎる忠誠心からモモンガさんの命令に難色を示すことですら許さないだろう。

「なるほど、中間管理っていうのは実務的な部分ではなく精神的な面をですか」

「はい。俺はそういったストレスのケアに対処します。どういったことがその個人にとって喜びか、やりがいを感じるか。モモンガさんに仕える事こそが喜びだーなんて言われるかもしれないませんが、好みつてのはそれらを超えた場所にあるべきだ。適材適所、適所に適していないなら適するための成長を促せるよう育成も兼ねた」

幸いと言うべきかロコモコは情報収集特化ビルドで組んである。戦闘に適性が無いわけじゃないが、得意なのは情報収集だし、俺自身も人の変化に対して敏感だったからこそ探偵なんざクソツタレな仕事に就けたわけで、その力を活かすには最高の適所だと思う。

何より早急に片づけないとならない案件が既に一つあるわけだし。

「わかりました、まさに適任だと思います。俺に直接言いにくい事とかもあるでしょうし、そういう存在が居るメリットについてもよくわかりますから」

「ありがとうございます、モモンガさん」

「いえいえ。それに多分皆喜びますよ。ユグドラシル時代のこと覚えているみたいですし、尚更」

あー、そうなのか。いや、そうなんだろうな。だからこそ最後まで残り続けたモモンガさんへの忠誠心がぶっ飛んでるんだろうし。

「その頃に恥じないよう、そしてギルメンの顔に傷をつけない様頑張るっす」

「ええ。よろしくおねがいします」

そういつて二人でもう一度握手をした。

愛され上司への道

再起動ルプスレギナ、その後アルベドとの対話

「ルプス、改めて久しぶりだな」

「はい。再びこうしてお姿を見るのができた喜びをどう表せばいいものかわかりませんが。本当に、お久しぶりです。そして先刻失礼な姿をお見せしましたこと、どうかお許しください」

「俺は失礼な姿を見せられたなんて思っていないさ。むしろセバスやユリ、そしてお前のこうした姿を見る事が出来た喜びの方が大きい。ありがとうな」

その言葉に危うく再び卒倒しそうになったのは内緒の話。

何とか耐えられたのはまさにこれ以上の失礼を重ねてなるものかという意思のおかげだろう。

だがおかしなことは言っていないだろうか、変に思われていないだろうか。

そういった不安を押し殺すのは並大抵の努力ではすまなかった。

何よりこうして言葉を交わしているという事実が未だに信じられず、夢心地ですらいる。

「ありがとうございます……つきましては本日ロコモコ様の共を申し付けられています。ご希望があればどのようなことでもお心のままに」

「そっか。ならそうだな、少し頭の中を整理したいのと腹が減ったんだ。飯食えるところに連れて行ってくれないか？」

ロコモコは既にリング・オブ・アイنز・ウール・ゴウンを指にはめている。

装備に関してはナザリック宝物庫に保管されており、後でモモンガが回収しに行く予定となっていた。

当然ルプスレギナの目にリングは捉えられている。

ナザリック内を自由に転移出来るのにも関わらず案内して欲しいと言われたことは、どういう意図か。

「かしこまりました」

頭を下げながらルプスレギナは思考する。

考え事をしたと言うなら静かな場所、自室等の方が良いだろう、そして食事もというのならば先に転移して頂き自分が持つて行くという形が効率的だ。

しかしロコモコにリングを使用する様子は見られない。

故にルプスレギナは混乱した。

かしこまりましたと既に返事をしてしまったのだ、何処かへと案内すると領いてしまった後でリングの使用を声掛けするなど失礼ではないだろうか。

何処へ案内すべきか、この場合は行く道中に時間をかけた後食堂へと向かうことが正解だろうか。

そうした場合足労頂いているという状況が不味い。ならば自分がロコモコの身体を抱え負担のないようにするべきか？ 等と言った思考のとんでも飛躍すら伺える。

「……絶対無理っす……」

小さく小さく呟く。

もうこうしているだけでいっぱいいっぱいなのだ。気を抜けば無様にも喜びで大泣きしてしまいそうなのだ。

だというのにどうしてその御身に触れるなどできようか。

「ルプス」

「はっ」

「そう緊張しないで欲しい。転移しないで案内を頼んだのはお前と話をしたかったからっただけで、そこまでガチガチになられたら気後れしてしまう」

困った様に話すロコモコ、その姿と言葉に己の失敗を悟ったルプスレギナは弾かれたように平伏、しようとした。

「それが困るって言うんだルプス。先に言った通り俺はまだお前たちの忠義を向けられる資格を持ち合わせていない」

「そ、そのようなことっ！」

跪こうとしたルプスレギナの身体を腕で支え止められ、至近距離で

瞳に映るロコモコの顔に心臓が高鳴る。

「今のままじゃかつての仲間にも顔向けできない。そんな中、獣王メコン川さんの子であるお前にそうされるのは心が痛むんだ。俺を助けると思つて、どうか普段通りにして欲しい」

——ああ、お慕い申し上げます。

そう言葉にできればどれほどの幸福か。

まさしくロコモコはルプスレギナにとって敬慕の念を捧げるべき相手だった。

親愛、情愛、敬愛……あらゆる種の愛情が胸の中で渦巻く。

自身の創造主が現れたのなら良かった。ただただ敬愛と忠義を捧げるだけで済んだのかもしれない。

しかし現れたのはロコモコただ一人で、創造主の姿は見当たらない。

不敬にもほどがある愛情という感情を隠すための、創造主のご友人という隠れ蓑は今ないのだ。

「過分な、お言葉、誠に、ありがとう、ございます」

ルプスレギナはそう答え、頭を下げるだけで限界だった。

そうして最早肅々と歩きなれた場所にも関わらず、どこに向かっているのかもわからないまま、どうしたものかと頭を悩ませるロコモコを案内することしか出来なくなってしまった。

「これは……御用でしたらメッセージ伝言等頂けましたら伺いましたのに」

「いや、礼を向けてくれた者に対しては礼を返さねばならないからな」
場所はアルベドの私室。

ドアの外には誰も通さないと欲しいとロコモコよりお願いを受けたルプスレギナが使命感を眸に宿らせて立っている。

結局食べることが出来なかった食事。空腹を覚えながらも思考がまとまったロコモコはアルベドと訪ねた。

アルベドとの会話。

それこそがまず着手すべき仕事だと定めたから。

「左様でごございますか……それで、どのようなご用件でしょうか？」

私に出来る事であれば全力をもってあたるとお約束致します」

頭を下げながらアルベドは頭を働かせる。

礼を向けてくれた者には礼を。

ロコモコはそういった。

それは裏を返せば無礼には無礼をと言う事。

事前に何の連絡もなく急に私室へと入ってくる。これは至高の御方であれば無礼でもなんでもなく、むしろ急な来訪を喜びもって応対すべきことだろうと言う事はナザリックにおける常識。

しかしそういった枷を外せば無礼失礼にあたることのはずだ。

そうアルベドが考えた時。

「——っ」

静かに息を呑んでしまった。

外面的には礼を欠かしてはいないはずだが、内面、心から礼を尽くしたとはアルベド自身思っではない。

それを見抜かれたのではないかと。

モモンガ含めて至高の御方が持つ叡智に遠く及ばないと常より知者であるとアルベド自身も認めているデミウルゴスは言っている。

その言葉がまさにそうだとするならば、誰にも明かしていない心を見抜いてもおかしくはない。

「やっぱり、か」

「あ——」

そしてその考えが正しかったと、アルベドは自身の愚かさを呪った。

ロコモコの視線にある、壁に立てかけられたモモンガの紋章旗と床へ乱雑に置かれたギルド紋章旗。

「こ、これは——！」

「いいんだ、言い訳も謝罪も要らないよアルベド」

告げられたアルベドの思考は冷たく冴えわたる。

——むしろ、好都合。これはロコモコという不安材料を消し去る千載一遇のチャンスなのではないか。

モモンガの心を救済したのは事実。それに対しては感謝もしてい

る。

これからモモンガと共にナザリックを導き、繁栄をもたらしてくれ
る存在として信じたいが、再び姿を消すという可能性は捨てきれな
い。

ならばいつそ、この手で。

アルベドらしからぬ短絡的な考え。その後モモンガの手によつて
処分されてしまうかもしれないが、モモンガの幸せを願つてこそその行
動。そうなたたとしてもアルベドに悔いはない。

故に。

「すまなかった」

「——え？」

深く、深く頭を下げるロコモコの姿に強く動揺した。

「お前がモモンガさんを深く愛していることは知つている。だからこ
そモモンガさんを裏切り傷つけた俺、俺たちを憎悪しているだろうと
いうことも。これはそれに対する謝罪だ。納得できないのであれば、
今お前が考えていることを実行してくれて構わない。少なくとも、モ
モンガさんに許可は得ている」

モモンガよりアルベドの設定を一部書き換えてしまったと言う事
は聞いていたロコモコ。

そうさせてしまった原因の多くは自分たちが姿を消してしまつた
からであると察してそうですかと気にしない風を取つたが、その影響
は大きいのではないかと考えた。

まとめた考えは書き換えた事によるアルベドの影響。

創造主が設定魔であつたが故に時間を要してしまつたが、ロコモコ
が何より最初に取りべき行動で仕事だと結論づけたのはこれだった。
「何だつたら直接モモンガさんに確かめてもらつてもいいぞ？」

「……」

アルベドは絶句したまま動けない。今何を言われているのか欠片
も理解できなかった。

あれほど望んだ存在を、たかが僕一人の不安を消すために処分して
いいと許可をした主も。^{モモンガ}

想像を絶する戦いだっただろう、それを終えようやく帰るべき場所に帰ってきたというのに、たかが僕一人の安寧確保に命を捧げて良いと言っている主も。ロコモコ

全て、お前の為になら惜しくないと言われているなんて、信じられない。アルベド

「どうした？ 如何に防御特化のアルベドとはいえ、何の装備もしていない裏方特化の俺を殺せないはずもない。遠慮しなくていいんだぞ」

そういうロコモコの瞳は優しい。

かつて直接声をかけられなかった頃よりずっと変わらない、穏やかな眸。

「できま、せん……出来るわけが、ありません」

瞬間、アルベドは至高の御方は何故至高であるかを魂で理解した。己の願いという欲望に重きを置いてしまっていた矮小さを知った。すべてを見抜かれてなお、それでいいと認められ、あまつさえ謝罪までされた。

格どころではない、次元が違うと身をもって知らされた大きな愛情。

「ロコモコ様に、忠誠を、誓います」

跪いてそう誓うしかなかった。何より心が服従した。

反抗心は軒並み押し折られ、敵うわけがないと悟った。

「あー……アルベド？ それを向けられに来たわけじゃないんだよ。先も言ったけどさ、まだ今の俺じゃ足りないしさ、一旦置いといて、だ」

「え、あ、はい」

置いといてとジエスチャーをしながら笑うロコモコは今まで部屋の中に漂っていた緊張感を霧散させる。

「嘘か真かとかもいいんだ。一つ危惧があつてな」

「危惧、でございますか？」

「ああ。ほら、モモンガさんってきアンデッドじゃん？ んで俺は人狼。言い換えればモモンガさんは既に死んでるから永遠に存在でき

るけど、俺はそうじゃないわけだ」

「そこまで言われてアルベドはピンと来た。

「寿命、でございますね?」

「そう。もしかしたら寿命を延ばす魔法とかアイテムがあるのかもしれないけど、まあ意思関係なくナザリックから旅立つ時はやってくるんだ、モモンガさんを遺してな。人狼という種がどれほど寿命があるかは分からない、けどアルベドよりも短いのは間違いないだろう」
「どうしようもない事なのだ。」

ナザリックにおいて定命種は確かに存在している。

ダークエルフであるアウラやマーレとて、長寿ではあるが寿命はあるだろう。

「だからここに来たのはそれについて話をするためってのがメイン。なあアルベド、俺の頼みを聞いて欲しい」

「はっ」

命令ではなくお願い。

もうすでに命令であろうと頷く心持ちであったアルベドにとっては意外な言葉だった。

それだけに少し緊張感をもって続くだろう言葉を待っていたが。

「モモンガさんを、これからもずっと支えてやって欲しい」

「当たり前前の事過ぎて言葉が生まれなかった。」

「ああ!? そんな顔するな!? 当たり前前だって? んなことわかってるって!」

「で、ではどう言った意味なのでしょう? 愚かな私にお教え頂ければこれに勝る喜びはありません」

わたわたと慌てるロコモコの様子に、なんだか可愛らしいと初めてだろうロコモコの前で笑顔を浮かべるアルベド。

そんなアルベドに向けて咳払いを一つした後、真面目な顔をして口を開く。

「定命の者は命を継ぐんだ。要するに子を成し意思を遺す。俺はいつか滅びるけれど、モモンガさんを支えるという意味まで滅ぼすつもりはない。アルベド、お前に頼みたいのは俺が遺した意思を見守り導い

て欲しいということだ」

「見守り、導く……」

「そうだ。俺の子がモモンガさんを俺の様に、あるいはお前たち守護者のようにモモンガさんを支える者であるよう見守り、導いて欲しい。それはきつとアルベドにしか出来ない事だ。アインズ・ウール・ゴウンを愛している他の守護者のような者たちではなく、モモンガという個を愛しているお前にしかな」

それは確かに己のみが出来る事だろう。

ロコモコに子が生まれることがあるとすれば、間違いなくナザリツク中から溺愛される。

全員が揃いに揃って甘やかすだろう、子供らしい我儘、本来ならば叱らなければならぬ場面であつても真面目な顔をしてかしこまりましたと言う守護者たちの顔が思い浮かぶ。

いや、もしかしたら、今のアルベドであるならば。

「確約は、致しかねます」

他の者と同じような顔をして溺愛してしまうかもしれない。

「う……まじ、かあ」

そこで断られるとは思ってなかったと顔を覆うロコモコだが。

「はい。ですののでいずれお命じ下さい。ロコモコ様がご自分をお許しになられた時に」

敬愛すべき新たな主ならこれくらいのお戯心は許してくれるだろう、察してくれるだろうとアルベドは甘える。

「……つたく、そういうのを飼い犬が手を噛むって言うんだぞ？」

「それは心外でございます。まだロコモコ様に忠誠を捧げること、許されておりませんので」

先とは全く違う、柔らかな雰囲気の中で二人は笑いあつた。

一難去つた後

「ふう……」

アルベドとのやり取りを終えて自室に戻ってきた。

一先ずこれで安心というか、一定の信用は得られただろうパーフェクトとは言えないかも知れないが、グッドコミュニケーションではあつたはずだ。

言つた内容や考えていたことに偽りは無いけど、やっぱり何処か気がひけるのはギルドから姿を消していた事実による負い目のせいだろうか。

「まあこれから、だわな」

一言二言、一回やそこいら腹を割って話した程度で信頼関係を築けるとは思っていない。流石にNPCとはいえそこまでちよろくないだろう、ないよね？

中間管理者というか、いわゆる良い上司ムーブは出来ているだろう。

単純に自分だったらこんな上司が欲しかったっていうのを実践しているだけに近いが、それこそが今のナザリックに必要なものであるとも思えるだけに徹底していきたい。

そういう実践を通してモモンガさんの苦労というか努力を垣間見えた気もする。流石ギルマス、さすマス。

ともあれ可能な限り自分の立ち位置をはつきりさせるべきだろう、下手に時間をかけてしまえば第二の支配者的な扱いを受けてしまうかも知れないことを考えれば。

あくまでもナザリックの支配者はモモンガさんなのだ、そして俺は良い上司程度に収まりたい。

ある意味既にナザリックは完成している。俺こそがイレギュラーであり異分子なのだ、そのことがアルベドと話してよくわかった。それだけにこれから当面の間は最大限注意して動かないとな。

「にしても、勢いで言つたとは言え子供か」

寿命がどれほどに設定されているかわからないが、モモンガさん程

は無いだろう。

モモンガさんを支えたいって気持ちはマジもマジだし、子供へとその意思を継がせたいとも思っている。

ただまあ子供となるともちろんお相手が必要なわけで。

この世界の現地人でも探せば居るのだろうが、やっぱり価値観の違いに悩まされるだろう。そもそも異形種間で子を成せるのかも疑問だ。

ならばユグドラシルからの設定を引き継ぐナザリツクで探す？

となると。

「ルプスカ」

同じ異形種というカテゴリかつ同種の人狼。

獣王メコン川さんがルプスレギナを作る時から思ってたけど、正直ドストライクなんだよな。いや、メコさんとお互いの性癖ぶち抜こうバトルの結果がルプスレギナだから俺にクリティカルなのは当然だけど。

性格というか内面に関してはまだよくわからない。設定に関しては色々知っているけれど、どういう形で反映されているか確かめられてないし。

「話をしようにもあの調子じゃなあ」

最初に出迎えてくれた時はビビった。セバスの鋭い目がなんだか生暖かくも感じたけど、それに気を向ける余裕もないくらい。

モモンガさんの話を聞いて忠誠心が高じてなのかなと一旦結論を出したけど、案内してくれた時の様子を見てもどうやらそれが正解だろう。

つまりそんな忠義の心を持ってきているルプス相手に迫るってのは……どう考えてもパワハラアンドセクハラです、ありがとうございます。いりました。

多分受け入れてはくれるんだろう、それこそご寵愛だなんだと喜んでくれるのかも知れないが、やっぱりそういう気持ちで抱くのはアウトだ。

メコさんに申し訳が立たないし、彼の流儀にも反するだろう。それ

はよろしくない。いやもしかしたらさっさとYOU喰つちまえよとかいう可能性はあるが、メコさんがここに居ない以上俺がメコさんに對して創った性癖ぶち抜きNPCをあてがえないし、お食べ下さいどうぞも出来ないし。

やっぱり愛だよ愛。

一方的な密約になってしまった以上、ちゃんとお互いの気持ちを大事にしたいところだ。

仕方ない、最悪ナザリック外の存在を片っ端から種付けするか、数撃ちやあたるだろ、良心も傷まない。外の存在である以上生まれる子供の能力に不安はあるけど、子供のころから躰れば大丈夫だろ。

「……………」

不意に気づく。確かに身内以外に対する興味は希薄な方だけど、ここまでだったっけ？

「……………」これがモモンガさんの言うやつか」

この身体に精神が引つ張られている。

リアルに生きていた頃の自分との差異。

モモンガさんから聞いた時はいまいち理解できなかった。

っていうのも精神沈静化ってスキルの存在がモモンガさんにはあるからだ。

プラスにもマイナスにも昂ぶることが出来なくなった心に精神が適応したんだと思ってた。

怒りも悲しみも、やっぱりそれは人間らしさなんだよな。言い方を変えれば感情こそが人間の証明である。

モモンガさんの言うところの鈴木悟の残滓。

こうして実感してみようけど、それは僅かに残ったモモンガさんのモモンガさんらしさなんだろう。

「なら俺は……………」どれくらい俺が残ってるんだろう」

わからない。

ただこれもやっぱりふとした時にしか気づけないんだろう、考えてわかるものでもなさそうだ。

まあ丁度いい。

ナザリツクは基本的に排他主義だ、同族至高主義とも言えるのかも知れないけど。

そんな中で生きていけば、気付ける機会は多いだろう。それに。

「次は、デミウルゴスと会おうし」

カルマ値マイナス500の極悪属性。

ある意味デミウルゴスとの会話は自分の試金石となり得るだろう。価値観、知性それらを含めて。

アルベドから今までモモンガさんに提出していた報告書、そして提出しなかったものの写しというか、ある程度纏められていたものを貰って確認した中であつた巻物スクロールの材料に関する報告。

デミウルゴスに対する危惧を解決するだけではなく、この存在を確かめる為にも会わなければならぬ、曰くの牧場で。

十中八九予想は的中しているだろうが、それでもだ。

「まさか気が重くならないことに対して気が重くなるなんてな」
なんとも複雑な気分だ。

けどこれも良い上司確立のため、頑張らないとな。

そんな時だった。

「失礼致します。お食事の準備が整いましたが、こちらでお召し上がりになりますか？」

「ん？ ああ、それじゃ食堂に行くよ。一緒に食べよう」

「と、とんでもありません。至高の御方と共になど……！」

慌てたようにわたわたと両手を振るルプス、可愛い。

やっぱりなー好みなんだよなーでもなーパワハラはなー。

「良いんだって、これも俺の我儘なんだ。可愛い子と一緒にメシ食いたいっていうさ」

「か、かわつ!? お、おとお、お戯れを……！　　そ、そんな事言われたら、我慢出来なくなっちゃうっす……！」

うん？　微妙に口調が？

いや、まあそれはいいか、嫌がつてる感じはしないし、ここは押すところ？

「頼むよルプス。一人で食事も味気ない。それに明日もついてきてくれるんだろ？ その打ち合わせもしたいしさ」

「か、かしこまりました。ええと、ですが、ほんとに、よろしいのですか？」

「もちろん」

「はいっ！ ……夢じゃないっすよね？」

なんかほっぺた抓りだした。うん、可愛い。

やったぜかわいこちゃんごはんだー！ パワハラではない、断じて、いいね？

「うまつ!? なんだこれうまつ!? シエフを呼べ待ったなしなだけど!? うーまーいーぞー!!」

「い、今お召し上がりになられていますのが、ナザリック産三種の冷製サラダクリームスープです。次に前菜としてスモークサーモンの塩マリネ、シエフ渾身コンソメルアン風、ホタテと鯛のムースと続きメインディッシュにドラゴンの桜燻製肉を準備しております」

何その呪文!? いいやめっちゃうめえしなんでもいい!

うわーこれはリアルになってくれて嬉しいポイント高いよマジで。

あのクソリアルじゃ絶対食えねえよこんなの、しかもさ。こんな可愛いメイドさんが給仕してくれてさ!

ナザリック万歳、超万歳。

「料理の紹介ありがとさん！ ルプスも食おうぜ！ めちやくちやうめえぞー！」

「か、かしこまりました。それでは失礼致します」

いやたまんねえよこれ、ここが天国か!

なんか厨房の奥から泣き声が聞こえるけど気のせいだよな！ うめえ、うめえぞー！ グツジョブだ!

あ、一般メイドさんごめんなさい、行儀悪いかもしれないけど許してね？ お作法がどうか言ってもらえないの!

あー、っていうか!

「皆も食おうぜ！ そんなとこで遠巻きに見てないでさ！ ああごめ

んな!? ちょっとこれ美味すぎる! 料理してくれてるやつもさ!
ごめん! 皆の分も作ってくれねえかな! んで落ち着いたら
こっちきてくれよ!」

良い上司どころ? 知るもんか! そんなもんそこのアンデツ
ドに食わせてやれ! あ、食べねえか!

「よ、よろしいの、でしょうか?」

「良いつて良いつて! メシは家族で囲んで食うのが一番美味いんだ
からさ!」

そういつた瞬間だった。

「ロコモコ様あ……!」

「うおっ!? な、何で泣いてるの!? ごめん、やっぱ行儀悪いか? ご
めんな? 次からはちゃんとするからさ、今日だけでも頼むよ!」

周りの奴らが一齐に泣き出したぞ!? 軽くどころかホラーだぞ!?

「いえ……いえ! とんでもございません! 是非、是非一緒に
させて下さい!」

「お、おお! ありがとう! そんじゃ一緒に食べよう食べよう!」

あーこれあれだな! いわゆる会社の飲み会つてやつだな! 酒
は飲んでねえけど! ははは!

その場にいた奴ら皆で食卓を囲んで、美味しい料理がさらに美味し
く感じて。

「ナザリック最高!」

食べられないモモンガさんには申し訳ないけど、最高の一時を満喫
したのだった。

牧場視察

「では、失礼致します」

報告書を持ってきた配下を見送り、デミウルゴスは静かに書類へと目を通す。

「……ご帰還なされたばかりにも関わらずこのご精勤、本当にあの方は」

そこに記載されていた内容はナザリツクへ戻ってきてからのロコモコの動向。

本来であれば至高の御方の動向を探る等不敬にすぎることだと理解して尚、色々な意味を含んだ心配があったため実行しているデミウルゴス。

ナザリツクの者達がロコモコ様に不快な思いをさせていないか、ロコモコ様が好まれるものは何か。

ひとえに再び姿を消されたくない、そのためには何でもするとう決意の現れでもあった。

「目を潤ませている場合では無いというのに」

そうして明かされたロコモコの行動に感涙してしまう。

アルベドとこれからについてを打ち合わせたのだろう、情報共有を行い、その後配下と共に食事を摂った。

食事当番だったものは恐らく至上の喜びに打ち震えただろう、書類には美味しい美味しいと、作法すら忘れて夢中になって頂けたと書いてある。

そして自然にナザリツクの者を家族と呼んだ。

身に余る光栄だと。その場にいられた者達へデミウルゴスは嫉妬すら禁じ得ない。

失礼をしないようにと心がけながらも、同席した者たちは感涙に咽いだだろうその光景が容易く脳裏に浮かぶ。

「まさしくロコモコ様は博愛に溢れた御方」

かつての頃より不敬と承知しながらも親愛を抱かずにはいられなかったその人。

そのような方が帰還されたことを、深く幸せに思う。

「それだけに……果たしてどうするべきか」

報告書が提出される前にアルベドから連絡がデミウルゴスに届いた。

——牧場の状態をご視察なさりたいそうです。

聞いた瞬間は自身がご案内出来るという誉れ、アルベドと間を置かず直ぐに自身へ会いに来られるということに狂喜したが、頭を抱えることとなってしまった。

一つ、何処まで牧場を案内するべきか。

デミウルゴス含めてナザリック全員がロコモコのことを慈悲深く、慈愛に溢れ、博愛に満ちた優しい御方だと認識している。

それだけに、ここで飼っている存在を見て不快な思いをされてしまわれまいだろうかということ。

事実、牧場の詳細に関しては似たような理由でアインズにすら伏せていることでもある。

カモフラージュとしての部分だけをご覧になって頂くに留めるのが最善ではないか。

ナザリックの暗部。

至高の御方より下された命令、仕事は全てが喜びであり汚れ仕事だなんて考えることすら不敬に過ぎると思っているが、それでもデミウルゴスの仕事は至高の御方、そのお目汚しになる可能性があるとは理解している。

ロコモコの趣味嗜好がまだ広い範囲で理解できていない今だからこそ、どうするべきか判断がつかないのだ。

何よりだ。

「私如きの考え、お見抜きになられているのではないか」

穏やかで優しい面こそ際立つロコモコであるが、アインズ・ウール・ゴウンそのかつての役目は智者として。

アインズが判断に迷っている際頼りにするのはいつも決まっただけに、と萌えかロコモコ、臥龍鳳雛と並び称される智者二人。

そのような御方が、ただの視察を目的とされるわけがないとデミウ

ルゴスは考え至る。

「最早委ねる他ないとは……愚かな私を、どうかお許しください」
悔しさを顔に表し、強く歯を食いしばった。

「ご足労頂き感謝に絶えません。デミウルゴス、御身の前に」

夜が明け日が昇った一番、牧場前にてデミウルゴスが手づから用意した椅子に——半ば無理やり——座らされたロコモコの前でデミウルゴスは忠誠の義を行う。

「あー……デミウルゴス、気持ちは嬉しいが先に言った通り俺は」

「理解しております。しかしながらロコモコ様、これは臣下としての礼ではなくただただロコモコ様を慕う気持ちの表れでございます。どうかお許し頂ければと」

事前に用意していた言葉を告げる。

忠誠を受け取れないロコモコに、自身の念を捧げるためにはどうすればと悩み考えた結果。

そしてロコモコ自身そう言われてしまえば断れないと座ったばかりの椅子から立ち上がり、デミウルゴスに近づく。

「顔を上げてくれ」

「はっー！」

「ならばデミウルゴス、慕う気持ち……つまり親愛というのなら返すことも断つてくれるなよ？」

そして跪いたままのデミウルゴスの手をロコモコは取り立ち上がらせる。

「ありがとう」

「――」

手を取られた時よりデミウルゴスの思考は止まった。

そして告げられた感謝の言葉に時すら止まった。

「勿体なき、お言葉、です」

「そんなことはない。感謝を告げるに間柄というものは関係ないさ、いわば当然だ。だが許してくれ、モモンガさんに、ナザリックに尽くしてくれるその気持ちに俺はこうする以外感謝を示す方法が今、思い

つかない」

今ここで、この胸に溢れる気持ちを高らかに叫ぶことが出来れば。

デミウルゴスは今ほど忠の心を恨むことは無いだろうと確信する。

(一刻も早く、ロコモコ様が抱く罪の意識を晴らさなければ)

そして告げるのだ、忠誠を誓うと。

今この時より、デミウルゴスは自身が旗する最大目標の一つへ固く刻んだ。

「急な来訪で迷惑をかけただろう、すまない。今日はよろしく頼む」

「はっ！」

「つと、そうだ。忘れていた手土産を持ってきたんだ」

「手土産、でございますか？」

手を叩きロコモコは笑って言う。

「ああ、一応俺が自分で取ってきたもんadena、気に入ってくれると嬉しい。ルプスー！」

ニコニコと、機嫌よく。

流石に一人でここまで来るはずもない。一人で来ていたなら叱責を飛ばさなければならなかったと安堵する。

(ルプスレギナがついていたのですね。獣王メコン川様と親しかったロコモコ様ですし、納得の人選、で、す——)

そして僅かばかりに生まれた余裕は、すぐさま凍りついた。

「お待たせいたしました」

「すまん、重かっただろう？」

ありがとうとルプスレギナを労うロコモコ。

そして地面に下ろされる手土産。

「そのようなことは。むしろお使い頂き、感謝申し上げます」

「うーん、まあいいか。さて、デミウルゴス？ 気に入って貰えただろうか？ 受け取って貰えるなら運び込むを手伝おう、保管場所に案内してもらえるか？」

「は、はは……」

デミウルゴスは無意識に膝を地面についた。

(なんと、なんとという優しさか)

デミウルゴスは理解した。

ロコモコは気を遣ったのだ、どうすれば良いのかと悩む矮小な自分すら優しく包んでくれたのだと。

主を凶る等という不義、そんなことはしなくていいと自ら示されたのだと。

「大変、ありがたく頂戴致したく存じます」

「良かった。じゃ、運び込もう」

「はっ！」

元よりわかっていたことだ、及ばない等と。

しかしそれをこうして実感できたことは何よりの喜びで、自身の尻尾がピクついていることにも気づかないまま。ロコモコを案内し始めた。

「お疲れ様でございます」

「ああ、ありがとう」

小さく息をついたロコモコへ、デミウルゴスは紅茶を淹れる。

視察が無事終わりデミウルゴス自身も心で小さく安堵の息をついた。

「しかし、わざわざ御手自ら皮剥まで行われなくてもよろしかったのでは？」

口にした通り、ロコモコは作業を自らも行った。

皮剥はもちろん、部屋や設備の清掃から交配実験監督に至るまでのほぼ全てを。

中でも皮剥に関してはデミウルゴスをして見事と言わしめ、その様子を見守っていたルプスレギナの目は輝いていた。

ロコモコ自身、かつてなら忌避感を覚えていただろうはずの作業ではあったが、大きく心を揺さぶられることなく実行できた。

そのことに自分の精神がどれほどの変容を迎えたのかを図ることができて満足といった心持ちである。

しかし疲労感は拭えない。

その様子に気づいたデミウルゴスだからこそ、氣遣った上の言葉

だった。

「デミウルゴス」

「はっ」

氣遣いを受け、その意図を正しく認識し少しの時間瞑目したあと口コモコはデミウルゴスをまつすぐに見やり。

「お前はモモンガさんのためになら死ねるな？」

「当然でございます」

即答する。

試しの言葉ですら無い、ただの事実確認に過ぎない。

「それはお前の配下もか？」

「同じく当然でございます。彼ら彼女らも、喜んで命を捧げましょう」

これも事実だ。

モモンガ……アインズ自らより死ぬと命じられれば、むしろ直接命じられたことに喜び、狂喜のまま死に向かうだろう。

デミウルゴスは口にくそしないが、ロコモコがそう命じたとしても同じこと。

「ではデミウルゴス。お前のためにお前の配下は死ぬるか？」

「……は？」

その問いは思考の隙間だった。

アインズから受けた命をデミウルゴスを通して部下、配下は実行する。

故に、結果は変わらず彼らは命を捧げることに違いはない。

だがしかし。

「お前が誰かに死ぬと命じて、命じられたものは喜びその命を捧げるか？ モモンガさんが命じた場合と同じように」

「……」

デミウルゴスは黙する他なかった。

命じれば、死ぬだろう。しかし、それはデミウルゴスの背中にアインズが居てこそだ。

アインズが自分を通して僕にへと命じるが故に、皆従う。

命じられる側も、デミウルゴスを通してアインズを拜している。

「悪い、変なことを聞いたな」

「い、いえ。とんでもございません。答えを直ぐにご用意できず恥じ入るばかりです」

まさしくデミウルゴスは恥じた。考えたことが無かったからだ。

ロコモコが口にした以上、それには深い意味があるとデミウルゴスは拝察している。だからこそ改めて考える。

「今日ここに来たのはな、デミウルゴスを含めたここで働く者達に会いに来たつてのはもちろんだけど、俺自身を試すことも目的だったんだ」

「試し、でございますか？」

「ああ、俺は、お前たちのために何が出来るのかを探りに来たんだよ」

その言葉はデミウルゴス、そしてロコモコの後ろに控えるルプスレギナへ衝撃を与えた。

二人の頭にあるのは自身が如何に尽くすか、どうすればその御心を案じられるかということのみ。

捧げ尽くす相手から、何かを望むという発想が無かったから。

「モモンガさんも、常々同じことを考えているだろう。だけど、ナザリック頂点に存在するがため軽々と出来ない立場にいる。だからこそ俺が代わりにやるんだ。まあ俺じゃ物足りないと思われてしまうかも知れないし、何を偉そうにと思われてしまうかもしれないけどな」

「そのようなこと!!」

「ありえせんっ!!」

ロコモコ後半の言葉に思わず声を荒げてしまうデミウルゴスとルプスレギナ。

驚きを超えて悲しみすら抱いてしまう、何処までこの至高にして慈愛溢れる御方は、自分たちを愛してくれる御方は、あらぬ罪に苛まれているのかと。

(……敵。ロコモコ様を今も苦しめている、敵い……! 許せない、許しはしないっす……!)

(二度とその存在、許しはしない。再び現れようものなら、必ずありと

あらゆる地獄を、永遠に)

ロコモコが戦っていたという敵。

元よりナザリツク全ての怨敵と認識されているが、その存在は最早言葉に出来ないほどの憎しみを向けるに値するものとなった。

「だから、だ。デミウルゴス」

「はっ！」

「俺だけじゃ足りないんだ。皆を大切にしたい、だけど俺はちっぽけだ。目も手も届く範囲が狭すぎる。だから、補って欲しい、助けて欲しい」

「――」

その言葉でデミウルゴス、ルプスレギナの胸に去来した感情は何か。

言葉にできない、言葉にしたくもない。圧倒的な、愛。

「大切にやって欲しい。困っていれば、悩んでいれば手を貸してやって欲しい。お前達がモモンガさんと俺……ギルドの宝であるように、ナザリツクに存在している全てもまたそうなのだから」
流れる涙は止まらなかった。

同時に先の問いに対する答えが胸に溢れた。

「――御心の、ままに」

今まさに託されたのだ、分け与えられたのだ。

自分たちを超越した遥かなる至高の存在が持つ愛、その片鱗を。

アインズの狙い、その補強

「おつですロコモコさん」

「おつつすよーモモンガさん」

アルベド、デミウルゴスへのまあ挨拶か。

それが終わって、改めてモモンガさんの元へ。

こうしてあの頃時代の挨拶をするとなんだかほっとする気持ちがある。さもすればやっぱりこの世界がゲームなんじゃないかと錯覚もする。

「どうでした？」

「やあ、なんと言うかやっぱ驚いたってのが大きいっすね」

各NPCにつけた設定、それがああいふ風に反映されている。

アルベドに関しては想像以上の予想外。

ギルドに対してではなくモモンガさんへの忠誠と言うか愛情と変更したってことが気になったのはそうだけど、途中で獣の勘が発動するとは思わなかった。

間違いなく、途中で俺を殺そうと考えていたんだよなアルベド。怖い怖い。

デミウルゴスに関しては逆に予想通りではあったか。

回りくどい言い方をしたけど、要するに部下を大事にしろって言うことはちゃんと伝わっただろうし理解もしただろう。

部下のために手を汚せない上司に部下はついてこない。同じ理由で部下を愛せないやつは愛されないもんだ。

その辺りを補強出来ただろうデミウルゴスならまあ無敵も良いところだ。

もちろん二人に対してこれで万事オツケーなんて言わないし、ちよこちよこ様子を見るつもりではある。

「とりわけモモンガさんに近い二人の理解は得られたと思うっす。この調子でいけばモモンガさんの位置をそのままに、俺も自分の立ち位置が確保できそうっすよ」

「相変わらず結構なお手並みで。敵として再会しなくて良かったです

よ」

同じ思いですよモンガさん。

ぶっちゃけ俺がいなくてもナザリックは完成してるんだ。そんな完成しているナザリックと敵対するなんて骨が折れそうなもの。

いや当たり前に対敵なんざしないし、したくないが。

「それでモモンガさん。コキュートスというか、リザードマン蜥蜴人のことっすよ」
「ええ。タイミング悪くて相談できませんでしたが、どう思います？」

コキュートスによる蜥蜴人集落への襲撃。

俺がナザリックに帰ってくる前にモモンガさんが指示したことで、なんだかんだと知れたのは牧場でデミウルゴスの口から。

「勝つか負けるのかの話じゃないっすよね？」

「もちろん」

狙いとしてはコキュートスが、というか俺たち含めたナザリックの存在が成長できるのかということ。

んでもってついでに微妙どころか低級と言わざるを得ない戦力をぶつけることで現地の戦力を測るってあたりだろう。

「いい案、だと思っす。人選と言うか戦力抽出もいい感じっすね、モモンガさんの疑問についての答えがしつかり出ると思っす」

「そうですか……ロコモコさんにそう言っつて貰えると安心できます、よかった」

実際内面的な成長って意味じゃ俺もアルベドやデミウルゴスに近いことを促しに行つたわけだし、恐らく結果がどうあれコキュートスは成長するだろう。

ただまあ不安があるとすれば。

「蜥蜴人が想像以上に弱かったらちとまずいっすけど」
「あー確かに」

ナザリック側が圧勝してはダメだ、だからこそモモンガさんも低級アンデッドをコキュートスにつけたんだろうけど。

最低でも善戦の上両陣営退却、じゃないとただナザリックが強いつい証明にしかない。

うーん、俺が調整に入るか？ いや、ちよつと時間も足りねえしコキユートスの成長にも繋がらない、か。

先にコキユートスに会いに行く？ それも微妙か？ 今でさえコキユートスなりに考えているところだろう、そこへ助言に入れば従われてしまいそうだ。いやでもなあ……。

早めに会いに行きたいとは思ってたけどタイミングが悪い、お話しで済めるような時間は残されていない感じが、仕方ない。

「ロコモコさんに何かしらしてもらえたら安心出来るんですけど」

「買いかぶりつすよモモンガさん。それに、まだ挨拶回りも済んでないつすから」

シャルティアやアウラ、マーレに直接会いに行くのはもちろんだけど。

それ以上にまだ気になることがあつたりする。

「挨拶回りですか。ちよつと羨ましいですね」

「いやあ、支配者は辛いつすねえ？ それこそモモンガさんがそんなことしたらナザリック大慌てつすよきつと」

しよぼんと肩を落とすモモンガさんは可愛いけれど、そこは我慢してもらわないとな。俺の仕事がなくなつちまうし。

「ともあれコキユートスに関してはあまり心配は要らないつてことでもいいです？」

「はい。率いるアンデッド軍団が余裕で勝つてしまいそうな場合だけ、俺がちよつと工作するつす。上手く負けてくれた後に関しては、モモンガさんが好きな様に運んでもらつて大丈夫つす」

「わかりました。まあしつかり支配者することにします」

二人して頷き合う。

かつてのユグドラシルとは全く違うけれど、やっぱりこうしてモモンガさんと何かしらやっているとゲームで遊んでるなんて感覚へ浸る事にしよう。

「コレハ、ロコモコ様。才呼び頂ケマシタラ馳セ参ジマスモノヲ」

「いやいいんだ。蜥蜴人どもを相手にする準備を進めているところだ

ろう？ 邪魔はしたくないしな」

「邪魔ナドト」

頭を下げようとするコキュートスを制しながら、何ともまあ武人然としたキャラになったもんだなと少し感動する。

「まあ陣中見舞いを兼ねてになつてしまふけど。こうして会えてうれしいよコキュートス」

「勿体ナキオ言葉。僭越ナガラ、私モ嬉シク思ツテオリマス。コノ感動ヲドウスレバオ伝エ出来ルノカ思イ浮カバナイ事、オ許シクダサイ」

ほんと隙あらば平伏しようとするよね？ まじで勘弁して下さい、俺はモモンガさんほど魔王ロールが出来るわけじゃないんだよって。内心慌てながらコキュートスの手を取って握手してみれば、その身体震わせながら冷たい息を吐かれる。

感動してると思いたいんだけど、流石に虫の表情は読み取れない。

正直デミウルゴスやアルベド以上に表面から掴めない感じは強いな。

「ともあれコキュートス。蜥蜴人相手の準備はどうだ？」

「万事、滞リナク」

ほむ。

話す前にこつそり確認しておいたから戦いの準備が完了している事はわかつている。

そして今の状態を万事と言ったコキュートス。

「流石だな、それならモモンガさんも安心して戦いを任せることができるといふもんだ」

「ツ……必ズヤ勝利ヲ捧ゲマス」

一瞬詰まったな？ ああうん、わかるよ。

いつでも戦える準備は出来ている。だけどそれが必ず勝つ準備となつているかに自信がないんだろう？

「この陣立ては全てコキュートスが？」

「設備ニ関シテハ、アウラガ手伝ツテクレテオリマスガ、攻メ触レニ関シテハ私ガ」

裏を返せばどう戦うかという面を誰かに相談したりはしていないと。

なるほどなるほど、モモンガさんが望んだ一番の部分はこの辺か。ただ盲目的に命令を実行する将は将に足りえない。

位置する立場が違うだけで本質的に命令を受け、命令を実行するという構図に変わりがないからだ。

ある命令を受ければ、それに適した存在を群から抽出し、指示を与える。

将であるならばその適した存在を抽出、今であるならば勝利するという条件を満たすためにどうすればいいかを思考するべきで、思いつかないなら相談すべきなのだ。

「そうか、コキュートスの手ならば間違いはないな。安心したよ」

「——ハッ！ 有難キ、才言葉」

つと、流石にいじめ過ぎだな。パワハラが過ぎた。

ともあれそういったことの重要性を説くことは簡単だ。もちろん俺よりモモンガさんが言うほうが効果もある。

その役目を奪ってしまうのは良くないどころかダメだろう。ならば。

「安心したところで、だ。コキュートス、一つ頼まれてくれないか？」

「ハイ、ナンナリト」

その効果をより高め、多くをコキュートスが手に出来る様に計らうことこそが肝要。

「ちよつと身体がなまっついていてな？ 相手をして欲しいんだよ」

「相手……ッ!? オ、才言葉デスガ至高ノ御身へ刃ヲ向ケル等!!」

うんうん、そういう忠誠はノーサンキューなんすよね、今は。

「何故だ？ 俺から頼んでいることだぞ？」

「サリトテ——」

「それともお前に刃を向けられる程度の事で俺が気分を害するだけでも？ そちらの方が問題だなコキュートス」

うおお……胸が苦しいぞ……！ ぶっちゃけ牧場での皮剥りよりよっぽど辛い!! 百倍くらい！

あ、でもやつぱ身内に対してはこういう風に思える自分が残ってて一安心か。

コキュートスが吐く息、その温度が一段と下がった気がする。

武人然であるコキュートスだ、ある意味誇りを汚す言葉だ、辛からうて。

「コキュートス。モモンガさんとシャルティアの戦いを見たな？ その勝算はどう見立てた？」

「……アインズ様ガ3、シャルティアアガ7ト見テオリマシタ」

「それは10回二人が戦えばそれ位の黒星白星数になるだろうと言う意味でか？」

「恐レナガラモ、仰ル通りデス」

なるほど、ね。

確かにまあそれ位に落ち着くだろう、コキュートスの見立てに間違いはない。

同じ条件や立ち位置であるならば。だけど。

「コキュートス、ならば俺とお前が戦った場合その数字はどうなる？」

「ソ、ソレハ——」

「答えてくれ。これは俺のお願いだ」

「——9対1。私ガ9デス」

うん、言いづらいだろうことをよく言ってくれたよね。

「ああ、その通りだ。お前が幻想とも願望ともいえる物に惑わされず、しっかりと現実を見ることが出来るもので嬉しく思う」

ちよつとずつ表情が掴めて来た。表情というより雰囲気、だが。

心苦しいのだろう、至高としている相手より自分の方が勝っていると告げるなど。

裏方特化である俺が、戦闘を目的として創造されたコキュートスに戦闘力で劣るなんて当たり前なんだけども。

事実だけに気にしないで欲しいがそう言っても仕方がない。

そう、そう考えているだろう、だからこそ。

「よしコキュートス、陣中見舞いだ」

「ロコモコ、様？」

絶対に負けられない時に負けないうことを教えてやろう。
「俺に対して10回の内9回勝て、これは命令だ」

効果への後押し

「なるほど……」

「アア、ドウカ知恵ヲ貸シテ欲シイ」

蜥蜴人との戦い、頭の片隅でありえると思えていたナザリツクの不利。

目の前で繰り広げられる戦闘推移は的中して欲しくない予感を辿った。

故にコキュートスは一つプライドとも言える何かを投げ捨て、デミウルゴスへと助言を求めた。

未だに意図が掴めないロコモコとのやり取りを含めて話し、どうか助けてほしいと願った。

しかし帰ってきたのは深く頷いただろうデミウルゴスの気配と、鼻を嚙るかのような音。

「デミウルゴス？」

「ああ、いやすまないね我が友よ。そんな場合じゃないとわかってい
るのだがね、思わずキミに嫉妬をしてしまった」

コキュートスの説明は多分に主観的であったが故に、そして先んじてロコモコの大きな愛へと触れることが出来ていたからこそデミウルゴスは意図を掴んだ。

同時に自分へと向けられたものとは別種の愛情を向けられたコキュートスに嫉妬をしてしまったのはご愛嬌と言ったところ。

思わず言葉を間違ったのかと首を傾げながら嫉妬の意味を考え始めるコキュートスを他所に、デミウルゴスは咳払いを一つして口を開く。

「私如きが至高の御方々の真意を全て掴んだなどとは口が裂けても言えないがね。間違いなく言えることが一つある」

「ソレハ？」

「アインズ様も、ロコモコ様も。我らの成長を望んでおられるということだよ」

掴んだからこそデミウルゴスは思考を加速させる。

下手に明かしてしまえばその意図を台無しにしてしまう可能性があったためだ。

モモンガの意図としては恐らく自分で考え行動するという面が強いだろう、ある種の確信を持って言える。

「確認したいのだけどね、コキュートス。ロコモコ様とのお手合わせ、キミはその命を守れなかったんじゃないかな？」

「ツー」

ロコモコ相手に9勝しろ。

その命をコキュートスは守ることが出来なかった。

その事實は、今でも恐怖に近いだろう感情を持って脳裏にこびり付いている。

「……アア。9勝ドコロカ、一度モ勝テナカッタ」

「そうだろうとも」

コキュートスが予想していた一敗。

それは手合わせ開始より一番初めに訪れた。しかしただで負けたわけではなく、ロコモコの動き、力量、それらを推し量るための一敗にしたつもりだった。

「恐ロシ、カッタ。ワケガワカラナカッタ。何ヲシテモ勝テナイトスラ、思ワサレタ」

ガチガチと無意識にコキュートスは歯を鳴らす。

元より至高の御方、不敬ではあるが簡単に勝てるとは思っていないかったのは確か。

それでも今で尚、純粋な力量は自身のほうが上回っていると思えるのにも関わらず、だ。

「アノ目、気迫。私ハ、ソノ前ニ敗北シタノダロウ」

敗北の理由は理解している。戦い、武、そのものであると自身を定めているコキュートスであるがために。

コキュートスの告白を、やはりデミウルゴスは涙を流し聞き、悟る。

「ロコモコ様はね、恐らく負けない理由をお示しになられたのだよ」

「負ケナイ、理由？」

「そしてアインズ様が望まれたのは、自分で考えて行動するというこ

となのではないかな？」

「……アノ言葉ニ、ソノヨウナ意味ガ」

コキュートスはまだ真に理解へ迫りは出来ていない。

しかし、何か温かいものに触れたような気がした。

「……！ コキュートス、申し訳ないが急ぎの用事が入った、最後にこれだけ言おう。キミの心のままに戦うといい、キミの勝利を祈っているよ」

「……」

ちらりとコキュートスが視線を送った先にはエントマ。

変わらぬ表情でコキュートスを見返している。

(ドノ道、モハヤ後ニハ退ケヌト言ウコトカ)

理解できないことは多い。

しかし、デミウルゴスの言った自身の心のままに戦えばいいという言葉。

「……指揮官タル、死者ノ大魔法使イニ命令ヲ下ス。蜥蜴人ニカヲ見セツケロ」

「顔を上げ、アインズ・ウール・ゴウン様。並びにロコモコ様の御威光に触れなさい」

戦いの幕は蜥蜴人の勝利で降りた。

終了を以て玉座の間に集められた守護者一同、アルベドの冷たさを含んだ視線がコキュートスに注がれた後、声へ従い一同は顔を上げる。

そこには変わらず玉座に座る絶対支配者アインズ・ウール・ゴウン。隣に控えるのはアルベド、そして玉座へ続く階段にロコモコが立つ。

たかが立ち位置、されど立ち位置。

ロコモコはこここそが自身のあるべき場所と知らしめる位置を見て、守護者一同はロコモコに根付いた罪の意識が未だ根深くあることを悟る。

「アインズ様、守護者一同御身の前に揃いました。何なりとご命令を」

「うむ」

そしてアルベドの言。

ロコモコの名前を省いたのは意図的にであろう、アルベド自身気を抜けば、あるいは心へ素直に従えば加えていたはずの名前。

ある種の共感を持ってロコモコへの念が注がれるが、意図を守護者一同正しく理解し、アインズの言葉へと傾聴する。

「よくぞ私の前に集まってくれた。まずは——」

守護者達へ向けられるアインズの言葉。

デミウルゴスへの感謝から始まり集めた情報の確認。

そしてヴァイクティムに対して。

「人、その友のために自分の命を捨てること、これよりも大いなる愛はなし」

小さくも弾かれたように、ヴァイクティムでさえもロコモコへと視線を向けてしまう。

——まさに御言葉を体現された御方。

その意を含んだ視線を向けられたロコモコは慌ててこの場ではアインズへと目を向け。

「構わない」

「ありがとうございます。皆、今の言葉はヴァイクティムに対して向けられた言葉だ。そして俺もまさにヴァイクティムこそこの言葉に相応しい者だと思う。モモンガさんと合わせて、感謝をしたい。ありがとう、ヴァイクティム」

「——これいじょうのよろこびはありません」

そうとしか述べる事が出来なかつたヴァイクティム。

思考回路は御方二人よりの感謝により麻痺し、決められたかのような言葉を機械のように吐くしか出来なかつた。

そんな様子のヴァイクティムへと嫉妬が混じりつつも、感謝を心で捧げる守護者達。

落ち着く頃合いを見計らいアインズはシャルティアを近くへ呼び、シャルティアの心へ刺さつた棘へと触れる。

そして我を失つたかのように罰をと叫ぶシャルティアにアインズ

は告げた。

「私はナザリックに仕えるお前達全員を愛している。当然お前もだ」
守護者一同、そして後方へ控えるプレアデスをして目に涙を浮かべた。

いや、浮かべただけで済まなかったのがデミウルゴスだった。

(ああ……ああ……！)

ロコモコが言った、アインズとて自分と同じことを常より考えているとの言葉。

偽りなくその通りだったと深く、深く知ったのだ。

アウラ、マールレをしてぎよっとする表情を浮かべていたデミウルゴスを尻目に、信賞必罰は世の常だと言うアルベドと何よりシヤルティア自身が望んだために領いたアインズ。

「コキュートス。アインズ様よりあなたに向けての御言葉がありません。傾聴なさい」

改めて、重ねてアルベドの声が玉座の間に響き、コキュートスの脳へ届く。

「蜥蜴人との戦闘、見せてもらったぞコキュートス」

「ハッ」

先程までとは変わった空気。

コキュートスの吐息とてここまで冷たくならないだろう緊張感を纏う。

叱責。

告げられるに相応しい雰囲気の下、アインズとロコモコは良い結果になるだろう予感を覚えた。

「先に言っておこう。私はお前の今回の敗北を強く責める気はない。なぜならどのような者もまた失敗するからだ。それはこの私だってそうだ」

響いたアインズの言葉に日和ったなと笑うことを堪えるのはロコモコ。

確かにその通りではあるが、アインズは私でもミスをするという部分を強調したかったんだろうなと想像出来てしまった。

「ただ、問題になるのはそこから何を得たかだ。コキュートス、質問を変えよう。どうすれば勝てた？」

ともあれ本題はここからだと言ったと頭を振って、コキュートスの成長を確かめようじゃないかと集中を戻すロコモコ。

コキュートスの敗戦分析は一言真つ当だった。

言う内容を最初から行えていれば、少なくとも勝敗はわからないという舞台まではたどり着く。

「素晴らしい」

ここまではアインズの想定、いや期待通り。

確かなコキュートスの成長を感じることが出来、これ以上を求めるのは酷だろうと言葉を続ける。

「二度と失敗しないよう精進するのならばそれは意味のある失敗だ。お前が何かを学び取ったことのほうがよほど意味がある。本当は誰にも聞かずお前だけで気づいて欲しかったが……許容の範囲だろう」
ちらりとデミウルゴスへと視線を投げながらも、頷くアインズ。

その後ロコモコへとも視線を投げるが、アインズの視線には気づかないのかじつと未だにコキュートスへと視線を向け続けているロコモコ。

(ん……？ まだ何か気になってるのかな？)

その様子に引っかけかりを覚えるアインズだったが、ロコモコの目を見て納得する。

(はあ、わかりましたよつと)

「蜥蜴人たちを殲滅させよ。今度こそ誰の手も借りずにな」

わからないことをわかったアインズは元々用意していた言葉を響かせ。

「——アインズ様ニ、お願いシタイ儀ガゴザイマス！」

(あつ……ロコモコさあん……？ またやりましたねえ？)

思わずロコモコを二度見してしまったアインズ。

激昂するアルベドを余所に、ようやく交わせた視線はなんともいやらしい視線だった。

「——よい、アルベド。顔を上げよコキュートス。お前が私に願う儀

とやらを聞かせてくれないか？」

アインズの心境はもはやなるようになれ、である。

もう知らない、ちゃんとケツは拭いてくださいねロコモコさんと、激おこぶんぶん丸なのだ。直ぐに沈静化が働いたが。

「どうしたコキュートス？ 別に怒ってないぞ？ 私はお前が何を考え、何を口にしたのかを知りたいだけだ」

別に怒ってないんだからね、どうせロコモコさんが悪い事したんだから！ コキュートスを責めてなんかいないんだからね！ と言った感じだろうか。

沈静化に舌打ちしたい気持ちもそこそこに、怒ってはいないなんてアインズはなんてツンデレ風味なんだと自嘲したい気持ちの下告げて見れば。

「蜥蜴人タチヲ皆殺シニスルノハ反対デス。ナニトゾ御慈悲ヲ」

そしてまたアインズ様が下された罰に異を唱えるとはと激昂しそうになっているアルベドとは対象的に。

ロコモコのお陰と言うべきかアインズは冷静さを持ってコキュートスの言を思考できた。

理詰め。

コキュートスが蜥蜴人に慈悲をかける理由を述べるに対して、アインズは理とナザリツクの利を考え言葉を返す。

コキュートスの更なる成長。

まさに今蛹となったコキュートスは羽化しようとする繭を破ろうとしているのだと理解したが故に。

とは言えロコモコにとつてこの状況はよろしいものでは無かった。お膳立てはしていた。ここで一步踏み込むための材料を手渡したつもりだったにも関わらず、予想以上にアインズが冷静だったためだ。

「では、殲滅ということではよいな？」

最終通告、いや確認がアインズの口から出る。

その時だった。

「——なっ!？」

ヴィクティムの時に口を開いてより見守ることに徹していたロコモコが、コキユートスの隣でアインズへ向けて頭を垂れたのだ。

「モモンガさん……いや、アインズ様。羽化には時間がかかるものです、少しだけよろしいでしょうか」

コキユートスと同じ姿勢で、コキユートスの願いはまるで自分の願いでもあるかのように。アインズ・ウール・ゴウンへと願い出た。

「――」

まさしく時間が止まった。

アインズもアルベドも、守護者一同までもが。

いや。

(うーらーぎーりーもーのー！)

ちつくしようにと一人であれば吠えていただろうアインズ。

そして思い出す。

(えーえーそうですよね！ キツイの担当さん！ その調整っていう名前の尻拭いは俺ですもんね！)

ムカ着火フアイヤーである。

沈静化によつて払われたおちやめな怒り、それと同時にロコモコへとこの場を譲ることを決めた。

「コキユートス」

「ハ……ハッ！」

頭は垂れたまま。静かにロコモコは口を開く。

「俺はお前を尊敬している」

「――!?」

「そしてお前が惹かれたものにも敬愛の念を捧げよう。自信を持って、お前は紛うことなき武人だ」

コキユートスの目から、鱗が落ちた。

同時に理解した、何故手合わせの時、ロコモコに対して恐怖を覚えてしまったのか。

「アインズ様！ 私ハ！ 蜥蜴人ノ武人トシテノ心意気ニ！ 心惹カレテオリマス！」

自身をナザリック、一振りの剣と定めたことに嘘は無い。

なりたいと心底願ったのだ、アイنزが振るう力。それを証明する武となると。

「彼ラノ持ツ輝キハ！ ナザリックノ剣ト定メタ私ガ持タザルモノデシタ！ 彼ラヲ戦イヲ通ジ知ルコトデ、我ガ身ニ何ガ足りヌノカ気ツク事ガデキタノデス!!」

ロコモコがコキュートスへ示した力。

それはナザリックのためになら何にも負けないという意志の力。

「私ハ！ 学ベルデシヨウ！ 彼ラヲ通シコレカラモ！ アイنز様！ 私ノ、私ノ成長ヲ待ツテ頂ケルノナラバ！ 何卒！ 彼ラを生カシ私ノ下ヘオ付ケ下サイ！ 更ナル成長ヲオ約束致シマス!!」
理解した。

蜥蜴人は弱い。弱い身でありながら低級アンデッド達相手とは言え勝利を収めることが出来たのは、まさしく守るものがあつたからだと。

コキュートスの言葉は守護者全員の魂へと響いた。

ナザリックらしからぬ思いであり、理解に及ぶことも難しい者のほうが多い。

しかしロコモコだ。

ロコモコがコキュートスと共にそれを許して欲しいとアイنزへと頭を下げたのだ。

理解は出来ない。
だが。

大事なことなんだろう、少なくともコキュートスにとっては。

（あーあーどうするんですかこれ。めちやくちやいい方向に転がってるのはわかりますけどロコモコさあん？）

助けてくれと目を向けるがロコモコは頭を下げたまま。

どうすんだこれと匙を投げたいアイنزを救ったのはやはり。

「アイنز様、横からの発言お許しください。よろしければ私の愚案を聞いて頂けないでしょうか？」

デミウルゴスだった。

今後の展望

「うーらーぎーりーもーのー」

「あははははは!!」

圧倒的愉悦っ！ いられない！ 笑わずには！

我ながらどうかとも思うけど、やっぱりこうじゃないとな、調子出てきた。

「何ですか何ですか？ そんなに俺を苦しめるのが楽しいですか？

ええ、楽しいんですよ知ってます。わかってました、わかっていましたともロコモコさんが居たらこうなるって事くらい」

「いやあ照れるっす」

「あー……無いはずの胃が痛い」

かつてもこういうことはよくあった、調整という範疇を超えての決定というものをモモンガさんに強いる事。

今回の様に、いわば爆発。

感情的な意味合いを含めて、一步引いた場所から意見を委ねようとするメンバーの意を発露させまとまりそうだった話をややこしくすることは。

「懐かしいっすね？」

「……はあ、やっぱりロコモコさんはずるいですよ。かつて今も、絶対良い結果になるってわかってたからでしょう？ 何も言えないですよ」

「買いかぶりパートツーツ。俺はこうしてモモンガさんにジト目を向けてもらいたかっただけです、骸骨だから眼球は無いんでしょど」

正直こうなれば良いな程度だった。

表情って言うのは思っているより多くの情報を示すわけで、それがわかり難いではなく表れないコキュートスと言った人外キャラはなかなか難しい。

性格にしても設定として把握しているだけで、理解しているとは言い難いだけにある種綱渡りの先にあっただらうこの今だ。

「異世界に来てまでも俺をいじめたいんですね？」

「ええ、その通りっす」

「もうちよつとこう否定して下さい!? ……く、鎮静化した」

いやいやモモンガさん、分かっているでしょう？

俺より早くこつちに来ていて、今まさに精神鎮静化が発動したように。

「……残滓、ですか」

「はい。こうしてかつてを演じてるって面はあるっす。なんとなく、こうしないと消えてしまうんじゃないかって怖いんすよ」

あのリアルで生きた俺とはもう違うってのは嫌って程にわかった。

今の俺ってやつをみてかつての俺は自分だと思わないだろうことも。

だけど昔の俺が今の俺を完全に否定してしまうということは、ユグドラシルでのことすらをも否定する事になってしまいそうです。

「モモンガさん」

「はい」

だからこそ。

そう、だからこそだ。

「俺たち二人だけの時は、あの頃に戻りましょう。空虚な事なのかもしれないけど、けどやっぱり忘れたくもないんです」

俺だけなのかもしれない。

モモンガさんが決別という覚悟を決めかけたように、時間や出来事が解決する事なのかもしれない。

「ええ。そうですよ、俺をモモンガに留まらせたのはロコモコさんなんですから。しっかり責任とってもらいますからね？」

「——ははっ。了解っす、万事お任せあれっすよ」

本当に、モモンガさんが言った通りギリギリだったんだらう遅刻に違いはないけれど。

アインズ・ウール・ゴウンを背負う……いや、自身をギルドとする。嬉しいと……思うんだらうか、メンバー達は。

真つ二つに割れそうな気もする。いつまで過去に囚われているの

かと言うメンバーもいれば、自分とのつながりを大事にしてくれたんだと喜ぶメンバーもいるだろう。

少なくとも俺は、嬉しいと思う。

モモンガさんの妄執ともいえるだろうギルドへの想い。リアルに生きていたころの自分であれば恐怖に近い思いを抱いたのかもしれないけど。

今となつてはそういういった気持ちにならないのだから考えるに値しない……いや、考えるだけ無駄だろう。

「んじや、これからのお話をするつすよ。コキュートスに蜥蜴人を支配してもらうつてのは決定として、これからの展望とかつてありますか？」

「そうですね……この前話した通り俺はこのアインズ・ウール・ゴウンつて名前をこの世界に轟かせたいと思つています」

聞いた話だ。

ギルメンが現れない以上、いたころの栄華をこの世界でも示すつて目的。

「それはもしもこの世界にギルメンが訪れた時、ギルドの存在が伝わったりやすくなるつて意味あいも？」

「はい。ロコモコさんが来たんです、やっぱり他のメンバーもつて期待はしてしまいますし、可能性の高い低いは気にしないで備えたいつて気持ちは大きいです」

可能性、ね。

「現状この世界に来ることが出来る条件は二つつす」

「二つ、ですか」

「ユグドラシルプレイヤーが死んだ時。そして最終日にログインしていた場合」

モモンガさんは生きてままログイン最終日、強制ログアウトをナザリックで待たつたつて話だから詳細を言うなら日付変更をユグドラシルで待たつた場合になるだろう。

対しての俺だが、どちらのケースにも当てはまる。

ログインが結局できないまま死んだのなら前者の条件に当てはま

るだろう。

後者に照らし合わせるのならば、ログインしてログアウトしないまま日付変更を迎えたことになるのだろうか。

ログイン中にプレイヤー自身が死んだ場合の処理ってどうなるんだろ？ やっぱ強制ログアウト処理になるんだらうけど、現にここへ来ることが出来るし。

やっぱり俺の場合はユグドラシルプレイヤーが死んだ場合、その魂の行方としてこの世界が選ばれて線が濃厚か。

「どちらにしてもこれからプレイヤーが現れる可能性はあるでしょう。要するにナザリックが脅かされる可能性があるっていう事っす。それでも尚アインズ・ウール・ゴウンの名前を轟かせたいですか？」
「……はい。それが、それこそが俺がこの世界を生きる意味だと思いますから」

ふう、まあ適当にナザリックで楽しく過ごしながら未知を拓いたーのしーする道もあるわけだけど。

我らがマスターがそう望むのなら叶えよう。

「わかりました。なら絶対目標、最大目標はそれで」

元よりモモンガさんを支えると決めただ、改めて覚悟を決めよう。

覚悟が伝わったのかモモンガさんは感謝も何も言わず頷いてくれた。

「手段として手っ取り早いのが世界征服っす」

「せ、世界征服、ですか」

ナザリックに対抗しえる戦力が在るのかどうか未知数ではあるけれど、瞬間的に名前が轟くと言えそうだろう。

幸いと言うべきかモモンガさんはアンデッドだし、見た目としてのインパクトは十分だ。

「世界を敵に回せば否応なしに名前は轟きますからね。確実にプレイヤーはアインズ・ウール・ゴウンの存在に気づきます」

有名DQNギルドだったわけだし、ギルメンじゃないプレイヤーも気づくだろう。

リスクは高いが、目的だけを考えるのならば早期合流も出来るし確認できていない敵になりえる存在をあぶり出すことも出来る。

「ただ言うまでもないですけど、戦う前に勝利が決まっている状態を作るって俺たちの誰基本でも楽々PK戦術術に基づくならそれなりに時間がかかるっす。気にしないで進めるのならばすぐにでもできますけど」

何も考えず世界征服だヒヤッハーしても、征服が叶う叶わない関係なく十分な効果あるけれど、正直何処かで綻びが生じるだろう。

ナザリック原理主義というか、究極的な排他主義であるうちとしてはそれこそ良いつて考えるヤツがいるかもしれないが。

「世界の、支配者……う、うーん」

「モモンガさんの気質がどうのつて部分に対してはまあ、はい。ただギルドの名前を背負って、その名を轟かせたいつてなるとそれ相応の立場につくことにはなるっすよ」

いわば旗そのものなんだし。

どういう形にしても表舞台にはでもらうことになる。

「とりあえず短絡的に進めるのはダメでしょう、皆を制御できるとも思えませんが。じっくりやる事は決定として、当面何を目標にするべきでしょう?」

「賛成っす。そうですね……何をやるにでも情報が足りないっすから、情報収集に力を入れつつ当面は国を作る事を目標としましょうか」

「国っ!?!」

「そうっす。アインズ・ウール・ゴウン王、ばんざーいっす」

驚いて固まってるモモンガさんに万歳してみるテスト。うん、なかなか悪くない……あ、沈静化した。

「何処をどうしたらその考えに?」

「真つ当に勢力としてのナザリックを表舞台に作るってことっすよ。もちろんどっかの国や勢力で影の支配者的なポジションでもいいっすけど、より効果的にと考えれば国を興す方がいいかと」

モモンとして作った冒険者としての立場、既にセバス達が潜り込ん

でる場所を考えればまあり・エステイーズ王国が良いだろうか。

俺としても次は懸念だったセバスへ会いに行こうと思っただころだ、丁度いい。

「わかりました。いや、まだ考えが追い付きませんがとりあえずその方向で考えましようか」

「了解つす。都度修正はしていくとして……お願いがあるつす」

「……すごく聞きたくないですけど、なんででしょう?」

「パンドラ——」

「うああああ!?!」

おー流石の黒歴史。いや、俺はかつこいいと思うんですけどね?

あ、二回沈静化した、それほどですか。

「理解して欲しいつす。外に出せるNPCが限られている上に、手が足りないんですよ。単純に考えてもモモンガさんがナザリツクにいる間、モモンを任せることが出来るパンドラズ・アクターが必要なんです」

「うぐぐ……」

「わかりました。じゃあ俺の創ったNPCも稼働させますから」

「え? 浅井さんですか?」

正しくはアサイーだけど、通称浅井さんである。

別に黒歴史を詰め込んだわけじゃないけど、メコさんの性癖詰め込んだNPCだから俺に対してどう反応するのかちょっと怖い。

ともあれ俺と同じくどこるか俺から完全に戦闘能力を取っ払った情報収集特化型のNPCだ、封印しっぱなしにしておけないだろう。

「交換条件つてわけじゃないですけどね。こういう時必要な存在をもったいぶるわけにもいかないつす」

「うー、わかりました。じゃあパンドラズ・アクターを表に出します……」

よし、これで何とかなるか。

「ありがとうございます。じゃ、世界征服第一歩として——」

——人事異動、しましよつか。

人事異動 その①

目を瞑り想いを馳せるルプスレギナ。

一時的にユリへと預けていたカルネ村の管理、監視へと戻ってきて尚、わずかな時間ではあったがロコモコとの触れ合いを思い出さずにはいられない。

——お前達の為に何が出来るのか。

今でも尚頭を痺れさせる言葉。

デミウルゴス管理の牧場でロコモコが言ったもの。それは少しの変化をルプスレギナに与えていた。

「……ただの玩具、だと思ってたっす」

アインズの命を受けてよりここへ来て。

恐れ多いのは百も承知であったが、悪くないと思えていた仕事だった。

取るに足らない存在であっても、毎日必死に生きている人間たち。その人間が絶望に直面し今際の際、どのような表情を見せてくれるのかを期待するといった意味において。

トランプタワー完成の間際、自身の手によってそれを崩す事を楽しみとするルプスレギナ。

だからこそロコモコの言葉は今の自分というものを深く考えるものだった。

カルネ村をナザリックの管理下に置く。

それはつまりナザリックという勢力が統治するという事で、そこに生きる存在は配下であるともいえる。

ルプスレギナが思っていたように、あるいはたった今言葉にしたように玩具だとしていたそれだが、ナザリックに生きる物は宝であるとロコモコは言ったのだ。

「楽しみにする対象じゃ、ないっすね」

ロコモコは言った、大切にして欲しいと。

僅かにではあるが嫉妬すら覚えてしまう。まるで尽くしていないにも関わらず宝とされているなんて。

いや、自身の考えが及ばない領域で至高の御方たちの役に立っているのだろうそう考えて平静を装う。

そうしてカルネ村、そしてそこに生きる人間に対して認識を改めはじめ一つの考えに至った。

「私、向いてないんじゃないっすかね?」

認識を改めだしたとはいえ、恐らく村人の一人が危機に瀕することがあったのなら間違いなく自分は満面の笑みで見殺しにする。

それだけならまだいい、御方達の意を深く理解できず、気づかぬうちにナザリツクへ不利益をもたらせてしまうのではないか?

「」

そう考えたとき、ルプスレギナの身体に震えが奔った。

がっかりされるだろう、それだけならまだいい。

期待されなくなる。

つまり仕事を与えられなくなる可能性がある。

役に立たないどころか足を引つ張る駄犬。

「ロコモコ様に、アインズ様に、見限られる? うぷつ」

そこまで考えたとき、喉元にこみあげるものがあつた。

耐えられない。

考えただけでどうにかなつてしまいそうなのだ、実現してしまえば

……自害すら許されない、自分でも許せない。

同時に仕事への責任感が胸に到来した。そしてその重さに身体を伏せてしまいそうになる。

「……怖いっす」

初めてだった、仕事をそう思うのは。

ロコモコ、アインズへ尽くすだけならば喜びだった。恐怖なんて欠片も覚えなかった。

仮に死を命じられたとしても、笑って捧げられるはずだった。

だというのに。

「は、はは……足、震えてるっす」

がくがくと。壁に手をつかなければ立っていられない。

及ばない。圧倒的に今就いている仕事は自分の能力でこなしきる

自信がない。

「ロコモコ様……助けて下さい……つす」

どうしようもない、どうすることも出来ない感情へと震える身体を抱えた、その時。

『各員、現在の仕事へ区切りをつけナザリックへ帰還するように。――べ、別に急がなくてもいいんだからねっ！ 早くみんなの顔が見たいなんて思っていないんだからっ！』

「……はい？」

妙な口調が添えられた伝言が、脳内に響いた。

ナザリック内は慌ただしかった。

アインズ、ロコモコの両名による招集命令が下ったからである。

「人事異動、ですか」

「ええ。ロコモコ様が提案されたことよ」

行き交う者たちを管理しながら、アルベドとデミウルゴスは言葉を交わす。

「守護者統括殿が落ち着いている所を見るに、アインズ様との立ち位置は変わらないと思っても？」

「私に対する認識を確認する必要がありそうね？ でもその通りよ。」

ロコモコ様からの一番に教えて頂いたわ」

人事異動の言葉を聞いたときアルベドは今の立場から降ろされるのではと瞬間沸騰しそうになったが、ロコモコよりすぐにその真意を聞いたために落ち着き、今はなるほどと深く理解を示している。

「……なるほど、適材適所の追求、ですか」

「そうね、そう捉えてもらって良いと思うわ。より私たちの能力を活かせる場所の模索とも仰っておられたけど」

デミウルゴスは瞑目し思考する。

確かに一部不安の残る配置はあった、デミウルゴスにしてみればセバスの王都派遣は気がかりそのものであったし、似たような問題是他にも存在している。

それらの解消は避けて通れない道だろう、どういう形であるのかま

では思い至っていなかったが。

「加えて……デミウルゴス、あなたには先に言っておくけれどロコモコ様は自身を筆頭とした諜報部隊を作りたいと仰っていたわ」

「なんと。そうであればこの私——ああ、そういう事ですか」

名乗りを上げようとしたところで、自分に向かって先んじ告げられた理由に考え至る。

アルベドにしても少し悔しそうというべきか、無念だと思っているような表情を読み取ることが出来た。

つまり諜報部隊を作るという面を知っている、知る事を許された者はそこに所属できないのだ。

「これもロコモコ様からだけど、より高次元の仕事を任せられる存在を自分の下に付けるなんてもつたいない。もつとアインズ様と近い場所で頑張つてほしいとのことよ」

「……ああ、ロコモコ様……なんと、なんとという」
所属できないことを悔しくも思うが、続いた言葉に感動を禁じ得ない。

まさしくロコモコはデミウルゴスとアルベドを自分の横に並べようとしているのだ。

恐れ多いという思いが強いが、その覚悟とナザリックへの想いに身を震わせる。

「デミウルゴス。言うまでもないけれど、ロコモコ様が戦っていらしただろう敵の搜索。これは最大限優先すべき事案よ」

「元よりそのつもりだよ。……こうしてロコモコ様と隣り合うことが出来るのは何よりの誉れだが……無用な覚悟を、罪の意識を植え付けた存在。許しはしない」

アルベドとデミウルゴス、二人で頷きあう。

四つの眼には明確な敵意、深い深い怨嗟が浮かんでいた。

お門違いの憎しみをロコモコに対して抱いてしまった事。

それはアルベドの心へ深い罪の意識をもたらせた。笑ってロコモコは許したどころかそれを正当だと認めしたが、そこで万事解決とするなんて出来ない。

(必ず、報いを)

ロコモコにある罪の意識を払拭する。アルベドもまた、それを最大の目的、その一つとして定めていた。

デミウルゴスもまたそうだ。

牧場視察の時に宿した思いは今もなお燃え盛っている。

ましてやこの人事異動という名の配置整理。

(私を、ロコモコ様と同列に扱わせる……この罪深さ。贖うすべはない)

ロコモコの認識としては単純で、その方が連携が取りやすいという一念。

しかしデミウルゴス、アルベドはそう受け取らず、ロコモコが言った共に支えるという言葉をわかりやすく周囲へ示す意図だと認識している。

そう、その罪の意識から自分の立場を貶めてまで。

(これが……愛。私も、アインズ様へこれほどの愛を捧げ、受け取ってもらえるようにならなきゃ……)

(これこそ大いなるロコモコ様の愛。……断れません、受け入れなければ。しかしいずれこの忠誠を……!)

瞳と心を燃え上げる二人へ、すっかり声をかけるタイミングを逃したパンドラス・アクターはどうしたものかと頭を抱えていた。

「ロコモコ先生様!」

「……はい?」

シャルティアの自室。

僕兼愛妾である吸血鬼ヴァンパイア・ブライトの花嫁達に雄が刺激されるのか、少し落ち着

き無かったロコモコは、当然のように忠誠の儀をしながら自身を先生と呼ぶシャルティアに困惑した。

「あーつと……会いに来るのが遅くなって済まないシャルティア。色々と言いたいことはあるんだけど……なんだその先生って!」

「はいっ! 我が創造主ペロロンチーノ様は常よりロコモコ様の事を先生とお呼びしていたであります。ならば私もそう呼ぶべきかと愚

「考えました！」

「そ、そう、か」

内心でペロロンチーノの名前を盛大に吠えつつも、平静の体を保つ
ロコモコ。

心当たりはあるのだ、自身でNPCを作った頃だっただろうかそれ
までいまいち疎遠であったペロロンチーノより。

——師匠と呼ばせてください!!

なんて詰め寄られたことがある。

「話そうと思っていたことから逸れるが……ペロさんは何でそう言っ
ていたんだ？」

「申し訳ありません。詳しい事は……で、ですが妖精オナ——」

「そこまでだ!! BANされちゃう!!」

がつくりと項垂れながら心で叫ぶ名前に獣王メコン川を付け加え
たロコモコ。

(性癖ぶち抜きバトル……今思えば若かったんだなって)

作ったNPCに罪悪感を一つ。

予想以上になんちやつてツンデレな存在になっていたが、そういえ
ばそういう設定をつけていたと思いい出し顔から火を噴いてしまいそ
うなロコモコを前にシャルティアは慌てる。

「ぐ、ぐ不快な思いを——」

「いや、いいんだシャルティア。そういう事なら先生呼びで構わない。
ペロさんを感じる事が出来るんだ、これ以上に嬉しい事はないよ。
本音で言えば呼び捨てで構わないが、付けるなら様か先生どちらかだ
けでいい」

何とか、ではあるが笑顔でそう告げることが出来たロコモコ。

メンタルにHPがあるのならまさしくレッドゾーンではあるが、こ
こに来た目的を思い出し自身を奮わせる。

「ともあれ、だ。人事異動の事については聞いているな？」

「もちろんです。許されない失敗をしたこの身でありんすが、何かに
でもお役に立てるのであればこれ以上の喜びはありません」

真摯にそういうシャルティア。

罰はコキユートスの戦いぶりを観ていた時に、アインズの椅子になつたこと、その際ロコモコからドン引きの視線を送られたことで済んでいるはずだが、やはりシャルティア自身は心底あれをご褒美だと思っているのだろう、禊ぎには程遠いと認識している様子。

「そうか。ならその機会を提供しようシャルティア」

「はっ！」

姿勢を改め、拝聴する体へ。

既にやってやるぞという意思が全身から迸っている。

「すぐに、ではないが。シャルティア、お前にはモモンガさん……いや、アインズ様の近衛兵、親衛隊長となつてもらいたい」

シャルティアがその意味を理解するのに時間はかかった。

しかしすぐさま。

「ありがたき幸せ！ この身、この心！ 全て捧げ忠勤に励みます!!」
喜びの意を最大限に交え声を上げた。

人事異動 その②

「お、お姉ちゃんー待ってよー」

「もー！ マーレ遅い！ 早く行くよー！」

誰がどう見ても一目で機嫌が悪いとわかるアウラの後を困ったような顔で追いかけるマーレ。

ナザリツク地下大墳墓、第六階層大森林を珍しく自身の足を地面につきながら走っている。

当たり前だが、これには理由があった。

(ロコモコ様……！ 何で、私達だけ……！)

そう、守護者達の中で唯一姉弟だけが個人的な時間を持ってないでいたから。

それが理由で自分の機嫌が悪いことは自覚している。

フェンの背に乗っていないことも、そんな自分で怯えさせたくないと思つてのことだ。

わかっている、わかっているのだ。

あのロコモコが決して自分たちを軽んじているわけがないということ位。

マーレとてそんなわけがないと固く信じている、今は他にも大事な仕事があつて仕方がないのだと。

己の目から見ても一箇所に留まられることなく常に動き続けているロコモコを案じてすらいるのだ。

アウラも同じこと。

少しでもその負担を軽く出来ればなんて当然のように思っている。

それでもこうして機嫌の悪さを面に出してしまうのは、つい先程あつたシャルティアとのやり取りのせいだろう。

——アインズ様の最側近、守護役をロコモコ様より直接任じられた。

それはどれほどの喜びか。

いつもの口調を忘れて、ただただ真剣な顔をしたままアウラへと告げたシャルティア。その内に宿った歓喜を簡単に想像できてしまう。

きやつきやと喜ぶことも、自慢気に話すことも出来ない。

これは現実なのかと信じられず、まるで夢熱へ浮かされたように足がつかないのだ。

アウラに報告したことも、自慢でもなんでもない。

誰かにシャルティアは現実に生きているよ、さつきのことは夢じゃないよと教えて欲しかったただけだ。

精神支配を受けてアインズと敵対してしまったシャルティアだ。

その上でこの抜擢。

恐らくシャルティアは今が現実だと認識した瞬間、涙するだろう。

自分なら、どうだろうか。

あまりの嬉しさに、粗相すらしてしまうかも知れない。

アルベドも、デミウルゴスも、コキュートスも。

ロコモコと直接対面した者達は、揃ってまさしく愛溢れる方だと口にする。

それほどの人が、自身達へまだ何もしてくれない。

「……な、泣いてないもんね!」

「お姉ちゃん……」

早く自分にも会いに来て欲しいと強請る浅ましさはある意味仕方ないと認めるところ。

アウラは悔しかった。

もしかしたら自分には、自分たちにはお会いにならないのではないのか?

そんな考えが過ぎってしまったこと、すなわちロコモコを信じることが出来ない自分の弱さが悔しかった。

マーレも同じく悔しかった。

こんな時に姉へ何も言うことが出来ない自分が情けないとすら思う。

そしてどうあがいても今のアウラを慰めることが出来ないと思ってしまったことが何より悔しかった。

何処をどう辿ったのか、目の前の景色が森より闘技場へと変わった時。

「ああ！ 探したぞ！ アウラ！ マーレ！ 遅くなってごめん！」
「ロコモコ、様……」

「ロ、ロコモコ様……」

笑顔に一握りの申し訳無きを含んで、求めていた人がそこに居て。

「ふ、ふえええええええ！」

「ろこもこさまああああ!!」

「うわちよ!? え? 何これ姉妹丼!? いやマーレは男……じゃなくて! 遅すぎたか? ごめん」

ロコモコの慌てた様な謝罪の声に、腕の中で二人揃ってぶんぶんと首を横に振りながら。

ぎゅつとロコモコに抱きついた。

さて、アウラとマーレ。二人がようやくと言って良いだろうロコモコと個人的な対面を果たした頃。

人事異動兼、ロコモコを頂点とする諜報部隊設立に向けて動きがあつた。

「プレアデスの中から、副官をお選びになられる……?」

「はい。誰が選ばれるかはまだ決められていないそうです。ですが、副官という地位はプレアデスの中からと」

セバスから告げられた言葉を数瞬理解できなかった戦闘メイド達。

ユリ・アルファ。

ルプスレギナ・ベータ。

ナーベラル・ガンマ。

ソリュシャン・イプシロン。

シズ・デルタ。

エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ。

オーレオール・オメガの名前は挙がらなかった。それは現在与えられている役目を引き続き行えということだ。

それにあたって選考外であることについてロコモコは直接謝罪に赴き既に丸くどころか花丸に収まっている。

また、セバスに関しても同じく。

故にこの6名から、ロコモコに限りなく近いとされる者が選ばれる。

「未だ驚きに目を丸くし微動だに出来ない彼女達を前に、理解の色を目に宿しながら言葉を続けるセバス。」

「諜報部隊はその名の通り情報収集を主とする他に、ナザリックに対して不利益を齎すだろう存在の事前排除も兼ねているとのこと。ロコモコ様より直接念を押しして伝えろと申し付けられていますので言いますが、汚い仕事であると認識して欲しいと」

ロコモコのために、ひいてはアインズ、ナザリックのために利を捧げる仕事だ。汚いなんてとんでもない、何から何まで誉れであり喜びだと全員が頭で思う。

それでも敢えてセバスに口にさせたということは。

「……相当に、意へ沿わぬ事をする可能性がある、と」

「まさしく。あのロコモコ様をしてそう仰られるのです、相当の覚悟が必要でしょう」

直接選考した人物へ説明するからと伏せているが、セバスはするであろう仕事の一部を聞いている。

これはセバスというナザリック内に置いて珍しく善に偏っている存在だからこそ催す嫌悪感ではあるが、聞いただけで眉根を寄せてしまふという不敬を取ってしまった。

同時に、ロコモコはセバスだからこそ先に伝えると言った。

その真意を全て察することは出来ていないセバスではあるが、それが優しさから来るものであることだけは理解できている。

「……なら私は、予め辞退申し上げなければなりませんね」

「ユリ姉？」

ふつと笑って、一歩後ろに下がったのはユリ。

たとえばそれは他の妹達へと誉れを譲ったという意味ではなく、正しく自分では勤め上げられないだろうという自覚があったから。

「ナザリックのためになら何でも出来ます。その言葉に偽りはありません。しかし、ロコモコ様であればだからこそセバス様に念を押され

たのでしよう」

ロコモコの意を汲んだのだ。

少しでも嫌と思うようであればやめておけというメッセージでもあったのだから。

「質問、よろしいでしょうか」

「構いません」

音もなく挙手したナーベラル。

「活動内容には、あの下等生物達カマドウマへ媚びることも予想されるのでしようか」

冒険者としてアインズに付き従った経験。

その経験から、もしそういった内容があるのであれば、自分は適さないだろうと考えての質問だった。

「汚い仕事であるとロコモコ様は仰られました。それは手を汚すという意味はもちろん、自身の誇りを汚す覚悟をも必要であるということではないかと、私は考えています」

「では私も辞退するべきでしょう。ロコモコ様、アインズ様のためならば何でも出来ます。ですが、お役に立てない可能性があるのならば、それは何よりも認めがたいことですので」

ユリに続いて静かに一步後退するナーベラル。

彼女とて命じられれば下等生物とする人間に媚びることも出来るだろう、その演技の出来栄えはともかくだが。

しかしそれが自分に向いていない仕事であることは重々承知していることでもある。

「……私も、辞退」

ナーベラルの辞退を見て、シズもまた一步下がった。

それは直感としか言えないものではあったが、その勘が告げたのだ自分には向いていないと。

カルマが善に寄っているからこそその判断ではあるが、シズとてナザリックのためにならば何でも出来る。

たとえば狙撃による対象の排除等が必要とされる場面は多いだろう、そういった時に胸を張って私をとということも出来る。

だが、それ以外はどうか。そう考えた時自信を持って自分を推すことは出来なかったのだ。

「……じゃああ、私も、ですなあ」
熟考であった。

その上でエントマも辞することを決めた。
向いている向いていないの部分であれば間違いなく適材だと自認出来た。

しかし、人間を前にして空腹であればどうか。
意思の力で抑え込めるだろうか？ そう自分自身へ問いかけ、長い思考の後、不可能だと結論を出した。
諜報部隊。

これに属するためには強い理性が必要とされることを理解したのだ。

我慢できるか否か。そう考えた時点でダメだと。

残るはルプスレギナ、ソリュシャン。

二人とも、目には強い光を携えていた。

口にこそしないが、言っていた、我こそがと。

(流石、ロコモコ様です。自分で自分の能力を分析させる意図、確かに確認致しました)

残ったプレアデスの顔ぶれ含めて、ロコモコの予想は的中していた。

多少の触れ合いがあったルプスレギナを除いて、創造主が付与した設定だけが判断材料であったにも関わらずの結果である。これもまた、ロコモコにとっては実験の一つではあったがこの結果によりさらなる確信を深められただろう。

「ルプスレギナ、ソリュシャン。よろしいのですね？」
「はっ！」

二人は揃って頭を下げた。

(絶対、ロコモコ様の隣に、立つっす)

ルプスレギナはその胸に宿した想い故に。

(必ず、お役に立つ、立てる。私なら)

ソリユシヤンは絶対の忠誠、そして自分こそが適しているという献
身故に。

人事配置決定、そして首脳会議

目標と目的の共有。

それは組織であればどの様なものでも大切なことだ。たとえば企業。

形骸化していると言うか、お飾りとなってしまっていることも多くあるが基本的に理念というものが存在している。

社会福祉に尽力するだとか、生活質の向上だとかそういった会社が掲げるスローガンみたいなもの。

そういったふんわりとしても設定されている目的を達成するために目標がある。

この間俺とモモンガさんですり合わせを行ったのもここにすれ違いを産まないためだ。

まあナザリツクにおいてはモモンガさんの発言や意図をデミウルゴスやアルベドが深読みして、結果がより良いものになったりと言った勘違いは存在しているみたいだけど。

アドリブの中にこそ生まれる良いものとはあるもんで、それはそれで最大目的へ繋がるようフォローしつつ上手く利用していきたい。

ともあれ、だ。

「なるほど、国を作る、ですか」

顎へ指を運びながら俺が言った言葉を反芻しているのだろうデミウルゴスが考える。

「確かに利が多く思えます。しかしながら、そう回りくどい事をせずとも一気呵成に人間たちを支配することも可能なのではないでしようか？」

「もちろんモモンガさんに提言はしたさ。事実やろうと思えばある程度までは確信を持って出来ると言える。が、短絡的にことを進めるのは止めようって話になってな。理由としては暴力や恐怖による支配は維持するのが難しいということと、それなりに被害を与えた上でしか実施出来ない。つまり生産性がある程度削ってしまうことになるから効率的に見えてその実無駄が多いんだ」

「んなあるほど！ 流石はアインズ様が頼りとする叡智溢れる御方
!!」

アルベドの質問に答えて、パンドラズ・アクターのリアクションに
ちよつと驚いて。

パンドラズ・アクターはともかく、アルベドは内心たかが人間如き
といった思いはあるだろう。

そこら辺の解決もしておくべき、か？

「ナザリックというか、モモンガさんと俺が根幹に持っている戦術は
戦う前に勝つてことだ。短絡的という言葉は悪かったが、平たく
言えば事前準備を入念に行うってことで。モモンガさんがそれを欠
いたことで出るかも知れないナザリックの損害を嫌った面も強い」

「まあ……！ アインズ様が私の傷つくところを見たくないと……！
く、くふー！ ロコモコ様、申し訳ありません。愚案でした、取り
下げます」

やんやんぐりんぐりとアルベドさん。

若干それをデミウルゴス、パンドラズ・アクターと一緒に引きなが
ら見届けて。

俺もアルベドの扱いを熟知してきたよね。あ、デミウルゴスさん？
お見事ですって？ ありがとう。

一部不安はあるけれど、俺を含んだこの四人がこれからも続くナザ
リックにおける首脳陣。

モモンガさんがこの場にはいないのは組織としての確立を目指すた
めの一環だ、ちよつと寂しそうにしてたけどごめんなさい。

「当面の目標は国を作るということ。それを見据えた上でまずはモモ
ンガさんが作った偽造身分^{アンダーカバー}。その拡大を図りつつ、情報収集を継続し
て行おうと思う」

「恐れながらロコモコ様。情報収集をするにあたり、御自ら部隊を率
いると伺いました。それは私達の力量が足りないだろうと危惧され
てのことでしょうか？」

おっと、プライドを刺激してしまったかな？ いや、どちらかと言
えば俺に動いてもらうってのに抵抗感があるって感じか。

流石のデミウルゴス、同格として扱って欲しいという言葉を上手く処理しつつ隙あらば慮ってくるね。

「デミウルゴス、重大な役目を俺如きに預けようとすることに抵抗はあるかも知れないが、これも役割分担、適材適所の一環なんだよ」

「そ、そのようなことは！ 申し訳ありません、愚考でございました。よろしければその考え、お聞かせ頂ければ感謝に絶えません」

このやり取りも若干テンプレ化してきたかもしれないな。ある程度お互いわかつているからこそ出来ることではあるが。

それにアルベド達もやっぱり気になつてはいるみたいだ。んじゃ、説明していきますか。

「よし、じゃあ聞いてくれ。今回の人事異動、その狙いは表と裏における組織の確立を目的としている」

「表と、裏、ですか？」

「表が直近目標である作るだろう国、裏がナザリックという認識でしようか」

頷く。

基本的にナザリックの者はナザリックでしか働けないというかその適性がない。

能力だけの問題だけじゃなく、見た目に関する問題もあるだろう。

「国を作った場合、どうしても人間を使える存在が必要になつてくる。モモンガさんの国を作ったからと言ってここをほったらかしにするわけにもいかないし、ナザリックの存在をまるっとその国に収めるわけにもいかないからな」

「御言葉ですが、ナザリックそのものを表に出す不都合とは？ 人間如き、あらゆるものが足りない者を使わずとも、大手を振ってナザリックの進出を示すべきなのではないかと愚考致します」

ふむ、やっぱりナザリックの人間を下等とみなす思想は中々に根深い。

いやまあギルメンのせいとも言えるからなんともだけど。

仕方ない、説明をっと。

「それは——つと、デミウルゴス。理由がわかったみたいだな？」

「恐れながらも。アルベド、つまりはこういうことなのだよ。我々はこの世界における強者だろう、しかしそんな強者が集い他と一線を画すナザリツクが存在そのものを知らしめてしまえば、周辺の国に緊張感をもたらし、排除すべしと包囲網を築かれてしまう可能性がある。圧倒的に情報が不足していると考えられる現状、そうされてしまえばシヤルティアの件然り想像し得ない何かを持ち出され不覚をとつてしまいかねない」

はーやつぱ優秀なんだなー……わかってたけどさ。

まさに一を聞いて十を知るつてやつか、心の中で拍手を贈つておこ

う。
「我々であれば包囲網ごと食い破ることも可能かも知れません。しかあし！ モモン……失礼。アインズ様はそれを嫌っておられる。ならば取るべき手段とは言えませんな！」

おーパンドラズ・アクターまで。

これは素晴らしい誤算だな、安心して任せられる。

「なるほど……かしこまりました。疑問に答えて頂き、感謝致します」
「よしてくれ、全然良いんだ。その調子で小さくても大きくても疑問は口にするべきだ。俺たちは高度な情報、理念、目的のすり合わせを行わなくてはならない。疑問は齟齬を生む、デミウルゴスもパンドラズ・アクターももちろん俺もこれから互いの考えへ疑問を遠慮せず口にしていいこう」

そう言ってみれば了解を示すように頭を下げてくれる。

いい調子だ、元が優秀なんだしつかりと実践に結びつけてくれるだろう。

「話を戻すが、組織としての確立。その内約としてナザリツクの中で教育を行い外で働ける人材を排出するという体制を作ること。そして表に出た際ナザリツクを匂わせず活動できる体制を作ることがある」

「外での体制を作るためにロコモコ様が諜報部隊をお作りになられるということも含めてですね？ このデミウルゴス、ロコモコ様の先見性へ感服致しました」

いやだから隙あらばそういうのは止めよう？ 照れるから。俺つてば多分君たちよりも随分頭不出来だからね？

あーモモンガさんの苦勞が身に染みる……。

「そういうこと。加えてモモンガさんが既に作っているアンダーカバー、冒険者モモンとしての活動はパンドラズ・アクターに担ってもらう。ナザリック活動資金収集と情報収集を兼ねる仕事だ、出来るか？」

「我が神のお望みとあらば！」

おっとー……いや、ノーコメントで。

しかしあれだな、一定の尊敬……いや、これは配慮か。パンドラズ・アクターは俺を通してモモンガさんを見ている面が強いな。今のセリフにしても、あくまでもモモンガさんがそう望んでいるのなら了解するって意味合いが強いだろう。

うん、ある意味一番良好な関係が築けそうな気はする。

「デミウルゴスに関しては今してもらっている世界情勢的な情報収集は俺が引き継ぐ。その代わりでは無いけれど、牧場を利用して人間の心理を把握するという仕事をして欲しい」

「ナザリック内での教育のために、いわば教科書作りということですね。かしこまりました、巻物作りと並行して行えるでしょう素晴らしい采配かと」

うひい！ くすぐったい！

何気にデミウルゴスの仕事量がパンク気味ではあったんだよな、身を粉して尽くすことこそ喜びとあたってくれているが牧場に集中することで仕事のクオリティは高まるだろう。思っているより早くナザリック教育機関の体制を作り上げる事ができるかも知れない。

「アルベドに関しては現状のまま、送られてくる情報の統括をして欲しい。モモンガさんの隣は任せました」

「く、くふっ。か、かしこまりました！ ロコモコ様のご期待に応えます！」

あ、デミウルゴスさんパンドラさん、なんですかその目は。

うまくなつたなーですか？ やめて下さいモモンガさんに悪いの

です。

「つと、申し訳ありません。疑問を口にせよとのことですし、他の守護者に関してお聞きしても?」

「ああ、もちろん。伝えるつもりでもあった」

あーうん、アルベドとしては主にシャルティアを親衛隊長としたあたり気になるよな? わかってるともステイステイ。

「シャルティアに関してには主にモモンガさんが表舞台に姿を表した時の立場って話だよ。ナザリックにおける第一から三階層に至るまでの守護者としての役目はそのままに。同様にアルベドは王となったモモンガさんの宰相的なポジションに収まることになるだろう。個人の武、その証明としてのシャルティアであり、モモンガさんを支える女房的な立ち位置にアルベド。この二枚看板を考えている」

「——くっふー!!」

あ、倒れた。

……やりすぎた?

「しゅ、守護者統括殿はさておき。なるほど、その論で言うならコキユートスを表舞台での将軍としての位置に据えるということですね?」

「あ、ああ。あくまでも予定ではあるけどな」

蜥蜴人の統治はいい経験になるだろう、将としての自覚が育つだろうコキユートスはまさにその位置こそ相応しい。

「アウラ、マールレに関しては俺の諜報部隊補佐に回ってもらいつつ、今持っている仕事の継続もしてもらおう。二人で上手く連携してやってみせると答えてくれたよ。浅井さんもつけたしな」

何気に相性が良かったのか良好な関係を作っているらしい。

アウラ曰く、何この子おもしろーいだそうだ。

「その他の守護者に関しては据え置きといえは言葉が悪いが特に新たな仕事を任せるつもりはない。今の役目こそ最大限集中して行ってもらいたいことだしな」

「かしこまりました。ありがとうございます」

こんなところ、だろうか。

あと他に話さなきゃならないことは、っと。

「そう言えばロコモコ様。諜報部隊副官をプレアデスから選出なさるとか」

「ん？ ああ、そうだ。その事も触れておかないとな」

予想通りとはいやらしいか。

ともあれルプスレギナとソリュシヤンが候補として最後まで残ったが。

「選ばれるのはお一人と聞いております。どちらを選ばれるので？」

「この会議終了を持って適性を実践で測ろうと思ってるんだ。具体的には王都へ潜入する。そこでの働きを見て決定するよ」

ある程度セバスとソリュシヤンによって情報が集まりつつあったからな、うってつけではある。

既にながっている情報を見るにしても王国はまあ初心者向けというか、やりやすい印象を受けたし。

「はっ！ 委細了解致しました」

よし、それじゃ動いていきますか。

王都編 王都潜入

王都におけるロコモコの活動拠点にはセバスとソリュシヤンが手に入っていた屋敷を使うことに。

アンダーカバーもほぼそのまま引き継ぐことになり、ソリュシヤンの従者としていてセバスの立ち位置にルプスレギナが収まる。

「まさかソーちゃんの従者になるとは思わなかったっす」

「本気で言ってるの？ ロコモコ様を偽造とは言え自分の従者としてなんて考えられないわ」

恐れ多すぎるどころか想像しただけで不敬と断じ自刃しかねない。わかってるっすよと笑った後直ぐに表情を引き締めなおすルプスレギナ。

「で、っす。情報の引き継ぎはしたっすけど、これからどうするっす？」

「さて、ね。フォローはすると仰っていたけど……まずはメイドラしく掃除でもしてみよう？」

まさかと笑ってから互いに考える。

二人の認識上これはテストだ。

予め副官は一人と考えているとも言われた、その言葉をそのまま受け取るならばよりロコモコに対して貢献することが出来ればその道は拓かれるだろう。

ルプスレギナもソリュシヤンもライバルと言える関係にある。

競う事は必要だ、向上心を持つという意味においてだが。しかしながらそうも言っていられないだろう。

「ナザリックの利を考えろ、ね」

「そこから考える必要があるっすね」

自分で考えてナザリックへ利となるだろう情報を集めなければならぬ。そのためにはライバル関係と言えど、お互いを蹴落とし合うなど論外。協力しあった上でどちらかがロコモコ、諜報部隊の副官に適

しているかを選んでもらうという体が一番だろう。

ロコモコ自身は屋敷に着き、既に集まっていた情報を三人ですり合わせた後すぐ動き出した。

何かしらの目処がついているのだろうか、ならばロコモコのアクションに呼応するための準備も必要だ。

「正直、目ぼしい人間を攫って拷問……いえ、尋問にかけるのが手っ取り早いんだけど」

「つすよね。私も一番簡単なんじゃないかと思ってたつす。けど」
止められている。

王都は既に裏のネットワークが確立されているのではないかというロコモコの見立て。

ならば人攫いを始めとした暗いコトを起こしてしまえば逆に尻尾を掴まれかねないと。

「ならそうね、やっぱりこの街を牛耳っているだろう存在の尻尾を掴むことが肝要ね」

「賛成つす。手段としては……うーん、ロコモコ様に合わせる準備もあるつすから短時間で効果的な方法を考えないとつすね」

揃って頭を悩ませる。

自分で考えることの難しさに二人は直面しているのだ。

戦闘メイドとは言え、基本的には従者として存在している二人はそもそも主の言葉に対してイエスと答えることこそが仕事であり生きがい。

どのような命令、要望であつても自身の全てを尽くし奉仕するという究極の指示待ちこそ絶対にして最大の基本姿勢。

根幹としてある思想がそうであるが故に、自発的にアクションを起こすことは不得手だった。

そういった意味でロコモコの動きに呼応するという面は簡単だろう。

しかし同時に、一歩踏み込んだものをロコモコは求めていることも理解している。

指示を待ち、受け対応する。

それだけならば誰にでも出来るのだ、命令達成の出来を度外視するのならば。

何より二人は副官候補、誰にでも出来ると思うことを出来たとて、それは副官に相応しいという証明にはならない。

「ソーちゃん」

「うん？ 何かしら？」

「私達って美人、あるいは可愛いっすよね？」

真面目な顔をして何を言うのかと思えばルプスレギナは当たり前前
のことを言った。

「ああいや、呆れないで欲しいっす。言葉が足りなかったっすね、そこら辺の人間から見てもその、是非お相手願いたい位の見目かって意味っす」

「それはもちろんでしょう。創造主様たちの美醜観を疑うの？ 私達は美しきモノとして創造されたのよ？」

「そういう意味でもないっす！ えっと、つまり。私達が外を揃って歩いたら、何としてでも手に入れたいって思うんじゃないかって話っすよ。今は強面でお人好しのセバス様もいないっす、なら」

やや拙くもそこまでルプスレギナが言えばソリュシヤンにも理解の色が広がった。

「なるほど。攫ってもらえる可能性があるってこと」

「そうっす。問題は触れられた瞬間そいつを縊り殺してしまわな
かって部分っすけど」

乱暴な手段を取ってこられたのなら、まさしく瞬間的に殺してしま
うだろう。

そこに思考は挟まれない、触っていいのは仲間だけであり、触られたいのは至高の御方のみだからこそ。

ロコモコやアインズの言葉を有り難くも受け取るのならば自分た
ちは宝なのだ、ナザリックに飾られた宝であり、所有者も当然至高の
御方。

「自信は、無いわね……」

「私もっす。うーん、いい案だと思ったんすけどね。自身を汚す覚悟

があるか……難しいっす」

一步踏み込んだ考えとして、自分たちが敢えて王都に蔓延っているだろう裏の存在に拉致され、内部から情報を集められないかというものだった。そういった理由により難しいと結論が出てしまった。

「けど、着想自体は悪くないのでは？ そうね……たとえばナザリツ

クの私財を使うことに抵抗は強いけれど、お嬢様らしく散財する様を見せていれば色欲の徒だけではなく、物欲の化も釣りやすいかと」

「えーと……なるほどっす。この家に対して正面からアクションを起こさせ易くするってことっすね？ いい案だと思うっす。セバス様も居ないし、敷居は低くなつたはず。散財に関しても同じく気が引けるっす。短時間で出来る効果の高いだろう活動としてはベストだと思うっす」

揃って頷く。

活動内容の外側は決まった、後は細部を決めること。

「……ロコモコ様」

外套を翻し颯爽と街へ向かった背中を思い出し、今何をしておられるのかと馳せた。

王都の治安。

報告書である程度把握し、想像もついていたことではあったがロコモコをして酷いと思わされた。

(……いや、ある意味人間らしいと言わなければならない)

デイストピアに生きる者はユートピアを願う。

それは逆もそうであるが、デイストピアに生きていたロコモコに映る王都はユートピアであった。

無論腐りかけた、あるいは既に腐りきっているのかも知れないがそれでもある。

(だと言っのにこの辛気臭さ。 ったく、なんとも言えないな)

フード付き外套を着込み、認識阻害の魔法を自身にかけ歩く。

低位の魔法であるがロコモコにとっては十分で、周囲の人間からはそこに居るが気にならない、気にできない程度の存在を保ち観察を続

ける。

王都と言うだけあって表通りは綺麗なものだった。

行き交う人間も、少し足りないと感じるものものそれなりに活気はある。しかし、だ。

「おいてめえー！」

「ご、ごめんなさい！…ごめんなさい！」

真つ昼間から喧嘩とは少しやんちゃが過ぎるとロコモコはこめかみを押さえた。

なるほど、どうやら酔っ払いの足へ少年が何かを引つ掛けたらしい。

酔いの勢いだろう加減されているようには見えない暴力が振るわれている。

(…:…:たっち・みーさんじゃあるまいしなあ。うーん)

一瞬よぎる救出という考え、あるいは仲介か。

自分、ひいてはナザリツクへ何の利益も齎さないだろうとその考えを却下する。バカバカしいと。

ただそれも。

「なんだその目は！ 何か言いたいことでもあんのかよ!!」

「…:…:あ？」

火の粉が降りかからない範囲での話。

(しくつたな、ちよつと気を向けすぎたか。変に欲をかかないで完全不可知にしときやよかつた)
パーフェクト・アンソウアブル

偉そうな事を言いつつの醜態だった。

人狼と一目でわからないようフードを被ってはいるものの、自分という強者を見た時の反応が知りたいからと低位の魔法にしていたための失敗。

尤も、強者を強者と見抜けるものどころか、偽装に関する魔法を突破出来る存在にすら今の所出会えてはいないのだが。

思わず頭を抱えてしまうロコモコ、その姿が酔っ払いの気へ余計にさわつたらしく。

「バカにしてんじや——」

「バカにする価値もねえよ」

伸ばしてきた腕、その拳にロコモコはカウンターを合わせた。

相当どころかかなり手加減されたその一撃で簡単に殴りかかってきた男は意識を飛ばし地面に伏せる。

「まだやる？」

「あ、あ……やんねえ！ お、俺達が悪かった！」

慌ただしく倒れた男を抱えてその場を後にしていく酔っぱらいの連れだろう達。

「あーあー……ったく、やっちゃったな、まあよくねえけど仕方ない。ほら坊主、立てるか？」

「あ、ぐ……」

倒れたままの少年に手をのばすが返ってきたのは苦悶の声のみ。

状態を見るに胸骨を痛めているのか、呼吸に合わせて苦痛が顔に描かれる。

どうしたものかと少し考えるロコモコだが、仕方ないと頭を振って。

「悪い、俺は旅人でね。王都には来たばっかなんだ、地理に明るくない。誰か神殿に連れて行ってやってくれ」

「あ、ああー！」

周りに後は任せたとぶん投げて、その場を後にした。

自己嫌悪に陥るロコモコは路地へと歩みを進める。

なんであんな事をしてしまったのかと思うのはもちろんだが。

（まあ、目立つちまったしなあ。でも、なんであれしきのこととで尾行されなきゃならんのだ）

後ろに感じる気配は一つ。

その理由が掴めず首を傾げてしまう。

（敵意は……ない、か。持たれているようならとっ捕まえて目的を吐かせられるんだけども。どうしたもんかね）

たかが喧嘩を収めただけだ。

その程度で釣れる存在が求めている情報を持っている可能性は低い。

つまるところ良い方向にも悪い方向にもロコモコにとつてもナザリックにとつても価値が無いのだ。

(んー……処分しちまうか？ いや、そりゃ短絡的すぎるか。しやあない、こつちから——)

対話を持ちかけるかと振り返ろうとした時。

「あ、あのっ！」

「……あんたは？」

どうやら尾行ですら無かったらしいことに驚きを隠しつつ、ロコモコは声をかけてきた青年に対応する。

「あ……私はクライムという者で、この国の兵士の一人です。本来であれば私の仕事をやって頂き、ありがとうございます」

一言で言うなら実直そうな青年だった。

やや毒気を抜かれたロコモコではあったが、兵士という言葉に少しの価値を感じ雰囲気や和らげる。

「失礼、俺もどうやら少し気が立っていたようで。お勤め、ご苦労さまです。まさかわざわざお礼を言うために追いかけて来られたので？」

それだけじゃないだろうとややカマかけ気味の言葉をロコモコは投げかける。

意図に気づいたかどうかは不明だが、ロコモコの言を耳に入れたクライムは唇を一瞬強く結んだあと。

「先程の技を……どうか伝授しては頂けないでしょうか？」

なんて事を口にした。

(あ、これあかんやつや。めっちゃ面倒くさいやつ)

口を引きつらせなかったのは流石と言わざるを得ないだろう、ロコモコはここまで失敗が響くかとはより強く自身の失態を呪う。

「はあ……俺如きが国の兵士様に教えられることなんてありませんよ。人にものを教えるってのもガラじゃないので」

なんとか断ることが出来ないだろうかと思いを巡らせるロコモコ。もしも星占いがこの世界にもあったのなら、本日はぶつちぎりのド

ンケツだろうなんてどうでも良いことを考えながら。

ともあれ真面目、誠実そうな青年だ。

こう言えばひいてくれるだろうとも考えた、赤の他人に何の対価もなく何かを教えてもらうなんて烏滸がましいことだと気づくだろうと。

「あつ！ 申し訳ないです。か、金なら——」

「いえ、金に困ってはいないんですよ。困っていたとて欲しいとも思わないでしようが」

クライムはロコモコの見立て通り自分の失礼へ気づき、予想を裏切りまだ教えを請うつもりでいる。

その事を不思議に思う。

まさしく他人だ、兵士というのならばもつと気心の知れた、あるいは強く、尊敬すべき上司に教えを請えばいいだろうと。

「強く、なりたいんです。どうか、どうか！ 金でダメなら他に何か対価となるものを教えて下さい！ 用意できるものなら用意します！」

「――」

クライムの瞳には強さへの渴望が表れていた。

その目はまっすぐ、フードの奥に隠されたロコモコの目を貫いている。

一瞬ロコモコの背に奔った痺れはなんだろうか。

考えるのも数瞬、その痺れの理由がわかった。

(……無くした人間性、か)

クライムの真つ直ぐな性根は、かつてのロコモコすら持ち得なかったものなのかも知れない。

それを確かめることはもう出来ないが。

「情報が欲しいんです」

「情報、ですか」

クライムは兵士だと言った。

ロコモコがざっと見るに大した力を持っていないだろうことから地位も低いだろうともあたりがつく。

「ああ、身構えないで欲しいです。別に国の機密を教えろとかそんな

のじゃない、クライム……君が知っているとも思えないですし」

「そ、それはそう、ですが。では何を知りたいんですか？」

見透かされていると身を振りたい気持ちを堪えてクライムは再度問う。

「そうですね、ならこうしましょう。俺が欲しいかも知れないと思える情報を集めてきて下さい。もちろん明かせないだろうことは無理しないで構わないです。その情報を見て、君に伝授する力を考えます」

ロコモコとしては別にここで無理だと言われても良かった。

先も考えたように一兵士が扱える情報など大したものとも思えない、ただこれからも情報は集まるだろうその時判断材料の一つにでもなれば儲けもの程度だった故に。

「……それは、いつまで？」

「期日なんて設けませんよ。別に俺としてはこの話が無くなっても構わないのですから。ですのでこれを」

ロコモコは軽く言いながらクライムへと小さなガラスのような材質で作られた玉を手渡す。

「それは対玉と言いました。片方が割ればもう片方も割れると言ったように状態を共有するアイテムです……俺が持っているこれですね。準備が出来たらこれを半分に割って下さい。応じることが出来ればそれを更に俺が砕きます。砕いたその日、今位の時間にここへ」

「わ、わかりました……ですけど、こんなアイテム初めて見ました」

しげしげと対玉を眺めるクライム。

それもそうだ、これはロコモコが道具創造クリエイティブ・アイテムでたった今作ったものなのだから。

「ではそういうことで」

「はい、どうかよろしくおねがいます」

クライムに背を向けながら。

（うーん、まあ結果オーライ？ オーライ、だったらいいなあ……）

良い結果になるようにと願いながら、拠点へと足を運んだ。

成長途中、そして拾い物

「ではまた。次に来る時は商品もお持ち致します」

「そうね、少しは興味の惹かれるものであることを願っておくわ」

屋敷の応接間。

実は本業じゃないの？ なんて訝しんでしまうほど堂に入ったソリュシヤンのわがままお嬢様モードだった。

隣で泡食ってるルプスレギナも良い塩梅だ。

実にお嬢様の横暴や独断の体を演出している。さぞさつきまでソファに座っていた商人からすれば御し易そうに見えるだろう。

はつきり言って想像以上。

ソリュシヤンにしてもルプスレギナにしても、自分で考えた上にこれをすると決めたなんて驚きじや済まない。

「お帰りになりました」

「そう、ありがとう」

二人のやり取り、やや緊張感が残っているのはここに俺がいるからだろう。

クライムとの出会いから三日。

ようやく地理等含めた王国の状態をある程度把握出来た俺は、二人の進捗を確認するためこうしている。

「……ロコモコ様」

「ああ」

完全に気配が消えたのだろう、ルプスレギナが完全不可知状態の俺へと声をかけそのまま膝を床へつき、間を置かずソリュシヤンも。

「まずは先に。素晴らしいな二人共、よく考えよく実行してくれた」

「も、もったいない御言葉です！」

「この程度、ロコモコ様に比べれば……むしろお目汚し失礼いたしました」

畏まっている体ではあるが、喜んでくれているのはわかる。

なんでって、ルプスの耳が帽子越しにもピコピコ動いてるし、ソリュシヤンのちよつとその深すぎる笑みよ。

「いや、本心だ。演技もさることながら、商人をターゲットにしたことは何よりも特筆して素晴らしいと思う。情報とは常に金と共にあるものだからな、報告書も読んだがかなりの収穫だ」

あ、プルプル震えてる。プルプルプレアデスですわかります。まあそうなのだ。

こういった国というか街というか。人が集う場所において情報と常に隣り合っているのは商人だろう。

鮮度が高い情報を持ち続けなければ、金の流れに乗る機会を逃してしまうわけで。次に大事なのが人脈と行ったところだろうか。俺が見ているだけでも今日は四人の商人と、商会の代表格の人間が三人。合計七人がここへ訪れている。

それだけここから金の匂いが漂っているのだろう、もしくはセバスが居た時から狙っていたか。

どちらにしても機を見るに敏なんて言わざるを得ない。

「まあそうしてないで、情報のすり合わせをしよう。座ってくれ」

「はっ！」

「失礼致します」

いまいちまだ固さが取れない二人だけれど、気を抜かれすぎても困るか。

二人が主に商人と顔を繋げてくれたお陰で得られた情報の一つが王都での金の流れ。

どういったものが王都の民に好まれているか、需要が高いか。

やはりとは言えないが、そういったものを鑑みた上で健全とは言えないことがわかる。

言ってしまうえば売りたいものが商人にとって利幅が大きすぎるモノが中心なのだ。

商売の基本は win-win だ。どちらにとつても利がないと売買という契約は履行されない。結ばれるのであればそれは恐喝だとか、詐欺であり商売じゃないだろう。

無論契約の中で少しでも自分に利益をと駆け引きはあるし、それこそ商人の腕の見せどころ。

そういつた部分をまるっと無視して、利益のみを貪ろうとする。まじで不健全。

加えて税金に関してだ。

税に関しては俺が調べた範疇ではあるが、あんまりにも高すぎる。これじゃ農家であれば規模によってはほぼ自分の懐に収められる分はないだろう。市場価格も調査したけど、中間費用を抜いたら純利益総額がギリギリ税金に届くかどうかでとところかね。

商人にしてみれば、金を巡らせるではなくどうにかして自分の懐に収めたいと動いても仕方ない。

もしくは……貴族とやらへ私的に金を収めて便宜を図ってもらおうとするか。

「さて二人共、今日来た者たちだが。その中に商人は何人居た？」

意地悪な質問だろう、二人揃って目を瞬いた。

彼女たちにしてみれば訪れた人間誰もが商人だ、しかしながら諜報活動をしていく以上人を見る目を養ってもらわなければならない。

人間なんて下等生物……というフィルターを外す作業とも言うが。

「申し訳ありません。私には、皆商人に思えます」

「そうか、ルプスは？」

「同じ意見です。申し訳ありません」

正直そう思ってもらわないと困る。いや、スタート位置の確認って意味で。

「よしそれじゃ——って、そんなマジの謝罪に移行しないでくれ!?!
ただの確認だよ」

「は、はい。失礼いたしました」

「か、かしこまりました」

やっぱプレアデスも大概だよね……。

いや、それだけ真面目だと考えよう。

「ふう、まあ言い方を変えるぞ? 今日来た奴らの中で、こちらの欲しい物に対して追求してきた人間は誰だ?」

「え、えっと……」

「確か、バルド・ロフォーレ商会の者はそうであったと記憶しておりま

す」

お、良いねソリユシヤン、名前までよく覚えていた。

「そいつだ。もしも今日来た商人達に対して真つ当な商売を持ちかけるなら彼だろう。商会の長自らが来たということも含めて互いの利を探ろうという意気が見えた。ソリユシヤンの態度があれにも関わらずな」

長自ら来ると言うのは言うまでもなくこちらとの取引を心底願っている上に重要視していますよってアピールに他ならない。

セバスのことにも触れていたし、個人的な面識もあるんだろうな。

「では、その者を中心に？」

「ルプス、確かに彼含めた周辺を調べれば情報は集まるだろう、無論暗部に近いこともな。だが恐らく彼が持つ情報は膨大過ぎる、解析するに時間と人手が足りない」

彼と良好な関係を築けても、欲しい情報が手に入る位の信頼を得るにはかなりの時間を要するだろう。

いや、よしんばこの上なく良好な関係を築けても、築けたからこそ簡単に情報を売り渡さない様になる可能性すらある。

「引き続き関係を維持する必要がある。だが今獲物とする相手は他だ」

「バルド・ロフーレ以外の者を、ということでございますね？」
そう。

他の人間は自身の利しか考えていない。裏を返せば考えなければならぬ理由があるということだ。

「ああ。よし、では今後バルド・ロフーレやその商会の者が訪れた際には二人で会ってくれ。可能な限り失礼な態度は取らないように、ソリユシヤンに関してはあの態度は篩にかける一環だと言ってやればいい、むしろそのほうが彼も喜ぶだろう。その上でセバスが購入を進めていた巻物や、マジックアイテム類の商談を持ちかけてみよう」

「かしこまりました、そのように」

「その他、商会に属さない個としての商人はルプスのみで会い、商会の代表と言って面会を求めてきたものにはソリユシヤンのみで会うん

だ。ルプスは恐らくソリュシヤンと繋ぎを求められるだろうがそっけなくしてやれ。ソリュシヤンは今まで通りの態度で。そして二人共、楽しくなれるものが欲しいと要望を出してやるんだ」

「はっー！」

思わず口角に力が入る。

楽しみなのだ、どうなるかが。自分の力が何処まで通じるのかと言った面をそう思う部分はあるが、何よりも思い通りに踊ってくれるだろうそのことが。

個人商人であればフットワークは軽い。ソリュシヤンに会えなくなったんだ、しかもそのメイド如きに冷たくあしらわれる。こちらをどれだけ重要視しているかを測りながら、何を留意できるかってここを把握できる。

商会の者であればテンションはあがるだろう、ソリュシヤンのみと会えるんだ好機と捉えるはず。

普段なら軽々と用意できるなんて言わないものすら出来ると言わざるを得ない。もちろん、こちらをどれだけ重要視してるかによるが。

……ん？

何々その目は、俺の顔になんか付いてる？

ああ、やっぱ人間の相手は疲れたのかな？ ちよつとぼーつとしてる感じ。

「二人共、ゴミの相手は疲れただろう？ すまん。俺も二人の働きに見合うよう頑張るからな、ありがとう。この調子でよろしくな」

「と——」

「とんでもございません！ 勿体なき御言葉！ その御言葉こそ何よりの——」

あ、ああ、うん？ ちよつと間違えた？

やっべ、流石にモモンガさんムーブは出来ないぞ俺。

ん、んー……まあやる気出してくれてるみたいだし、オツケー？

よしおっけー。

「と、とこころでロ「モ」様？」

「うん？」

「アレはどうされるのですか？」

ああ、路地裏で拾ってきたヤツね。

「ソリュシヤンはどうしたい？」

「……様々な病気に侵されておりましたし、食指はその……で、ですがご命令とあらば！」

「いやそうじゃない……ってあれ？ ルプスに治療してもらっただろ？」

「はい、ご指示頂きましたので治療は終わっております。身体の、ではありませんが」

まあそうですね。メンタルはやばいよね。

想像できるだけで、今の俺には理解できないが。

「そうかそうか、ありがとうな。んでどうするのかったのはまあ一言で言うなら、ナザリックの為に働いてもらうのさ」

んじゃ、拾い物に会いに行きましようかね。

「加減はどうだ？」

「——ッ!？」

そこまで驚くかね、いやまあ驚くか。

一応路地裏で捨てられてたのを見つけた時、助けてほしいかとは聞いたし、その言葉に縋ったんだ。

その後どうなるうとも受け入れる覚悟をしておくべきだと思うがね。

……いかにいかに。

「別に取って食いやしない。さしあたってはむしろ食べてほしいんだけどな、これ」

手渡したのは消化に良いだろうお粥みたいなもの。

自分で作ろうとしたらなんでか包丁がどっかに飛んでいくとか意味不明なことがあったので、ルプスに頼んだ。めっちゃ嫌そうな顔された。なんでか俺も食わされた。ルプスは喜んだ、なぜだ。

「……ふう、やれやれ。ほれ、あーん、だ」

後ろで壁にヒビが入った音が聞こえたのは気のせいだろう、気の所為にしたい。

だってこの子動かないんだもん、これじゃ話になんないよ、いいから食え。

「!？」

おっとー、一口食べたらず手を伸ばして来たね。どうぞどうぞ。

うーむ、良い食べっぷりだ。あ、布団にこぼしたな？ ハハハ、コヤツめ。

しっかりと見れば見るほど不健康だね、ガリガリじゃん。これじゃソリュシヤンの食指が動かないってのもわかる気はするな。

え？ もう食べた？ 早いね。

あーあー眠そうにしちやって、これじゃ話聞けないじゃないか。足運んだだけ無駄――

「――!!」

「っておい!？」

うーわめつちや頭掻いてる！ どうする？ え？ 良い人ぶる？

……ああ、まつぴらごめんだ。

「なるほどな。予想通り散々な目にあっていたようだ。アテがはずれなくてよかったよ」

「……え」

おいおい、人の悪意だ欲望へ慣れるには十分だっただろう？ 救いなんざ降って湧いてくるもんじゃないんだよ。

そうだ、その目だその通り。

「生憎残念と俺はお人好しじゃないんだ、お前を助けたことには理由がある。錯乱している場合じゃないぞ？ 役に立たなそうだと思うたら捨てるし場合によつちや処分する。理性を保て、集中しろ、今こそがお前の瀬戸際だ」

救われたなんて勘違いを許さない。仲間以外に向ける無償の愛なんて俺には存在しない。

「まずは名前を聞こう」

「……ツ、アレ……えす」

ツアレ、ね。了解。

自失までしてたら面倒くさかったから助かった。

「よし。良いか？ お前の立場を明確にしよう。お前はエサだ、何を釣るのかは知らなくていいが、エサだと認識しろ」

「わ……たし、エ、サ？ あな、たが……たべ、る？」

やめろとんでもない事言うな？ ほら後ろのプレッシャーが大変な事になったぞ？ どうしてくれる？

たしかにさー、フードも取ってるからケモミミが見えてるからさー。たべちやうぞーがおーって意味に取られても仕方ないけどさーぐぬぬ。

「覚えているかは知らんが、ここにはお前より遥かに食べたくなるような女がいる。襲うならそっちに頼むさ」

あ、プレッシャー無くなった？ うん、正解だったね？ いやどうなのさこれが正解って。

ま、ままええわ。

「当面まずは療養しろ。そしてここですばらく過ぎせ。目論見通りにコトが運べば、その後面倒見てやるかも考えてやる」

「わか、り……まし、た」

まあ、こんなものか。

王都で身売りの女がどれほどの扱いを受けるのかは知らんが、まあここまでじゃないだろう。

薬物中毒に、数々の骨折、病気。明らかに普通ではない。

だからこそ、普通じゃない収穫が得られるはず。

……かつての自分だったら、どうなんだろうな。あんまり考えたくはない。

ともあれ。

「ではな。また折を見て顔をだす」

「は、い……」

対玉が割れた、いいタイミングだ。握りつぶして返事をしよう。

ロコモコの實力

「以上トナリマス」

「うむ、ぐ苦勞だったコキュートス。蜥蜴人の統治は順調だな」

玉座の間にてコキュートスの報告を聞き終わったアインズ。傍らにいつも控えているアルベドはデミウルゴス、パンドラズ・アクターと会議中にて珍しく不在。代わりにセバスが控えている。

これはアインズ自身がコキュートスとしつかりコミュニケーションを取りたいという意図あつてのこと。

半ば無理だろうなと思いつつもアルベドへと言ってみればすんなりと頷かれ驚いたのはついさつき。

ロコモコより事前にアルベドへと一対一に限りなく近い少人数で会う事による関係性の強化について伝えられていたためだ。

アルベドは説かれた当初そりやもう反対した、反対したが続いたロコモコの言葉。

——これを許可しておけば、自分の番……アルベドとモモンガさん二人つきりでお話する場を設ける布石になるぞ？

との言に、くふりと頷いた。

支配者、というよりは上位者が下位とされるものと会う時の場とは重要だ。

守護者揃つて会う場合は守護者としての役割を強く感じさせ、個と個よりは複数そのうちの一人を意識させるものになるが、こういった個と個で会う場合はその意味を為さないまでもいかずとも限りなく薄くする。

守護者の一人ではなく、コキュートスの言を聞きたいのだと示す事ができる。

何よりこうしてほぼ一対一で会うという大きな意味として。

お前を信頼しているからこそ一対一で話すことに不安を覚えていない。

という信頼を示しているのだ。

それはコキュートスがたった今強く実感し、至上の喜びに震えている

ることで証明されている。

「さて、信賞必罰は世の常。良い仕事には褒美が必要だ。コキユートス、何か望むものはあるか？」

「ホ、褒美ナドト!!」

堪らぬとコキユートスの目は回った、衝撃に星さえ見えた。

喜びへ更に重ねられた畏れ多い言葉。コキユートスはまさに今死んでもいいどころか、この幸せの中で死ぬるならどれほどかと思えう。

「なに、遠慮はいらない。私を狭量な主とさせないためにも何か考えてくれ」

卑怯な言い方だ。

その言葉はコキユートスに思い浮かばなかったが、逃げ道を塞がれた事は認識できた。

こういった言い方はアインズ自身、ロコモコを参考に魔王ムーブへと活かしているその一部。

「デハ……ロコモコ様ノ、強サニツイテ伺イタク存ジマス」

「む？ ロコモコさんの？」

「ハイ」

活かしているからこそコキユートスの頭に過ぎったロコモコの影。

「デミウルゴスカラソノ一部ハ聞イテハオリマス。私ニ対シテ、手合ワセトハイエ完勝サレタ。イエ、マサニ至高ノ御方ダカラコソデハアリマスガ」

「なるほど、皆まで言わなくて良い。手合わせの件は聞いている、結果から学びたいのだな？ 褒美としてそれを願わなくても良いと言うのに」

「未ダ私ハアノ敗北ノ理由ヲ分析デキテオリマセヌ。意思ノカヲ理解ハ出来マシタ、実感モ。シカシ、ソレダケガ完敗ノ理由デハナイヨウニオモウノデス。ソノ理由ヲ自身デ解キ明カセヌ事、オ許シクダサイ」

コキユートスの言葉に深く頷いたアインズ。

その成長へ大きく感心したのだ、純粹に、裏表なく。

「お前の全てを許そうコキユートス。そしてその姿勢、まさにナザリック守護者に相応しく思うと共に感謝する」

「トン——イエ、身二余ル光荣デス」

一瞬アインズの言葉を受け取れず否定の言葉を返そうとしてしま
うが、素直に拝諾した。

まだまだ至らぬ自身ではあるが、いずれアインズが感謝するといっ
ているコキユートス像へ至ってみせるとの意気によりだ。

「よし。コキユートス、ロコモコさんのメイン職業は知っているな？」

「アイテムスミス、デゴザイマスネ」

「そうだ。生産職をメインにしつつ、情報収集を行う為に有用な魔法、
スキルを取得し、攻撃能力は必要最低限と言ったビルド。言ってしまう
えば戦闘には全く向いていない人だ」

情報収集を考えなければ間違いなくルーンスミスまで取っていた
だろう、レベル上限の兼ね合いもあり断念したが。

そんな戦闘に不向きな相手へ完敗したという事実に対し少し落ち込む
様子を見せるコキユートスだが。

「それでも、だ。コキユートス。ロコモコさんはな、あのたち・みー
さんから絶対に相手したくないと言われた人でもある」

「——ナント」

たち・みーの強さはコキユートスだけならずナザリック全ての存
在が正しく理解している。

それだけにそんな人が相手にしたくないと言うところが想像でき
ない。

セバスにしても珍しく顔に驚きを表し、アインズの続く言葉へ集中
しはじめた。

「実際に戦えば間違いなくたち・みーさんが勝つだろうがな。それ
に集団戦と言った場合でもさほど力を発揮するタイプじゃない。だ
が、言うなればロコモコさんは一対一に強い。一時期タイマン最強説
も浮上していたほどだ」

「……」

コキユートスの脳裏に蘇るロコモコとの手合わせ。

何をしても勝てないと思わされたあの姿。

「コキユートス。ロコモコさんと戦って、怖いと思わなかったか？」

「ッ！……マサニ」

ビクリと身体が震えた。

その通りだった、打つ手返す手、全てが通らないと思わされたあの戦い。

「あの人はな、戦う相手の思考を制限する」

「制限、デゴザイマスカ？」

語るアインズが何処と無く楽しげに見えるのはコキユートスの気の所為ではない。

楽しいのだ、まさしくモモンガは楽しかった。仲間の武勇を語るこ
とが出来て。それはまるで秘密の宝物を自慢するかのような。

「これなら大丈夫、絶対に通るはずだ。という自信を砕かれ、これなら
大丈夫だろうかという疑問手をも封じられ……最後には何をすれば
良いのかわからなくなる。いや、正しく言うのならばこれもダメに決
まっていると思ひ込まされてしまうのだ」

アインズ of 言葉は正しかった。

コキユートスが戦っていた際の思考推移、まるで経験したことのある
かのようにそのまま口にされたのだから。

「ロコモコさんは、一言で言ってしまうえば型にハマれば無類の強さを
誇る、限られた点数の中でこうなってしまえば戦えると言ったビルド
にしていた」

「自分ノ型へトハメル能力ニ秀テテイル……トイウコトデスネ？」

その通りとアインズは満足そうに頷く。

何よりもアインズ・ウール・ゴウンらしいキャラクターだと言うの
に、ある一面においてガチだったロコモコの設定。

これしか無いという手の連続を強制させる。

思う壺ほど相手にして楽なものはない。ある意味、絶対的な力
の差以上に有利を築ける。

そこまでに導くロコモコの瞬発的思考力、そして実行力と狙いを表
に出さない胆力。

それを前提に置かなければ戦えないスタイルであった。

(ナルホド……アル意味私ハ自爆シテイタノカ)

疑心暗鬼、焦り、不安。

今冷静に考えれば戦闘中であってはならない感情を抱えていたと思いつき返すことができたコキユートス。

「ロコモコさんに勝つためには最大前提条件として互いに初見であることが必要だ。無論大きなステータス差……いや、力量差が無いとした上で」

「オ互イノ手札ガ不透明デアルコトガ必須トイウコトデスネ。ソノ上デ、様子見ヲ介サズ自身最大ノ攻撃デ突破スルコトガ最適解」

再び頷くアインズ。

コキユートスの言う通りであった。

戦闘時間が長くなれば長くなるほどロコモコは相手の表情、力量等を推し量り対策を講じてくる。

思考時間を与えず、破れかぶれの一撃が通る事を祈る。それこそが対ロコモコ戦のキモだった。

「私自身、生産職は戦闘に向かない、出来ないものと言う認識があった。あったが、ロコモコさんが簡単に覆した。彼の創造生産物による相手の攻撃を無効化、あるいは防ぎながらの戦闘技術は、かつてのユグドラシルであつても再現出来る存在は、いても少数だろう」

「ナルホド……私ガ完敗シタ理由、ヨク理解デキマシタ。感謝、申シ上ゲマス」

「いや何、私もかつてを思い出すことが出来て嬉しかった。こちらこそ感謝しよう、出来ればロコモコさんの戦闘映像を見ながら解説とまで洒落込みたかったが……ふむ、今手が空いていないか聞いてみるか」

「ソ、ソノヨウナコトマデ！ ロ、ロコモコ様ニゴ迷惑ガ！」

口ではそういうものの、アインズの言葉は魅力的過ぎた。

ナザリツク絶対の支配者自らの解説、それもただ守護者一人のためだけに。

その事実ですら目が眩む思いなのだ、だと言うのに内容が今何より

望んでいる強さへの模索、その一回答。

とは言えコキユートスは内心、ロコモコは断るだろうとも思っていた。

戦闘技術など言ってしまうば秘中の秘。一部かも知れないが明かすなんていう弱点を晒すことなんてと。

だが。

爛々と伝言をロコモコと繋げたらしいアインズの口からでた言葉は。

「喜ベコキユートス。今丁度人間へ手ほどきをするところだったそうだ。それでよければ見てくれと」

人目の無い路地裏。

そこにフードを被ったままのロコモコと、言われた通り自身が及ぶ範囲、最大限の情報を集め渡したクライムが居た。

真剣な表情で剣を構えるクライムに対して、未だにロコモコは驚きが抜けきらない。

(まさかこれほどの情報が手に入るとは、な)
手にした情報。

渡してきたクライムに後ろめたいと言った様子はない、真つ当にこの程度なら大丈夫と確信しているようにすら感じる。だと言うのに情報の深度が深すぎた。

明らかに一兵士が集めるに及び得る範囲じゃない。

ましてやこの短期間、言い下してから一週間も経過していないのだ、ありえないと断言していい。

(いや、ともあれちゃんと契約は履行しないとな。モモンガさんの伝言の件もあるし)

文字解読のメガネを外して、クライムへと視線を向けるロコモコ。持ってきた情報に応じて対価、それに応じてどれほどの手ほどきをするか決めるとは言っていた。

その通りにするのなら、これは最大限のお返しをしなければならぬ。

契約は契約。

そこを違えることは許されない、何よりロコモコの矜持故に。

「よし、クライム。ちょっと手合わせから始めようか」

「はいー」

クライムの剣を握る拳に力が入る。

強者であることは理解できていた、冒険者で言うなら金級に届くかどうかという自分では届き得ないほどの。

しかしながら最近ガゼフ・ストロノーフより受けた指導。

流石に彼程では無いだろう、ありえないと思いつつながら——一步、踏み込もうとした。

「——え？」

「うん、まあこんな感じか。ほら、次行くぞ？ 剣拾ってこいよ」

遅れて聞こえてきた地面へと持っていた剣が転がる音。

何が起こったのか理解できず、ロコモコの言葉が聞こえはしても頭に入っていない。

「あれ？ どっか怪我したか？」

「い、いえ！ すいません！ すぐに！」

我に振り返って剣を拾い構え直すクライム。

何があったのか、何をされたのか。頭には疑問が駆け巡る。

「人間……だけじゃないが、理解が出来ないものは怖いもんだ、わからないことってのは怖い。故に理解できるよう目を凝らす……そしてその受けの姿勢こそ、最大の隙」

「え、あ——」

転がっていた石を投げつけられた。辛うじてクライムが認識できたのはそれだけ。

気づけば背後に回られ、首に短剣を添えられている。

「な？ 最大の隙だろ？」

「は、はは……」

一瞬だけ向けられた鋭利な殺意。

すぐにそれは霧散されたが、背筋の震えは収まってくれない。次元が違う。

クライムは理解した。

これはガゼフ・ストロノーフが至っている場所とは全く違う頂だ
と。

「さて、それじゃあ攻め手を見せてくれよ。今度はちゃんと攻撃させてやるから」

「っ——はい！」

一瞬プライドを刺激されたがすぐに諫めたクライム。

これほどの相手には、もう出会えないかも知れないと強く強く思ったのだ。

ならばこの機会を逃してはならない、強くなるためそして主である黄金のため。

「はあっ!!」

「うんうん、気合いの乗った良い攻撃だ」

初撃に全力を振るったつもりだった。

しかしそれを簡単に避けられる。

「うおおおお!! っ!?!」

「はい、そこで熱くならない。足元掬われる……いや、掬われたらどう？」

二撃目へ移る際、言葉通り足を引つ掛けられ地面に伏せてしまうクライム。

受け身なんて取れない、いや取ることを許されなかった、そういうタイミングだった。

「初撃から全力つてのは買いだ。だが落ち着け、心は熱く、頭は冷静にだ」

「心は熱く、頭は冷静に……」

ロコモコの言葉を反芻する。

一撃目を簡単に避けられたことでムキになった、なりそうになったところを狙われたのだ。

冷静になる必要性が嫌でも理解できる。

「はい、次」

「お願いします！」

繰り広げられるのは遊戯。

傍から見れば喜劇とも捉えかねられない内容で、間違っても訓練などとは思えないだろう。

何かクライムがアクションを起こせばその次には地面に転がっているクライム。

まるで決められているかのようにころころ、ころころと。

しかし、ロコモコを含めて漂う雰囲気は真剣そのものだった。

「よし、止め」

「はあっ……はあっ……」

正当な対価をと始まった手ほどきではあるが、クライムの真っ直ぐな向上心とも言うべき心を素直にロコモコは内心称賛していた。

故に。

「クライム。次で最後の手ほどきだ」

「は、い」

雰囲気の一つ重いものになった。

息も絶え絶えであるクライムだが、その雰囲気をしつかりと感じ呼吸を整える。

「次で最後、だが。ここで止めたほうがいいと一応言っておく。次はお前次第ではあるが、死ぬ可能性がある」

「……」

死なせるには惜しい、いや違う。

人間であることが惜しい。

そう、打算なく思ったロコモコ。

才能は無い。心はあれど、高みに至る可能性は絶望的。

命を賭して、壁を超えたとしても……何の意味もないのかも知れない。ここでクライムが死んでも、何一つ心をロコモコは動かさない。

だから事前に言ったのはサービス。

僅かに残っているロコモコの人間性が口を動かした。

「それでも、やるか？」

「はい。男、ですから」

覚悟を決めた一人の男。

それを前にしてロコモコは気持ちよく笑みを浮かべることが出来た。

「その意気や吉。じゃ……死ね」

「――」

ロコモコの殺意を乗せた一撃。

その様はこの光景を見ているセバスやコキュートスの身体を一瞬強張らせた後、立ちあがらせる程。

ただの人間であれば、簡単にショック死するだろうその一撃をクライムは。

「……お見事さん」

「ハ、ハハ……」

生を持って乗り越えた。

智の化け物その片鱗と、残滓

なんちやって稽古とそのお披露目から帰ってきて。

「んー……むう」

クライムを通して手に入れた情報が頭を悩ませる。

渡された時の所感はまるまるその通りで、深すぎる情報をどうしたものかと。

クライムが自主的に集めただろう情報は良いんだ。

どこどこの宿のメシが美味いとか、装備の質を保証できる店だとか。

使えるとはいまいち言いきれないが、王都内で何処に人が集まるってことは伝わってくる。

その中でも価値があるとすべき情報と言うなら強者についてだろう。

ガゼフ・ストロノーフ。王国戦士長その人については多分にクライムの主観混じりではあるが、それだけにどういった人間なのかが良くわかった。

モモンガさんもこいつと面識があるみたいだし、記憶に留めておく必要がある。

そして蒼の薔薇。

国内に二つしかない。いや、無かったアダマンタイト級冒険者チームの片方。

意外といえはそうだけど、クライムは顔が広いらしくこいつらに関するの記載も多かった。

尤も、名前から始まり、どういう功績をあげたとか概要程度で、どういった人間かという部分は主観的印象論の色が強く信憑に欠けているだが。

もう一つのアダマンタイト級冒険者チーム、朱の雫なんてのもあるらしいがそれは名前だけ。

まあここまでと言うか、この程度であれば予想の範疇。

そう、ここまでなら良かった。

「良かった……んだけどなあ。これ、絶対に試されているだろう」
あるいは解決出来ますかと依頼でもされているのか。

こちらが知りたいと思っっているだろうことが記載されている文章。

「犯罪組織、ねえ」

犯罪組織。

恐らく各八つの部門から構成され王国内のあらゆる裏組織と関係を持つだろう存在。

王都の腐敗具合から見ても納得のできるものだった、犯罪が跋扈しているに違いはないが犯罪組織というか結社かね、そういった存在がバックにあった方が裏の者は動きやすくなる。まさに今俺がナザリツクの暗部として動いているように。

この辺からクライムが知っているか知っていないかが不明瞭な部分になってくる。

知っているのならば、クライムが集めただろう情報の中にも入っているだろうし、知らないならこれを書いた人間が誰なのかという問題が出てくる。

第三者にクライムを通して誰かが情報を集めていると露見するのは良い。

露見して緊張感を漂わせる存在程度であるなら安心して簡単に尻尾を掴めるつてもんだ。

つまるところ、クライムと一緒に情報を集めた存在であるのか。

それとも、クライムが情報を欲しているからと与えた存在であるのか。

それが問題だ。

「考えたくは無いが。後者、かね」

一緒に情報を集めたのであれば、この深さを誇る情報はありえない。

一兵士がその気になった程度でここまで王国の裏を知ることが出来るのなら、とつくに国は滅んでいるだろうし、少なくともクライムは生きていない。

表層が濁っているとは言えまだ澄んだものがある以上、深刻であつ

ても壊滅的じゃないだろうこの国の腐敗は。

次々と危うきを闇に葬り、裏だった存在が表となるまでいつていな状態だからこそ、付け入る隙があると思っただから。

やっぱり元々この情報を保有していた人間をクライムは頼ったんだろう。

いや、可能性として俺が困る程の情報を手にしているとは思ってなかったかも知れないが。

「じゃあ、そういう視点で改めて考えるところとして」

クライムの事は一旦置いておこう。

相当過ぎる情報通がクライムの身近に居たとして、この情報を渡してきたそいつは俺を誘導しようとしている。

それも俺ならば解決できるだろうというある種の確信を持って。

「……いや、本気で？」

誘導を試みるということは、だ。

この情報があれば解決できるでしょうと見越しているということだ。

つまりこれを書いた存在は、僅かに過ぎる俺達の痕跡を辿ってそう結論付けられる程の智慧を有しているということ。

……深読みが過ぎるだろうか？

いや、そうは思わない。この文面から漂ってくる試しの意。

互いの存在だけは知り合いつつも、関係を結んでいないなら双方にデメリットはどうなろうと存在しない。強いて言うなら万が一俺達が失敗した時に負うだろうリスク程度。

「なら、メリットは？」

俺達がこれから先得られるメリットは言うまでもない、目的を定められるということだ。

この犯罪結社組織を傘下に置くでも、壊滅させてしまった上で新たに裏を牛耳るでも方針を決めやすくなる。この情報が信用できるかの裏取りは必要だが。

ならばこいつのメリットは？

まさかクライムが手ほどきを受けられる、要するに強くなるために

なら何でもしますなんてバカじゃないだろう。

犯罪結社をどうにかして欲しいといった正義感を持つ人間という可能性？

「いや、無いな」

そんなちやちなモンで動くようなヤツなら、とつくに別の手段を取っているだろう。見ず知らずの信用できない俺達を頼るなんてことはしない。それこそ信用できる人間を集めて壊滅へ向かっている。つまり、だ。

そういった組織的な力を頼る、あるいは集わせることが出来ない存在であるということ。

そしてその情報を使う機会にも恵まれていない存在であるということ。

逆に言えば。

「個人に近い力でここまでの情報を保有したってこと」

……思わず身震いしてしまう。

明らかにこと知に關しては俺を遥かに凌ぐだろう、デミウルゴスといい勝負するのも知れない。

これが人間であった場合なら癪に過ぎるが、認めざるを得ないだろう。

いや切り替えよう。

正義感で動いているわけでもない、更に組織としての力もない。

ならば個人の意、目論見や欲望があつてこの情報を渡してきたってことだ。

なるほど、試されていると感じたのはここか。

与えた情報から想定されている通りに動けば、こいつだけが得をする。

そうなりたくないなら、自分は関知しませんのでご自由に利を得て下さいと。

「あークソ。やられたなー……」

まったくもって誤算も良いところ。

まさかあの真面目野郎がこんなやつと通じているなんて思わな

かった。

失策だ、失態だ。やってらんねえ。

だが。

「先手取れて嬉しいだろうがな誰かさん。あぐらをかいてくれるなよ？ あんたも綱渡りの舞台に立ったこと、思い知らせてやる」

正直楽しい。

この感覚はぶにと萌えさんと悪巧みしていた時の感覚に近い。今はもう一人だけれど、俺の思考にぶにと萌えさんは生きている。

あの人のためにも、このままで終わらせてなるものか。

アインズ・ウール・ゴウンを試す？ は、身の程を知れよ。てめえが手にしたのは都合の良い道具じゃねえってこと、教えてやる。

「ご思案中、失礼致します。よろしければお飲み物を」

「んあ、ありがとうソリュシヤン。そだな、ちよつと気分を入れ替えようか」

気分転換は必要だよ。

ちよいちよいとソファを勧めてみれば一瞬驚いた顔をしたけど、すぐ微笑んで腰掛けてくれた。

「人間の相手は疲れるだろう？ でもお陰で助かってるよソリュシヤン」

「勿体ない御言葉ですロコモコ様。ロコモコ様、アインズ様、ナザリツクへ尽くしてこそ私の私達でございます。どうか存分に腕を知恵を振るわれ、私共を使って頂ければこれ以上の幸せはありません」

プレアデスは今日も平常運転ですわかりません。思わず苦笑いしてしまっただけいいだろう。

しっかしそれでもまあすごいもんだ。いや、成長速度的な意味でね。

こつちが出した割と抽象的な指示にも関わらず、しっかり自分で考えた上で良い結果を出している。

俺もまだまだだ、見習わないとな。

ともあれ、休憩だ。仕事の話をするのもつまらない。

「そう言えばナザリックに帰ったのは俺がこっちへ来た時だけだったか。人間だらけのここは何かと疲労するだろう、身体や心の調子はどうだ?」

「問題ありません、常に御方達の御意志を叶えられるに万全を整えております」

うわああ、平常運転ちよつとやばすぎない? やばい。

「ソリュシャン、それはとても嬉しい話ではあるがそうじゃないさ。そうだな……今の件が一段落したら何かしたいこととか、欲しい物は無いか?」

「したいこと、欲しい物でございますか? 無論、ロコモコ様のお作りになられる諜報部隊、その副官に据えて頂けますことが何よりの褒美でございます」

ぶつこんできたね、中々の意欲を示してくれる。

何処と無く自信に溢れているようにも見えるソリュシャンの表情。

実際、屋敷内でのキーパーソンはソリュシャンなんだよなバルド・ロフールとの繋がり含めて。

副官の件は置いておくにしても、王都で活動する上でなくしてはならない存在になりつつある。

演技の質も見事だと思し、構成ビルドにしても実に諜報活動に向いているだろう。

「ちよおおおつと待つっす!!」

「きやつ!」

「うおつ!」

ばたーんと大きな音を立ててドアから入ってきたのはルプス。

ていうか口調よ、何回か漏らしてたけどやっぱそれがお前の地か。

「抜け駆けはなしって言ったじゃないっすか! 約束破りは許さないうっすよ!」

「お、落ち着きなさい!」

「落ち着いていられないっす! そうっすロコモコ様! 私! 私の仕事ぶりは——あ」

うん? 仕事ぶりは何だって? 何々? 何固まってるの? ほ

れほれ？

「も、申し訳ありません!!」

「大変お見苦しいところを!!」

はいはい、そうなりますよねー知ってた。

……ク。

「あはははははは!!」

俺、大爆笑なう。

「ろ、ロコモコ様?」

「え、えつと……」

いやー笑わずにはいられないよね。

なんせ久しぶりだ、敬われる立場を意識しなくて済んだのは。

「いやいや、すまんすまん。嬉しくてな」

「こ、この醜態をして嬉しく思われるとは……?」

「わ、私、この命捧げて償う覚悟はあるっす……」

ご乱心じゃないってば、もう。

「なあ二人共。やっぱりさ、俺は皆から忠誠を捧げられるモンじゃないんだよ」

「そのようなこと!!」

「仰らないで下さい!!」

あー違う、違うって。要らないって言ってるわけじゃないよ。

「落ち着いてくれて。確かにさ、諜報部隊が出来たらさ二人どちらかは副官になる。そしてその隊の頭は俺。直属の上司になって忠誠を受け取る必要が出てくる。そんな時は俺だつてある意味の覚悟をしてるから、ありがたく受け取るさ」

「……!」

おつと? そこでどうして目を輝かせる?

んーあー……なるほど? あれか、ナザリックで初めて忠誠を受け取ってもらえる存在になるってことに気づいたわけね。うん、その通りだよ。

「でもさ、今はやっぱ違うんだって。試用期間っちゃさそうで、先を見据えて忠を尽くしてくれるのは嬉しいし正解だ。さつき嬉しかったの

はな、二人の仲が良い姿を見られたからだよ」

至高の御方である限り、上司である限り。

そうそう見られる光景じゃないだろう、今二人が思ったようにそれは失礼にあたるものなのだから。

「今のうちによく見せてくれ、お前達そのものを。仕事抜き、これは俺のお願いだよ」

「ロコモコ様……」

瞳を潤ませる二人。

俺の言葉をどう思っただろうか？ ……なんて、素直な気持ちを吐露した直後だつて言うのにこの打算。

たまに嫌になる時があるのは残滓のせいだろう。

だけど、大事にしたい。

残った残滓は僅かで、クライムの輝きを見て少しの興奮を覚えどすぐに冷静になれてしまう程度の人間性。

ちっぽけで容易く消えてしまいそうな炎だけれど、ナザリックの成長を喜べて、モモンガさんと一緒に今を楽しめる心なのだろうか。

ドア越しの思戦

路地裏を歩くルプスレギナの目は鋭い。

前を歩く男は一定の警戒をしながらもその鋭利な視線に気づかない。

——こいつだ、こいつを尾行し、辿り着いた先を調べろ。

ロコモコはルプスレギナへそう下した。

姿を不可視化し、気配を殺し命令を遂行せんとする姿は闇の狼。

ソリュシャンではなく、ルプスレギナ。

選ばれたのは役割分担上、身軽であるという理由があつたが、ルプスレギナはそう捉えなかつた。

今の仕事は誰にでも出来る。

ソリュシャンの従者として振る舞い、間抜けを装う仕事はそう思えるものだった。

自身の有用性を示すに不十分であると、不敬は承知で考えていたところ。

故に今こそが切所。

ここで最大以上の成果をロコモコへと捧げるのだと、ルプスレギナは自身へ固く誓っている。

本来の気質、全てを抑え込み、必ずと。

何より本来この作戦はロコモコが行うべきものだった。

予想される難易度と言つた意味も含めて、ルプスレギナがこなせるかどうかの見通しが立たなかつた。

しかし、ロコモコがクライムを通して入手した情報。

その裏取り、発信源を突き止めるべくロコモコは今、クライムを尾行している。

ソリュシャンの能力もまた確か。

しかしルプスレギナにソリュシャン程の演技力はない。

だからこそソリュシャンは屋敷から動けない。

(私しか、出来ないこと。私に、出来ること。必ず、示し捧げるつす) ソリュシャンもルプスレギナも、ロコモコの副官という地位を心底

欲している。

だがその理由、内訳は違う。

ソリュシャンはロコモコへ忠誠を捧げることが認められた存在になりたいという思いが強い。

自分の忠誠を捧げ、受け取ってもらい認められる。

一番初めという優越感を感じたいと言う欲望があることは否定できないが、ソリュシャンをきっかけに多くの者達の忠誠を受け取って欲しいという気持ちは確かとソリュシャンにある。

対してルプスレギナ。

ルプスレギナはロコモコから必要と思われる存在になりたいと思っていた。

畏れ多いのは確か、ご寵愛をなんてとんでもない。ナザリックの為に、アインズの為にという気持ちも確かにある。

しかしそれ以上にただただ支えたいのだ、ロコモコを。

自分という存在に心を安らげて欲しいのだ、何処までも自分を責めているだろう彼の心を癒やしたい。

だからこそ、ロコモコの隣が欲しいのだ。

それは副官でなくとも、彼に侍る愛玩具、愛犬といった存在であっても構わない。

自身の考えと、ソリュシャンの考え。どちらが従者としてあるべき姿なのかはルプスレギナに判断は出来なかった。

ナザリック、プレアデスが一人ルプスレギナという存在は今の彼女に無く。ここにはただただロコモコの安寧を望む女がいる。

(間違ってる……っすよね。けど、私は……！)

そこまで考えて頭を振る。

目標が周りを見渡した後、一つの家屋へと入っていった。

そそくさ中に入ろうとする、先程まで自分の要望を聞いていた商人然とした男。

滑り込むように、自分の身を躍らせ共に中へと入ってみれば。

(臭いっす！ うええ……)

特段香が焚かれているというわけではない。

しかしルプスレギナは臭いと感じた。
それもそうだろう。

「コツコドール様、どうやらアレは間違いなくあそこに」
「なるほどねん。よくやったわ、ご褒美は期待していいわよん」
あまりに下衆にして下等と言わざるを得ない欲望の香りが充満していたのだから。

コツコドールと呼ばれた男に対して屋敷の間取り等やツアレの居場所と思われる場所を挙げていく男。

ロコモコが商人達の行動を制限しなかった理由はエサとした存在に気づかせるため。

(流石ロコモコ様っす……っすが、これをどう活かすんすかね)

続く会話を頭に入れながら、ルプスレギナは思考する。

(そのまま考えるなら……敢えてエサを奪還させる、んすかね?)

しかし二人の会話に奪還といった言葉は出ない。

存在していることに間違いがないということを入念に確認している様子。

(こいつらが何らかのアクションを仕掛けてくるのは間違いなさそうっすね……いや、そう言えば)

思い出すのは楽しくなれるものが欲しいと言った時のこと。

返ってきた言葉は何か。

(確か、男の趣味……)

思わず殺してしまおうかと手を振るうことを必死に我慢した言葉。

——あなたに侍るに足る男をご用意出来ます。

思い上がりも甚だしい、ナザリックの宝である自身を飾ることが出来る人間などいるわけがないと。

身震いすらしたのだ、ならばと仮に用意させて周りに侍る人間の男を想像して。

(それは今関係ないっすね。えっと、つまりこいつらはそういう人間を用意する力があるってことっすね)

もう一度頭を振って、集中し直す。

「金策も出来そうだし、ゼロの手を借りようかしらん? そうね、そう

すればあの屋敷の女達も手に入りそうねん」

「その時はあのメイドを是非私に」

（――）
続いた商人の男の言葉。

聞き終わると同時に手が奔った。

（とま——れっ!!）

荒い息をつきながら、その手をもう片方の手で抑え込む。

奇跡と言っていていいだろう、止まることが出来たのは。

そして幸運と言うべきなのは、不可視化が解けてしまう条件を満たさなかったこと。

（はあっ！ はあっ！ こい、つ……！ 絶対、絶対クロス！）

視線で殺せたのならと願わずにはいられない。

思えば上がりどころではない、存在を許してはいけない。

（私の全てはロコモコ様のモノだと言うのに——!! って、あ……そっか。そうなんすね）

まさに心のメスが出たルプスレギナ。

だからこそ気づいた。

（ああ、なんて畏れ多いんすか私。私は――）

欲望渦巻き悪臭漂う中で、ルプスレギナもまた自身の欲望を正しく認識した。

（ロコモコ様を、愛したい）

ヴァランシア宮殿。

ロコモコもまた最大限の警戒を持つて侵入した。尤も、その警戒心は完全不可知化だけで足るものであったと実感して拍子抜けしてしまっただが。

（王、王族住まう場所にしてはあまりにもザル過ぎる）

いや、ザルと感じてしまうがここ王国であって最大級の警戒態勢が敷かれている場所に足る警備ではあるのだ。ただナザリック、いやユグドラシルの力を看破する程ではないだけの話。

中に入っていくクライムの足取りに迷いは無い。

つまり、何度もここに訪れているということ。言い換えるのであれば訪れることを許されているということ。

(なるほどね、ただの一兵卒って認識が間違ってたか)

兵士という立場に違いはないのだろう、しかし同時に宮殿の誰かを守る親衛兵でもあるのだ。

当然のようにクライムの姿を見れば頭を下げるメイドもいる。

「……なんで、平民風情に」

当ててんのよ！ もとい聞こえるようにしてんのよ！ だろうか。

うちのメイド達の爪垢でも煎じて飲ませたいと思うロコモコだが、そもそも爪垢すら見逃さないだろうと気付き、宮殿メイド達の質を哀れんだ。

(王の価値、その低さの証明、か)

権威とは衣の上に着るものである。

そして衣とは身の回り全てを指す、当然妻であったり子供もそうだし、兵士やメイドに至るまでの全てが王の衣なのだ。

特にメイドと言った様な存在は衣の価値を如実に示す。

(まあ、街の様子と合わせて考えても……無能と言わざるを得ないな) ナザリツクで先程悪態をついたメイドのような者がいれば。

(やめとこ)

考えることを止めて、警戒心を戻し集中してクライムをつける。

そうすること少し、ある扉の前でクライムは足を止めた。

手の甲を扉に向けて、ノックをしようとしたのだろうそれは扉に当たる前で止められ、扉をクライムは開いた。

今のやり取りの意味はロコモコにいまいちよくわからなかったが、クライムと同時に入室は出来ず閉まったドア近くの壁に背を預け耳を澄ませる。

「クライム」

「失礼いたしますラナー様」

さて、ここで一つロコモコの思考を超えることがあった。

宮殿に部屋がある以上高貴な存在がこの部屋の中にいることはわかる。

情報をクライムに渡した人間であるかはまだ分からない、国にとってある程度重要な人間に間違いはないと思っていたが。

(ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ……まさかの第三王女様かよ)

王女の部屋へノックすらせず入室したクライムの姿。

中から聞こえるクライムの声色はやや硬いものではあったが、敬愛等ある種の親しみが含まれているし、ラナーにしても声から窺える感情は親愛。

(つたく、とんでもない尻尾掴んじまっつたな)

中から聞こえる会話は、ラナーの純粋にクライムを慮っているのだろう内容に、照れたように言葉を詰まらせながらも返事をするクライム。

わざわざリスクを承知でこんな所まで潜入したというのに、なんだこの甘酸っぱ劇はとロコモコの顔は引き攣りもする。

しかし。

「それにしてもアインドラ様達は大丈夫でしょうか？」

「娼館襲撃計画の事？ 大丈夫、慎重に慎重を重ねるだろうし、まだ場所を突き止められてないわ。見つかったその場で突入なんてラキユースはしないと思う。それに、保険も出来たでしよう？」

「そのことですが、やはり……」

「クライムが強いと言った人だもの、きっと上手く協力できると思うの！」

ラナーがクライムに情報を託した人間であることは理解できた。

(やり手、だな)

保険という言葉は失言だったのだろう。ラナーにとってではなく、クライムに対しての。

ラキユース達が失敗したとしてもロコモコ達が達成するだろうという意味合いだったものを、協力を得られるかもしれない相手を得られたという意味へ自然に変えた。

言い変える前の言葉こそがラナーの本質だろうとロコモコは考える。

しかしながら、クライムに対してその本質を気取られたくないとも。

(本質が冷酷……いや、王の器、あるいは執政者の鏡。少なくとも誰かの上に立つものに足ると言うべきであるのなら。慎重を期すだろうという言葉も一部偽りかもしれない。むしろ捨て駒上等、失敗しても構わないと思っているかもしれない。ラキュースつてのは蒼の薔薇のリーダーだったか、その面を知ってるのか知らずに利用されているのかが気になるところだが……クライムに対しては、まだわからないな)

ロコモコがラナーの人物像を分析している中。

ラナーもまた、自分にアクションをかけてきた者を分析していた。

王女様のお気に入り。クライムがラナーと近しく親しい存在である事実は、妬みの色を大きく含みながらも宮殿内や王国兵士に広まっている事実だ。

だがクライムへ本気で情報をくれと言う人間はいない。

持っているものは国を、あるいはラナー自身を揺るがすといった大したものではないし、ラナーに向ける忠誠心や敬愛もまた大きく知れ渡っていることから無駄と判断されている。

それを知った上でクライムにアクションをかけるということとはすなわち、ラナーにアクションを掛けてきたということだと認識していた。

ましてやクライムが報告してきた手合わせの内容。

ガゼフに稽古をつけてもらった時の尊敬や憧れを多く含んだものとはまた違う、ある種の畏怖を交えながらの報告。

想像し得ない力を有している相手。

数多の断片的な情報を事実へと結びつける事はずつと行ってきた。さらに最愛のクライムだ、誰よりも多く深く接してきた相手の感情を違えるわけもない。

だからこそ、そうだとラナーは結論付けた。

故にラナーはどう転んでも利が舞い込むように仕掛けた。

他にも知っている事があると匂わせ、開示してもいいが、して欲し

ければこの問題をどうにかしてみろと。

愚策である事はわかっていて、相手の不興を買うかもしれないことさえ承知。それでもこの方法しか無かった。

全ては彼女が思う理想郷を手に入れるために。

ロコモコとラナー、二人の思索は絡み合う。

ロコモコは先手を取られたと思っていたが、ラナーは取らざるを得なかった。

しかし二人は今こそが始まりだと言う確信を持ち、思案に暮れる。

部屋の前に来た一人のメイドが扉をノックした。

その響きをもって、二人の前哨戦は始まりを告げる。

そんな中、ロコモコへとルプスレギナより伝言が届く。

『ロコモコ様、ご報告がございます』

『ルプス？ わかった、こつちも切り上げるところだ、屋敷で落ち合おう』

『いえ、恐らく緊急です。戻られるのであれば、私も戻りますので道中にて』

『……よし、ならば——』

ロコモコの仕事

『なるほど、状況はわかりました』

『ええ、多分これは岐路つす。どちらに進むかは俺が決めて良い事じゃないつす』

そう時間は多くない。

ルプスからの報告に出たコツコドルとか言う奴は、少なくとも犯罪組織中の上役に位置する者だろう。本人が来るとは思えないが、間違はなく息のかかった存在がこの屋敷へ近いうちにやってくる。

こちらの目論見通り、目的はツアレを買い取った事をダシに更なる甘い蜜を吸うことだろうな。

つまりは好機。

我ながらツアレをゲットしておいたのはナイスプレーだったな。裏界限の情報が多少掴めたら良かった程度だったんだけど、クライム……もといラナーからの情報。人身売買に関する法制定と絡めれば一気に価値が高まったし。

まあそれは良い。

モモンガさんへラナーの件含めて報告をした。

『ロコモコさんは、どう思いますか？』

『……この犯罪組織を支配、あるいは傘下に置けば、王国において裏の支配者となるのは容易つす。逆に殲滅ないし二度と活動出来ない状態になってしまうのであれば王国の国力は向上、するかはまだわかりませんが少なくとも真つ当な方向へは向かう足がかりにはなるつすよ』
モモンガさんが聞いてきたのは俺ならどうするかって話だとは分かる。

だけどだめだ、それをしてしまったら、認めてしまえば。

俺がナザリックの裏の支配者となってしまう。

それだけはダメだ。

『ロコモコさん……』

『わかって下さいつすモモンガさん、一度これを許してしまつたらざるざる行くつす。相談は喜んで、モモンガさんの意を叶えるための協

力も献身もするっす。だけど決定だけは俺がしちやいけないすよ』
俺ならこうするって考えはもちろんある。

だけどそれは絶対にしてはいけない事だ。俺はナザリックの、モモンガさんの意を叶えることこそが存在意義なのだから。

故にこうすればこうなる、ああすればそうなるよと可能な限り具体的なビジョンを示すことこそが俺の仕事であり立ち位置。

そしてその最大目標はアインズ・ウール・ゴウンの名を轟かせること。

今モモンガさんに決定してもらおうのは、どう轟かせるかその第一歩なのだから。

『……今はとにかく金がないです。パンドラズ・アクターが冒険者として稼いでくれてはいますが、それ以外にまとまった外貨を稼ぐ手段がない。この問題は恐らく当面続くだろうからこそ解決すべき案件だと思えます。ロコモコさん、王国は金のなる木ですか?』

『微妙な所っすが……植林する事は可能っすね』

王国を滅ぼすことを視野に入れて吸い尽くすか、力を残して金を引き出せるATM代わりにするかって違いはあるが。

モモンガさんは活動資金不足を当面続くだろうと言った、同感だ。

デミウルゴスの人間心理把握は進んでいるだろうが、完全なノウハウを得られたなんて段階にはまだ至っていないだろう。

『わかりました、ならその犯罪組織を囲い管理する。その上で王国には力をつけてもらいましょう、ナザリックの資金源として。出来ませぬ?』

……ふふふ、流石我がマスターさん。もう、モモンガさんってば欲張りね。

『我が神Wennessのお望みとあらば』

『やめてください!?!』

あーあーよっしやよっしや、やったろうじゃないか。

そうだよこれだよ、これこそ俺キツイの担当の仕事だったわ!

『ありがとうっすよモモンガさん』

『お礼を言われる理由がわかりませんよ。こちらこそ、よろしくお願

いします』

伝言を終える。

うんうん、やる気出てきたね。

モモンガさんは言ったのだ、要するにどっちともやれって。

犯罪組織を支配しながら、王国にある程度の力を持たせろってことだ。

んじやまあどうしますかね。

犯罪組織を支配するのはまあ簡単だ、ぶっちゃけ攫って拷問かけて忠誠を誓わせりゃいいだけの話。調教とも言うか。面倒くさいなら支配で吐かせてもいいし。

流石に芽を残してはおけないからまるっと組織そのものをいだけるようにしなきゃならないが、ありがたーい事に向こうからやってくるんだ、馬鹿だよなー詰めをかける時こそ一番警戒を高めないといけないってのに。

自分たちこそが上にいると思ってるんだろう、大きく振る舞えばそれが当たり前に通ると思ってるんだろう。今までそれがまかり通ったが故に。

知らないだろうから教えてやるよ、獲物の気持ちってやつを。

「……ああ、そっぴやルプスは殺したいやつがいるって言ってたか」

えらい剣幕で言われたしな、そいつはあげよう。

ソリユシャンにしてもそうだ、拷問するのを任せたらご褒美になるだろうか？ 聞いてみよう、せめてストレス発散位にはなればいな。

組織をまるっと頂くが、別に原型を留めておく必要はないんだし。やっぱり考えないといけないのはどうやって王国に力をつけるかって部分だな。

それはまあ王国の裏を知り尽くしてるらしいこいつらの持つ情報次第ではあるけど、ラナーと直接会う必要も出て来るか。

「できれば、ラナーに対して上から構えたいところだけだ」

第三王女を旗に、王国の治世へ介入することが出来れば。

何とも言えないマウント合戦だ。

取れたと思っても、実は取らされたんだよみたいなこともあり得るし。

結局ラナーの持つ欲望というか、望みを知らなきや無理か。

それは言い換えれば弱みだ、握っておかなきやならないだろう。

「まあこいつらからわかる事もあるだろう……さて、誰が来るのかは知らんがどうでもいい。精々ナザリツクの役に立ってくれ」

笑わずにはいられない。

「あなたは世の渡り方をよくご存知だ……今回の件が終われば、良き関係を作り直したいものです」

サキユロントと言ったか、屋敷を出る間際俺に対してそう言い残した。

「ルプス、あいつらを尾行しろ。無いとは思いが二手に分かれるような事があればサキユロント、あのフードの男を優先。何処かの建物に入れば伝言をくれ、位置は物体^{ロケット・オブジェクト}発見で把握できる。ソリュシヤンはとりあえず塩撒いというて」

「はっ」

ルプスレギナが姿を消して音もなくこの場を後に。ソリュシヤンがドアに向かって塩を投げつけてるのを見ながら、割と感心している。

「……あの喧嘩騒動を収めたところから、か」

「ロコモコ様？」

俺の存在を晒したのは酔っ払いの喧嘩を収めた時と、裏路地でクライムとやり取りした時だけ。

クライムとのやり取りは事前に周囲の気配を確認していたし、実質喧嘩仲裁の時だけでも関わらずちゃんと把握していたということだろう。

「いや、思ってた以上に優秀な組織だと思ってな」

「……そうなの、でしょうか？」

「ああ。喧嘩仲裁で俺を知り、ツアレを助けたことによって人柄と身分を推測したんだ。こうして直接会うのは初めてだが、あいつらに動

揺は見られなかった。予測の内つてことだったんだろうな」

スタツファン・ヘーウィツシュ、だったかあの巡回使とか言う役人は。

頭ごなしに恫喝してくる上に下手くそな演技。ありやただの愚物だったが、サキュロント自身か彼に指示をした存在は優秀だ。確実にこちらへ詰みをかけてきていた。

「しかし、ロコモコ様にあの様な態度を」

「構わない、あちらが想定した通りの人物を演じる必要があった。むしろよく我慢してくれたな」

「勿体ない御言葉です」

正義感、あるいは哀れみからツアレを保護した慈悲深き大商人。

なんとも反吐が出る人物像ではあるがセバスが王都で築いた偽造身分のこともある、俺はその主として顔を合わせる必要もあつたし仕方ない。

その甲斐あつて相手方からすれば実に御しやすい相手だと思われたことだろう、サキュロントが最後に言った言葉は遠回しな傘下への誘いでもある。

「改めて王都、いや王国か。思っていた以上の泥舟だな、掌握した後のことを考えれば頭が痛い」

スタツファンは本物の役人だろう、あの欲望丸出しの視線や恫喝。今まで甘い蜜を吸いきつてそれに慣れきっている様子を見るにだが。

つまりは役人、貴族が犯罪組織と通じている証明。

組織さえ掌握してしまえばほぼ王国を牛耳られるという証左でもある。

「ソリュシャン」

「はっ！」

「俺はルプスの報告を待つてからだ、ここから出ることになる。その間、ツアレの警護をしつつこの屋敷へテレポーテーション転移で獲物を寄越すからそいつらの管理をしてくれ。ツアレに対してナザリックの存在を明かしても良い。それと……遊んでも良いが、頭と口は回る状態までにしてくれよ?」

「かしこまりました、また遊びを許可して頂き有難うございます」

俺とルプスが動いている間にツアレ^エが奪われる可能性は僅かにある、念の為だがケアは必要だ。

転移は道具生成で対象一体を指定の場所へ送られるものが作れるし、ルプスの支援があればそれなりの数を連れてこられるだろう、問題ない。

サキュロント、スタッフアんどちらかへ支配をかけ情報を割らせる。出来ればコツコドールとか言うやつも居てくれればもつとスムーズにことが運ぶだろうが……居るかは五分五分だな。

『ロコモコ様、二人揃って建物に入りました』

『わかった、すぐに向かう。他に出入りが無いかだけ注視しておき俺を待っててくれ』

『かしこまりました。お待ちしています』

よし。ここからはスピード勝負。

ラナー陣営には何一つ渡さない、全て攫いきってやる。

一夜の決着

「あな、たは……」

「ナザリツク、プレアデスが一人、ソリュシヤン・イプシロン。慈悲深きロコモコ様に感謝なさい、これより私があなたの警護に付きます」
連れてこられたのは何処にあったのか大きな部屋。

ツアレにそう告げたソリュシヤンの姿はメイド然というには物騒に感じるものではあったが従者を示して、時折見かけるお嬢様らしい雰囲気からは全く想像がつかないもの。

「あ、の……」

「口を開くことを許した覚えはありません、これから起こることに対してもまた同じです。黙ってそこへ居るように」

温度を感じないその言葉にツアレは今のソリュシヤンこそが本当の顔だと直感した。

自分の事をなんとも思っていない、恐らくロコモコの言葉さえなければこうして側に居られることすらないだろうと。

「……」

湧き上がる恐怖が口から出ないよう固く結び、ツアレは身を縮める。

ここに連れてこられてから……いや、助けられてからというもの、まさしく空気の様な存在として扱われていた。

不定期的に屋敷を歩けと言われるも、基本的にそういった指示がなければ部屋から出ることには許されなかったし、何かをさせられることもなかった。

居るか居ないのかわからない、まるで透明な置物。

それでも、今まで受けていた扱いを思い出せば遥かに天国だった。痛い思いも苦しい思いもなくてすんだし、ただただ空虚な時間に身を任せるだけで生を繋ぐことが出来る。

だからこそソリュシヤンが言ったように、ロコモコは慈悲深いのだろう。その面を見られることは無かったが。

「来ますね」

「——え？」

片目に手を当てていたソリュシャンが小さく呟いた、それと同時に。

——どさり。

「ひっ!?!」

「もう忘れたの？ 黙りなさい。……それにしても、流石はロコモコ様、見事なお点前でございます」

何もない空間が一瞬揺らぎ、そこから降ってきた一人の男。

それにはツアレも見覚えがあつた、なにせかつてのスタツファン^客なのだから。

「これはこれは……先程ぶりでございますが、ようこそおいで下さいました」

「ひっ……!?! な、何だ!? ここはあの屋敷か!? き、貴様! これは一体どういうことだ! このようなことをして——!」

「——黙れ」

ツアレは小さく息を飲んだ。

男を見て仕事の時を思い出したからではない。

「ロコモコ様への無礼に過ぎる態度、言葉……全て許せない。万死に値すると知りなさい」

「あ……ぐ……!」

冷たく昏いソリュシャンの瞳。

まさしく絶対零度を思わせる雰囲気^客に息を飲んだ。

「ですが私はメイド……許しもなく殺してはいけない身。我らが主は慈悲深く、死が許可されるまでの間、楽しみを許してくださいます」

ツアレにしてもはや意味がわからなかった。

先程までの空気をかき消し、漂う雰囲気は妖しく、ソリュシャンは身を纏うメイド服の一部を開ける。

「あ……あ……!」

「私で楽しみたかったのでしょうか? それは私もです、是非……あなたで楽しみたいと思っていました」

吐息に熱が帯びる。

混乱しているのはスタッフファンとて同じだ、わけがわからない。急に何者かがお楽しみ最中に乗り込んできたと思えば景色は一転し、目の前には情欲を覚えた存在がいて自分を誘っている。

今いる所は白昼夢か、それとも別の幻か。

「けひ、けひひひ……そうか、そうであったか」

この場で自分を突き動かすものは本能。

わからない、わからないが自分のオスは目の前のメスを欲している。

メスもまた同じなのだ、オスを欲しこうして身へ誘おうとしているのだ。

ならば。

「——な、あ?」

「あはあ……」

伸ばした手がソリュシヤンの身体へ沈んだ。

ソリュシヤンの顔に浮かんだ三日月はその深さを増して、更に更にもっと奥へとその手を、腕を導いてゆく。

「さあ、楽しみましょう?」

「う、あ……うあああああああああああ?」

絶対的強者であり捕食者。

ツアレの目に映るソリュシヤンは、まさにその存在で。

本来であれば、この光景を見て真っ先に悲鳴を上げていただろう自分はずなれ目を釘付けにしたまま動かないのか。

それはソリュシヤンが一人を飲み込み切り、新たなナニカが部屋へと落ちてきても、わからないままだった。

「どういうことだ! 何が起こっている!? 相手は一体誰だ!」

「そ、それが俺達にもまだ良くわからないんです! コツコドールの娼館が襲撃されました! 相手の身元もまだわかっていません!

それで——けひゅっ」

八本指、警備部門長ゼロ。

コツコドールからの依頼を受け、サキユロントへスタツフアンの付き添いを命じていた彼もまた近い場所に留まっていた。

そのゼロの前へ慌てた様子で報告に来た部下は、ただ事じゃないという漠然とした三つの回答をした瞬間に身を爆ぜさせた。

びちやびちやと肉片が床に落ち、その一部がゼロが座っていたイスの前にまで飛び散る。

「……ボス」

「ああ。どういう仕掛けかわからないが、これは宣戦布告だろう。すぐにでもやつてくるぞ」

間を置かず、六腕と呼ばれる人間——一人はアンデツドだが——たちがサキユロントを除いて姿を現し、部屋に緊張感を齎せる。

サキユロントは上手くやったはずだった、その報告を別の人間からついさつき受けたばかりだ。

屋敷の主は人はお人好し、王国のルールに明るくない故の失敗につき、結構な小遣いと商品を得られるだろうと。また、清濁併せ呑む考えのようで今後の関係も上手く作っていけるだろうと。

「清濁併せ呑む……まさか、付け入られる事を想定していた？」

他の動き、嗅ぎ回っていた蒼の薔薇とてまだ何も掴めていないはずで、今こうしてコトを構える相手はいない。

つまり動けるとすれば、この屋敷の手のもの以外にない。

「馬鹿な……いくらなんでも早すぎる」

浮かんだ考えを振り払うゼロ。

王都での動きは表も裏も把握している、あの屋敷の者達とていわば新参だ。八本指という裏組織があることに気づけても尻尾を掴むまでに至るはずもない。それは自分たちのネットワークからも結論が出ている。

「ボス、とりあえず」

「ああ、警戒態勢だ。何人かは他の部門長へ連絡を」

「わかりました。なら俺が——」

ぐしやり。

俺が行くと答えようとしたのだろうその言葉は、文字通り潰され

た。

「あーあー、どうなろうと汚いっすねー人間って。やっぱ玩具にすらしたくないっす」

「な——」

「なにもんだっ!!」

唐突に何も無かった空間から現れた姿はメイド、のような服を着て、聖印を象ったような巨大な武器を持つ赤髪の女。

頬に浴びた返り血を指で拭い、うわばちちいと拭っている。

「——ナザリック、プレアデスが一人、ルプスレギナ・ベータ。覚え……なくていいっす。とりあえずあんたがボスっすか、それ以外は邪魔なんで殺し——黙らせちゃうっすね」

不意に美しさすら感じる畏まりを見せ、人懐っこいと言うべきか笑顔を浮かべた後、指をパチリと鳴らし。

「フロウアップフレイム吹き上がる炎」

「うぐおおおおお!!」

部屋の中に火柱を顕現させた。

「つてあー、ちよつと派手すぎたっすかね？ うー……怒られちゃうっす」

「き、さ、まああああ!!」

六腕が炎に巻かれる中、ゼロのみが一步を踏み出し身を包む炎をかき消した。

顔に示すは憤怒。

未だに理解は及ばない、しかし目の前に立つ女は間違いなく自分の敵だと認識は出来た。

「あちやー……ちよつと面倒くさそうっす」

「ふんっ！ 貴様が何者かは知らんがオレの強さは理解できたようだな?! だが後悔しても遅い！ 貴様は今ここで殺す！」

事実として、ルプスレギナとゼロの相性は悪い。

ゼロの実力はアダマンタイト級冒険者に届くと言われているもので、この世界にとって強者に違いない。

見た目から推測するにしても己の身体を武器とした接近戦を得意

としているだろうゼロは、支援をメインとするルプスレギナに取って分が悪い相手でもあった。

だが、ルプスレギナが言った面倒臭さはそういうことじゃない。

「一応言っておくっすけど……頭、下げたほうがいいっすよ?」

「何を寝ぼけたことを——かはっ」

ルプスレギナは構えることもなく、ただその場へ傳いた。

理解できないその姿に一瞬動揺するも、ゼロは腕を大きく振りかぶりルプスレギナへと突貫——しようとした。

「ほーら、だから言っただっすのに。……ロコモコ様、お見事でございませす」

「良いって。とりあえずこここの火消して次行くぞ」

「はいっ!」

倒れたゼロ、火に巻かれたままだった他の六腕は辛うじて生きているだろうか焦げた身体のまま、ソリュシャンが笑顔を浮かべて待っているだろう場所へと送られた。

「クライム?」

ロコモコ達による犯罪組織への襲撃から一夜明け、再びの夜。

ラキュース達の捜索も実らず、どうしたものかと思案に暮れるラナーの部屋。

そのドアがノックされずに開かれた。

「なるほど、やっぱりノックしないことが符丁だったわけだ」

「……あなたは」

開かれたドアの先には誰いなかった。そしてドアが閉じられた時に現れた。

「はじめまして、ラナー王女。こうしてお話できることを楽しみにしていましたよ」

「はあ……なるほど、どうやら私は負けてしまったようですね。どうぞ、立ち話も落ち着きません、こちらに」

空間を塗り替え、満足気な笑みを浮かべた人間……いや、頭から獣の耳を生やした男を見て、ラナーは自身の敗北を悟った。

「犯罪組織……いえ、八本指は？」

「さて、どう考えられますか？」

イスへと腰掛けたロコモコを前に、まずはどれ程の敗北かを知るためラナーは問う。

しかしながら疑問へ疑問を返されてしまった、それはつまり。

「完敗、ですか」

「こちらからすれば辛勝と言ったところですが」

お手上げだった。

現にまだラナーの元へ八本指が壊滅したとも失踪したとも、何も報せが届いていない。

これは何一つラナーが欲しいと思っていた材料が不確定であるということの証明。

「……」

じとりとロコモコへ視線を投げてみても、ニコニコと笑顔のまま何も話さない。

つまりこれは勝者と敗者を決定づけるための邂逅、上下関係を示し改める機会だとラナーは認識した。

「私に捧げられるものは多くありません。あなたの望みは何でしょうか？」

「あなたの望みを知ること」

そうしてラナーは屈服した。

わかった、わかってしまった。

これは何よりも悪質な強請りだ。

「酷い人ですね、あなたは。それをエサに私を使い続けるつもりですか」

「まさに」

ロコモコの言葉は少ない。

これは意図的にそうしていることでもあった、ラナー程の叡智を自分を持ち合わせていないと正しく認識しているが故に、余計なことを口にすればそこから突破口を作り出されてしまうからと。

同時にラナーもその意図を感じ取った。

だからこそ、抵抗は無駄であると実感した。この場で出来ることはロコモコが言うように自分の望み、欲望を伝えることしかない。

そうして何かに使われるのだろう、使われていく中でなんとか突破口を探すしか無いのだと。

「一人の男を手に入れたいのです」

「クライムですか」

ラナーは静かに頷いた。

クライムを手に入れたい、その首に輪をかけ、一生手元で飼っておいきたいのだと。

純粋な瞳で、何よりも歪な欲望^{ねがい}を口にした。

「先程王女は捧げられるものが多くないと言いましたが」

「ええ、本当に多くありませんよ？」

笑ってラナーは言う。

真実何も無かった、手にしているものは多くの情報。

しかし、恐らく八本指を手中に置いているだろうロコモコが得られるだろうものでもあった。

それでも提供できる情報があるとすれば、王国にある派閥抗争についてのものくらい。

「自身の願いを叶えるために、この国を売れますか？」

「――」

ラナーの瞳から光が消えた。

即答できる問いだった、もしもクライムと小さな箱庭を築くことが出来るのであれば全てを捨てることなんて容易に過ぎる。

しかし即答しなかったのは、ロコモコの言葉があまりにも軽かったから。

「……」

じつとラナーは改めてロコモコを観察する。そしてそれをロコモコは許した。

八本指をどうにかしたと、宮殿に容易く単身乗り込んできたこと。間違いなく疑いようもない実力者だ、それこそ自分が、世界が想像

出来ないほどの。

その観察結果に基づくならば。

「あなたは、この国なんて容易く滅ぼせるのでしょね。八本指をどうにかしたようにか、それ以上に」

ラナーの言葉にロコモコは反応しない。

しかし内心で頷いていた。極論、アインズが絶望のオーラを発動しながら街を歩くだけで滅ぼせるのだ。

ロコモコにそれほどの力は無いが、同じ結果を齎すことにさほどの時間を要しない。

敢えて言うのならば残虐な手を使うことになるだろう、自身の力がそれほどでもない故に。

「お答えします。願いのためになら、全てを捨てられます。尤も、元より価値を感じたことはありませんが」

「よろしい」

笑顔のままラナーの答えに頷くロコモコ、そしてそのまま立ち上がる。

「王女、これは契約だ。あんたの望みを叶えよう、そしてその代わりに国を捧げるんだ」

悪魔の契約。

その言葉がラナーの頭に過ぎったが。

「畏まりました」

その場に、初めて王女は傅くという行為をした。

主会議、アインズ様いじる

「おつですモモンガさん」

「はい、ロコモコさんおつです」

一旦王都での活動は区切り。終わりではなく区切り。

ラナーにも言ったけどまじで辛勝だろう、ギリギリだったと思う。

コツコドールを捕まえる事が出来たり、八本指がある程度王都内に留まっていたからとかの幸運も味方してくれたお陰だ。

そんなわけでこうしてモモンガさんにご報告。

今後の展開についても相談したいしとでナザリックに帰ってきたわけだ。

「しつかしまあ……先に報告書で読みましたけど、流石ですね」

「買いかぶりぱーとさんつすよ。いや、謙遜じゃなくマジもマジで。運が良かったつす」

ほんとにね。

「とりあえず、こつちに送ってきた八本指の幹部は恐怖公とニューロニストに任せてますけど」

「流石的確つす。送った二人に関しては忠誠を植え付けた後もつかい王都で活動してもらおうつすから」

麻薬部門長のヒルマ、そして警備部門長のゼロ。

とりあえずこの二人に関しては早めに服従させたい故の処置でもある。

「わかりました。他にも居るみたいですけど、そいつらは？」

「奴隷売買部門長……コツコドールに関してはデミウルゴスにつけようかと。牧場の手伝いというよりは人間心理把握の一助として上手く使えると思うつす。まあ今はまだルプスの遊び相手になつてると思うつすけど」

なんともまあ可愛いけどおつそろしい顔して、そいつ下さいと言われたもんだ。殺さないようには言ってるから大丈夫だろう、大丈夫だと思う。

他の奴らに関しては保留と言う名の拷問継続、ありつただけの情報を

吐かせた上で検討する予定。ソリユシヤン大歓喜である。

二人が嬉しいと俺も嬉しい。

「ロコモコさんの笑顔が怖い、ともあれ了解です。これで王都の裏……というよりそのラナー王女ですか？ それ含めたら全体をほぼ掌握出来たって感じですか」

「そうっすね。ナザリック活動資金保管場所の体は取れるとおもっすよ、ある程度の加減は必要っすけど。今後の方向性に応じていつでも潰せます。まあ長期的に活かすってことになる結構な介入が必要になると思うっす」

瞬間的な搾取であれば構わないけど、長期間継続的になると色々着手すべき問題がある。

たとえば宮殿の派閥抗争問題だったり、貴族達の汚職問題。

正直肅清飛び交う魔都まっしぐらレベルのテコ入れをしなきゃダメだろう、まじで現国王何してんの。

「金目的で今回はこうしましたけど、ロコモコさんから見てナザリック国作りに利用は出来そうですか？」

「うーん……周辺諸国の情報が集まりきって無いのでなんともっすけど。王国だけで考えるのなら本格的に乗っ取るパターンと、王国に恩を売ってナザリックへ依存させてしまうパターンはありかもっすね」
どちらにしても膿を出し切ってからになるのが前提だが。

乗っ取るならば土台がゴミ過ぎるけど、善政を敷いてしまえばモモンガさんというかナザリックを喜んで受け入れるだろう、そうなること異形種に対する忌避感解決もしやすい。

ナザリックへ依存させてしまっうって形なら直接統治する手間が省けてこっちは身軽になる。ラナーを遊ばせることになるのが気がかりではあるけれど。

ただ王国から土地を下賜されたりってパターンには持ち込みたくない、形だけとは言え王国の下につくのは最高にムカつくしメリットが少ない。

「なんとも言えない感じですね。とりあえずどっちにも舵を取れるように準備だけしてもらっていいですか？」

「了解つす。まだこつちも完全に土台作りが出来てないつすから、それを見て決めるつすか」

「そうしましょう。……他に王国を利用できることつてあります?」

「んー、そうつすね言つてしまえば遊び場……色々な現地人に対する実験には適してると思うつす。失敗してももみ消すのは簡単、人民幸福度もほぼ最低値つすから釣りも容易つす」

「いやほんと何をどうしたらここまで腐るかね?　ここまでするほうが難しい。」

現国王、確かランポツサ三世だったか?　ラナーの父親とは思えない無能っぷりだわ。部下というか王以外のヤツがある意味優秀と言うか悪知恵だけは働くとか?　それを御しきれないあたりやつぱ王がダメダメなのか。

「実験ですか。それは有り難いですね、試さないといけないことは山程ある」

「はい。つとそうだ、今後俺は役割上王国に留まれないことも関係してセバスを再び王国に戻してもらいたいんですけど大丈夫ですかね?」

「ん?　セバスをですか?　別に引き払つてしまつてもいいんじゃないんです?」

「もちろんモモンガさんがしたい実験にセバスが必要なら取り下げるつす。ただデミウルゴスが今人間心理把握つて言う名の悪用方法を考えてくれてるつすが、それだけじゃ片手落ち、活用方法も調べないつす。セバスには王国であたつてもらいたいつす」

「いい面悪い面両方掲載してこそその教科書だ。」

デミウルゴスなら確実に人間の利用方法は考えつくだろうが、活用方法を思いつきはしても切り捨てるんじゃないかな。

セバスにその面を任せて二人協力態勢で教科書作りにあたれば、より良い物が作られるだろうと思う。

「んーまあ金の工面は付きそうですしあの屋敷維持費も賄えるか。確かにセバスは良い人選ですね、カルマ的に考えても」

「はい、ツアレに加えて何人かあの娼館で囲われてた女を保護して

るっす。表向きは屋敷の主である俺、ソリュシャンが離れている間の屋敷維持って名目でセバスが残り、その女達のケアをしつつ活用方法を考えてもらおうかと」

「セバスハーレムか……」

いや、別にそういう意図じゃ……あ、でもそう考えたら腹たつてきたな、おのれセバス。

「わかりました。外の人間をナザリックへ迎えるわけにもいきませんし、今後外で捕獲した人間は屋敷に送る形で。それをセバスに管理してもらいましょうか。……ニニヤに恩も返せますし」

ニニヤ？ にやーん？

まあ良いか。

屋敷を介して捕まえた人間をデミウルゴスの牧場送りにするかも篩にかけられるし、一石二鳥だろう。

「了解っす。ありがとうございますモモンガさん」

「いえいえこちらこそです。ロコモコさんはこれからどうするんです？ あと副官の件も」

もちろんある程度八本指の躰に絡むけれど……結構手すきになるな。

デミウルゴスから引き継ぐ形の世界情勢に関しては、アウラに頼んでこの世界の正確な地図作りが終わってからのほうが効率的だし、それももう少し時間は必要だろう。

しばらくはナザリックの皆と交流するか、直接皆の進捗も確認したいし。

んで副官だけど。

「俺はまず皆の進捗確認に動きます、終わる頃には八本指も大人しくなってるでしょうし。副官はソリュシャンにしようかと」

「へえ、ソリュシャンにするんですか。てつきりルプスレギナにするかと思ってきました」

好みで選んだりしないし!? ルプスもソリュシャンも甲乙つけ難いとかおもってねーし!?

ああ!?! 絶対ニヤニヤしてるでしょモモンガさん! つてかこや

つめ、俺とメコさんの性癖ぶち抜き勝負知ってるな!?

「……色々言いたいことはあるっすけど。ソリュシヤンのが適任なんすよ、ルプスと俺じゃ役割が被る。確かにルプスは回復系の魔法があつてめちやくちや有用ですけど、そもそも回復が必要な状況を作つた時点で隠密としては落第ですから」

「別に二人つけても良いんですよ？ 許しますよ？」

「だだだ、だから!?! 揺らいでねえっす！ だったら二人共なんて思つてねーっすよ!?!」

おのれモモンガ、いつかの仕返しか？ くそう、流石我らがマスターだぜ……。

「ふふふ、いつまでもイジられる俺じゃないってわかつてくれました？」

「……はいはい、流石のギルマスでございますー」

「いじけないでくださいよ。いじりに走つたのはともかく、二人つけても良いと思つてるのは本当ですよ。実際、プレアデスに仕事を振り切れていないですから。遊ばせておくのは彼女たちに悪い」

まあ、確かに。待機は待機でしっかり気を張つてやつてくれるけど、やっぱ仕事してる時が一番輝いてるもんな。これこそ我が生き甲斐なんて風に。

「言う意味はわかるんですけどね。ただ予備戦力というか、予備の人員確保もまた大事っすよ」

「むう、強情ですなあ。ルプスレギナ、泣いちゃいますよ？」

「うう……ちゃんと説得はするっす。だからその、もう堪忍して欲しいっす……」

ルプスの前に俺が泣くぞ？ ええんかこら、泣くぞこら。

「やれやれ、わかりました。それじゃ、この後皆の前で話す時に褒美としてソリュシヤンに副官をと言えば良いんですね？ ルプスレギナに対しては何か欲しい物を聞く形にします」

「はい、ありがとうございます」

やれやれはこつちですよもう。

あーでもそうだな、何回も考えたこととは言えルプスには申し訳

ない。

さも当然だつて体を装わなきやならないのも辛いし、うーん個人的に何かご褒美でも容易するか。

「——よし。ロコモコさん、確認してみたらちよつと時間がかかるみたいなんで三時間後位に玉座の間で」

「了解つす。それじゃ一旦はけるつす」

三時間か、何用意するかなー。

渾身のおねだり

「面を上げよ」

「一同。顔を上げアインズ様、ロコモコ様の御威光へ触れなさい」

玉座の間。

揃うはヴィクティム、ガルガンチュアを除く守護者とセバス率いるブレアデス。

玉座に腰掛けるアインズ、隣へいるアルベドに階段へと立つロコモコ。

またパンドラズ・アクターはアインズより八本指が王都に居ない間王都の監視を命じられ、冒険者モモンとして王都にいるため不在。

漂う雰囲気はようやくと言う程時間が経ったわけではないが、それぞれの立ち位置に違和感を覚えることは無くなったと言ったところ。

胸にある思いや誓いこそ変わりは無いが、新しいナザリツクの形へと順応を見せ始めた。

「アインズ様、皆傾聴の姿勢が整いました」

「うむ。早速ではあるが、ロコモコさんが王都での仕事に区切りをつけた。その報告、並びに各員に任せた仕事の進捗報告をせよ。まずはデミウルゴス、牧場の状態と人間に関する心理把握、その調子はどうだ」

「はっ。まずは——」

まずはと最初に口から出たのはロコモコへ労りの言葉。

少し慌てたように、しかし最後まできっちりその気持ちちをロコモコが受け取ったことにデミウルゴスの喜びが見えた後、報告が始まった。

牧場、つまり巻物生産に関しては順調の一言。

心理把握と兼ねて行い、人間の心理へ一步踏み触れたことにより生産性の向上が図れ、巻物一つの価値が低下した。これからはさらに量産出来る見込みであると。

「素晴らしい。デミウルゴス、お前の忠勤に感謝をしよう」

「勿体ない御言葉です。アインズ様、並びにロコモコ様の叡智あつて

「こそのこと」

一礼するデミウルゴス。

また、報告しないのではなくまだ実感できてはいないため口に出れないことだが、デミウルゴス配下にも変化は見られ始めていた。

本人としては適材適所を探るという一環ではあったが、配下に対して多くの言葉を交わし始めたことにより互いの関係性再構築、それも良好な結果に行き着こうとしている。

配下はデミウルゴスの気持ちに触れ、デミウルゴスは配下の意図を知った。

互いのビジョン、そのすり合わせを行えたのだ。

人間心理把握の効果だけが、生産性向上に繋がっているのではないとデミウルゴスが気づくのは近い。

「後から再度説明をするが、今後はその仕事にセバスが加わることになる。——ああ、勘違いするな。同じ場所で働くという意味ではない。関係性が強い仕事をセバスが行うという意味だ」

「畏まりました、またお気遣い感謝致します」

「アインズ様」

「よい、後から再度説明する。セバスは今、新しい仕事を任せられるということだけ覚えておけ」

「畏まりました。口を挟みましたこと謝罪申し上げます」

ぴりりと奔った緊張感ではあったが、それもアインズの言葉により消える。

「次にコキュートス。蜥蜴人達はどうか」

「ハイ。集落維持活動ニ関シテハ本人達へ任セテイマス、デスガ裏切りノ様子モミラレズ。戦士トシテノ力量向上モ順調デス。イズレソレヲ示ス機会ヲイタダケレバト」

コキュートスと蜥蜴人の関係は良好だった。

蜥蜴人からすれば絶対的強者であるコキュートス。そんな存在が自分たちの強さを認めていると知り彼らは涙を流した。

またコキュートスは良くも悪くも武人だった。

明け透けとも言うべきか、そういった何かを認めているだ惹かれて

いるだと、齒の浮くような言葉を極々自然に言う。有り体に言えば裏表なく接する姿へ、蜥蜴人は更に忠誠を日々高めている。

「うむ。コキュートスに任せて良かった。機会に関しては近いうちに考えよう、それまで引き続き統治に励め」

「有難キ御言葉。万事、才任せクダサイ」

今の蜥蜴人たちであれば、かつてのアンデッド軍団なぞ齒牙にもかけないだろう。その身体、心共に大きく成長を見せた。

「では次にシャルティア。今の所階層守護の任がメインだが……気になることはあるか？」

「はい、領域に関して大きな変化はありません。また、御身を守護するための親衛隊兵編成に着手してあります。そのことでいずれアインズ様、ロコモコせんせ……様のお知恵をお借りしたく思いません」

シャルティアもまた何もすることが無いと腐ってはいなかった。

先のビジョンが与えられたからだ、それに向かってあれこれと試行錯誤に励んでいる。

「わかった、こちらと同じく近いうちに時間を作ろう。ロコモコさんも、良いですね？」

「了解です。シャルティア、楽しみにしてる」

「そ、そのような――！ ご期待にお答えできますよう、励みます」

実際に動き始めてこそいないが、シャルティアは並々ならぬ思いを抱えている。

アインズと敵対したという事実。それがあってもアインズの近くにいることが許され、あまつさえその警護を任されるとの話だ。

最近口調が固くなりやすいことも含めて、シャルティアの心は燃えていた。

自身の眷属、僕へのお楽しみが控えられ、眷属達が少し残念に思う程に。

「アウラ、マール。世界情勢を知るための活動としての世界地図作り。その進捗は？」

「はいアインズ様。おおよその地理が把握できました、あたしが集めた情報を元にマールが今実際に地図を作っているところです」

アウラとマールではアウラの方が機動性が高い。故に二人は役割分担を行った。

アウラが外で集めた情報を、マールが領域守護にあたりつつ受け取り、地図へ起こす。

その非常に効率的な仕事ぶりに思わずアインズとロコモコは目を見開いた。

「想定を遥かに上回る進捗具合だ。素晴らしいぞ二人共」

「も、勿体ない御言葉です」

「あ、ありがとうございます」

二人は照れたように身を振る。

「地図作りが終わった後についても現在検討中だ、追って知らせるようになる。何か希望などあれば聞いておくが」

「あ、あたし達の役目は——いえ、ごめんなさい。それじゃあ、あたしはやっぱり外に出る仕事が嬉しいです。もちろんロコモコ様への組織的な補佐は継続して行います」

「ぼ、僕は……え、えつと、お姉ちゃんの補佐をするのが、い、一番かなと思います」

アウラは外に出て活動することが性分に合うらしい。今回の地図作りで各地と飛び回る中で世界の大きさを知った。そこには自分の興味を惹かれるものがまだまだあるんじゃないかと心を踊らせている。

マールにしてもそういう姉のフォローをすることが性に合っているのか、姉の背中に隠れるという一環なのか。効率的かつ効果的に支えられるのはマール以外にいないだろう。

「わかった、考慮しておく。ではアルベド、気になるところなどあるか？」

「今の所はございません」

「よし。ならば皆も気になっているだろう、王都での活動について。ロコモコさん」

「はい。それじゃあ皆、少し長くなるが聞いてくれ」

一歩進んでロコモコは口を開く。

王国そのものをナザリツクの資金源と出来るよう暗躍していた八本指を掌握したこと。

第三王女と面識を得て協力関係を結んだこと。

「掌握したと言ってもまだ恐怖公とニューロニストの手にかかっている最中だがな、まあ問題ないだろう。ラナーに関しては扱いが難しい、俺と同等……いやそれ以上に頭が回る。もしかしたらデミウルゴスとアルベドに任せなければならぬかも知れない、その時はすまんが頼んだ」

「そ、そのようなこと！」

「ロコモコ様をしてそう言われる相手……私如きが代わりになれるとは思えません」

先に声を荒げたのはアルベド。ロコモコ以上にいるのはアインズのみで、その中間に位置し得るものなど存在しないといった意。

続いたデミウルゴスは少し遠回しなロコモコの、自分より上の知恵者だと言った言葉を遠回しに否定する意。

「まあ今後の調査と利用方法次第ではあるよ。そのこと含めて、協力頼んだ」

「畏まりました、必ずや一助に」

「同じくして、御期待にお応えしますことを誓います」

落とし所はここかとロコモコは一つ頷く。

実際、やや手に余る存在だというラナーへの認識は変わらない。出来れば早く役割を設定して、手のひらの上で管理したいとロコモコは思っている。

「先のセバスについてへ繋がるが、使っていた屋敷にどう扱っても問題ない人間……まあ背後関係がまったくない人間だな、そんなやつらを保護している。セバスにはこいつらのケア、そしてデミウルゴスと同じように、お前のやり方でこいつらを通し人間心理の把握へ努めてもらいたい」

「畏まりました。ですが、質問をしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、何故セバスについて話なら簡単だよセバス。元より築いていた偽造身分のこともあり引き継げる存在として適任だという理由もあ

るが、何より困っている人を助けるのは当たり前、だろう？」

「ロコモコ様……畏まりました。全力を持って、その任にあたるとお約束致します」

セバスは感動に打ち震えた。

ロコモコが自分でできないと思っっていることを任せられたこともそうだが、何より自分の適所だろうという仕事を見つけて貰ったと認識したからだ。

ナザリックでの自分、その任を不釣り合いだなんて思ったことは無い。しかし、そんなナザリックにおいて自分が得手とする仕事が見つけにくいことも事実。

やりたいことがナザリックの為になる。

それがこれほどの喜びなのかと震える身体を止められない。

「セバス。わかってているね？ 今後私との連携も必要になってくる。あまり傾倒しすぎても困るのだよ？」

「デミウルゴス様、元より承知でございます。必ずや、創造主であるたち・みー様の名にかけて」

セバスの返答へ僅かにたじろくのはデミウルゴス。

創造主の名に誓うとまで言ったのだ、全てを賭けてセバスは仕事を全うするだろう。

信じざるを得ない。反りが合わない等言っつていられない、セバスへの不信は至高の御方への不信に繋がると、固く自分を戒めた。

「セバス、その敬称は要らないよ。今後似たような仕事にあたるんだ、よろしく頼むよ」

「……畏まりました。こちらこそ、よろしくお願い致します」

「続けるぞ？ 二人で協力して人間に対する教科書を作成するんだ。それが出来上がり、内容と王国の状態をもって今後は改めて考える」

「畏まりました」

「重ねて言うが王国はいわば出し入れ可能な貯金箱といった扱いだ。それに加えて人間心理観察含めた実験の場でもある、今後王国に対して意図が掴めない命令等があればその一環だと認識してくれ」

「はっ!!」

全員の返等を待つてロコモコは頷き一歩下がる。

「報告はこれで終わりだな。ロコモコさんの仕事含めて、これは私の……いや、アインズ・ウール・ゴウンのための国を作ることを目的としたその一環だ。各自、その認識を持ち正しく任せた仕事を全うするように」

「――！ 御心のままに！」

さらっとではあったがアインズは国を作ると明言した。

これで全員の意識はそこへ集中しただろう、その確信をアインズとロコモコは得る。

「では最後になるが、今回ロコモコさんのした仕事には報奨が在るべきものだと考えている。アルベド、お前はと思うか」

「まさにその通りかと」

来た、とプレアデスの二人、ソリュシャンとルプスレギナは身を一瞬強張らせる。

「ロコモコさん」

「俺についてはもう貰ってますから。皆と一緒にモモンガさんのために働ける、その許しが今回褒美を貰えるとしたら最大の褒美です」

決まっていたかのように口にするロコモコ。

守護者達がそんな言葉へ身を震わせる光景を尻目にアインズもまた肩を竦める。

「はあ……じゃ、次のはマシマシで」

「あはは、加減お願いしますよ」

それでも二人は笑っている。

だから守護者達も笑う、それで良いのだろうと心で笑う。

「ではルプスレギナ、ソリュシャン。前に来い」

「はっ！」

呼ばれた二人は身を固くしながらも静かに歩き、アインズの前で膝をつく。

「御身の前に」

「うむ。告げよう、ルプスレギナ、ソリュシャン。今回の働き、見事である」

「有難き御言葉」

「多くの言葉を贈りたいが、それはこの後ロコモコさんから貰うが良い。私からの言葉は今後のお前たちについてだけだ」
場に緊張感が高まる。

ルプスレギナ、ソリュシヤン二人はもちろん。守護者や、セバス、プレアデスまでも。

ルプスレギナか、ソリュシヤンか。

今ここで決まると、理解したが故に。

「その働きを認め……ロコモコさん率いる諜報部隊、その副官をソリュシヤンとする。ロコモコさんの下、一層励め」

「——畏まりました。この身、この心、全てを捧げ忠勤に励むことを誓います」

——空気が、変わった。

選ばれたのはソリュシヤン。

告げられた本人は、未だ痺れる心を制御出来ず身体を震わせている。

まさか、私が。

信じられない思いだった、なってみせると心に旗していたことが現実になった。

なったのに現実感がない。ふわふわと、世界が微睡んでいるかのよう。

周囲もまた複雑だった。

喜ぶべきことだ、しかしルプスレギナの心を思えば素直に諸手を上げられない。

誰も、ルプスレギナへと視線を向けられなかった。

泣いているだろうか。そんな不義、普段なら許されるものではないが、今だけはそうなくても見ないふりをしよう。そう皆が思った。

「次にルプスレギナ」

「はい」

呼ばれたルプスレギナの声は普段どおり。

まだ現実に関心を追いついていないのだろうか、理解することを拒ん

でいるのか。

「副官という地位は与えられないが。お前の働きもまた、褒美に値するものだ。何かあるならば叶えよう。今じゃなくても構わな——」

「アインズ様」

構わないという言葉を遮って、ルプスレギナは姿勢を平伏に変え。

「私は……私はっ!!」

叫んだ。

誰しもが副官をとみつともなく言うだろう、そう思った。

しかし。

「ロコモコ様を……愛することを許されたく思います!!」

「——は?」

全員の予想を裏切った言葉だった。

アインズも、ロコモコも、守護者もセバスもプレアデスも。

全員が、そろって目を丸くしてルプスレギナを見つめた。

「畏れ多いことだと理解しています! 許されないことだともわかっています! ですが、ですが……何卒! 褒美を下さると仰られるのなら! 私にロコモコ様を愛すること! お許しく下さい!!」

まさしく必死。魂からの言葉。

床に添えた指先は震えている、目からはとめどなく涙が溢れている。

「お願いします! お願い、致します——!!」

誰も何も言えない。

頭が理解を許していない、それはロコモコさえも。

そんな中。

「ハ——ははははは!! ……あーくそ、抑制された」

「あ、アインズ、様?」

大爆笑だった。

アインズは嬉しかったのだ、心の底から。

「良からう許す。アインズ・ウール・ゴウンの名において、ルプスレギナがロコモコさんを愛することを許し、今後お前をロコモコさんの専属メイドとする」

「ちよ!?!」

「あ——ありがとうございます! ありがとうございます!」

驚いた様子のロコモコも、今も尚頭を下げ続けるルプスレギナも。

「ロコモコさん」

「は、はい? え、いや、はい?」

今はロコモコしかいないかつてのギルドメンバー。

そしてメンバーが遺した子どもたち。

そう、まさしくかつてのNPCが仲間であり、子であるのならば。

「獣王メコン川さんの娘であり、俺の娘です。幸せにしてあげてくれないと許しませんからね?」

「え、あ、うそん? え? モ、モモンガさあああああん!」

かつてを迎えることは出来ないかも知れない、だが新たに創り出すことは出来る。

そう気付いたアインズ……モモンガは。

今があることを、この上なく幸せに思った。

尽き果てるまでの心

どうしてこうなった。

いやまじでどうしてこうなった。

あのカオスをモモンガさんが強制的にといつて良いだろう締めて、しばらく動けなかった俺に声をかけてくれたのは……誰だったわけ？ やばい、頭の中真っ白すぎて何も覚えてねえ。

えーと？ とりあえず？

「何？ これっていわゆるお父さん公認のお付き合い的な？」

わけがわからないよ。

いやいや、現実逃避やめよう俺。

まずは冷静になって現状を見直すんだ、それこそ勝利への第一歩。何を以て勝利というのかわからないけど。

真っ白な頭とは言えなんだったか。

確かソリュシャンもルプスレギナも先にプレアデスへの引き継ぎを済ませるって言ってたよな。

いや、俺が言ったんだ。一旦頭を整理したいから先にきてくれて。

ソリュシャンはセバスに王都での活動詳細を、ルプスレギナはカルネ村に關してを。

うん、そうだ、思い出してきた。

「えーと？ 俺に合わせるって言ってたよな？ まとまればお呼び下さいって」

どれくらい時間がかかるかわからないけど……って結構時間経ってる、こりやそろそろ呼ばなきゃならん。

諜報部隊として今後の活動をどうするかってのは結構考えていたし、まずはそつちから詰めるか。

んじゃ呼び鈴つと。

「お呼びでしようか」

「ああ、ソリュシャンを呼んでくれ」

「畏まりました……わん」

ん？ ペストーニヤ？ ってああ、行っちゃった。

館ころもつちもちさんの創ったNPC、確か優しいって設定だったよな？ んー……ソリュシヤンの事はともかくとしても相談してみるか。

いやいや、切り替え切り替えっと。

「お待たせ致しまして申し訳ありません、ソリュシヤン・イプシロン。御身の前に」

「ありがとうございます。引き継ぎはもう終わったか？」

「はっ！ 滞りなく完了しております」

っとー……めちやくちや気合い入ってるな、一目でわかるくらい。

俺も気合いを入れよう、大丈夫自分の口で言ったじゃないか、お前の上司になることとはって。

ここで堅苦しいのは止めようなんて間違っても口にははいけない。

そうさ、わかってる。ソリュシヤンが俺に対して忠義を向けたいが為に頑張ってくれていたことなんて。

少なくともソリュシヤンに対しては絶対たる上位者として振る舞わなければならぬ。それが何よりの礼儀でありソリュシヤンの心に報いることだ。

「よし。まずは今日に至るまでの活動、よく務めた」

「勿体ない御言葉です。全てはロコモコ様のお導きあつてのこと」

「それは違うなソリュシヤン。モモンガさんに副官を誰にするかと聞かれた時、俺はお前をと即答した。そしてそれはお前が使いやすいからと思った等という理由じゃない、お前が相応しいと思ったからだ。導かれたなんて言うな、お前が自ら掴み取ったんだ」

言ってみればソリュシヤンは一瞬身体を震わせる。

別に聞こえの良い言葉をと思ったわけじゃない、本心だ。

確かに役割上俺が担えない部分を埋めてくれるって目論見はある、だがルプス以上にソリュシヤンはその時すべき事を考えるって面が長けている。

「俺は事前にあの屋敷へ送る人間をどう篩にかけるかとお前に伝えな

かった。しかし、結果を見れば実に良い塩梅で振り分けてくれた。ルプスでは出来ないだろう、お前だからこそ出来たことだと俺は思う」「勿体ない……御言葉です……!!」

ルプスじゃきつと全員情報を吐くだけの機械にしてただろう、言っ
てしまえば廃人にまでしていたと思う。

顕著なのは何も伝えないまま、その場で閃いただけの娼館に捕らえ
られていた女の扱い。

扱い方にまで考えが及んだわけじゃないかも知れないが、しつかり
他のモノとは違う意図を感じ取ったという証明に違いない。

「ソリュシャン、お前を部下として信頼する。俺達はチームだ、突発
的、瞬間的な判断を要する時は必ずある。そんな時に限らず、お前が
俺の意図を探り思考し活かせるよう動くように、俺もまたお前の意図
を探り思考し、我が意を簡単に優先せず、大切な意見として扱いナザ
リックへ活かせるよう考慮することを誓おう」

「――」
ソリュシャンは黙って平伏した。そしてそれを俺は止めない。

これが俺とソリュシャンの新しい関係なんだ、在るべき状態なん
だ。

「顔を上げろ」

「はっ」

シヨゴスでも涙は出るんだな、なんて思いながらではあるけれど。

「ソリュシャン、よろしく頼む」

「この身、この心。全てをナザリック、そしてロコモコ様のために捧
げ、死力を尽くしお役に立てるよう忠義に励む事を誓います」

こうしてプレアデスではなく。諜報部隊副官、ソリュシャン・イプ
シロンが誕生した。

「ふう……」

あの後は今後の打ち合わせだった。

まずはアウラとマールレが作り上げた地図を見て、ガワとしての世界
環境、情勢を確かめる。

その上でどの国をどう扱っていくかを検討し、そのために動いていくなんて話。

「まあ性に合わないなあ……」

モモンガさんやっぱすごいよね、支配者ムーブしっかり出来てるわけだし。

影でこっそり苦悩はしてるんだろうけど、その苦悩を払うことだって俺の仕事なわけだし。気張らないとな。

「しっかしソリユシヤン、中々に積極的だね」

質問や意見交換が活発だった。

少しでも多く俺の意を把握しようって姿勢が見えたし、自分の考えを理解してもらおうと意見を出してきた。

紛れもない成長だ。

少し過激というか冷酷が過ぎて情報を活かしきれない面はあるけど、こうして打ち合わせを重ねていけば解消されるだろう確信がある。

「んで、だよ」

問題……って言ったら違うか。

ルプスの俺を愛したい発言だよ、それをモモンガさんが俺をすっ飛ばして認めた発言だよ。

「……ペストーニヤ」

「はい。お呼びでしょうか、わん」

いい加減向き合おう、別に好きなものも嫌いなものも最後に残す様なタイプじゃないはずだ俺は。

「ペストーニヤは俺のことが好きか？」

「……しょ、少々お待ち下さい？ ……ふう、それはもちろんでございます、わん。私だけではなく一般メイドに限らずナザリック全ての存在がそうです、わん」

「では俺を愛したいと思うか？」

「……あの、畏れ多いこと存じておりますが。これがいわゆる愛のムチというものでございますか？ ……わん」

……うん、愛のムチですわんとうに、ありがとうございました。

「悪い、そういうつもりはなかった」

「であれば、こちらこそ申し訳ありません。不敬をお許し頂ければこの上ない喜びでございますわん」

「うん、許す」

「ありがとうございます。そして先程の御言葉に対する答えですが……思わない、でしょう。無論、お許し頂ければ全力で、ご命令であれば全てを捧げて愛することお誓いできますわん。ですが、そういった意味ではないのでございましょう？ わん」

その通りだ。

NPC達はそうあれかしと設定され創られた存在だ、何処までもその範疇を超えない。

いや、設定のもと自分で思考し設定に行き着くという言い方が正解だろうか？ アルベドなんかが良い例ではある。

元の設定を書き換えたことにより、モモンガさん個人を愛するようになった結果、アインズ・ウール・ゴウンを憎んだ。少し言い方を変えるのであれば、アインズ・ウール・ゴウンを憎むことがモモンガさんへの愛情の証明なんだ。

それを加味してアルベドには、俺はモモンガさんを幸せにしたいからこそ戻ってきた。という部分において信頼されているはずだ。

それこそその部分が揺らいでしまえば容易く再び憎悪されるだろう。揺らがせる気持ちはないし、そんなことしそうになりそうであれば、なる前に自分を殺す所存だが。

「ああ。ペストーニヤ、その通りだ。お前が今優しきで言い難い事を述べてくれたように、そうあれかしという部分はお前たちの行動、思想原理そのものだ。遅くなったが礼を言うよ、ありがとう」

「勿体ない御言葉ですわん」

つまりルプスは俺を愛すると獣王メコン川さんに設定されたが故に愛したいと許しを請うたのか。

自身の成長により自分で考えた結果として俺を愛したいと願ったのか。

「恐れながらロコモコ様」

「うん？　なんだ？」

「確信を持って申し上げますが、我らナザリツクに生きるもの一同。至高の41人の御方達、誰からどのように扱われましても、須らく喜びでもって受け入れることでしょう。……わん」

……なるほど？　と言うかそれを問題視してもいるんだが。

「再び恐れながらも。誰からどのようにと申しましたのは、御方達と思われるベストを向けられることに強く喜びを感じると申し上げました。私は愛という感情を深く今は理解できません、しかしながらもロコモコ様が思う最大の愛を頂戴下さるのであれば、まさにこれ以上の幸せは無いと思うのです、わん」

……はあ、やっぱりさ。

「……そうあれかし、か。やれやれ、やっぱりペストーニヤは本当に優しいな」

「勿体ない御言葉です」

ナザリツク最高かよほんとさ。

要するに俺のやりたいようにやれってこった。

思うがままに振る舞うこと、それこそが自分たちの喜びであり幸せだってよ。

「よっしペストーニヤ。それじゃルプスを呼んでくれ」

「畏まりました。……えっと、呼んだ後は何時間ほどここを離れ、誰も来ないよう配慮すればよろしいでしょうか？　……わん」

「……お前さあ？　いや、良いよ。ご休憩だつて配慮にしてくれ」

「畏まりました。では、失礼致しますわん」

「ろ、ロコモコ様、せ、専属メイド、る、るるルプスレギナ！　御身の前に！」

「ああ、遅くなつてごめんな」

「と、とんでもございません！　え、えっと！　さ、先程の醜態、どうかお忘れになつて頂ければ……じゃないっす！　忘れられたら泣いちやうっす！　ええと、えっと!?」

うーわー、めつちやテンパつてる。

いやまあ俺も人のこと言えねえか、手汗がとてもやばい。

「ルプス」

「は、はいっす!」

「引き継ぎはちゃんとお出来たか?」

「はい! と、滞りなく! ゆ、ユリ姉が……で、ではなく! ユリ・アルファに引き継いでおりますっす!」

口調もうめちやめちやじゃん? くっそ可愛いんだけど?

あー元気っ娘が、異性と忠義に揺らぐ様に心がわんわんするんじゃないあー……。

ん、んっ!

「ルプス、お前は俺の専属メイドだろ? 口調もそうかしこまらなく

ていいき、その方が楽なんだ」

「で、ですが! ほ、他の者に示しがつかないっす! ってああ!?

ほ、他の者に示しがつきません、どうかお許し頂ければこれ以上の喜びはありません!」

やれやれですなあ。

いやまあ、やつぱ好みどストライクなんだよな、メコさん……良い仕事しやがって。

「じゃあ二人きりの時だけでもいい。それで今は二人きりだ、どうだ?」

「う……ずるいっす、ロコモコ様」

「様も要らない」

「あうあー……畏まりました、ロコモコさ……さ、ささ、さ……さん
まあこれくらいがいい塩梅かね。

後は時間が解決してくれるだろう、そう思う。

「まずは副官の件、悪かったな、選ばなくて」

「と、とんでもないっす! 御心のままにつす!」

ああいやいや、平伏しなくていいってば。

「それで、だ。俺の専属メイド、ルプスレギナ・ベータ」

「っ! はい!」

うお、めっちゃ姿勢良くなった。

この辺やっぱプレアデスというかなザリツクの存在だよ。自分の立場を意識させると一瞬で切り替わる。

「ありがとう、お前の忠義と愛情。嬉しく思う」

「——っ！」

あら、一瞬ガッツポーズしようと思いましたね？ 良いんですよやつても。

……落ち着け、ちゃんと言おう。

「その上で、だ。ルプス。これを受け取って欲しい」

「こ、これは……」

ホントなら慰め用というかでクラフトしたもんなんだけど。

ちよつと別の意味になっちゃったな。

「センサーブースト感知増幅と同等の効果がある腕輪だ、褒美とか贈り物にしてはちやちだけど……道具創造で創ったもんだ、俺が魔力を通し続けないと存在出来ない。その……俺は諜報部隊だからさ、お前と離れることも結構あると思うんだ、だから、それで俺がちゃんと生きてるといっかこの世界に存在してるって知ってもらいたくて、ああサイズは装備したら自動で合うから大丈夫だと思うんだけど！」

「——」

うあーめつちやこつ恥ずかしい！ あーもー顔めつちや熱いんだけど!?

って、ああうん、ごめんそんな恐る恐るというか大事そうに受け取ってもらおうようもんじゃ——っておい！

「ルプス……」

「えへへ、やっぱりここっす。ロコモコ様、ありがとうございます」

腕輪のほすが、ルプスはそれを首に装備した。

照れたような、嬉しいって叫ぶのを我慢してるような。

……いやほんとにこの可愛い生物。

「ルプス」

「はい」

うん、ちゃんと言おう。

「俺は、お前を愛しているかはわからない」

「……はい」

「わからないんだ。愛情とはどういう風に示すべきものか……うん、理解はしてはいたはずだけど。今の俺は、どうすればそれを示せるのかわからない」

かつてリアルに生きた頃の俺だったら、きっとわかっていたはず。だけどロコモコになってからは……どうもそれに違和感を覚えて、あまつさえ嫌悪感も抱いてしまっている。

「だけど俺はお前を愛したい」

「……」

好みだなんだと言うものがあるってのは否定しない。

何だかんだ、モモンガさんのおかげで踏ん切りをつけられた。いわば棚ボタだとも理解してる。

だけど。

「俺を愛したいと言ってくれたお前を愛したいんだ、ロコモコとして。もしかしたら歪な示し方になるのかもしれない、お前が望む形では無いのかもしれない。……がっかりするかもしれない、お前に存在しているロコモコから遠く離れた姿を晒すことになるかもしれない。だけどそれでも愛したい」

残滓に引きづられてかつて人間だった頃の示し方をなぞることになるのかもしれない。

未だ想像がつかないロコモコとしての示し方になるのかもしれない。い。

だけどそれでも。

「それでも、良いか？ 情けない事を言っているのは自覚している。この先ずつとこんなのかも知れない。それでも——」

「ロコモコさん」

言い訳がましい言葉が出続ける俺、けどそんな俺を。

「私は、ルプスレギナ・ベータは。この身、この心尽き果てるまで……いえ、尽きようともずつと。ロコモコさんを愛します」

「——」

抱きしめてそう言ってくれたルプス。

ああ、いい女だな。

ほんとメコさん、良い仕事しすぎつすよ、性癖ぶち抜きバトルは俺の完敗です。

いつかこの世界で再び会えたのなら、そんな時は改めてお嬢さんを下さいってやらせて下さいね。

「ルプス」

「はい。どうぞ、ロコモコさんのやり方で、愛して下さい……つす」

ナザリツク整備編 プレアデス月例会議

プレアデス月例会議。
定期的にプレアデスの面々で集まり近況などの報告を、といった場。

現在ルプスレギナ・ベータとソリユシャン・イプシロンを除く全員が既に集合している。

「プレアデスで集まるのも、考えた方が良いのかも知れないわね」

「そうおー?」

「物理的に……難しい……」

現にこうしていつもの時間に間に合わないという事態が発生している。

セバスが王都への仕事へ着任し、代行という形ではあるがプレアデスをまとめるリーダーとなっているユリとてやってこれたのはギリギリだった。

予め定められていた規定を考えれば、プレアデス六連星からブレイアデス七姉妹へ移行し、オーレオール・オメガをリーダーとする必要があったが、今後の活動へ柔軟に対応するためそのままとなっている。

仕事を任される事は幸せだ。ナザリツクのためとなるに何の憚りがあるのか。

全員がそう思っている、しかし同時に若干の寂しさに近い感情を覚えてもいた。

「アインズ様の身边をつて任務も、最近一般メイドに任せきりですし。難しいものですね」

彼女たち本来の役割を考えれば、でもある。

寂しさというよりは不甲斐なさとも言えるのだろうか、新たに任せられた仕事をこなしつつその本来に従事出来ないことを齒がゆく感じていた。

ユリにしても一時的にカルネ村の管理代行を行っていたとは言え、

正式にスライドしてきた仕事となれば勝手が違う。ルプスレギナが培った人間関係にしてもそのままスライドしてくるわけでもない訳で、関係構築といった部分からの着手。

ナーベラルとて同じく多忙だ。

冒険者モモンに付きそう美姫、冒険者としての活動があった。

アインズ自身がモモンとなる頻度は下がったが、冒険者モモンの活動頻度が下がったわけではない。

むしろパンドラズ・アクターの精勤故に冒険者としての活動頻度は高まり、同様に冒険者ナーベとしての仕事も増えた。

現在完全にナザリック内勤として存在しているシズとて暇ではない。

ナザリックギミックの管理とて手の抜ける仕事でないのは勿論だが、分担していたナザリック内の業務がシズへと集中し始めたこともあり手が足りないと実感している。

ではエントマはどうなのか。

無論多忙である。内と外の連絡役として適しているが故に内外問わずの活躍というか、縁の下の力持ちといったポジションに収まる事となり、その腕を振るっている。

忙しさのあまりおやつを働きながら食べる姿を見かけるようになったのは最近の話。

「明確な役割を与えられている喜びは勿論ですが」

「ええ、不満だなんて思わない。ただ本当に少しだけ、寂しいというだけです」

もしかしたら今回が最後の月例会議になるのかも知れないと、場にしんみりとした空気が漂い始めた時。

「遅くなりました……どうしたのかしら？　この雰囲気は」

「ソリュシャン」

手に紙束を抱えながら入室したのはソリュシャン。

やや疲労が見える様子ではあるが、それ以上に気力が充実してるところがわかる。

「ロコモコ様のお、副官、たいへんー？」

「その言葉は不敬かと思うわ。でもそうね、やり甲斐……そうですね、本当に、やり甲斐があるわ」

事実ソリュシャンはやる気に満ち溢れていた。

自分の働きがロコモコの評価に直結するといった認識も勿論あったが、何より自身の忠勤がロコモコに認められることイコール、自分を通してナザリツクの僕全ての忠義が認められることだと認識していたから。

そういった部分も含めてではあるが、ソリュシャンは非常に満たされてもいた。

自分の意見、それが取るに足らないレベルのものであろうともロコモコは理由を含めてしっかり返答してくれたし、良いものであれば良いものと認めてくれもした。

至高の御方に認められる。

間違いなく何よりの至福だったし、かつての自分であれば身を喜びに震わせ動けなくなっていただろうとも思っているソリュシャン。

しかし今は違う、もつと認められたい、もつと色々なことを知りたいたいと震える暇なく欲求が生まれるのだ、もつともつと。

「ああ、理解しましたわ。その気持ちは私にもあります、やっぱりこうして集まれば何と言いますか、ほつとする気持ちがあります」

「ソリュシャン……」

「ですが私は思うのです、今こそが忠勤を示す時だと。ロコモコ様は今を土台作りと仰っておられました。下地を作り、その上にシステムを構築する。それが出来た時、無理なく満足感をもって仕事が出来ると」

現状を放っておく気はアインズにもロコモコにも無かった。

慣れない仕事、したことのない仕事をするということはそれだけでストレスであり、負担。

それをすることで何かを犠牲にする可能性は誰しにもあった、プレアデスで言えばこういった月例会議という交流だったし、コキュートス等は蜥蜴人の統治に忙しく本来の守護者としての役割をしつかりこなせていないのではないかと悩んでもいる。

「負担等と思いませんとは申し上げましたが、そこは固く放置してはいけないとも言われました。そして、これですわ」

「これ、ですか？」

ソリュシヤンが紙束から取り出した一枚の書類。

ユリが受け取り記載されている文字を読んでいく。

「業務、改善計画……週、休二日制？ ええと、これは？」

「アインズ様とロコモコ様が共同でお考えになられたものです。草案であるとのことで、更に発展させて欲しいとのことですよ。まずはプレアデス、そして一般メイドから意見を募りたいということですよ」

自分たちの意見など、と驚きを顔に表すユリ達。

しかしながら御方達のご意向ならばと真剣に書類を回し読む。

平たく言えば休日の制定といったものであった。

ナザリックへ尽くすことこそ喜びであり全てという考え方の彼女たちであるが故に、変な発想……暇を言い渡されているのではないかと不安になりもしたが、ソリュシヤンが上手く伝え直す。

「英気を養う……というよりは思考を整理する時間を作るとも言えるかも知れません。その日までに行ってきた仕事を振り返るでも良いのです。そういった時間を作ること、次に仕事へ向かう時新たな思いで向かえると」

「確かに、効率はわかりませんが効果的であるかもしれません」

ユリはなるほどと頷く。

ナーベラルやシズ、エントマも続いて頷きながら今までそういった事を大事にしてきただろうかと省みる。

「それに、まずはプレアデス、一般メイドからという言葉通り、試験的に休日を制定されるそうです。まずは、その休日に月例会議……いえ、週例会議を行ってみるといいうのも良いかも知れませんわね」

ソリュシヤンの随分と綺麗な笑顔にユリは思わず手を叩いた。

続いて自分たちが感じていた寂しさもお見通しなのであろうと、苦笑いが浮かぶ。

「本当に、アインズ様もロコモコ様も……慈悲深い御方です」

「頂けた慈悲を無為に帰すわけにもいかないわ。この機会にしっかりと

考えないと」

ユリが危うく感涙にむせび始めるのを制して、ナーベラルがキリリと言うが、同じく目端は光っている。

「そうですね、しつかり皆で考えましょう。……ところで」

「ルプー、おそいい」

それなりの時間が経過してもまだ姿を見せないルプスレギナ。

事前に確認して参加すると返事をしていたものの、ここまで遅いと何か緊急事態でも発生したのかと心配してしまう。

「ロコモコ様の専属メイドですもの」

「はりきるのも……わかる」

ソリュシヤンの言葉にシズは頷く。

なんとなく含んだソリュシヤンの言い方が気になったユリ。

「やつぱり、怒ってる?」

「怒ってなどは。まあ確かに当て馬にされた気分ではありませんわ」

「当て馬?」

「私が副官に選ばれたからこそルプーは専属メイドの立場を頂けた。それを上手く処理出来ない面があります。けど」

逆ならばどうだっただろうかとも思うのだソリュシヤンは。

あの場で選ばれたのがルプスレギナであれば、自分は肩を落としないながらも別の褒美を頂戴していただけないか、無垢な者をなんて言っていただけなのではないのかと。

アルベドかシャルティアがアインズに正室として選ばれた後、自分は側室を狙ってみようか。

なんて目論見もかつてぼんやりと考えてみていたように、ご寵愛を至高の御方に求める心がないわけではない。

だが。

「あそこまでまつすぐ私は求められる気がしませんわ。処理できない面は確かにあります、けどそれ以上に尊敬する気持ちが強いです」
穏やかに笑ってソリュシヤンは言う。

その笑顔は姉妹であっても初めて見るもので。

「今のソリュシヤンなら、受け入れて頂ける様な気がしますわ」

「あら？　そうであればそれ以上の喜びはありませんわ。けど、まずは副官としての仕事をしなければなりません。そう、今の私は仕事が恋人ですもの」

全員で笑い合う。

(ああ、やっぱりこの時間は……失いたくないな)

ユリがそうしみじみと思った時。

「っ!?　ル、ルプー?」

「いやー!　ごめんっす!　おまたせっす!」

元氣よく入室してきたルプスレギナ。

もう誰が見てもご機嫌、超ご機嫌といった様子で。

「ルプー……すごく、元氣」

「シズちゃん!　私はいつも元氣っすよー!　ああでも今日はいつも以上に元氣なのは否定しないっすけどね!　ビンビンっす!」
なんとなく。

そう、本当になんとかなくルプスレギナの言葉で部屋の温度が下がった気がしたユリ。

「なんでえ、そんなに元氣なお?」

「おっ!　エンちゃんも聞きたいっすか?　聞いちゃいたいっすかあ!?」

(聞くの!?!　止めて!　それはきつと地獄の蓋を開けることになるわ!?)

ちらりと横目で、温度を下げただろう存在を見やるユリ。

「――」

そこには先程浮かべた笑顔のまま、自身の背後に漂う空気を重くし始めたソリュシヤンがいた。

「いやー!　でも言うようなものじゃないっすよー」

「勿体ぶるのは変わらないわね。……でもどうしてさつきからお腹を撫でているの?」

(いやー!?!　触れちゃダメだってボクの勘が言ってる!　なんで貴女にはその勘がないの!?!)

目を覆いたい気分だった。

ルプスレギナはさつきからこれ見よがしに下腹部を撫でている、まさに誰か気付いてと言わんばかりに。

「あー申し訳ないっす、ついつい触っちゃうんすよね……なにせここにぐ寵——」

「ルプスレギナアアアア!!」

「うわっ!! ソーちゃん一体何すかあ!?!」

ソリュシャンはキレた。そりやあもうキレた。

こちらら一生懸命色々な気持ちに一旦折をつけようとしてるのに、なんだこの能天気馬鹿はとキレた。

「あ! だめっす! 私にそんなことしたらロコモコ様が悲しむっす!!」

「ムキイイイイイイイ!!」

どったんばったん大騒ぎ。

「ユリ姉」

「なんですか? ナーちゃん」

そそくさとユリの後ろに回ってきたエントマとシズ。

隣に呆れた様な顔をしてやってきたのはナーベラル。

「月例会議、今後もやりますか?」

「……前向きに検討することを善処します」

続けるようになろうとも、終わることになろうとも。

もうかつての月例会議は戻ってこないんだらうなあと、二人が大暴れする光景を見ながらユリはため息交じりに確信した。

リア充量産体制

「なあアルベド。ちょっとモモンガさんに反逆しようと思うんだが」「何を仰られますか、お戯れにしては言葉が過ぎるか」と

言葉が過ぎるところかやべえんですが。

うーん、思ったよりアルベドから強く信頼されているらしい、咎める口調ではあるけど緩やかに笑ってる。

そんなことするわけがないと思ってもらえてるみたいだ。

いや嬉しいのは間違いないんだけど。

言っておいて真面目に反逆したいと思ってるわけでもないしな。

「むう、まともに聞いてほしいんだがな？ 仕方ない……上手く出来ればアルベドがモモンガさんの妻となれるかも知れなかったが、その信頼を裏切るわけにもいかないな」

「詳しくお話頂ければこれ以上の喜びはございませんっ!!」

はい大勝利、ルーザーアルベド。決まり手、モモンガさんはあんたの夫。

なお、誰が正妻かとは言っていない。

さてさて、現在ナザリック内部の整備に関してアルベドと話を詰めている最中。

モモンガさんにはめられた俺はルプスレギナを専属メイドにできましたやったぜ。……ではなく、このまま枕に涎零して濡らしているだけはいられない、プライド的な意味で。

ちらりと後ろを見てみればおすまし顔でいたルプスレギナは視線に気づいてにつこり笑顔を向けてくれた、くそう愛してる。

ともあれいじるいじられるの関係は極めて繊細だ。

このまま主導権を握られているわけにはいかないのだ。

「社内恋愛を大々的に認める……いや、推奨しようかとな」

「社内恋愛、でございますか?」

いまいちピンと来ない様子、いや急に社内とか言われてもまあわからんわな。ナザリックは会社じゃないし。

「さてアルベド、デミウルゴスとセバスの仕事に関しては把握してい

るだろう?」

「無論でございませす。既に実験含めた報告書が何枚もあげられておりますし、内容も把握しております」

「流石アルベド。前から言っているようにこの仕事は人間の心理を把握して、より効率的かつ効果的に人間を使うためのものであるが、狙いとしてはもう一つある」

そこまで言ってみればアルベドは首を傾げた。

美人なんだよなあという感想はさておき、こと人間に関してはやっぱり下等生物認識が強くて額面上だけで受け取りがちだよな、ナザリックのほぼ全員がそうだけど。

「それがヒトの営みを知ること、だ」

「営み、でございませすか? 申し訳ありません、蒙昧である私にはその深思を理解する事できず……」

「いや、言葉が足りなかつたな。ヒトに限らず生物の営みと言うべきだった。平たく言えばアルベド、たとえばお前がモモンガさんの子を授かり産んだとして——」

「くっふー!!」

あ……やらかした。

いやでも、他にたとえようがなあ……。

「か、重ねて申し訳ありません。そ、それで? アインス様のお子を私が授かつたとして?」

「あ、はい。とりあえずその鼻息を落ち着かせて下さいお願いします」

はいはいステイスティー、アルベド。

あ、落ち着いた? うん、じゃあ話すけどまた倒れないでね?

「その子供をアルベドは愛せるか?」

「当然でございませす!」

「それは何故だ?」

「……はい?」

おっと、こっちのが逆鱗だったかな?

「いやすまない、アルベドの愛情を疑っているわけじゃないんだ。要するに、お前はモモンガさんを愛する女としてその子を愛するのか、

その子の母であるから愛するのかといった話だ」

まあ人間であればそれは両方、あるいはそれらの理由とその他諸々含めてだろう。

どれか一つというわけではないはずだ、全てが愛する理由となる。「そう仰られますと、確かにこれこそがとは言えませんが。なるほど、アインズ様を愛することに理由は要らないと思っておりましたが、そういうことでございますね」

「言っておくが、今アルベドが言うそういうこととした部分は俺にわからない。そして恐らく違う誰かに聞いたとしてもわからない。千差万別だろうからな、また別の者は違う答えに行き着く可能性、いや違って当然だと俺は考える」

希薄になった人間性ではそのあたりの機敏へ想像が及ばない。元人間だった俺でさえそうなんだ、NPCたちはそれ以上に掴めていないはず。

ただ少なくとも、アルベド然り、多くの生物は愛する相手との子供だから愛せるというのは間違いないだろう。

「理解致しました。それを知るために営みを知れと」

「そういうこと。教科書作りは順調だ、だが教材から学べる事は多くとも実践出来なければ意味がない。そこで社内恋愛推奨だ」

営みを知り、自分たちならではの営みを模索する。

理解できないものは怖い。ナザリックにおける人間排他はモモンガさん原理主義を確立させる上で重要ではあるが、手に入らないものもある。

その補完をこれで担う。

「生産性という面では効率的とは言えないがな、モモンガさん然りの召喚、自動湧き等に比べるまでもない。生命の営みへ通じるという意味として恋愛があるのならばいまいち適しているわけではないが、平たく言えばもつと交流を深めましょうという話だ」

「はい、仰られた意味はよく理解できました。人の営みを通じ、実践し己達の営みを知り、再びそれを人間達を利用することへおろす……。恐らく知ったからこそ余計に排他するものも現れるでしょうが、理解

及べたものこそが外で働く適性を持つものであると」

さっすがアルベド、素晴らしいね。

まあつまりはそういうこと。

知るということは考えを及ぼせる様になるということだ。

「関係性の強化とも言える。蜥蜴人然り、お互いの関係から生まれる何かが強さを増す可能性はあるんだ、あいつらに出来てナザリックの者たちが出来ないということはないはずだ」

「デミウルゴスにしても配下との関係性が良くなった結果、巻物の生産性向上と言った結果も出ております。なるほど、ナザリック内において交流を深め関係性を高める重要性……理解いたしました。ですが、その……」

うん？ どうしたのアルベドもじもじしてさ。

「わ、私がその、アインズ様の妻にという言葉へ、どう繋がるのでしょうか？ 愚かな私にご教授下されましたらこれ以上の喜びはありません」

あーつと、そりやそうだ。

アルベドにしたら一番気になるところはそこだもんな、さつきから悪かったよほんと。

「関係性には名前がつくんだよ。ポジティブな意味であるなら友人、恋人……その中に夫婦と言うものもある。ネガティブな意味であってもそうだ、怨敵とか名称であらわせる」

「はい、理解できます。恐れながらもロコモコ様と私であれば上司と部下と言ったように、でございますね？」

「そう。だが、それ一つではない。モモンガさんの幸せを望むといった意味において俺たちは同志と言った関係性を示す言葉にもあてはまるだろう。こんな感じで関係性は一つだけで全てを示すことはできないんだ。俺とルプスは先の件から主とそのメイドになり上下関係が築かれたが、これもいずれまた変わる」

ピクリと後ろで動く気配。

ああいや心配するなど、俺がお前を捨てるわけがないだろうと。

「変わると仰いますと？」

「ああ、嫁にする。いわば夫婦になるわけだ」

あ、ざわざわ気配が収まった？ うん、安心してくれたかな？

……代わりに前からとてつもないプレッシャーを感じるけど。

「……申し訳ありません。不敬どころか許されない事と理解しておりますがぶん殴つてもよろしいでしょうか」

「待て待て待て!! 悪かった! お前とモモンガさんに先んじて関係を進めたのは悪かったって! 惚気たいわけでもない! だけど落ち着いて話を聞いてくれ!! ほら、そんな血涙流しながら手を奮わせるな!!」

ふふふ、怖いです。

いやまあ、愛されてるなあモモンガさん……。

「いずれと言っただろう? モモンガさんに先んじてしまったのは俺としても痛恨なんだ。だからこそ、次のステップだろう夫婦つてのはまず先にモモンガさんかと思ってるんだよ」

「そ、それはつまり私を!」

「いや、そこははつきりしておこう。俺はモモンガさんの嫁になりたいと思う存在を全力で支援すると約束するが、そう思っている者はアルベドだけではないだろう」

「むう……」

ふくれっ面のアルベドもいいね! とまあ感想はさておき、例えばシャルティアだって狙ってるというかなりたいと思ってるって話は聞いたし。依怙贖は良くない。

「だが前提としてモモンガさんが幸せになれるだろう相手、という言葉葉がつく。そして俺の目から見て、条件を達成しているだろう存在は少なく、アルベドが達成するに一番近い位置へいると思ってる。違うか?」

「つ!! 相違ありません!」

「ならばアルベドがモモンガさんの妻となれるよう協力は惜しまない。存分に頼ってくれ、そして早く俺とルプスを夫婦とならせてくれ」

「畏まりました。持て得る力、全てを使いお望みを叶えますこと誓い

ます」

ククク……そうだ、それでいい。

モモンガさあん？ よおくもやってくれましたよねえ？

目には目を、歯には歯を、つてのはダメですけど幸せパンチのお礼は幸せパンチしてもいいですよねえ？

覚悟して下さいよお？ このお礼はきっちり倍返ししますからねえ？ ククク。

「あ、あの……ところでロコモコ様？」

「ん？ なんだ？ 早速何か手を打つか？」

流石アルベド、一刻も早くってか？ いやん、素晴らしいわね。

「いえ、確かに動きたいこと山々ではございますが。後ろをご覧くださいださればと」

「え？ 後ろ？ ……ル、ルプスウ!!」

恐怖！ ロコモコは見た！ 血の海に沈む将来の嫁！

え？ あれ？ 一体何が？

くそう、伏兵か!? や、やるじゃないアルベド……!」

「いえ、私がおかをしたわけではありません。アインズ様の名に誓つて」

「な、なら一体誰が……! くつ、見つけたらただではおかんぞ……!」

「ですが犯人でしたら存じ上げております。どうぞ、こちらを」

うん？ 鏡？ まさかここに犯人が映って——って俺じゃん。

え、何？ どういうこと？

「犯人はロコモコ様でございます。お気づきになられませんでしたか？ ロコモコ様がルプスレギナを嫁にすると聞いた瞬間よりこうなっておりますよ」

「なん、だと……」

なにそれ怖い。ラブコメ怖い。

いやいや、そんなことあるう？ ここナザリックだよ？

「はあ……いえ、申し訳ございません。僭越ながら、アインズ様がかつて口にした言葉をロコモコ様へ」

「な、なに？」

「リア充爆発しろ」

……はい、大変申し訳ございませんでした。

「ロコモコ様？」

「なんでございましょう？」

「ルプスレギナをこのようにするその手腕、お見事でございます。アインズ様と結ばれるため賜りますご支援、不敬ではございますが大変期待しております」

「……はい、誠心誠意、この身、この心を尽くして支援します所存です」

あーうー……なんだかなあ、こりや暫く誰にも弱いかも知んねえな俺。

やれやれ。

「えへ、えへへ……ロコモコさまあ……愛してるっすう……」

「はいはい、俺も愛してますよー」

鼻血を流しながらもトリップしてららしいルプスを介抱しながら。

爆発させられないよう頑張ろうと、心に決めた一日だった。

模擬戦、必要な敗北

シャルティアは頭を抱えていた。

「わからないでありんす……」

表での活動を見据えたアインズ親衛隊の構成。

草案ではあったが、自身で納得の出来る案が出来上がり、まずはロコモコに提出したは良いが結果的に却下されてしまったからだ。

シャルティアなりにといえ言葉は悪いが、持てうる知恵を絞りに絞って考えたものだった。

簡単に却下されたわけではなかったが、ロコモコの言葉が頭にこびり付いている。

——親衛隊の意味をもう一度考えてくれ。

「親衛隊の、意味」

小さく唇を指でなぞりながら反芻する。

簡単に言ってしまうえばアインズの身辺を一番近い位置で守護する役割のはずだ、親衛隊とは。少なくともシャルティアはそう認識している。

だからこそ気配探知に長けた従僕を選びすぐり不意な襲撃に備えられる構成は勿論、外での活動を意識した人間に近い種族をとも配慮した。

完璧だと思っていた。

時間はかかったし、頭が溶けるほどに考え抜いた分だけ出来上がったものに満足もしていた。

それだけに何故却下されてしまったのか。

「ロコモコ先生様が却下されたことでありんす、きっと何か致命的な見落としがあることはわかりんすが……うーん」

意地悪という言葉は幼稚だが、そういった意味でダメだと言われたなんて欠片も思わない。

思わないが、ここまで考えても何がダメなのかわからず複雑な気分へと陥っている。

「お前たち」

「はい」

内心蕈にもすぎる思いで、侍っていたヴァンパイア・フライド吸血鬼の花嫁へ声をかける。

「親衛隊の意味とはなんぞえ？」

「我らで申せば、シャルティア様へと侍りその命を直ちに実行し、御身を守護することかと」

頷くシャルティア。

彼女たちの答えは今も尚正解だと自身でも思っているが故に納得できる。

「でもそれはロコモコ先生様からすれば不正解……。お前達も考えるでありんす」

「かしこまりました」

その光景はシャルティア私室では今まで見られなかったもの。

部屋の主と一緒に首を傾げながら頭を捻る。

今まで吸血鬼の花嫁達然り、シャルティアの従僕は彼女を満たすための存在意義が強かった。

しかしロコモコが帰還してからと言うもの、今までの様な使われ方は見られなくなりつつある。

少し前まではその事を残念に感じる想いもあったが、今となってはこれも別の角度からシャルティアを満たすその一環であると考え及び、一層の忠を尽くしている。

とは言え。

「うー……。わからないっ！」

「シャ、シャルティア様……」

元よりの使われ方をされなくなったわけでもなく。

こうして煮詰まり、壁にあたった時の気分転換として相手をすることはまだまだある。

シャルティアに対しての尽くし方に多様性が生まれたことで彼女たちはその満足を深めてもいた。

「……全く、何荒れてんのさ」

「む、チビすけ？」

たーべちやーうぞースタイルをとっていたシャルティアへ呆れ顔

を見せながらやってきたのはアウラ。

「何の用ですえ？ 今ちよつと忙しいであります」

「そんな態度とっていいの？ アインズ様とロコモコ様からのお言葉を持ってきたのに」

アウラの言葉を認識した瞬間シャルティアは弾かれたように姿勢を正し、アウラの前に片膝をつく。

「拝聴致します」

「——コキュートスの蜥蜴人、シャルティアの親衛隊を確認するため模擬戦をトブの大森林にて行う。相手はあの時のアンデッド軍団に加えてロコモコ様、ソリュシャン、ルプスレギナを加えたもの。開始は明日午前とのことだよ」

「畏まりました」

シャルティアは確信した。

これは何故ダメなのかを教えて下さる機会だと。

「シャルティア、親衛隊案ダメ出しされたんでしょ？」

「う……な、なんで知っているでありますか」

「ロコモコ様に教えてもらった。っていうか、あたしならどう編成するかって聞かれたの。ああ、もちろんロコモコ様がシャルティアにダメ出しをしたって御自ら言われたわけじゃないよ、あたしが無理やり聞いた」

アウラの言葉に強く動揺するシャルティア。

もし、アウラが自分より良い案を生み出すようなことがあれば、お払い箱になってしまうのではと。

「安心しなよ。あたしもダメだった」

「そ、そうでありんすか。いえ、喜んではいけないとわかっていんすが」

ほつとしたのは間違いないが、同時に与えられた仕事の難しさを再認識してしまう。

「難しいよね、馬鹿にしてるわけじゃないけどさ。でもがんばんなよ？ 今回の模擬戦、アインズ様も戦場に立たれるんだって。あんたは親衛隊としてアインズ様を守護する役割らしいから」

「——っ！」

震えを以て緊張感を高めた。

模擬戦とは言え、なんてレベルじゃない。教えてくれるなんて生易しいものでもない。

「……ちよつとだけ、同情じゃないけどしてあげる。あたしでも、ううん。守護者全員、シャルティアの立場だったら、きつと今日は眠れないだろうから」

アンデッド故に睡眠は要らない。なんて茶化しているわけでも、茶化し返せるわけでもない。

アウラは言付けを頼まれた時、心底シャルティアの立場に自分が居たなраと思ひ震えたのだ。

ロコモコは、優しい。ナザリックに存在する全てがそう認識し慕っている。

しかし、その根幹にあるものは冷たさだと認識した。アインズを守るためにならあらゆる手段をとる覚悟と冷酷さを持っていると。

その事を誇りにも思う、より親しみを覚えながら尊敬の念を捧げて止まない姿勢だとすら思う。

だが同時に、ロコモコの領域への遠さをも実感してしまうのだ。

「……コキュートスと、打ち合わせしてくるでありんす」

「うん」

ぐつと唇を結んだ後、前を見据えたのはシャルティア。
その姿を。

「がんばって」

アウラは小さく、されども強く応援の言葉で見送った。

「ふむ……蜥蜴人の仕上がりは順調、いや想像以上だな」

アインズはアウラが創ったログハウスにて蜥蜴人の戦いぶりへと内心舌を巻いていた。

ロコモコへと預けたアンデット達は立ち向かう蜥蜴人の数に合わせて規模こそ縮小しているが、以前蜥蜴人集落を襲撃したものと同程度の力量。

「アインズ様」

「うむ、シャルティアか。警護ご苦労、変わりないか？」

完全武装状態のシャルティアはアインズの前で跪き変わりが無いことを報告する。

しかし、戦闘開始から時間が経つにつれて緊張感は増す一方だった。

「先に説明しているが、私はこの通り何もしない。ここへとロコモコさん、あるいはその手のものがやってきたとしてもだ。全てお前に任せる、頼んだぞ」

「はっ！ この命にかえましても」

戦況は蜥蜴人優勢。

優勢だが、このままで終わるわけがないとシャルティアは確信している。

コキュートスとの打ち合わせにて、ロコモコの戦闘スタイルについては把握している。

また、もう一度コキュートスとロコモコが戦えば、ほぼ確実にコキュートスが勝利するだろうとも理解しているし、自分とロコモコが戦っても同じく。

元より戦闘に関するスペックが大きく離れているのだ、種の割れた手品に惑わされるはずもなく圧倒できるだろう。

ロコモコ自身、コキュートスに対してはもう勝てないとわかっていたし、完全武装したシャルティアに対して出来ることはせいぜいが時間稼ぎ程度だろうとも理解している。

ルプスレギナ、ソリュシャンにしてもロコモコ以上にスペックだけを見れば劣っているのだ、不覚をとる理由がない。

だが。だがしかし、だ。

(絶対に、何かの一手がある)

このままではコキュートスが統治している蜥蜴人の仕上がり確認にしかない。

ここに自分がいる意味がないのだ、ロコモコもアインズも親衛隊を確認すると言った。ならば必ず試しの時がやってくる。

「……眷属よ、周囲をもう一度確認してこい」

焦燥感に突き動かされてシャルティアは再び眷属を放つ。

何かをしていないと不安なのだ、正解、間違いがわからない。故に常に手を打ち続ける、意味があるうとなかろうとも。

「シャルティア、少し落ち着け」

「も、申し訳ありません。お見苦しい姿をお見せ致しました」

慌てて頭を下げるシャルティアではあるが、直接言われても落ち着けない。

直接戦うことに勝機を見出だせないのであれば、必ず奇襲を狙ってくる。それはつまり奇襲に対して備え続けなければならぬのだ、気が気ではない。

「ふむ。シャルティア・ブラッドフォールン」

「はっ！」

そこでアイNZは声のトーンを少し改めた。

「お前は私の何だ？ ああ、もちろんこの模擬戦においてだ」

「アイNZ様の御身を守護いたします親衛隊、その長として存在しております」

確認だ。

今この場においてシャルティアはナザリック守護者ではなく、親衛隊長その一人。

「では親衛隊とは何だ？」

「……それは」

ロコモコよりも問われた親衛隊、その意味。

少しの沈黙を漂わせた後、シャルティアは口を開く。

「アイNZ様への害意と脅威を打ち払い、その御身を守る者です」

「……なるほど、な」

何度も考えた。

何度も何度も、従僕達にもコキユートスにも相談した。

それでも変わらなかった答え。

「シャルティアよ、アルベドの役割を知っているか？」

「アルベドの、でありんすか？ それは勿論我ら守護者を統括する者

として――」

「違う、ナザリックにおける役割の話ではない」

守護者統括として以外のアルベドが持つ役割。

その意味がうまく理解できず、シャルティアは黙する。

「ナザリックにおいて敵対侵入者が玉座の間にたどり着くこと、それは我らの敗北を意味する。そしてアルベドが勝敗を左右する場ではなく、敗北の場に在る意味とは何だ？」

「……それは」

わからない。シャルティアにはその意味がわからない。

自身が敗北するという意味はわかる。その可能性だってある事は理解できる。

だがナザリック、アインズ・ウール・ゴウンが敗北するという想像が出来ないのだ。

「アルベドはな、私と共に死ぬためそこに在るのだよシャルティア」
「――っ！」

そのようなことと反射的に口へ出しそうになるのを堪えた。

アインズの口調が酷く穏やかであるのに加えて、羨ましくも思っただのだ。アインズと共に死せると認められたアルベドのことを。

「私の隣に在るといふことは、そういうことだシャルティア。そして再び問おう、親衛隊とは何だ？」

「……」

ナザリックという裏におけるアルベド。

表の舞台とした場で親衛隊の長としての自分。

それは。

「ふふ、どうやらそれを示す機会がやってきたようだぞシャルティア」

「っ！ まさかっ！ ちいっ、コキユートスは一体何をしてるでありんすか！ 眷属――くそっ！」

薄らぼんやりとした答え、手をかける瞬間、驚異の気配はやってきた。

コキユートスからの報告が無いことへ怒り、眷属を周囲警戒に放つてしまいすぐに戻せない状況を創ってしまった自分の愚かさを呪い

ながら、警戒を最大にまで強めるシャルティア。

(気配は……く、流石ロコモコ先生様、全然わからない！ でも——)

「そこっ！」

「きやんっ!? う、うー……やられたっす」

スポイトランスを突き出した先から現れたのはルプスレギナ。

小さく白旗を振りながらその場に蹲る。

(よし！ でもここにいてるってことは！)

「シャルティアアアア!!」

「せん、せいい！」

背後からシャルティア目掛けて突貫してきたロコモコ。

見るからに何の策もないような突撃、それを身構えがっしりと受ける。

「らしくありません！ ロコモコ先生様！」

「……いや、そうでもないさ」

「——え？」

何を言っているのか、スポイトランスとロコモコが手にしていた短剣、合わされていた力がふっと抜けた時。

「——失礼致します、アインズ様」

「ああ、構わないともソリュシヤン。お前達の勝ちだ」

声に振り向けば、そつとアインズに触れているソリュシヤンの姿。

ここに、勝敗は決した。

「シャルティア」

「コキュートスでありんすか。申し訳ありません、善戦どころか勝利は目前だったはずにも関わらず」

模擬戦は終了した。

コキュートスは蜥蜴人達の戦力向上、そしてその指揮を褒められ、シャルティアは何も言われなかった。

そう、何も言われなかったのだ。

その事実を肩を震わせシャルティアは俯き、既にコキュートス以外誰もいないログハウスに佇む。

「コチラこそ、悪カッタ。ロコモコ様達ノ動向、掴メテイレバ此度ノ模擬戦。敗北ニハナラナカッタダロウ」

「そう、なのかも知れないんすね」

確かにロコモコ達がログハウスを急襲してきた時そう思った。

事実、その報があればシャルティアは眷属を散開させる必要もなく、守備に備えられていたのだろうから。

だが。

「違う……」

「ム？」

「違うでありんす！」

シャルティアの答えは出ていた。

「親衛隊は、私は!! アインズ様の代わりに死ぬ事を許されていたんでありんす!!」

あの時。

確かに詰み目前だっただろうあの場面。

「だと言うのに私は！ 敵を倒そうとしていんす！ 何よりも先に！ アインズ様の場所へ一歩でも近く向かわなければならなかったのに!!」

「シャルティア……」

ナザリック守護者としても、親衛隊としても間違っていた。

シャルティアは何よりも先に死ぬことこそが役目だった。

ルプスレギナを発見することでも、仕掛けてきたロコモコの相手をする事でもない。

何よりも先に、我が身を犠牲にしてもアインズより先に死ぬことだった。

「私は……また失態を晒したでありんす！ 血の狂乱を抑えきれなかった時のように！ 自分を抑えられなかった！ 敵を討ち滅ぼすことこそが私の役目であると思ひ込んでいた!! 何度も、何度も！ 親衛隊としてここに居ると仰って頂けていたのに!!」

難しいことだろう、事前にそうだと説明されてすらいなかった。

何処までも自分で考え、自分で気づけと言われていた。だから気づ

けなくとも仕方がない。

「蜥蜴人ニ私ガ敗北シタ時ノコト、覚エテイルカ？」

「……」

「私ハ、敗北シタコトデ学ベタ。敗北ガナケレバ今ノ自分ハイナイダ
ロウ」

コキユートスは言っているのだ。

この敗北はシャルティアにとって必要な敗北であったと。

先に在るだろう戦いで、勝利を捧げるために今敗北したのだと。

「……本当に、お厳しい御方達」

「アア、ソシテ何ヨリ慈悲深ク才優シイ」

二人は頷く。

何より明日勝つために、必要とされる自分へ成長するため。

「コキユートス、忙しいのは理解しているでありんすが、親衛隊の編成
案作り、手伝って欲しいでありんす」

「無論ダ。更ナル連携ヲ築コウ」

二人が考えた、軍事編成。

それが認められ、大いに褒められたのは、このすぐ後のこと。

諜報部隊稼働中

なんと言うかまあシャルティアには悪いことをしたと反省している。

提出してもらった親衛隊編成案は実に攻撃的だった。

敵となり得るものを全て討滅してしまえば結果的にモモンガさんを守るだろうといった感じの。

確かに一理あるというか、それが出来れば一番なんだけでも。

可能だと判断が出来るのならそもそも親衛隊を作るなんて考えないわけで。

コキュートス、シャルティアは現ナザリックにおける最強クラスの矛だ。そして対を成す盾はアルベド位しかない。

要するに万が一……いや、シャルティアが精神支配を受け敵対してしまった時のようなことが起きてしまえば対処が非常に難しくなる。

迂闊だなんだと言うつもりはない。が、やはり想定外が考えられる以上万全を期さなければならぬわけで。

だからこそ派手に動きにくい場所へと据える必要があった。もちろん、戦力としても申し分ない。

ただ適任かどうかといえば、案の定ではあったが微妙なところ。結局それを知ってもらうための模擬戦なんて側面があった。

ハナからコキュートスを相手にせず、王手狙い。モモンガさん狙いで動き徹底的に隠密、奇襲を心がけた。

予想以上に蜥蜴人が戦力組織として確立されていたから焦った部分はあったけど、ギリギリなんとかといったところか。

いや、予想以上なんて言葉は蜥蜴人だけじゃない。

「お待ちせ致しました。ソリュシャン・イプシロン、御身の前に」
「ルプスレギナ・ベータ。御身の前に」

「ああ、お疲れ様二人共。まあ楽にしてくれ」

イスを勧めてから改めて予想以上の二人を見る。

こう言っってはなんだけど、俺についてこれたつてのが驚いた。

生産職、情報収集特化ビルドとは言えレベルはカンスト。ステータ

スだけで言うなら二人よりも上なはずだけど、それでもである。

数字つてのは残酷だ、同じスタート位置からヨードンしてしまえば情け容赦なく差が出来てしまう。だが離されずついて来た。

つまり、ルプスにしてもソリュシヤンにしても俺のしたいことを深く理解して先んじて動いているということだ。スタート位置を俺より先に置いて動けるように努めている。

「まず二人共、よくやってくれた。ほぼ俺の想定通りの形に収まった、これは二人の協力なくしてはなし得なかっただろう」

「勿体なき御言葉です。しかし、こうして御身に仕える者としては当然とありたく思います」

「同じく。でなければ御身の側に在る意味がありません」

さも当然と言ってくれるけれど、並々ならぬ努力があつただろう。通常時ではなく戦闘時のような瞬間的な行動つてのは、予め想定しておかなければ咄嗟に対応できないものだ。

まだこうして副官、専属となつて日は浅い。

だと言うのにこれほどまでの呼応を見せてくれるまでに至つた。

「ああ、二人を選ぶことが出来て本当に嬉しいよ。ありがとう」

「——っ！　ありがとう、ございますっ！」

二人揃つてわざわざ立ち上がった後の一礼だった。うん、本当にありがとうな。

「よし。それじゃ模擬戦からいこうか。どうだった？」

「……はい、どうやらしつかり網にかかつてくれたようです」

「アウラ様に依頼していますが、どうやら帝国方面へと向かつたようです」

模擬戦の所感を聞いたわけじゃない。

そう、あの模擬戦でしつかり何か釣れたかどうかの話。

「帝国、か。どれ程の情報を掴ませたと思う？」

「蜥蜴人とアンデッド達が戦っていた、程度かと」

俺達は完全に伏せていたしな、それくらいが妥当か。

帝国……デミウルゴスが調査していた部分を絡めて考えても、さてどうするか。

王国への工作は順調に進んでいるし、貯金箱化はもう八割方完成している。

別の方面へ手をのばす好機ではあるが。

「ロコモコ様、質問が」

「うん？ どうしたソリュシヤン」

質問は大歓迎ですよつと、絶賛成長中のソリュシヤンなら尚更。

「何故、敢えて幻術などで秘匿、隠蔽を凶らず模擬戦を？ いえ、情報を掴ませるという意図は理解できるのですが」

「なるほど、実に根幹的な質問だなソリュシヤン」

「も、申し訳——」

「ああ、違う。咎めたわけでもがっかりしたわけでもないよ。根幹を知る事は大切だ、そういった部分に興味を持ち欲するという成長を嬉しく思ったんだ。良い機会だ、じっくりすり合わせよう」

「有難き御言葉」

ほんと大成長だよねって。

さて、模擬戦へ介入したのはシャルティア、親衛隊に関する部分とコキユートスの蜥蜴人の確認。

それに加えて俺達が戦いの中でどう動けるかを確認すること。それは十分にできた。

「じゃあまずは何で完全に隠匿しなかったって部分からだな」

「はっ」

ソリュシヤンが言うように場所ならナザリックの、たとえば第六階層なんかでも良かった。

完全に秘匿して確認するならそれが一番だ。でもそうしなかった理由はもちろんある。

「俺とモモンガさん……いや、ユグドラシルでかつてアインズ・ウール・ゴウンとして活動していた時の基本戦術、いやこの場合は戦略だけど。それが戦う前に勝っている状態を作るというものなんだ」

「戦う前に、勝つ」

誰でも楽々PK術。

GVGといった組織同士の戦いでも勿論この考え方がベースに

なっている。

……知識というものは多くのものが持つべきではない。ぷにと萌えさんの言葉にそのままあやかると、これも本当は秘匿しなきゃならんのだろうが……。

ほんと、何で教えようとしてるんだろうな？　ぷにと萌えさんが今の俺を見たらなんていうやら。

ただどの道言い方は悪いがギルメンが担ってくれていた各役割の代替的存在は必要だ。個の力を見れば高いが、だからといって組織としての力が高いままというわけじゃない。

こういった育成に関しては組織力向上を考えた上で必要なことでもあるはずだ。

「その中に相手へどれだけ虚偽の情報を掴ませるかといった物がある。今回隠匿せず、知ろうとしているものに一部情報を掴ませたのはその意図だ」

「虚偽の情報を、でございませるか？　しかし今回行った模擬戦は現実です。どの部分が虚偽になるのでしょうか？」

ほんと冴えてるよなソリュシャン。

こりや近い将来俺がお飾りになっちまうかも。

「あれだけ組織的な動きをアンデッドは見せた、統率……支配している存在がいると考えるのが普通だ」

「はい、でなくば組織的な動きなど下級アンデッドでは行えません。指揮するためにエルダー・リッチがおりました」

「その発想に行き着かないほどの患者相手なら気にしないでいいんだがな。ともあれ、アンデッドを統率する存在が下級アンデッドを率いて蜥蜴人と戦っていた。これがソリュシャンの言う真実だ」

頷くソリュシャン。

ちらりとルプスを見てみれば若干頭を傾げ始めてるな？　可愛いけどもうちょっと頑張れ。

「不気味な勢力があるということだけわかっただけじゃなければ、そのうち判断がつかない都合の悪い出来事をそのせいにし始める。悪いことが起きればきつとそいつらのせいに違いないとまでいけば最高だな」

「なるほど！ 理解致しました、核心に至らない真実を掴ませ、勝手に虚にまで発展させるのですね！」

いやはやほんとすごいな、これだけでそこまで考えられるか。

「思考の逃げ道を用意すると言っても良いか、俺達からすればそれは思考誘導でもあるが。袋小路を与えてしまつては窮鼠猫を噛む様に、閃きに近い何かで隠したい真実へ行き着く可能性もある」

「可能な限りそれを抑止するということですね？ 川を分散させ水の勢いを衰えさせるように」

二人して頷き合う。

こりやすんごい子を副官に得られたね、嬉しすぎる大誤算ですわ。

現状諜報部隊の規模は小さい。というより、うちで働ける適任者が少ない。ナザリック内での教育が進めば解消されるだろうが、まだ時間がかかるだろう。

数が増えれば潜入と言つた手も打ちやすいんだけどな、無いものを言つても仕方ない。

こういう方法もあるんだよなんて紹介の体ではあつたが、あまり打ちたくない手でもあるんだ。さっくり自分で確かめたほうが早いし、現実でもある。

手に入る情報の分析に手がかかるといふ意味では同じだけど、行うための諜報部隊でもあるしな。

「ともあれこういった手段で得られた情報から相手の像を調べ確立し、手を回す。それが戦う前に勝利している状態への第一歩だ、理解してくれたか？」

「はい、有難うございます。この知、必ずや今後の活動へと活かすとお約束致します」

「ああ、期待している。可能な限り早く戦略、戦術書を用意する。出来上がればまずはソリユシヤンに渡すからそのつもりでいてくれ」

「はっ！」

追記出来るような形で作ろうか、渡す時自由に思いついたことや疑問とかを書けるように。

んでそれを二人で検討して現ナザリックにマッチしたものを作り

上げて、ナザリック内教育に活かせるようにと。
よし。

「ルプス、地図を」

「畏まりました」

テーブルの上にアウラ、マールレお手製の地図が広げられる。

仮にそのまま模擬戦の情報を掴んだのが帝国、あるいは帝国へ情報を渡したい存在だとして。

改めてガワからあの模擬戦を見れば、アンデッドが多量に発生してそれを蜥蜴人が迎え撃ち殲滅したつて形に見えるだろう。

トブの大森林は東側を帝国、西側が王国とで分けられ両国が管理している。

当然調査に来るだろう、来なければ二つどちらかの意味でやばい。

一つとしては、脅威になるだろうことを放置する暗愚だということ。

もう一つは、これが罠だと看破して放置するということ。

どちらにしても来なければこっちの警戒を高めるだけで終わってしまう、万が一来ないのであれば直接潜入するしかなくなるわけで、そうなるとナザリックの整備が遅れる。

来てくれる事を祈るばかりだ。

「当面ナザリック周囲からトブの大森林までの巡回にあたろう、見慣れない人間が侵入した場合は問答無用で捕らえる。全く関係ない場合は記憶操作して放逐するが、基本情報を吐かせるぞ」

「畏まりました。情報の吐かせ方はお任せ頂いても?」

「構わない。ただ、放逐する場合は考えて原型は留めてくれよ?

放逐しないと決定した後は好きにしていいい」

「ありがとうございます」

支配なんしをかけたほうが手っ取り早いけど、仕事には楽しみがないとね。

「ルプス」

「はっ」

「アウラとマールレに竜王国の立地、状態を調べてもらおうよう伝えてく

れ」

竜王国は近年、ビーストマン達の侵攻を受けているって話。

カツツエ平野で毎年行われている王国と帝国の戦争、何らかの形で利用したいがでかい出来事だけに結構なコトになる。

動き方次第ではナザリックの存在を知らしめることになってしま
うだろう、最悪周辺国の団結を促してしまうことになりかねない。

「竜王国、ですか？」

「今一番滅亡の危機に瀕しているのはここだろう、言い方を変えれば
付け入り易い国だ。いや、まだ断言できないけどな。目星をつけと
くってことで」

「畏まりました。すぐに伝えます」

「それとルプスには仕事を頼みたい、ユリからカルネ村についての情
報があった。東の巨人、西の魔蛇だったか、モモンガさんが興味を示
してな。元より森の賢王……いや、ハムスケの存在によって守られて
いた村だ。勢力バランスが崩れた今、どうなるかわからない、一時的
に落ち着くまでカルネ村に行ってユリの補佐に入って欲しい」

「そ、それは……いえ、畏まりました。ユリ・アルファの下に向かい、
バックアップに動けるよう図ります」

まあ離れるのは寂しいと言うか抵抗あるのはわかるんだけどね！
専属メイドだし！

愛されてるなあ……ってのは良いとして、他に適任がないし、何
よりも。

「気持ちわかるがな。これは二人に対してだが、優先順位を間違え
てはいけない。ここナザリックにおいてモモンガさんは頂点だ、何よ
りも優先すべき存在だ。仮に俺とモモンガさんが同時に命令をした
場合、欠片たりとも俺に意識を向けるな。モモンガさんに従え、それ
こそ俺に忠義を示すことだと知っておいてくれ」

「畏まりました」

よし、ここは違えてはならないポイントだ。しっかり伝えておかな
いとな。

「……まあ、複雑に思ってくれるなら嬉しい。けど、やっぱりナザリッ

クの主はモモンガさんだ。ソリユシヤンにとっての俺は上司であり主ではない。ルプスレギナは個としてみれば俺が主だけどその主としてお願いするよ、モモンガさんを優先してくれって」

やっぱり俺自身がモモンガさんを支えたいと思ってる存在の一人だから。

それこそがナザリツクに俺が生きる意味だから。

ルプスレギナのある一日

愛咬、と呼ばれる愛情表現がある。

馬で言うのならば仲間の身体を前歯で軽く咬み、親愛の情を示す行為。サルでいうところの、蚤取りに近い行為だ。

人間であっても似たような事をする。

それはたとえば相手の身体につけるキスマークが愛咬と言えるし、食べちやいたい位に可愛いなんて言葉も人間に残った野性的な本能の一部による欲求であると言える。

ではナザリツクにおける人^{ルプスレギナ}狼という異形種であればどうなのか。

「……おはようございませす、ロコモコさん」

同じ布団で眠り、起きる。

こうするようになってからしばらくの間はロコモコが先に起きていたが、今ではルプスレギナの方が早い。

というのもこうして、未だに面と向かってロコモコさんと敬称を変えて呼べない彼女が生み出した苦肉の案で、寝ている相手なら言えると気付いてから先に起きるようになった。

「すー……」

尤も、それだけが理由ではないのだが。

こうして寝顔を堪能してから、いつものメイド服を着る。

この一連の流れがルプスレギナにとって、幸せだからというのがまず一つ。

「……うー」

ただあまり顔を見続けてしまうのも彼女にとっては問題で。

昨晩つけられた咬痕が疼き出してしまい、もう一度同じ布団へ潜り込みたくなってしまう。

疼きをなぞってしまえば身体は簡単に熱を思い出してしまうし、心做しか呼吸が早くなる。

熱い視線でロコモコを見てしまえば、自分がロコモコへつけた咬痕へと視線が流れてしまうし、無意識にそこへと指が伸びてしまう。

「だめっす……支度しなくちゃっす」

ロコモコより早く起きるようになった理由は数多くあるが、完璧に身支度を整えた自分を見て欲しいという気持ちもあって。

自分を見て美しいとも可愛いとも思ってたほしいし、何なら言葉で言ってる欲しい。

ロコモコは結ばれる前に自分が望むような者じゃないかも知れないと言った。

それはルプスレギナ自身も自分に対して思ってたことだ。

ロコモコに求められる様な者では無いかも知れない、それでも彼を愛したいと生まれた欲求は止められなかった。

だからこそ常に自分を磨き続け必要とされ続ける自分でいようと固く誓ったのだ。

真の意味で御方のためになら何でも出来る、どんなものにもなってみせると。

同時にお互いがそう思っていたとわかって喜びも覚えた。

お互いがお互いの為に努力し合う関係。

畏れ多い気持ちも勿論強いが、何より御方の力になれると実感して。

自分の魅力を増せば、それに応えようと彼は更に自身を磨く。

彼の魅力が増せば、自分は増した彼に相應しいものになろうと自分を磨く。まさに好循環。

こんなになってしまった自分を少し前の自分が見ればどう思うだろうか。

ロコモコの帰還が無いまま時を過ごしていたならどうだっただろうか。

「ふふ、きつと笑っちゃうっすよね」

そんな確信がある。

今でさえ、もう一人の自分とも言うべき存在が心の中で信じられないと言っているのだ。

打算も、愉しみも要らない。

ただただこの人を愛せるに相應しい自分で居続けたい。

そうさせたのはロコモコで、この方に染められたんだと思えばやつ

ぱり身体が熱くなる。

「もつと、もつと愛して下さいっす」

染められたい、溺れたい、支配されたい身も心も。そう望む心。人狼という種のせいなのか、狼の本能によるアルファシンドロームなんてものが存在しているのか。

自身より下等な存在を玩具と思っているように、自分を玩具にする権利を持っているのは主のみで。

持っているのにも関わらず深く愛情を向けられ、大切にされていると感じてしまう幸せをルプスレギナは毎日こうして噛みしめる。

故に、これこそが彼女の愛咬なのだろう。

彼の歯車に牙を持って噛みつき、共に廻るのだから。

では、彼女にとっての玩具とはなんなのか。

「ルプー」

「あ、ユリ姉え。来たっすよー」

さほど間が空いたわけではないが、随分と久しぶりに感じるカルネ村。

やや緊張感漂っている村に、眉を僅か眉間に寄せる。

「…………ごめんね、ロコモコ様と離れたくなかったでしょう？」

「ああ、いやまあそりやそうなんすけど…………それは置いとくっす。それにしても、結構な警戒態勢っすね」

村人に気取られないよう。いや、あてにされないよう気配を殺しながら。

「ええ、ちよつと私には荷が重いです」

「そつすね。私なら完全不可知で近い位置にいられるっすから…………うん、仕方ないっす」

申し訳無さそうな顔をしたユリに苦笑いを向けるルプスレギナ。

大々的に守って良いのならばユリも適任ではあるが、アインズにとって重要なのはインフィーレア・バレアレ、エンリ・エモット、リイジー・バレアレの三名のみ。

その三人の守護となると完全に影からの支援となり、いよいよ三人

が危ないという状況以外は村人に任せなければならない。

村そのものを守れという命令ならユリは確実に遂行するだろうが、ある意味での試しの意を含みながらとなればルプスレギナこそが適任だろう。

「ま、この村には子供もいるっすからね。ユリ姉えにはちと厳しいっすよ」

「そ、そんなことありません。ちゃんと……ちゃんと、任務通り出来まっす」

言いながら自信は無い。

と言うよりルプスレギナが来ると決まってから、ユリは避難場所の確認、子供を守る位置の確認をしていた。はっきり言って守る気満々である。

「わからない、わけじゃないっすよ。もしも、ロコモコ様とのお子がこのにいればなんて思うと……うん、ほんとに」

「……ルプー、変わったね」
「そっすかね?」

ロコモコへの気持ちを通してカルネ村を見たことがある。その上で自分には余る仕事だと思っただことがある。

ロコモコを通してこの村を見たからこそ、理解できたものがあつた。

「変わったよ。ボクの知ってるルプーだったら、守るように見せて——」

「——敵の目の前に放り投げる、っすかね? 言いたいことはわかるっす、けどそれはもう一番じゃないんすよ」

「一番じゃ、ない?」

静かにカルネ村を見ながら頷くルプスレギナ。

ユリの目から見ればルプスレギナに少しロコモコの雰囲気を感じてしまう。

「今でも……投げた人間が信じられないって顔して私を見て。笑ってるだろう私に絶望する表情を想像したら、ぞくぞくする。楽しいだろうなって思う。けど」

「けど？」

すぐには言葉を続けなかったルプスレギナの瞳には、エンリ・エモット。新しい村の長となった女の姿。

「……それ以上の楽しみ。ううん、幸せっすね！ 知っっちゃったっすから！」

「――」

不意にユリは理解した。

この生粋のサディストは、変わったのではないと。

「そっか、ロコモコ様に染まっちゃったんだ」

「えへへ、そうはつきり言われると照れちゃうっす！」

だらしない顔をしながら頭をかくルプスレギナ。

そう、きつと重ねてしまったんだろうンフィーレアに自分を。

愛したい人と結ばれないまま終わってしまう自分を想像して。

それはきつと何よりの絶望で、ルプスレギナにとっては至上的ご馳

走であるはずにも関わらず、それを捨て去ってしまえるほどに。

「……羨ましいな」

「ん？ 何か言ったっすか？ ユリ姉」

――あそこまでまっすぐ求められる気がしない。

ソリユシヤンが前に言っていた言葉。

ユリも理解した、同時に尊敬した。

「いいえ、何も。では、補佐のほう、よろしくおねがいます」

「がってんすよ！ おまかせあれっす！」

まだまだ変わっていくのだろうルプスレギナは。

少し寂しい思いはあるけれど、輝いて見えるルプスレギナへとユリは目を細めた。

「でね！ 聞いてくださいっすロコモコ様！」

「ああ、聞かせてくれよルプス」

帰還したルプスレギナを笑顔で迎えたロコモコ。

思わずその笑顔に飛び込みたくなって、堪えて。けどやっぱり飛びついた身体を優しく抱きとめてもらって。

今は夕食を二人で食べながらカルネ村での出来事を笑顔の中で報告している。

「私、ちゃんと我慢したんですよ！　ちゃんとンフィーレアもエンリも守ったつす！」

「偉いぞルプス。流石俺のメイドだ」

俺のメイド、なんて言葉にルプスレギナは腰を振らせる。

ちゃんと主張してもらえるのだ、俺のものだと。

それはつまり主を喜ばせられたということ。今日もロコモコのメイドでいられたということ。

「えへへ……」

アインズより命令されたからじゃない。

命令がなくても、ロコモコのメイドだと思えるこの瞬間が何よりも嬉しいのだ。

いずれロコモコはこの関係もまた変わると言った。

嫁にする発言はルプスレギナにとって衝撃の言葉であったが、どのような意味を持つのかはわからなかった。

実際夫婦という関係が想像できなかったのだ、特に相手は至高の御方。

夫婦でなければ愛を捧げることが出来ないというわけでもない、アルベドにしてもアインズとの関係はやはり主と僕だ。それでもアルベドはアインズに忠はもちろん愛を捧げようとしている。

置き換えるのであればメイドであっても、言う所の妻であっても今と変わらないと認識しているルプスレギナ。

いや、そう認識していた。

「そうだな、じゃあよくできたルプスには何かあげないとな。欲しいものとかあるか？　ああ、そういうや前の玩具は壊れたんだっけか、新しいのでも用意しようか？」

「いえ、ロコモコ様。何か頂けるのでしたら——」

こうして自分の意識や認識が変わった今だからこそカルネ村に広がっていた光景で思ったことがある。

「ロコモコ様の、お子が欲しいっす！」

「ぶっ——!?!」

人間の営み。

下等生物であるとは今も変わらず思っている。

しかし、広がっていた営み。その中でも子供が親に対して笑って母と呼ぶその光景にルプスレギナは強く心を惹きつけられた。

「私を、母にして欲しいっす!」

「いやいやいやいや!?! ちよつとまで!?! ああいや、嫌とかそういうんじゃないでな!?! 出来てもおかしくないけどな!?!」

愛を捧げる人の子を宿し、生む。

そしてその子が自分を母と呼ぶのだ、想像しただけでルプスレギナはたまらなかつた。

夫婦という関係はよくわからない、だがカルネ村の光景はルプスレギナの母性本能を強く刺激した。

「ルプス」

「はいっ!」

「俺も、実の所よくわからないんだがな。子を成すというのは夫婦だからこそ出来る事なんだと思う」

なるほどと大きく頷いたルプスレギナ。

それはつまり。

「なら早くアインズ様に奥方を取って頂かなければっすね!」

「ああ、そういうこと。だからごめん、もうちよつとだけ待っててくれな」

「はいっ! じゃあまずはアルベド様にロコモコ様との生活をお話しして何か手段を——」

「それはやめようか!?!」

盛大な自爆を敢行するところであつたが、ルプスレギナは居ても立っても居られない心持ち。

こんなにも輝かしいと思う未来が待っている。

忠を尽くす事は生き甲斐だ、あれかしと存在している自分たちにとってはまさしく。

けどそれ以外の幸せをくれた人。

「ロコモコ様！ 愛してるっす！」

「はいはい、俺もだよ」

この人と一緒に生きることが出来れば、もっともっと多くの幸せに出会えると確信して、ルプスレギナは綺麗に笑った。

教育方針

「おつつすーモモンガさん」

「おつですロコモコさん。……それで早速なんですけど、アルベドに何かしました？」

恒例の二人会議ですが何ですか藪から棒に。

「何かって、特にこれと言って何かした覚えはないっすけど」

「ほんとですか？ ……って嘘だ、その笑い方は絶対嘘だ。うああ……悪かったですって！ ルプスレギナのご褒美に関しては何とにごめんなさい！ だからアルベドのアレ何とかして下さいよ!？」

あーダメだ、やっぱ顔がにやけちやうよね仕方ないよ仕方ない。

さて、アルベドに対して入れ知恵はした。

あまりの剛速求愛をしてしまうとモモンガさんはドン引きする、つまり精神鎮静化が発動する。

あんまりにも強い感情を抑制するってスキルというか特性なんだけど、これにはキモがあった。

「何かですね、こう……奥ゆかしいんですよアルベド！ もの凄く男心をくすぐってくるんですって！」

「良いじゃないですか。あんな美人に言い寄られるじゃないっすけど、男冥利に尽きるってもんです」

そう、つまりプラス、マイナス方向へ振り切れない感情の動きは抑制されない。

たとえば風呂に入って気持ちいいなんて思うのは抑制されないのだ、一緒に風呂入って確認したから間違いない。あと、今度三吉君は俺も借りる。

「やめて下さいアルベドに惚れてしまいます」

「設定書き換えたのはモモンガさんでしょ？ ゆー惚れちゃいなよっす」

サムズアップしてみれば何を言っても無駄だと分かったんだろうモモンガさんは肩を落とした。

よしよし、アルベドによるアインズ様攻略は順調なようだ。

ある程度アルベドが攻略方法を確立させた頃合いを見計らってシャルティアにも声をかけよう。

「あ、なんですか？ まだ悪だくみしてるんですか？」

「いいえちつとも。ほら見て下さいこの澄んだ瞳を」

キラキラー。

「……次はシャルティアですか」

「なぜばれたし」

「わからないでか」

やられたらやり返されるんですよモモンガさん。

ほら、ぶにっつと萌えさんも言ってたでしょう？

「目には目を、歯には歯をと言わない。だって報復はマシマシでするもんっすから」

「おのれぶにっつと萌えさん、とんでもない相方育ててくれおつて」

ふふん、俺を敵に回すところなるんですよわかってくれました？

ええそうです、幸せ巩固めです。

「我らナザリック一同、アインズ様のご結婚、心待ちにしておりますれば」

「やめるんだっ!? ……くう、抑制された。まったく、とりあえずその

話は良いです。真面目な話、良いですか？」

ええご随意に。正直俺もそつちのが性に合いますし。

「カルネ村の件は聞いてますよね。今回の件もあって、出来ればナザリック直下のものにしたいんですけど何か腹案ありますか？」

「……このロリコンが」

「違う!?」

「冗談っす。俺も悪い気どころか嬉しかったですから、賛成です」

ナザリックに初めて人間が招待された。

ンファイレア、エンリ、そしてネム。中でもネムに関してはナザリックを褒めちぎったとか心から思ったんだらうすごいと。

モモンガさんは当然、俺たちギルメンからしてもすごく嬉しかった。地味にちよつと泣いた。

それだけに体裁的な重要度だけではなく、心情的にもカルネ村の重

要度を高める事には賛成だ。

だからこそ、モモンガさんは歓迎した上で自身が改めてアンデッドであることも教えたんだろう、今後あの村と関係を上手く構築していくために。

エンリたちは当然驚きはしたし、冷静になるまでいくらかの時間はかかったものの決め手はネム。

——かっこいい！

なんて言う一言だった。

思わず笑ってしまったが、個人的にカルネ村の中で一番重要な存在に格上げしておいた。

まあそれはともあれ俺としてもカルネ村の活かし方は既に考えている。

「ポーションの聖地とでも言いますか、いや、その他の事全般を含めて。あそこを学術的な研究都市化するって手段がまず一つあるっす」

「研究都市、ですか」

ポーションの研究だけではなく、たとえば魔法武器なんかにしても。

そういったこの世界にだけ存在している技術を研究する場所にする。

「ナザリックが勢力として表に進出した後にはなるっすが、そうすると決めたら大々的にあらゆる支援が可能っす。何より今回ファイリア達へモモンガさんはアインズとして面会し交流を深めた。カルネ村としても呼応しやすいかと」

「なるほど……」

うんうんと頷いてくれるモモンガさん。

「もう一つとしてカルネ村で旗揚げするという方法っす」

「旗揚げですか？　つまりカルネ村を王国から独立させるってことですね、そんな事可能なんですか？」

まあ王国のトップ、ではないけどラナーを押さえているし、何らかの動きで合わせてくれるだろうって見越しもあるが。

「手っ取り早いっすねこっちの案は。カルネ村の人々は受け入れてく

れるでしょう。ただ世界的に受け入れてはくれないでしょうから、この案を執るのなら自然と王国を滅ぼす方向へ進んで行くつす。八本指は上手く動いてくれているし、一気に金を得る機会にもなるつすね」

個人的にはあまりお勧めは出来ない方向でもある。

「だけど表に出る機会を伺っているだけでは上手く動けないのも確かだ。」

「さつさと国の原型を作ってしまった方が動きやすい可能性もある。」

「うーん……確か王国と帝国は毎年戦争してるんですよね？ 確かにカルネ村の位置であれば介入することも容易か」

「お決まり戦場のカツツエ平野は直ぐ傍つすからね。とはいえカルネ村に国を作った場合介入を嫌つて別の場所が選択される可能性もあるつす、他の国の動向もまた変わると思うつすよ」

「そこら辺の問題が出て来るんだよな。」

「随時対応していくつて形はあまり好ましくはない、ナザリック内の教育がまだ出来ていない以上現場判断が上手く実らない可能性がある、というかこつちで把握したり制御するのが難しい。」

「他にカルネ村の利用方法ありますか？」

「今の所は思いつかないつす、申し訳ない。現状唯一のナザリックに対して友好的かつ理解を得られやすい勢力……というには小さいつすけど。そういう存在であるつてのは確立されてるのは確かつす」

「それ以上を求めるのであればこつちの体制確立がなった上じやないと難しいな。」

「わかりました、まずはこつちが表に出ることが先か……」

「はい。表に出る方法の一つとして今竜王国の情報収集へ着手し始めています」

「竜王国ですか？」

「ドラウディロン・オーリウクルス女王が治める国。」

「ビーストマンに自国の人間たちを餌扱いされている弱い国。」

「カルネ村程じゃありませんが、カツツエ平野で行われるだろう戦争にも介入しやすい位置つすね。また、王国が腐つた国ならこつちは半

死の国です。生かすも殺すも簡単で、恩を売って依存させ傀儡化を目指すも、滅ぼして新たに建国するのにも適していると思うっす」

このままでは間違いなくビーストマンに食い荒らされて終わりだろうが。

アウラの報告によればビーストマンも対した強さじゃないって話だし、ナザリックからすれば殲滅は容易だろう。

ビーストマンを殲滅してビーストマンになるもよし。

ビーストマンを殲滅して竜王国になるもよし、だ。

気になる事があるとすれば竜の血をひいてるとかなんとか、それによる想定外の何か位だろうか。

「どういう形にしる竜王国を奪っておけば表に出た時の後ろ盾に出来る、ですね」

「はい、そうすればカルネ村で旗揚げした場合でも多少やりやすくなるっす。もちろん放置してもいいっすけど、滅びのカウントダウンは始まってっすから、何かしらに使うなら早めによろしくっす」

「わかりました」

ここら辺が俺の仕事範囲だろう、後はモモンガさんが考える事だ。

そう思えば随分この形にも慣れてきたな、モモンガさんも。

少なくとも俺たち二人のラインがしっかり確立されてきた証明だろう、いいことだ。

「他に諜報部隊として何かありますか？」

「そうっすね、この前の模擬戦で、アンデッドの軍団と蜥蜴人が戦っているって情報が帝国に渡ってるっす。恐らくっすけどナザリック近辺を調査に人間が来るかと思うっす」

「うーん……ああ、なるほど。そこを捕らえると」

一瞬首を傾げたのはわざわざなんでもって感じだろうか。

やっぱ人間に嗅ぎまわられるのはモモンガさんも嫌なんだろうな、基本的には。

「積極的に外に行けないっすから、呼び込む形を取ったっす。申し訳ないっす」

「いやいや、大丈夫です。ありがとうございます」

出来るだけこの辺もモモンガさんの意向を反映しないとな、反省しよう。

やっぱナザリックの整備は急務か。ぼちぼちデミウルゴスとセバスへ会いに行こう。

「ともあれ、帝国は真つ当な強国だと思うっす。良い国かどうかはわかんねっすが、表の舞台に置いて強い国、ここに対しては可能な限り早くモモンガさんの意向を決定できるような情報を集めたいところっす」

「じゃあ捕らえた奴らに情報を吐かせて決めましょうか、俺も出来る事があれば協力します」

「ありがとうございます。なら捕らえられ次第報告するようにするっすよ」

モモンガさんに協力してもらおう内容ってなるとまた難しいな。

尋問はソリユシャンがやってくれるし、その効果も高い。難しい様であればニューロニストに協力してもらえばいい話だし。

まああれか、どこから来たのかわかればそこに対してアンデッドによる何らかを仕掛ける事になるし、そのアンデッドを創ってもらう形か。

「そいじやナザリック内についてのお話しっす」

「そうですね。諸々まとめて教育でしたっけ？ 実際どういう形でやっついていくんです？」

「はい、まずは守護者格、セバスやプレアデスは優先的に受けてもらいっつ。受けるべきところから声をかけた者と、受けた者が推挙する者が受けられる形するっす」

「そうですね、全員一度に受けられるものでもないですし。闘技場なんか使えば出来そうですけど、内容が薄くなりそうか」

質問やらに答えられる時間が取れなくなるし、そういうことですね。

「そういったベースの上で、提供する講義は選択式でいくつか用意しようかと」

「選択式？」

知りたい知識を篩にかけるって目的だ。

命令で受けさせるよりも、進んで自ら知りたいと思ったことの方が頭に入りやすいし、身にも付きやすいわけで。

「もちろん概論というか、基礎的な部分を知ってもらうのは必須っす。その上で、そうですね。たとえばセバスに人間の陥れ方なんて説明しても嫌悪感なんかが先に来るでしょうし、逆分野の方こそ上手く活かしてくれるでしょう」

「それぞれの得意分野を伸ばしていく形ですね。そして伸ばしたものを活かせる場所へ配置すると」

その通りっすな。

守護者なんし上の立場が学びを修めて、部下配下へとそれを教える。その形を確立させてしまえば、一気に浸透していくだろう。

「なら十分に理解出来たかどうかを確かめるためのテストも準備しましょうか。パス出来ればそれを教えていいよ的な資格を渡すとか」

「おー、その発想はなかったっす。そうですね、その方がこっちとしても安心ですもんね」

さすモモ。

そうだな、その方が効率も良いか。いわば教師役の確保としても使える。

「最初の概論、でしたか。それはロコモコさんがやってくれるんでしょう?」

「そのつもりっすけど。出来ればモモンガさんに一発目、なんらかして欲しいかなって。教育機関の設立とその重要性について皆の前で話すとか」

「うっ……」

俺がやっても良いけどさ、モモンガさんがやるのが一番効果あるもん。

変な場所で支配者然とさせてしまうことに気が引けはするけど、これもナザリックのためっすよ。

「少し暗い話をしますが。教育ってのは一種の洗脳っす」

「洗脳とはまた良い言葉じゃないですな」

まあかつてのリアルを知る俺たちにとっては尚更だから、気持ちはず痛いくらいに理解できる。

「自由思考に方向性を持たせようとしてるんです、今までの漠然としたモモンガさんの意を叶えようって言う部分を管理すると言っているようなものつすから」

「まあ……そうですね、それは俺たちが痛いくらいに理解している事です」

「確実に言えることが一つある。」

ナザリツクの皆はとてつもなく頭が良い。赤子がスポンジのように知識を蓄える様に、様々な事を吸収する。

いや、まさに赤子なのかもしれないな。この世界に来てから初めて自分の意思を発露出来るようになったんだ、言い得て妙なのかもしれない。

このまま自由思考に任せていけば、知らないうちに俺を……いや、俺たちの判断が及ばない領域に足を踏み入れる。

皆がモモンガさんへと向ける忠誠心を疑うつもりは欠片もない。だけど、そんなときに足を引っ張る存在にはなりたくないのだ。

出来るのであれば、その成長を喜び認め、はつきり任せると言えるようになりたい。

「子の成長は早い、か」

「モモンガさん？」

なんとなく笑っているように見えるモモンガさん。

子の成長、か。もしかしたら似たような事に考え至ったのかもしれないな。

「わかりました、最初に俺が皆へ言葉を贈ります。そこから先の事は、任せましたからね？」

「……なあんか妙な予感がしますが。了解つす、万事お任せあれつすよ」

セバスハーレムなう

その出会いは運命だったのかも知れない。

人間が何かの壁にぶちあたり、乗り越えるための力を掴み取ることが使命であるのならば。

まさしくブレイン・アングラウスが出会ったセバスという男は運命の相手と言ってよかった。

「今日はここまでに致しましょう」

「はあっ！ はあっ！ ありがとうございます！」

死んだ目で虚ろに生きるブレインの新たな仕事は屋敷の用心棒だった。

シャルティアに心を折られた後、ガゼフとの再会。

少なくともただの居候でタダ飯食らいという立場に羞恥を抱ける様になったブレイン。

それでもかつてのような傭兵稼業には抵抗がある、故に選んだ仕事だった。

「ツアレ、彼にタオルを」

「畏まりました。ブレインさん、こちらを」

「はあ……はあ……ふう、ありがとう」

傭兵稼業への抵抗、それは戦いへの忌避感。

命を天秤にかける行為はまっぴらごめんだった、求めていた真の強さなんてどうでもいいとすら思った。

だがそれでもこの屋敷に来た時からブレインは毎日死ぬ思いをしている。

まだ少しぎこちない笑顔のツアレからタオルを受け取り、顔を拭いながら思わず苦笑いが浮かぶ。

「セバス、様。どうですか？ 俺は、用心棒……いや、番犬役程度なら任せられる位にはなりましたか？」

「そうですね、いい目をするようになってきましたが……あと少しと言ったところですか」

用心棒になりたいとこの屋敷へやってきた者はブレインだけでは

なかった。

応募者の中から誰かを選ぶため、セバスはある方法で篩にかける中残ったのがブレインで。

セバスからすれば誰でも同じ程度にしか見えなかったが、それでもブレインだけが残ったのだ。

今はまだ、用心棒という本来の仕事にすら就くことを許されていない。

訪れてはただ稽古をつけられる毎日。

情けないと言って良いのかも知れない、しかし最早彼に捨てられるだけの恥は残っておらず、ただただ今は用心棒という仕事に就けるだけの自分へ至りたいという気持ちだけ。

そう思ってしまうほどブレインから見たセバスの力量とは天上のものだったのだ。

自分の心を折った原因へ似た感情を覚えてしまうほどに。

「少しでも早く、役目を果たせるよう努力します」

「はい、よろしくおねがいます」

言い残してセバスはその場から離れていく。

頭を下げながら見送ったブレインは、完全にセバスが居なくなつた瞬間床へと腰をついた。

「……世界は広いわ」

「ふふ、全くです」

残った二人は笑い合う。

ブレインは如何に自分が大海を知らない蛙であったのかを知つたし、ツアレは自身の凄惨と思つていた過去がどれだけ小さな世界だったのかを知つた。

傷ついた、その傷は確かに深く大きなものだったし、今も尚自身を苛むことはある。

だが、だからこそ新たな世界が輝いて見えるのだ、掴みたい、掴み取りたいと思うのだ。

再び、羽ばたけるように。

「良いのかい？ セバス様は行つちまつたけど」

「この後セバス様はご面会の予定で、そこに私は呼ばれていません。今日のお仕事はこれで終わりです」

そう言つてツアレは気づかぬ間にブレインの頬へ出来ていた傷へそつとハンカチを這わせる。

「あらま、こんな所に」

「お、お屋敷が血で汚れてはいけませんから。掃除するのは、私達なんですよ？　ならこれも掃除、です」

もう一度二人は笑う。

いつか大きく輝いた世界で笑うために。

「セバス」

「お待たせ致しましたデミウルゴス」

屋敷の一室。

先に部屋へ居たデミウルゴスに一礼と共にセバスは入室した。

気の合わない相手ではあるが、礼を失することなど出来ない故に。

「早速だがねセバス。あのメイド達はなんだい？」

「あのメイド達と言いますと？」

セバスはロコモコより命を受け、自分なりにではあるが彼女たちを知ろうとした。

そのために保護された者をこの屋敷にてメイドとして教育し始めるとアインズ、ロコモコへ報告し受理されている。

同時にそうなったと守護者各位に連絡もされているためデミウルゴスもまたこの屋敷における彼女たちの役割を理解していた。

「まるで教育が行き届いていない。監督不行きなのではないかい？　あまりにも気が抜けすぎている」

珍しく立腹している様子のデミウルゴス。

珍しくというのは誰が見てもわかるほどに感情を表に出しているといった意味合い。

それだけにセバスは肝を冷やした、彼ならば自分の気づかぬ間に彼女たちを処分などいくらでも出来るだろうから。

「申し訳ありません。メイドとしての仕事はきっちり教育していたつ

もりではあったのですが」

「そうだろうとも、それは疑っていないさ。実際あまり使われ無いだろうこの部屋にしても掃除が行き届いている、その手腕は素晴らしいと思っっているよ」

デミウルゴスのそんな言葉にセバスは首を傾げる。

自分の知っている彼の像から出るような言葉、人間如きの仕事を認めるような言葉であることへ違和感を覚えたのだ。

そしてその上で立腹しているのは何故かがわからない。

「わからないようだね。良いかい？ 彼女たちはロコモコ様が保護した存在だ、つまり彼女たちを蔑むことはロコモコ様を蔑むこと。そのような不義出来るはずもない」

「なるほど、それは重ねて申し訳ありません。失礼をお許し下さい」

理解が及んだセバス。

確かにそういった理由ならば納得が行く、性格は対極と言っているが至高の御方へ向ける忠義を互いに疑ってはいない。その面においては誰よりも信頼していると言っても過言ではないのだ。

ならば何故怒りを表しているのか。

デミウルゴスは遠回しに言っているのだ、あのメイド達の所有権はロコモコにあると。

「は……」

「理解したようだねセバス」

そこまで考えてセバスはようやくデミウルゴス立腹の理由を悟った。

「申し訳ありません！」

「私が許せることでもないがね。許しはロコモコ様に頂くべきだ、何より私自身も似たような失敗はあるのだから」

そう、デミウルゴスは言っているのだ。

今のメイド達ではロコモコ様の所有物であるなんてとても言えないと。

至高の御方を飾る存在にも関わらず、汚してしまうなんてとんでもないと。

「彼女達はキミしか見ていない。キミの目が届かない場所では手を抜く、態度を緩める。セバス、キミはアインズ様、ロコモコ様の居ないところではそのような事をしているのかい？」

「言葉ありません、直ちに意識改革へ努めます」

デミウルゴスも最近なのだ、その部分を改めたのは。

部下が自分たちを通して主を拝していることは理解している。

畏れ多いことではあるが、だからこそ自分たちは主の鏡なのだ、主達は自分を通して部下へと感情を向けているのだ。

逆もまた然り。

自分たちは部下の鏡でもある、部下の失態は自身の失態。

主である至高の御方は自分たちを通して部下を見ているのだから。

「すまないね、会って早々に」

「いえ、私だけでは気づけなかったこと。感謝致します」

デミウルゴスの想いを正しく理解したセバス。

これは彼なりの部下へ対する愛情なのだ、そうあれと願い期待しているのだ。

「私は、デミウルゴスの事を誤解していたようです」

「……誤解ではないさ、今も尚私はキミに対して苦手意識を抱いている。キミもそうだろう？　だがね、好きだろうが嫌いだろうが上手くやる。全ては御方達のためだよ」

今日は珍しいことばかりだとセバスは少しだけ笑う。

照れたのだろうか？　デミウルゴスが少し顔を背けながら言った言葉。

「そうでございますね。ですが、だからこそ私達は互いを埋めあえるのですでしょう」

「まったく……アインズ様、ロコモコ様のお見立て通りということさ。さあ、無駄話はこの辺りにして来た目的、教科書の最終確認をしようじゃないか」

「畏まりました」

恩というものは最も簡単に裏切れるものである。

地獄からの脱却、救いというものは墮落でもあるのだ。困っていれば、また誰かが助けてくれるかもしれない。

ある意味期待と言つて良いだろう、そんな気持ちは緩みを生む。

「でもさー、こんな所誰も来ないのにねー」

「いいじゃん、これしてるだけでお金貰えるんだし」

窓を、壁を磨きながらメイド達は言う。

こんな簡単な事をしていれば自分たちは生きていられるのだと。

娼館に監禁されていた時、遡れば苦しい生活の中にいた時。

それから考えればまさに天国だった、六日働けば一日は休みだ、給

金は満足のいくものだったし住み込み働き故に衣食住で困らない。

つまり得られる金全て自分のために使える。

「あ、あの……ちゃんとお仕事して下さい」

「……はあい」

緩み始めた空気を引き締めなおそうとするのはツアレ。

そのツアレとて恩義に報いるためなんて意識は薄れつつある。

それでもこうした空気を嫌うのは、ソリュシヤンの仕事を目の前で

見たからだろう。

もしも、この光景を彼女が見れば。

「——っ」

身震いしてしまう。

セバスは確かに優しい、そして仕事も丁寧に教えてくれる。

ここはまさに人間が人間らしく働ける場所だ、しかしただの人間が

働き続けられる場所ではないと、ツアレは正しく認識していた。

簡単に、それこそ何の感慨もなく処分される。

自分たちの代わりなんていくらでもいるのだ、ナザリツクと呼ばれ

た場所に存在するだろう人達は簡単に代替品を見つけてくるだろう。

自分の価値を示し続けなければならない。

恩義という気持ちが薄れてきてもその想いだけは決して薄れない。

だからこそツアレはメイド達の中で一番幼い風貌にも関わらずま

とめ役に収まっている。

「ツアレ」

「セ、セバス様！」

そこへ不意に現れたセバス。

ツアレの声に慌てて姿勢を正す他のメイド達、彼女たちもまずいと思っただろう冷や汗が浮かんでいる。

そして。

「へえ？ 様になってるな、ツアレ。久しぶりだ」

「ロ、ロコモコ、様……!?!」

セバスの後ろに居たのはロコモコ。

そうだと認識した瞬間ツアレはその場に平伏した。

他のメイド達はツアレの様子に戸惑いを隠せない、この人は一体誰なんだろうかと訝しんだり首を傾げたりと。

実に間抜けを晒していた。

「セバス」

「申し訳ありません！ 皆、平伏しなさい！」

「もも、申し訳ありません!!」

不愉快気にメイド達の姿へ眉根を顰めたロコモコ。セバスの焦った様な声がことの重大さ、そして現れたロコモコという存在が遙か至上に居る方だと示していて、そんな存在の前で先程の姿を晒したという事がどういふことかは流石に彼女らとてわかる。

「セバス」

「……はっ」

「お前は俺にこいつらを纏えと？ 俺を飾るに相応しいと？」

「そのようなことは。申し訳ありません、全て私の失態です」

絶対零度の響きどころではない。

冷たすぎて温度すら感じず、ただ鋭い針に刺されているかのような声。

——殺される。

メイド全てがそう思った。心底数刻前の自分を無かったことに出来ればと涙すら浮かべた。

「信賞必罰は世の常。ならこれはどちらに値すると思っっているセバス、答えろ」

「無論、罰でございませす」

予感はずしかった。

救われた。それは間違いだった、救われつつあったことを自覚した。

同時に自分でその機会を無に帰してしまうことも。

「お、お許しくだ——」

「黙れ」

「ひっ」

最早何も言えなかった、許されないと悟った。

だから、諦めざるを得なかった、自分の愚かさを心底認めて。

『顔を上げ、目の前の光景から目を離すな』

「——っ！」

そんな時何処からか逆らえない力を孕んだ声が聞こえた。

言葉通り、メイド達は顔を上げ目を見開く。

「ではセバス、罰を与える」

「はっ！」

ロコモコは腕を振り上げ、そのままセバスの頬へと——

「——悪いセバス、無理」

「……は？」

向かうはずだった腕を静かに降ろした。

「何も期待していない、期待していないから責任もない。だが管理してくれているセバスには責任がある……そして上司はその責任を取らなければならぬ」

「ロ、ロコモコ様……っ？」

戸惑いの空気が流れた。ロコモコ以外の全員が呆然とする中、自嘲する様な苦笑いがやけに映えていて。

事前の打ち合わせではここでセバスへ暴力を振るい、メイド達が不始末をすればそれはセバスが責任を取らないければならぬことを知らしめるはずの予定。

そうすることで自分以外の誰かが苦しむと教え、自分たちについてを自覚させる目論見であった。

セバスとデミウルゴス、二人からの立案故簡単に袖に出来もせず曖昧に頷きここまで来たロコモコだが、直前になってやはり無理だと諦めた。

「この場で責任を取るべきなのはセバスじゃない。それは俺だ」

小さくロコモコが呟いた。

そして間を置かずにロコモコは腰に回していた短剣を取り出し。

「だ、だめっす!!」

「——ぐっ」

完全不可知を解いてまでの静止。

しかしルプスレギナの声は間に合わず、短剣はロコモコの手のひらを貫いた。

「ロコモコ様っ!!」

「いつてえなあ……まあ、セバス殴るよりかマシだわな。ルプス、まだちよつと待て。セバスもだ……ああいや、ルプスをちよつと抑えといて」

言いながらロコモコはようやく初めてメイド達へと視線を向けた。

「さて、はじめましてではないがはじめまして。貴様達の上司であるセバスの上役、ロコモコという」

「——は、はい」

何が何だか分からない彼女たちは頷くしか出来ない。

未だに抜かれていない短剣が、血を伝い床へと流れていることにすら気が向けられない。

「あまりバカと話す気にもなれなくてな、少しだけ言っておこう。精々ぬるま湯で生きろ、代価はちゃんと支払わせる……誰かにな」

「——」

さも当然とロコモコは言った。

いや、既にこの場においてロコモコは支払ったのだ、まさしく血で。その事実には、彼女たちは息を呑んだ。

遠回しに言われているのだ、次もまた自分以外の誰かが血を流すと。

「……くたびれ儲けにならなきゃ良いがな。セバス、ルプス、行くぞ」

「はっ！」

「……畏まりました」

言いながら何事も無かったかのようにメイド達に背を向けるロコモコとセバス。

ただ一人、ルプスレギナは。

「……もしも次、同じ様な事をすれば、助かった事を死にたくなる位後悔させてやる」

「——ひっ」

この世の憎悪を煮詰め、煮詰めたらこんな視線になるのか。向けられた瞬間、多くのものが床を濡らした。

「ルプス」

「申し訳ありませんすぐに……。覚えておけ、無価値なゴミ共」

そうして完全に姿が見えなくなった後。

『自由にして良い』

「——ひ、あ……」

身体が自由になりそのまま床へと崩れ落ちた。

上手く呼吸が出来ない、身体は芯から震えて立ち上がることも出来ない、動く気になれない。

頭の中はぐちゃぐちゃで、まともに何かを考えられない。

「……今の私達じゃ、またこうなります。ううん、こうにすらならない」

「っ、っあ、れ?」

唯一だろ正しく立ち上がったのは。

そして静かに言葉を続ける。

「メイド長と呼びなさい。そして命じます、今後非番時以外気を抜くことを許しません。加えて、この命を破った場合の保証もしません」
毅然としてツアレは告げた。

唇を強く噛み締め、手を握りしめて。

ツアレも理解したのだ、自分の、自分たちの役割を。

「かしこ、まりました……メイド長」

「よろしい。ではまずこの掃除をします、素早く行い元の業務に戻

りなさい」

「メイド達もまた理解した。

——このままでは、いけない。

自分たちは救われたのではない、助かったわけでもない。

救いを手にする権利を得られただけに過ぎず、掴み取るのは自分自身だと。

「もうっ！ ロコモコ様！ほんとに……ほんとにもう！」

「あはは、悪かったよルプス。ごめんな」

部屋に着くなりルプスレギナはロコモコの手を取り回復魔法を使った。

目には涙を浮かべて、言いたいことは沢山あるのにロコモコの苦笑いで何も言えないまま。

「申し訳ありませんっ!!」

同時にセバスとデミウルゴスが額を強く床へと叩きつけた。

自分たちがこうすれば上手くいくだろうと考え願った結果、ロコモコが自傷という行為に出たのだ。

少なくとも二人はそう思っている、故に最早どう償えば良いのかすらわからない。

「止めてくれって。全部俺が悪かった、言われた時に却下するべきだった。俺には出来ないって、二人が考えてくれた事を無駄にしまつて本当に悪かった」

「あ、頭を上げ下さい!? そのようなこと……! 私達が未熟だったがせいです!!」

「その通りです! ロコモコ様のお気持ちを考えず、この様な愚案を!! 信賞必罰と仰るのであれば、どうか我らに罰を!!」

必死だった。

愛情も与えずぎては毒になるのだ、このままでは墮落してしまうという気持ちもあったが、こんな様ではいつになったら自分たちの忠誠を受け取って貰えるのかわからない。

「さつきも言ったが……言ったっけ? まあ責任は上司が取るもん

だ。全部これでチャラにしよう。お前達がアインズ・ウール・ゴウンの子、モモンガさんの子なら俺にとってもそうだ。我が子を殴るなんてドメスティックバイオレンスも良いところだな。お互い、次に活かそう」

治療が終わった手をひらひらと振りながら、やっぱり苦笑いで二人に話すロコモコ。

「ロコモコ様……！ つく、申し訳ありませんでした！ そして畏まりました、以後この様なことが無いよう、忠勤に励みます……！」

「私とて……！ ロコモコ様の大きい愛情へ応えられますよう、さらなる精進を誓います……！」

平伏する二人。

——もう、間違えない。

デミウルゴスは固く心に誓った。

自分は他の者に先んじて人間心理の把握へと着手出来た。

驕りがあつたと確信した。人間心理は仕事だ、だがそれを理由に最大優先したい気持ちを無碍にしてどうするのかと。

セバスもまた、自分の甘さを実感した。

自分の責任という範疇を見失っていた、面倒を見ていたメイド達の失態は自分が責められるべきもので。言い換えれば自分が犠牲になればいい等というナルシズムとも言える何かに踊らされていたと。

困っている人を助けるのは当たり前。

だがそれは無作為に救いを与えるだけでは終わらないのだ、その後に対してもしつかり責任を負うこと。

それをもつて助けると為る。

「うん、お互い頑張ろうな。それじゃ教科書の確認をしよう、よろしく頼む」

「はっ！」

「畏まりました！」

出来れば、ここで働く喜びを彼女たちも知ってほしい。

否、知らせるのだ。忠を捧げること、捧げる相手が居ることの喜びを。

誰がための幸福か

「忙しい中よく集まってくれた。皆、楽にせよ」

「お、御言葉ですが――」

「よい。こうして守護者やプレアデスが一同に介するのも久しぶりと感じる、皆の顔をよく見せてくれ」

何そのムーブ。

……あ、はーん？ あれですね、支配者ポジをちよつとスライドして校長先生ポジに移行しようとしてますね？ ダメですダメダメ、ナザリックの支配者はモモンガさん。異論は認めない。

「モモンガさん、それ多分孫に久しぶりに会ったおじいちゃんのポジっす」

「ぐ……」

ほらほら皆も困惑してるから、そっちに行きたいならちゃんと相談乗りますから、ね？

叶えるとは言っていない。

「はあ……アルベド、いつもの頼む」

「はっ！ 皆、顔をあげてアインズ様、ロコモコ様の御威光に触れなさい」

うんうん、皆安心するよね。いや、これで安心するってのもあれだけどさ。

だけどモモンガさんの言う通りこうやって各リーダー級と言える存在が集まるのも久しぶりだ。

やっぱそれぞれに仕事を割り振ってるもんな、どうしても二、三人欠けた状態が多かったし。

あ、ほらパンドラズ・アクターさん？ ごめんって。ともあれ仕切り直し。

今日こうやって集まったのはこれからの行動についてモモンガさんから改めて伝えるためとナザリック教育機関開設のお知らせなんだから。

「まず最初に皆の忠勤に感謝しよう。おかげでこれからの行動をある

程度確定することが出来た」

「何を仰いますかアインズ様。全てはアインズ様のご慧眼通り、我々はアインズ様のご軌跡を辿っただけに過ぎません」

あ、また失敗しましたねモモンガさん？ お前達のおかげだー作戦もダメでしたね……流石に少し同情します。ちゃんとフオローは後でしますからここは踏ん張りどころですよお願いします。

「やれやれデミウルゴス。仮にこれが私の想定通りであったのなら、その想定通り動けた自分を誇るが良い、下手な謙遜はよせ」

「申し訳ありませんアインズ様。御言葉、有り難く存じます」

よっ！ 流石アインズ・ウール・ゴウン！ 支配者ムーブのがやっぱり素敵ですぞ！

「ではこうして主たるもの全員に集まってもらった目的を話そう、今後の動き方についてだ」

よし、思考を引き締めよう。

モモンガさんに掴んだ情報そのままと私見については述べた通りだ。

俺としてもその後どう決定したのかはまだ聞いていない、集中しないとな。

「まず国作りに関してだが、竜王国をバックにつけた後カルネ村を独立させる」

……そう決定したのね、モモンガさん。良い決定、かも知れないな。

竜王国をバックにつけるってのはナザリックに対して、だな。カルネ村と竜王国を結びつける意図では無いだろう。意味もあんまりない。

カルネ村の独立はナザリック支援の下、王国から独立させるって意味かね。

ラナーを通して襲撃を受けたカルネ村の税は免除されるって話が出てると聞いてるけど、まあ後の祭りではあるわな。

必要な時、必要とされる場所に居るってのはとてつもなくでかい。

警戒や備えという意味でもそうだ、襲撃の報せを聞いてから向かったところで手遅れになってる可能性の高いってのは誰でも……い

や、わかってたらこう付け込まれないか。

特にエンリ新村長とは個人としてモモンガさんと交流している。

王国よりは魅力的な話に聞こえるかも知れない……そこは上手く調整しなきゃなんないかな？ どう考えてるんだろ。

「竜王国は現在ビーストマンから継続的な襲撃を受けて疲弊している。我らナザリックはそのビーストマンとの戦争に介入し竜王国を救い滅ぼす」

「救い、滅ぼす……？」

おつとアウラとマーレが首を傾げてるぞつと。シャルティア、わかったような雰囲気出さないの。

なるほどね、とりあえず竜王国に対してはビーストマン殲滅してから傀儡国家化を目指す方向で決定か。

「デミウルゴス、確認だ。ここまででわかった事をアウラ、マーレ、シャルティアに向けて説明せよ」

「畏まりました。アインズ様の遠謀、全てを理解出来たとは思えませんが恐れながらも。良いかい——」

コキュートスさん？ こっそり答え合わせしてますね？ いいぞもつとやれ。

さて、じゃあどう動くかな。

帝国の動向はまだ掴めてない、網にかからないと判断するにはまだ少し早いしもうちょっと根を張っておきたい所。

軍事的に介入するってことなら練習も兼ねてコキュートスと蜥蜴人に任せるのが一番だろうか、モモンガさんはもう考えてるのかな？

まあ考えてるだろう、この人の調整的な能力はほんとに尊敬するレベルだし。

「——そして竜王国を傀儡化した上で、ナザリック援助の下カルネ村を独立させる。これはナザリックの手中に二つの勢力を得るということなのだよ。多少つじつまが合わないことや不都合は全部竜王国に泥として被らせれば、我々は実験含めてあらゆる事を自在に行える」

「な、なるほどでありんす」

アウラのジト目に気づくんだシャルティア。いやまあやつぱ守護者達の関係性はほんとほっこりするな。

デミウルゴスがモモンガさんに向かってよろしかったでしょうかと言わんばかりに一礼して、大きく頷かれる。

ん？ つてことはカルネ村でも旗揚げしないし、竜王国にアインズ・ウール・ゴウンの国も作らないってことか？

「カルネ村に独立の動きがあると王国に情報を流す、カルネ村には何も告げずな。その時ナザリックの存在を明かしていなければ王国の行動はどういうことが予想される？」

あ、なるほど。そういうことね。流石モモンガさんだな。

ていうか中々えげつないな、マッチポンプを図るのね。

「え、えつと……なにしてるんだーって怒りに来ます」

「その通りだマーレ。実際にはまず司政官が派遣されるだろうな、何故だと。しかしカルネ村は何のことかさっぱりだ、当然そんなつもりも無いのだから知らぬ存ぜぬだろう。しかし流す情報が確かだと王国に信じさせることが出来れば虚言だと見なされ反乱発起と断定される、そこでロコモコさん」

「はい、情報を流すのは任せて下さい。その上で王国に武力鎮圧を促せば良いんですね？ ナザリックとしてはそこに介入すると」

「なるほど！ 王国が自国民へ槍を向ける等施政者に非ずと義勇を装うのですね！」

そうすりゃカルネ村の守護者として立場を確立出来るし、武力だけに限らず直接的な支援も可能と。

いやあ、いい手だな惚れ惚れする。俺の私見とナザリックの意見を上手く絡めた手段だ流石調整の鬼。

それじゃラナーにも言わなきゃならんな、八本指にも工作させるか。

タイミングは竜王国の傀儡化がある程度進んでからだろうけど、そこまで時間がかかるようなもんでもないだろう、一度助けられてしまふという事は救われることではない。弱みを握られて付け込まれることへ怯えなければならぬのだ。

それがわからない愚物であればより楽だけど、精々期待することにしてしよう。

「そうしてカルネ村を勢力として明確に保護する。カルネ村の今後は開拓村から研究都市へと考えているが、ある程度村の規模が大きくなった頃に国としよう。アインズ・ウール・ゴウン国としてな」

「畏まりました、素晴らしいご慧眼。感服致しました」

うんうん、ナザリックの技術をもつての支援を行えば発展はまさに瞬く間だろう。

発展が周囲に知らされればエ・ランテル辺りの都市はすり寄ってくる可能性もあるし、思っている以上に立国は早いかも知れない。

なら俺としては王国への情報統制をしつつ、帝国の件を早めに片付けないといけないな。途中で変なちやちや入れられると困るし。

後はまだ情報を得られてないけど法国にも手を伸ばさなきゃな……中々に忙しくなってきたそうだな。

「ここまでは良いな？　そしてこのプランを実行に移すため必要なものがある。アルベド、何かわかるか？」

「人手、でございますね？　ある程度まとまった数で並行し動かねばなりません。規模に関わらずまとめる者や各仕事に適した者が足りないかと」

おっと、そろそろこつちの出番だな？

「その通りだアルベド。知つての通りセバス、デミウルゴスが人間心理に関する研究を進めその成果が形となった。まずはその働きに感謝しよう。後ほど褒美を用意する」

「勿体なき御言葉……！」

「ナザリック、アインズ様のために働くことは当然でございます！　褒美等と……！」

「よい。二人が作り上げた教科書、ロコモコさんと共に確認したが素晴らしい出来栄だった。これに褒美をつけられず何につければいいというのか。望むものを考えておいてくれ」

いやほんとにね。

名付けて誰でも楽々人間操縦術ですか、マジで抜け目ないのが出来

たよ。

「その人員確保、または人員育成のため、将来的に人間を使役するため。この教科書をもってナザリツクにおいて教育機関を設立する。また、この機関における最高責任者は私ではなくロコモコさんだ。皆、我が友の顔に泥を塗らぬよう励め」

……はい？

「畏まりました!!」

ぬえっ!? いやいやいや!? 畏まったじゃないよ! 畏まらないで!?

ああ!? モモンガさん絶対内心笑ってるだろ! あたいわかるんだから!!

うあー……妙な予感はこれかー……しかも我が友とか言われちゃったし……こ、断れねえ。

「ではこの場を解散とする。次いでロコモコさんより教育機関の説明を第九階層、円卓の間にて行ってもらおう。そうだな、一時間を目処に準備を終え再集合するように」

い、一時間……くっそ、文句を言う時間がねえ! なんで抜け目ないんだよ! ちくしょう! 後は任せるってこういうコトかい!

あーあーわかりました、わかりましたよ! やります! やらせていただきますう! ぶー!

「さてまずは皆お疲れ様、モモンガさんと重ねて時間を作ってくれて感謝してるぞ」

「勿体なき御言葉です」

忠誠はまだ受け取らないってのは大分と浸透しているみたいで、モモンガさんに向けられる忠誠の儀は行われな。いい傾向だ。

「早速だが、皆に言っておきたいことがある。俺は皆よりも頭がいいとか仕事が出来るとか全てを見通すことができるなんて大層なモンじゃない」

「そ、そのような——!」

「いいやデミウルゴス。俺は皆よりも多少人間の事をよく知っている

ただだし、仕事である諜報に関してもそうだ。今から、いやこれから受けてもらう教育の中で成長すれば俺なんて足元にも及ばない程優秀な存在になるだろう」

デミウルゴスは反射的に何かを口にしようとしたけど、他の皆は驚きのあまり絶句してしまったようだ。

確かに自分を過小評価しすぎてるのかも知れないが、皆が成長すれば俺より遥かに優秀な存在になるだろうってのは間違いない。

「言い方を変えよう。この教育機関はそういう存在を作るため、俺を超えてもらうために存在している。生徒は教師のコピーになるのではない、教師を超えるために学ぶんだ」

「――」

うわあお、一気に空気が重くなった。

そんなこと出来るわけがない、つてところだろうか？ 至高の御方

リスペクトはやっぱすごいよね嬉しいけど。

「うーん……そうだな、モモンガさんの言葉を借りようか。お前達はギルド、アインズ・ウール・ゴウンの子だ。ならばモモンガさん、俺にとつても子。その親が願うこととは何だと思う？」

「……も、蒙昧なる私達には、とても」

さて、それは思考停止というものだが。

そうだな、皆は少し遠慮が過ぎる。

「親の願いとは子の幸せと成長。親よりも幸せに、優秀に育って欲しいと願うんだ」

「――ロコモコ、様」

そうさ、かつて理解していたことの中で今も実感としてあるもの。

それが皆の幸せを願う気持ち。

「独善的であることは認める、わがままであるとも。それに俺を踏み台になんて言えば抵抗があるかもしれない。だが、俺よりも幸せになつてくれる、俺よりもナザリックにとつて優秀な存在へとなつてくれることが何よりの幸せだ。その一助になれるだろうことを、心の底から嬉しく思っている」

本音だ。

自分で考えて答えを出す、出せるようになるという意味は自分なりの幸せを探せるようになるということ。

やっぱりわがままではあるんだろうとわかってる、けれども願わずにはいられない。それが親としての……いや、ロコモコとしてのエゴだ。

「成長した皆が、やっぱりナザリックに尽くすことこそが幸せだと思ふならそれが正解だ。だが、今はまだ答えを出すな。いずれ自分で見つけ直してくれ、その上で出した答えが何であれ俺は絶対に祝福する。きつとモモンガさんも同じ思いだろう」

「アインズ・ウール・ゴウンというギルドを愛したモモンガさんだから。」

ナザリックに存在する意思ある者の幸せを祈っている。

「もう一度言う。俺よりも幸せになれ、俺よりもナザリックに利を運べるようになれ。……ああ、もちろん簡単になれると思うなよ？ 既に幸せという面だけなら、今この場にいる誰よりも幸せだという確信があるからな」

ちらりとルプスへ目を向けると顔を真赤にしてくれてる可愛い。

ふふんとドヤ顔で言っただつもりだったけれど。

「ふふ、それはどうでございましょう」

「うん？」

「ええ、アルベドに同意です。恐れながらもロコモコ様、今の私達はお二人に負けず劣らず幸せだと確信しております」

「む……う？」

なるほど？ よくわからんが張り合われてるな？ くそう、負けるもんか。

「ふん、なら何よりだよ。だがまだまだ足りないな、もつともつと貪欲になれ。知識に対しても幸せに対してもな」

「はっ！ 我ら一同、ロコモコ様からの学びを以てより幸せの高みに至ること、お誓い致します！」

お、おおうここで忠誠の儀ですか？ な、なんかタイミング違うくない？

ま、ままええわ？

とりあえず言つときたい事は言ったしお授業始めますかね。

「よし、それじゃ今後の授業プランについて説明してくぞ？　まずは

—」

立国編

その一歩

「——お話は理解致しました」

「ああ。どれ程の兵を差し向けられる？」

ラナーの私室。

夜分に訪れたロコモコは用意された紅茶へ僅かに眉根を寄せながらも話を続ける。

この時間ならばラナーが人を呼ばない限り入室してくるものはない。

よしんばいたとしてもノックがされるし聞こえた瞬間ロコモコは不可知化できる。敢えて言えばクライムは気取れないが、そもそも忠義高い彼であればこんな夜には緊急時以外現れない。

緊張感のある話をしているにも関わらず穏やかな空気が流れている理由はそういったものもあつたが、何よりお互い既に王国を捨てている。

ラナーはクライムさえ手に入るなら国等不要だったし、ロコモコにしてもカルネ村の件が上手く行けば王国は最終的に滅ぼすことになる。

重ねて、王国滅亡はほぼ内定しているようなもの。

それこそアインズが王国を滅ぼすなどとも言わない限り、いずれやってくる確定した未来だった。

「カルネ村の戦力をお聞きしても？」

「俺から言えることはない。お前の掴んでいる情報から予想を立てろ」

これは手厳しいとラナーは軽く手を挙げつつ、思考を巡らせ始めた。

正直な所、ラナーの手にカルネ村の情報はほぼ無いと言って良い。

あるのは襲撃を受けたこと、全滅は免れ、復興支援として今季の税が免除されるといった程度。

その事実から考えるのならば、大軍を差し向けるまでもなく王国正規兵の百でも向かわせればそれで事足るだろう。

しかしロコモコはカルネ村に大軍が来ると考えている。

「……なるほど、それが私の仕事ですか」

「そういうこと。そうだな、多ければ多いほど嬉しいぞ?」

カルネ村へと大軍を向かわせるよう工作する。

それこそがラナーに与えられた仕事だった。

現状、帝国との戦争時期が近づいている事もあつて数を揃える事自体は難しくない。

徴兵が着実に進んでいるタイミングだ、それこそ片手間でカルネ村鎮圧など出来る。

自国の開拓村で起こるだろう反乱鎮圧如きに大軍を動かせるか、問題はその部分。

手っ取り早く動かせ易く都合がいいのはバルブロだろう。

王族である人間の前で介入出来るという面はかなりのメリットだ、王子率いる軍勢が敗走し独立を許したという体が取れる。敗走ではなく壊滅、あるいは全滅までしてしまえば王国の貴族派閥は大きく力も失うし、ラナーにとつても素晴らしく都合がいい。

バルブロ第一王子は功を上げたがっている、帝国との戦争、その前哨戦扱いとしてある程度の数を率いさせて向かわせるのは可能だろう、片手間を片手間としながらもそれなりに名を上げられる程度に価値を付加させるためにはどうすればいいか。

「ラキユース……いえ、蒼の薔薇を使います」

「へえ? アダマンタイト冒険者をねえ」

ロコモコの口角に力が入った。

そんな様子を見てラナーは意図が通じた事を確信する。

「はい。掴めない八本指の尻尾を探して苛立っていますし、ストレス発散にでもどうかと」

「わかった。だが、最悪とは言わないが一人くらい死ぬかも知れないぞ? 具体的な数を調査されては困るからな」

蒼の薔薇を使ってカルネ村の調査をする。

そしてアダマンタイト冒険者にある程度損害を受けさせ失敗に終わらせられれば、カルネ村にある程度以上の戦力があるという証明になる。

王国内でそれなり以上に名高い冒険者チームだ、バルブロは飛びつくだろう蒼の薔薇で無理だったことを成し遂げられるのならば。

「ええ、ストレス発散になるでしょう?」

「つたく、ほんつとお前はこっち寄りだよ」

二人は笑う。

月明かりに照らされて、禍々と。

「ふう。じゃあ第一王子が率いられるだろう戦力数を教えてくれ」

「つ……もう、全て手のひらの上は止めていただけませんか? 心臓

に悪いです」

笑っていた顔が引き攣る。

同時に確信した、どういう手段を使おうとカルネ村へバルブロを向かわせられていただろうと。

「とは言えあまりそちらに関しては詳しくありません。ご存知だろう通り徴兵で集められた者達は平民です、槍を持った一般人です。戦士長直下の戦士団やボウロロープ候の精鋭兵団、貴族の私兵であればまた違うと思いますが」

「バルブロとボウロロープは緊密だったな? 一緒にカルネ村へ来る可能性は?」

「低いでしょう。兵をある程度貸し出しはするかも知れませんが、やはり多くは徴兵で集めた者達です。ボウロロープにとつては後に控える帝国との戦いがメインディッシュです……ですがそういった理由を含めても最低千は満たせるかと、多くて五千といったところでしょうか」

「は……? いやすまない。それは本気で言ってるのか?」

思わずの言葉に紅茶を吹き出すところだったロコモコ。

カルネ村の人口は少しづつではあるが増えている、しかし腐った国の兵とは言えど正規兵。

エンリが召喚したゴブリン等人外の戦力という存在を知らないと

は言え多すぎる。

「嘘など申し上げません。そういう者なのです」

その言葉を聞いてロコモコは強い頭痛を覚える。

「なあ、ラナー？」

「どうされましたか？」

「ほんとき、よくこの国保ってるな」

「ですので申し上げました。元より価値等覚えたことがないと」

なんとなく勝ち誇った様な顔をするラナー。

こればかりは降参だとロコモコは内心で白旗を振る。

ラナーはこうも言っているのだ。

民、平民が起こすだろう内乱鎮圧の為に平民と言う名の兵をそれだけの数揃えぶつけると。

得られもしない名誉のために。

「いやなに、クライムを見てしまったからな。お前の護衛とは言え兵なんだろう？ さぞ他の兵達も精強とまでは言わずとも、強く忠義や仁義に厚い者が多く集っているんだろうと思っていた」

「まあ……！」

思わず素で言ってしまったロコモコではあったが、まさしく真実だった。

それがわかったラナーだけに、目を輝かせてしまう。

久しぶりどころか初めてなのだ、クライムの事を買う存在と出会ったのは。

ラナーが友としてしているラキュースとてクライムのことを認めているのは自分という存在を通してだし、強さに関して持ち上げるような意味合いは無かった。

しかし蒼の薔薇を軽々と超越してるだろう目の前の存在がクライムを買っている。

「あの、話が逸れてしまうのですが、クライムの事を何故買っておられるのですか？」

「え？ いや、正直俺から見たら弱っちいけどさ。ああ言うのは強くなるよ、ことお前を守るためになら尚更」

ロコモコの脳裏に浮かぶのはナザリック守護者達。

確かにレベルという概念は存在していて、元より強者ではあるし人間ではないが。彼ら彼女らを強者に留め続けているのはアインズに対する忠誠があるからこそ。

想いが存在の力を高めることは種族問わずとして大いに有り得る話で、人間とはことさら顕著に想いで力を左右される生き物である。「人間ってのは何かの為にこそ強くなれる、その何かを強く想えば思うほど。だったらあいつは俺が今の所会った人間の中で間違いなく最強だよ、ガゼフとやらの方が強いんだろうけどまだ会ってないからな」

「ロコモコ様……ありがとうございます」

「いや、お礼を言われる理由がわからない」

クライムに対して見えたものは少ない。

いや唯一と言って良いだろう、それがラナーへの想い。

守りたいと、そのために強くなりたいという高潔にして眩しい一念。

今ラナーは救われた気分だった。

お前が手にしようとしているものは価値があるものだ、認められたようなものだった。

それだけにクライムへの執着心は高まる。

つまり、手に入れる為にならどの様な手段でもロコモコへ捧げると。

「ともあれ最低で千が確保されてるなら少なすぎて困るってのはなくなりそうだ。んじやタイミング合わせるためにもこれを渡しておく」

言いながらロコモコはラナーへと状態共存アイテム、対玉を渡す。

初めて見るアイテムを受け取った後、しげしげと眺めながら使用方法を聞くラナー。

なるほどと頷きながら、ラナーは自分の時が動き始めたと確信した。

「この国も、秒読みですか」

「よく言う。お前が望みに一歩近づいたってだけだよ」

——良かったな、一番強くて。

未だに。いや、今だからこそその言葉に震えることが出来るのはゼロ。

なるほど確かに自分は六腕の中で一番強かった、故にこうしてナザリックの外で活動できている。

好きな時間に食事が出来て、好きなときに眠れて。好きなときに好きなことが出来た。

これを自由と言うならばそうなのだろう、監視の目すらなくただ仕事さえこなしていれば守られる。

「ああ、そうだ、俺は、ああはなりたくない」

かつて今の自分へとこれほど執着したことは無いだろう。

思い出すのはかつて同じ腕として肩を並べた存在達。今はもう一本の腕が骨となってしまい残るは自分を含めて五本だけ。

全員が今のゼロを狙っている、唯一の腕になろうと今も地獄を泳いでいるのだ。

いつ、何処で、自分が地獄に再び落とされるのかわからない。

監視の目があるうとなかろうと関係ない。失敗すれば問答無用だろう、簡単に。

「ゼロ」

「……ヒルマか」

なんとなくゼロは次にここへ来るのは彼女だと思っていた。

明確な理由はない、ただそれでも敢えて拳げるとするのなら同じタイミングで洗礼を受けたからといったようなもの。

「コツコドールは？」

「もう着いてるさ、準備してるんじゃない？ 他の奴らもすぐ来るさ」

同じタイミングが理由であるならコツコドールもそうだろう。

ただゼロもヒルマも洗礼後よりずっと王都に派遣され、かつてのコネクション維持に努めている。

他の部門長も各自の身辺整理が終われば王都に詰めることに

なっていた。

「随分真面目になったもんだ」

「はっ、あんたからそんな言葉が聞けるなんてね。まあ……普通なら生きてるだけ儲けものなんて言うけど、ちよつと違うね。地獄で生きるくらいなら死んだほうがマシだもんね」

「違くない」

簡単な話だった。

裏切ろうとすればどうなるか、非常によくわからされた。

一人の部門長は自分の拠点へ生還した後逃げの一手を打った。

打った瞬間簡単にナザリックへ連れて帰られた、今頃どうなっているのかなんて想像は出来ない。いや、したくない。

ただ一つ確信を持って言っているのは、殺してくれと叫んでいるだろうってこと。

一人だけぬるい洗礼だった。

自分たちは逃げるなんて欠片も考えられない位の洗礼を受けたにもかかわらず逃げようとした者を一瞬尊敬すらしそうになったが、蓋をあけてみれば単純で。

元から見せしめ役とされていたっただけ。

——指って五本で十分だよな？

一人消えて七本指となった時、ロコモコは自分の指を見て笑いながらそういった。

その瞬間折れた心が粉々になったことを覚えている。

「狂いたいのに狂えない。死にたいのに死ねない。ああ、そうだ。まさしく慈悲を与えられたんだろう俺達は」

「……はは」

六腕の他の者を思い浮かべるゼロ。

今も蜥蜴人の訓練相手を務めているんだろう。いや、もう手も足も出なくなつて別の相手の案山子役になってるだろうか。

誰相手でも彼らは死物狂いで務める。勝利を求め、ゼロの役目を手にするために。

遠い目をするゼロを見ながらヒルマは無意識に自分の腹部を撫で

る。

今も夢に見るのは自分の身体から生まれた子供達が自分を食べている光景。

狂うことも許されず、ずっと平静な心で眺めさせられたそれはヒルマの心へ決して癒えない傷となつてまだ確かとある。

人間という存在の追い込み方をよく理解されていた。

希望があれば縋ってしまうのだ、掴み取ろうとしてしまうのだ。

今生きて何かの仕事をしている元八本指全員、目の前に人參を吊され走る駄馬だとわかっている。わかっているが走るしかない。

「ほんとにね、自分たちが如何に小悪党だったのかを理解したよ。あの方達に比べたら、ほんとうに」

「生きてる世界が違うのだろう。利用価値があるから生かされている、なくなれば使われるだけ。だが……俺は」

「わかっているさ、今の自分達を幸せにも思うよ。利用価値があるうちは……そう、人間なんて枠組みから外れた場所でいられるんだから」

こうして最低限命令に従っていれば、自分たちは人間でありながら人外へ身を置くことが出来る。

ある意味保護と言つて良いだろう、いつ簡単に潰されるかと怯えながらでも、成果を出しているうちは。

「アインズ様、ロコモコ様を信じる以外に術はない……はっ、改めてまさか俺がこんなふうになるなんてな」

「おんなじ気持ちだよ。さ、無駄話はこの辺にしようじゃないか。ロコモコ様直々の命令を受けられるんだ、お役に立たないと……も、もうアレの苗床にされるのは——」

「わかっている。俺だつて自分の脳みそをもう二度と見たくはない」
ゼロは頷き震え始めたヒルマの背を追う。

自分たちは敗北者だ、かつてしてきたように骨の髄までしゃぶられるだけの存在。

掴み取れない希望へ手を伸ばそう。それが敗北者としての有様だと。

王国が、滅びへの一步を踏み出した。

いや、ゼロやヒルマ、コツコドールは滅ぶとは思っていないだろう。
簡単に殺せるのに殺されない自分たちがこうしているように、この
国もまたそうなのだから。

戦闘準備

忙しくなってきた。

組織としての拡大前にここまで手広くなると人手がやっぱり足りない、というか外で使える存在の少なさがネックだと感じる。

まだ教育機関は稼働し始めたばかりだし、皆が優秀とは言え流石にすぐ外で使いましょうってわけにはいかないわけで、俺としてはここからしばらくが踏ん張りどころだろう。

「まず、ラナーの案に関してからか」

蒼の薔薇をカルネ村に派遣させ内部戦力の調査を行わせる。

いや、行わせてはならない。村へと一歩も足を踏み入れられずに目的を頓挫させるためにはどうするか。

端的に言ってしまうえばカルネ村の戦力として偽装した存在をぶつけてしまえばいいんだけど、あまり強すぎてもだめなところがミソではあるな。

さつくり蒼の薔薇が全滅するかもレベルの戦力を向かわせてしまえばそれこそ誰も近寄らなくなるだろう、いわゆる放置、名前だけ王国の領土、村としておきつつ暗黙の了解で村の独立を認めるなんてことになりかねない。

蒼の薔薇が善戦するも、これ以上は危険だとして撤退せざるを得ないと判断する程度の戦力が求められる。

「蜥蜴人……は、無理だな。竜王国へ派遣の予定だし」

コキュートスを頂点においた多民族連合軍。連合と言うにはまだ蜥蜴人だけだけど、いずれそうなるだろう。

その試しとしては十分な相手だと思うビーストマンは。まだ竜王国ヘナザリックからの書状をもってアウラとマーレがついさつき出発したところだし、細部はまだ決まっていらないが。

コキュートスの軍が使えないとなると、他に適している戦力に挙げられるのは。

「プレアデス、か」

ユリに関してはカルネ村で仕事を任せているわけだし適任だろう、

ルプスに關しても巨人だ蛇だの話が落ち着くまではバックアップに入りやすいよう待機している。

蒼の薔薇がどれほど強いのかはまだ掴めない所だが流石にこの二人で十分だと言うのは浅慮としか言いようがない。

ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラ、ガガーラン、ティア、ティナ、イビルアイ。

この五人。

最低でも同数は確保しておきたいところだ、保険を付けるなら俺が行くべきだろうか。

とはいえソリユシャンは張った網の管理に忙しいし、蒼の薔薇と対峙してる時に網にかかりましたなんて事になれば目も当てられない。

ナーベラルは漆黒として活動してるし面が割れてる以上難しいしセバスも同じく。エントマも連絡役の要をしてくれてる以上気軽に動かすのは厳しいか。

「ユリ、ルプス、シズ……あと二人」

やっぱ俺は入らないとダメだろうな、つてことは後一人。

ああ、そういえば八本指がカルネ村に潜伏してるかも知れないなんて言うかもとラナーが言ってたか、ならゼロを使っても良いな、こいつなら蒼の薔薇より強かろうが弱かろうが関係ないし。

じゃあ俺、ユリ、ルプス、シズ、ゼロの五人で蒼の薔薇と戦おう。モモンガさんに報告する時シズを一時借りるって事に加えて、万が一に備えてもらうことも必要か、やっぱ忙しいなあ。

流石にギルメンというか、ユグドラシルプレイヤーレベルカンスト勢以外に負けるつもりはないし、プレアデスもそうそう引けは取らないだろうけど……まあアダマントイト級冒険者ってやつの実力を拝む良い機会か。

「出来るならこっち側に引き込みたいところだし」

蒼の薔薇ってネームバリューはそこそこ価値がある。

ラナーは今回こいつらを切った。切り札を使ったという意味ではなく、完全に切り捨てた。

無論無事に王都へ帰還すれば今後も付き合いは続けるだろうが、俺

たちに委ねたんだ。

やっぱりラナーは取り扱い危険物だなと再確認出来た話し合いではあったんだよな、ほんと頭痛い。

そんなわけで俺たちナザリツクとしてもまだ表で活動できる存在が少ない以上、有名冒険者を自由に使えるようになりたいってのはある。

上手く道筋を探して行きたいところだな。

「伝言——ソリュシヤン」

『はっ、ロコモコ様如何なされましたか？』

今は巡回中だったな、一応確認もしておくか。

「そっちの確認とこれからの動きに関してだ、まず網の様子はどうか？」

『申し訳ありません、まだ誰もかかってない状態です。後、以前仰られておりました東の巨人、西の魔蛇と呼ばれる存在を目視で確認しました、トロールとナーガのことを指しており、また住居……いえ拠点らしき場所も確認しています』

ほほーん？ 森の残った大きい勢力はその二つかね。

カルネ村の使い方が決まった今、余計なちやちや入れされても困るな。

いやモモンガさんが何かするって言ってたし、調査結果を報告するか。

「わかった。網については継続して張っていてくれ。巨人等の情報はよくやった、ありがとう、俺から先にモモンガさんへ口頭で簡単な報告はしておくから、帰還次第詳細な報告書をモモンガさんへ提出してくれ」

『ありがとうございます、かしこまりました。ではこれからの動きに關してとは？』

「ああ、カルネ村付近でアダマンタイト冒険者をプレアデスの一部と俺、あと一人数合わせの人間を入れて迎え撃つ予定が出来た。その間はソリュシヤンに対して指示が出来なくなるって報告と合わせて、今日から戦闘が終わるまでの間は一時、網に関する扱い全てをお前に委

ねる」

『——っ』

良い機会でもある。

ソリュシャンはいわば俺の弟子と言えるし、教育機関が設立されるよりも早く俺の教えに触れている存在だ。どれほどの成長をしてくれたか見せてもらおう。

「今を維持してもいいし、何かを発展させてもいい。ソリュシャン、思う存分にやってみろ。ただし直接帝国に潜入すると言った行動は禁じる」

『畏まりました！ このような機会を頂きましたこと感謝いたします！』

ぶつちやけ手が回しきれてないしな！ お願いソリュシャン助けてっちなもんだ。

やる気もマシマシになってくれたし良いよね？ 良いと思う。

よし、まあともあれ。

「モモンガさんに報告してから、カルネ村に行きますか」

カルネ村はずれ。

やつぱりちよつとした要塞だよなと外壁を見て思う。

櫓らしきものも立ってるし、中さえ見なきや軽い軍事拠点と言われども信じられる。

「プレアデス、ユリ・アルファ。御身の前に」

「プレアデス、ロコモコ様専属メイド、ルプスレギナ・ベータ。御身の前に」

「プレアデス、シズ・デルタ……御身の前、です」

「え？ あ、え？ ぜ、ゼロ、です。お、御身の前、です？」

いやこうして綺麗どころに混じらせて悪かったよ、めっちゃ浮いてるわ。

「……お前」

「も、申し訳——」

「いや、良い。事前に何も言わず召集をかけたんだ、許すよゼロ。それ

よりも今から一時的にチームを組むことになる、まあ仲良くやろう」
そこまで言えばプレアデス達は纏わせた怒気を霧散させてくれた。
うん、ありがとう。

とはいってもやっぱりこいつ弱いな、横に並べたら余計にわかる。
何とか目的を達成させるためには上手く動いてもらわんとならん
が……ふうむ。

「さてこれからチームを組むと言ったが、理由を話そう。アダマンタ
イト冒険者チーム、蒼の薔薇がカルネ村へと調査にやってくる。俺た
ちはそれをここカルネ村外周で迎え撃ち、撃退する。これはその為の
チームだ」

「あ、蒼の薔薇を、ですか？ そりやまたどういう——」

「黙りなさい、何を勘違いしているの？ ロコモコ様がそうすると
仰った、なら私たちはそれにイエスと答える以外に言葉は必要ない。
……これだから人間は」

おっとルプスさん？ 前のメイドの件から人間にあたりめつちや
きついですね？ いやほんとごめんなさい。

というかユリもシズも頷かないで？ ほらゼロ震えてるから、ね？
「構わない。チームと言っただろう？ ある程度の情報共有は必要
だ、これから理由の一部も含めて説明するから聞いてくれ。ゼロもそ
う怯えるな、闘鬼の名が泣くぞ？」

「も、申し訳ありません！」

よしよし、聞く体勢は整ったな？

「ゼロは王都で進行中の工作を把握しているな？ あれはこの村を独
立させるためのものだ、そして今回蒼の薔薇をここで撃退するっての
も同じく必要な一手なんだよ。ここに一定以上の戦力があると誤認
させるための手段だ」

「独立、ですか……そりや——いえ、何でもありません。かしこまりま
した」

お、学ぶねえゼロ君。いかついでだけが取り柄じゃないよね。

「蒼の薔薇を通じて王国に報せるためだ、あんたらが本腰入れないと
簡単に独立しちやいますよってな。殲滅ではなく撃退といった意味

はここに有る」

「蒼の薔薇自体を報告書扱いするということですね？」

「その通り」

この中じゃユリが一番その面では賢しいな、カルマは善に寄ってるはずだけど……これなら心配はいらんか。

「蒼の薔薇がどれほど強いのかって部分はいまいちハッキリしない。ゼロ、お前をここに入れたのはそれを知る為でもある」

「はい。直接やりあった事はありませんので、ずばりこうだとは言えません……俺と同等から王国戦士長ガゼフ以下、つてところでしょう」

ええと？ 正直いまいち物差しが出来てないんだよな、セバスの私見ではユグドラシル基準でレベル30位って言ってたか。

つてことは相当弱くないか？ え、それでアダマンタイト級になれんの？ マジ？ んじゃ冒険者モモンがアダマンタイトつて不釣り合い過ぎない？

い、いや。

「なるほど？ じゃあパーティとして強いってわけか」

「パーティとしても強いと思われまます。個人としての力量も確かですし、かつて最強を自負していた俺でも……ガガーランといい勝負つてところかと」

……ええ？ これだったらプレアデス連れて来なくても良かったんじゃない？

むしろユリとルプスだけで戦力的には十分だったかも知れんな。

……だめだめ、悔るのはまずい。

武技だなんだと知らないスキルのようなものだってあるんだ、緩めないでおこう。

しかし、良い傾向だなゼロは。自分こそ最強って思ってたこいつがナザリックを知ったことによる意識変革。それにより自分への妄信が無くなった結果、互いの戦力を測る目が良くなったみたいだ。

過小評価に振れるかその逆かはまだわからない。が、ユリ達を見て弱者だと決めつけるどころか警戒する姿を見せたゼロだ、ある程度は

信頼できる目になっただろう。

つまり、そう大きく違いは無いってのは確かで、パーティならではの連携を取られたら不味い、か。

「わかった。ならこっちは各個撃破の形を目指そうか、協力されたら面倒そうだし……よしゼロ、蒼の薔薇について知ってる情報を」

「畏まりました。まずは——」

——なるほど、ね。

パーティリーダーラキュースは神官戦士、水神を信仰する信仰系魔法詠唱者か。

キリネイラムとか言う魔剣が気になるところ。真つ当にユリが相手にした方がいいか、使わせる暇を与えないってことで。

ガガーランは純粋な戦士みたいだな。ゼロといい勝負って話だし、そのままゼロをぶつけるか。

簡単に負けても困るしその逆もそうだから、ゼロには何かしら持たせる必要はありそうだが。

ティア、ティナなんてどう考えても忍者だろ。

え？　つてかまじで忍者？　だったらそれなりに強いはずなんだけど？　うーん、前提ジョブとかの条件どうなってるんだろ。

んで、だ。

「イビルアイ……」

「こいつは噂じゃ蒼の薔薇主力って話です。極大級魔法詠唱者なんても呼ばれてますし、最大限警戒するべきかと」

こいつだよ、こいつが一番よくわからない。

わからないだけに俺が相手にする必要がありそうだ。

全員の力量が同じ程度であるなら手の内がわかるって意味で相性的に忍者の二人を俺が相手にするべきなんだが……。

「よし。まず蒼の薔薇を発見できるように周囲へトラップを仕掛ける。発見出来次第、相手をバラけさせる様に動き一対一での戦闘へ持ち込むことが第一目標だ」

「畏まりました」

ゼロは俺と一緒に行動させよう、明らかに一人動きが鈍い状態にな

るし。

探知に引つ掛ければそこに集合し、相手の状態を見て散開させる。強制短距離転移のアイテム作つとかないとな。

「各自の相手はユリがラキユース、ゼロにガガーラン。ゼロには後でバフアイテムを渡そう、勝たなくてもいいが最低限負けるな」

「畏まりました」

「か、畏まりました！ 必ずやご期待に応えます！」

うんうん、良い気合いだねゼロ。

ユリは……平常運転かね。

「双子の相手はシズとルプスに任せる。二対二の体をとつても良いが、どうする？」

「場所によつては私の炎系魔法が使いにくいです。出来ればシズと共闘出来ればと」

「前衛、いませなので……出来ない事は、ありませんが。出来れば」

そうなんだよな、俺が入りたかった理由はそれもある。

まあルプスには回復手段もあるし、最悪粘つてもらおう形を取つてもらうか。

「わかった。ならそれを前提にしよう」

「ありがとうございます」

「感謝……申し上げます」

……。
パーティ戦ならこつちも構成自体は良いんだけどね。ゼロがなあ

「俺はイビルアイってやつにあたる。最終確認だが、出来れば殺すな。けど実力が肉薄していて手加減が厳しいようなら殺していい。逃げる姿勢を見せられたら追わなくていい」

「はっ！ お任せください！」

「よし、それじゃあ細部を詰めていくぞ」

それじゃ準備しますかね。

蒼の薔薇戦

歴戦の勇士は予知に限りなく近い予感を手にすることが出来る。

それは勿論素質による物が大きいとは言うまでも無いことではあるが、そういつた素質を有していることは蒼の薔薇がアダマンタイト級冒険者チームである証左の一つ。

蒼の薔薇をまとめるラキユースは言うまでもなくこの世界における一角の人物。

ラナーからの依頼に一種のきな臭さを感じたが故に警戒はしていた、ましてや八本指が絡んでいるかも知れないなんて話だ高いレベルの意識を持っていた。

簡単に村へと入ってはいけない。

いや、ガガーランが言ったようにまだ正式な声明をカルネ村が発したわけではない。

冒険者一行、その依頼の為に立ち寄ったとしても言えば入ることは出来るはずだ、声明を出す前から事を大きくはしたくないだろうからと。

だがそれをイビルアイが止めた、発表前に蒼の薔薇が立ち寄ったという事実こそ何より渡してはいけないものになりかねないと。

「戻った」

「おかえり。早速だけどどうだった？」

斥候へ出ていた双子を迎えたラキユースは一つ胸を撫で下ろしながら状況を聞く。

態度に出てはいなかったがイビルアイも同じ気持ちだった、斥候すら失敗となってしまうえば予想以上の戦力が既に集められているという証明であったが故に。

「まずあれは村とは言えない」

「ちよつとした要塞。いや、軍事拠点って言ってもおかしくないかも」
城壁を思わせる壁に囲まれたカルネ村。

外からでも見える位置に櫓が立っており、遠目でしか確認は出来なかったがそれでもわかる異質さを二人はラキユースへと伝える。

「――異様ね」

「独立、反乱を狙ってるっつーのも、ありえねえ話じゃないか」

「襲撃にあった経験から防備を固めた……なんて村人が出来る規模じゃないのは間違いないな」

どう考えても何者かが手を貸したとしか思えない。

資材にしても人員にしても、襲撃を受けた村人が出来るようなものではなかった。

ティア、ティナは正しく自分たちの所感が伝わったことを理解した。

もう少し近くで確認は出来た、リスクを背負って良いのであれば。

一歩近づくとたびに頭の中で鳴り響く警鐘。無視するには自分の命を賭けなければならぬのではないかとすら思ってしまったその音色。

「正直、あの外観だけでも独立、反乱の信憑性になる」

「これ以上は報告して任せても良いと思う」

見たものにしかわからない感覚だろう。

僅かに肩を震わせながら二人は懇願に近い報告、いや忠告をする。

引き返すなら今だ、と。

「ガガーランはどう思う?」

「あん? 俺か? ……二人に賛成、かもな。報告して終いにするか

は兎も角、出直しても良いんじゃないか?」

「イビルアイは?」

「なんとも言えないな。ここでヤバそうだから退くをしてみれば、あの村を脅威として認定することになる。その意味がどういうことかわからないわけじゃないだろう?」

ラキユースは一つ頷いた。

心情的にはイビルアイに近い、自分たちはアダマント級冒険者なのだ。強者があれは脅威だと言ってしまう意味なんて当たり前に理解している。

元よりラキユースはその意味を強く想ったからこそ引き受けた面があった。出来ることなら自分達だけで事を収めてしまいたいとす

ら。

カルネ村が脅威であると報告してしまえば、村に存在する命はどうなるのか。

今の軍部、その頂点達がどう判断するのかを考えればラクユースの頭に良いだろう答えは浮かばない。

反乱、独立なんてやめるんだと説得できれば、無用な血を流すまでもないのだ。

だが、蒼の薔薇チームリーダーとして考えるならば。

そんな自分のエゴを元にパーティを危険に晒していいのか？ 良
い訳がない。

自分たちの手に余ることかも知れないのなら、終息させることが出来る存在に任せるべきだ、それがどの様な形であっても。

ライラの畑を焼き払ったときと同じだ。

解決するためにはどうやっても犠牲は出る。ならば今回も同じことだ、冷酷かも知れないが必要な決断はある。

ならば。

「……調査を続行しましょう」

「わかった……ほんと、我らが鬼ボス」

「鬼リーダーここに極まれり」

言いながらも双子は笑った。

これだからラクユースは、こうだからラクユースだと。

そうして笑いが伝染し、全員が立ち上がった時。

——都合のいい決断、ありがとう。

そんな言葉が聞こえた瞬間、蒼の薔薇に映る景色が移り変わった。

「まーさかこうして蒼の薔薇とご対面になるとはな。畑の件はありがとうよ、あいつに変わって言うておくぜ」

「ここは!? つく、あんたは——!」

「お前らが探してたヤツだとだけ言うておく」

一瞬の浮遊感後、蒼の薔薇は森の中にいた。

驚き慌てる様子の中、ゼロはニヤニヤと笑いながら語りかける。

「わりいんだがよ、まだ時期尚早ってやつでな。知られるわけにはいかねえんだ……おい」

「っ!? 囲まれてる!?!」

ゼロの言葉と共に現れた、なんとも不気味な仮面を被った者達と。

「なんだこいつら……って、魔獣までいんのかよ」

「――」

黒い狼。

その姿が見えた瞬間、イビルアイは動かない心臓が大きく跳ねた気がした。

「――逃げるぞ」

「あ?」

「良いから逃げるぞ! あれは不味い! 魔獣なんて生ぬるい! 本物の化け物だ! わ、私がなんとか食い止める!」

「つく!!」

ただ事じゃないとわかるイビルアイの言葉に思考の一切を止めて、退転する蒼の薔薇達。

「おーおー見事だ。……俺もお前位賢かったらな、まあ良い。行けっ!」

「ぐあっ?! —— 飛行!!」

ゼロの言葉で黒狼がイビルアイへ口を開け――目に映らない速度の体当たりでイビルアイの身体を吹き飛ばした。

そのまま森の奥へと一匹と一人は姿を消す。

「よおし! 俺達はアイツらを追うぞ!」

「……ち」

赤髪の女らしきものが舌打ちを一つ。

しかし足は既に前へ。

「ルプー」

「わかってるっす、手筈は間違えないっすよ。ちやんとある程度の実力を確認したら逃がすっす」

「うん……行く」

全員で頷きながら、抜き去ってしまわぬように加減をして。

「まず私から、ラキユース、でしたか。アルファ、参ります」

その中からアルファは先行し、ラキユースへと追いつく。

「なんっ——つぐ!？」

「お相手致します、どうかお覚悟を」

「ラキユース!!」

そのまま殴り飛ばされたラキユースもまたアルファと共に姿を消す。

「くそが！ おいテイア、ティナ！ 先に行きな！ 俺がここで——」

「食い止める？ 馬鹿っすね」

「浅はか」

振り向き足を止めたガガーラン。その左右をあざ笑うように抜けていくベータとデルタ。

そうして残ったのは。

「簡単には逃さねえよ」

「——つたく。まあいいさ、あんたが八本指だろう？ 尻尾を掴ませ
て貰えなかつた礼、ここでしておいてやる！」

得物を構え大地を踏みしめるガガーラン。

目付では、自分と同等かそれ以下。考えることはここで可能な限り早くゼロを撃破して誰かの救援へと向かうこと。

「……いや、まあお前は本当に運が良い」

「あ?」

ガガーランが覚悟を深く心に刻む最中、ゼロは表情を消しながら言った。

「まだ勝負出来るんだから」

「そりゃ一体どういう——」

「気にすんな、失言だ」

しかしそれも一瞬。

二人の戦闘が開始された。

「くそっ！ なんなんだお前は！ ありえないだろ！ あいつらの中にお前を超えるものは居なかつた!!」

」
イビルアイは錯乱に近い状態。

ちやんと目付が出来たわけでは無かった、だがそれでも今自分が相手をしている魔獣があの中で一番強いことなんて簡単にわかる。

それだけにあり得るだろう可能性、誰かがビーストタイマーで魔獣を使役してるといふものを否定されて混乱していた。

「お前みたいなのはいいの！ 何故人間の言うことを聞いている！ あまつさえ何故アイテムなんか使っている!!」

」
更に黒狼はアイテムまで使用した。

ディメンショナルロック
次元封鎖、一時的に転移を阻害する効果を発揮するアイテムまで。

「答える！ 何故——つく！ クリスタル・ウォール 水晶防壁!!」

姿を消していた黒狼が不意に現れ仕掛けてきた突進、それを水晶防壁で防ぎ——脆く崩されてしまったが——なんとか距離を取ろうとするイビルアイ。

言葉を理解しているとか、話が出来るとかそういったことを考えているわけではなかった。

口にしなければ頭がどうにかなりそうだったのだ、自分の理解できないことが立て続けに起こった、把握しきれないまま状況が進んだ。

ある意味愚痴に近い。

吠えたところで望む答えが帰ってくるわけでは無いなんて百も承知だったがそれでも。

マキシマイズマジック
「魔法最強化・結晶散弾!!」
シャード・バックショット

イビルアイの手に魔法陣が発現し、結晶の礫が黒狼に向かって放たれるが。

「——無効化?! デタラメすぎる！ 飛行!!」

何をするわけでもなく黒狼の身体へ当たる前にかき消される。

それがわかっていたかのように黒狼はそのままイビルアイの身体に牙を突き立てようとする瞬間、イビルアイは飛行にて空へ逃れる。

(無理だ、勝てない。けど時間を稼ぐだけなら出来る……こうして空

に出来ないところを見ると流石に飛行能力は無いはず、ならこの距離から——つて!?)

位置さえ間違えなければと考えたところだった。

黒狼は木々を蹴りながら三角飛びの要領でイビルアイへと肉薄し。

「ぐ——あ」

腕に噛みつきその身体を地面に叩きつけた。

「あ、あぐ……だが空中ならっ!! ベネトレイトマジック 魔法抵抗突破・クリスタル・ダガー 水晶の短剣!!」

「——」

身体を横たえたまま発動した魔法。

しかし黒狼はまるで意に介さない様子のまま、再び何事も無かったかのようにイビルアイの魔法はかき消される。

(抵抗突破も!? いやいよ打つ手が無いぞ……だが)

わかっていたことだ、勝つ手段は無かったことなんて。

故に模索するべきは蒼の薔薇全員が無事に生きて帰ること。

(わざわざ木をバネにして空へ来たってことは、飛行能力が無いってことは確定、だろう。転移は出来ない、なら空で逃げる……そろそろ他の皆は逃げられたか? わからない、けどそう信じるしか無い)

魔力にはまだ余裕はある、しかしこのまま戦い続けてしまえば仲間を回収して帰還することは出来なくなってしまう。

仮面の下、イビルアイの顔は歪む。この戦闘から離脱する方法はある、あくまでも可能性として出来るかも知れない程度だが。

だがこの魔獣から逃げて、魔獣が他の仲間の下に辿り着く前に自分が到着できるのかまでを考えればほぼ絶望的以下の可能性であり賭けにならない。

「やるしかない!」

そう、最早イビルアイにはそれしか手段が残されていないかった。否、考えつかなかった。

未だに頭は混乱しているし、状況も理解できていない。

もっと冷静になれていれば、別の何かを思いついていたのかも知れないが、一度思いついた考えを検討している時間もなかった。

「こい化け物! 我が名はイビルアイ! 貴様を殺すものだ!」

「――」
一瞬黒狼が笑った気がした。

そしてその身体をかき消し――。

「サンドフィールド オール砂の領域・全域!!」

「っ!」

それは黒狼が初めて見る魔法だった。

イビルアイのオリジナル魔法であり、一見ではどのような効果があるものか判断がつかない。

術者を中心にして広範囲に砂嵐が発生したことから恐らく行動阻害の魔法であるとはわかるが――。

(まあ、頃合いか)

一つ頷いて黒狼はイビルアイを見失った振りをする。

「飛行っ!!」

その姿を見てイビルアイは空へと逃げる。

「この勝負、預けておくぞー!」

殺すものとして名乗った割に良い逃げっぷりだと感心しながら、その姿をロコモコは見送った。

戦闘終了

「おおおおお!!」

「つぐ……面倒くさいったらねえなあ!!」

ゼロとガガーランの実力は並んでいた。

同じ前衛として噛み合っている事もあり戦いは激しい。

ガガーランが自由自在に操る鉄^大砕^槌きはまともにゼロを捉えられないものの、その衝撃の余波でゼロへとダメージを着実に与えていたし、ゼロの拳とて何度もガガーランの身体を捉えている。

二人の戦いによって周りの木々はなぎ倒され、一目すれば森の中にバトルフィールド戦場でも作り上げたのかと思うほど。

「ちいつ!!」

「は……やっぱてめえは強い、強いが怖くねえ」

鎧を殴られたガガーランはその勢いを利用し後ろへ大きく距離を取りにらみ合いの形へ。

戦いはゼロが優勢だった。

ロコモコより貸し与えられたガントレットには幻視の効果が付与されており、確率で自分の攻撃に実体の無い攻撃が自動で発生するというもの。

ガガーランはゼロの攻撃を防御しても不意に現れる攻撃の気配へ面白いように踊らされていた。

だがゼロは一つの確信をここまで戦い得る。

「俺はお前には負けん」

「ああ、悔しいがてめえに勝てる気はしねえな」

実力を測るのであれば自分のほうが少しだけ低いだろうと目付けた、そしてその感覚は正しく借りられた装備がなければもつと苦しい戦いとなっていただろう。

実際ガントレットがあるからこそある程度の余裕を持って、生まれたいワンチャンスを活かすことが出来ているのだ、これがなければチャンス自体が発生しなかった。

それでも。装備がなくてもこいつには負けない。

それがゼロの得た確信。

「お前は正しく相手を恐れているんだろう、それはかつての俺には無かった感覚であり経験だ」

「は、褒めてんのか？ どうせならもつといい言葉を使えや」

ゼロが言うように、ガガーランは正しくゼロを恐怖している。

常に危ないへと感覚を研ぎ澄ませ、致命的に至らないよう工夫を凝らし、ゼロから逃げようとしている。

それはまさしく一流の冒険者である証明。

かつてのゼロは己こそ最強だと信じて疑わず、いつだって相手を叩き伏せてきたが故に、そんな危機管理をしてこなかった。

だが今は違う。

「お前は、怖くない」

「うるっ——せえ!!」

真に恐れるべきモノを知ったのだ。

己の拳が砕けるどころか何一つ意味のないものになることを知ったのだ。

ゼロは正しく恐れるべきものを恐れることを知ったのだ。

「ああ、わかった。あの方が言っていた意味がよおくわかった」

「これでもくら——!?!」

——あんなのは冒険者じゃねえよ。

ガガーランの大ぶりを潜り、ゼロは静かに憑依スキルを発動する。

「ぐはっ——」

「俺の、勝ちだな」

潜り込み、上体を起こすと共に放たれたアツパー。

その威力に逆らえずガガーランは大きく吹き飛び、ゼロの視界から消える。

「……もつと、強くなりてえ」

勝ち得なかったものに勝てた。

それはゼロ初めての冒険が実を結んだ結果。

求めていた強さの質、ようやくその輝きに触れられた気がしたゼロは静かに涙を流した。

「はあっ……はあっ……！」

「鬼ごっこはお終いでしょうか？」

簡単に単純な話だった。

自分の攻撃が何一つ通らない、それはつまり対抗する手段が無いという事。

フロートイング・ソーズ
浮遊する剣群は捉えられないどころか全てをはたき落とされ、あまつさえ何本かを指で止められる。

クロック・オブ・ラットスピード
ネズミの速さの外套で向上させた敏捷性を容易く上回られ、自分の背後でため息すらつかれた。

残る手段である魔剣キリネイラムの力を発動させようとしてみれば気取られ殴られる。

観客がいてもいなくても、自分を含めた誰にでもわかる詰みだった。

「まだ、よっ！ 射しゅ——」

「申し訳ありません。それはもう飽きてしまいました」

「ぐうっ!!」

浮遊する剣群を射出し距離を取ろうとするが、何度目だろうこうして再び殴り飛ばされ地面を舐める。

自身の無力へ涙が出そうになる。

どうやっても勝てないだろうこの相手には。何がアダマントタイトか、何が英雄級か。

自分の強さを驕った事はない。無いが、仲間達と共に多くのことを成し遂げられると思っていた。

今回の事もそうだ、八本指のことは抜きにしても、助けたいと思っただのだ人の命を。

腐敗した王国の中で、力なき人を守りたいと思ったのだ、認められなかったのだ欲望に潰されていく無辜のものを。

「ま、だ……まだ」

「立ちますか、ならばもう少しだけ」

立ち上がれば殴り飛ばされる。

どうして倒れ伏せている間に止めを刺されないのか等もう考えられない。痛みすらもう感じない。

ラキユースはここで折れてはもう二度と綺麗事を口にできないとわかっていた。

綺麗事。そう、綺麗事だノブレス・オブリージュは義務を強制するなんてものは。

力を行使する自分に酔うための文句でしかないのだ、少なくともラキユースが知るその言葉の意味は。

だからこそ綺麗事だとわかっている。綺麗で居たいと思ったのだ泥にまみれようとも。

「あ……ぐ……」

「……ほう」

思い出すのは焰。

ライラの畑を焼き払ったあの時の炎。

自身の何かと決別したはずの時のこと。

「なん、で」

「……」

手は震えている、足ももう力が入らない。

それでもまだ、口は動き、言葉を紡ぐことが出来る。

「それほど力があって、八本指、なんかに、力を、貸しているの？」

ラキユースの言葉は的を射ていない。

ユリからすれば何言ってるんだこいつはとしか思いようがない。

「守れる、はず、よ。八本指からも、国の汚いものから、も」

ただラキユースの瞳を綺麗だと思った。

弱く脆く、簡単に消し飛ばしてしまえそうな存在だと理解している。

しかし、この輝きだけは、殺しても消せはしないのだろうとも理解した。

故に。

「我が意は全て御方のために」

「……はは、悔しいなあ。そいつに、嫉妬しちゃうわ……殺したい位」
ラキユース最後に紡いだ言葉で反射的にユリの拳がラキユースの

腹部へめり込む。

そしてその身体は静かに大地へ沈んだ。

「……その言葉は不敬ですよ」

言いながらまだ息があるかを確かめ安堵する。

薄汚く下等であつても、高貴であることは出来る。

「顛末をどうかお見届け下さい。あなたならそれで理解出来るはず」

ユリは初めて、人間に期待することを覚えた。

「ルプー……やりすぎ」

「つすよねえ……」

辛うじて息はあるだろうか二人の目の前に転がっている双子。

足にはシズが放った銃弾による負傷、上半身にはルプスレギナの持つ杖によるものだろう殴打痕。

戦いは当たり前に一方的だった。

忍者であるだろうことから警戒をと言われていただけに、侮らない一撃が致命傷ギリギリになってしまった結果である。

「でも……当然よね」

「ルプー？」

最近、ルプスレギナの人間嫌いは加速している。

王都でのメイド達、ゼロの最愛の主人に対する態度。

全てがルプスレギナの癪に触ったし、我慢するのに多大な労力を要した。

今回の作戦であつても、ロコモコが殺すなど言わなければ一人で全員狩り殺していただろうほどに。

「どうする？ 回復、する？」

「必要ないつすよ。したくないつすし、実力伯仲であれば殺してもいいんす。だつたら後はこいつらの運つすよ」

冷たく吐き捨てるルプスレギナにシズの眉根があがる。

シズは愛という感情をよく理解していない。

しかし、今のルプスレギナを見るとロコモコはどう思うだろうかと考える。

人間を簡単に見捨てることに悲しむのではない、ただ直感でしかないがルプスレギナを見てロコモコは微笑まないだろうと思った。

「ルプー。回復、する」

「なんすかシズちゃん、随分と——」

「ロコモコ様に……迷惑、かかる」

苛立ったようなルプスレギナの表情はロコモコの名前で簡単に凍りつく。

「どういう、意味っすか？」

「わからない。けど、今のルプーを、ロコモコ様に会わせたくないと思っただ」

要領を得ないシズの言葉ではあるが、ルプスレギナも考える。

果たして、今の自分を褒めて頂けるだろうか？

褒められる、だろうよくやったと。

作戦概要上は何もミスをしていない、条件があるにせよ殺しても良いということはそれほど重要な存在ではないということだとルプスレギナは思っている。

実際、ここでこの双子が死んでも大局は左右されないだろう。

ロコモコを含めて知らないことではあるが、ラキユースの蘇生魔法によって死体さえ回収できるのであれば復活も出来るのだ、問題は無い。

ただ、何故か。

「……回復するっす」

「うん。それが、いい」

褒めてもらえる。けど、抱きしめてもらえないとルプスレギナは思った。

自慢のメイドだと、言ってくれないと思ったのだ。不思議とそのとおりになるだろうと淡く確信すらあった。

「難しい、っすねー……」

「うん、難しい」

何故の部分はわからない。

言い止めたシズですら、感覚的なものが強すぎて言語化出来ない。

だからぼんやりと。

自分に笑顔が戻ってくるまで、ロコモコの顔を思い浮かべた。

「助かったぜ、イビルアイ」

「いや……言葉が違う。私達は生かされたんだ」

拠点の宿、ダメージが大きいラキュースとティア、ティナをベッドに寝かせた後、ガガーランとイビルアイは部屋のイスへと腰掛ける。

「生かされた、か。認めたくねえが……そうなんだろうな」

イビルアイの救援は間に合った。

間に合ったがどうして間に合ったのか理解できないのだ、いつでもトドメをさせるだろうにも関わらずこうして全員生きている理由はそれしか思い浮かばない。

「嵌められた……少し違うな、最初からカルネ村にはこれほどの力があるってことを教え付けられたんだ」

「ってことは……王女様もグル、か？」

「流石にそれは違うだろう。わかっていたのなら最初から国の軍を動かしていただろうさ。出来るできないは別にしてな」

尤も軍があつた黒狼をどうにか出来るとは思わないがと続けてイビルアイは黙る。

言っておきながらなんとも気味の悪い感触があるのだ、もしかしたら自分たちは生贄扱いをされたのかもしれないと。

「まだ勝負出来る、か。ちくしょう……」

ゼロに言われた言葉。

ガガーランは確かに勝負をした、そして敗北した。

だが他のものは違つたとすぐに分かつた、これはただの蹂躪、いや遊ばれただけだと。

「何にしてもカルネ村が戦力を有しているのは間違いない、八本指が絡んでいることもな。全くの通りすがりが私達を遊びで半殺しにしたなんて考えるほうが不自然だ」

「ちげえねえ。だが、どうすんだ？ 報告して軍が動いたとしても、お前さんが言う通りアレをどうにか出来るなんて思えねえぞ」

「八本指だけならまだマシ……なんて言うことになるとは思っていなかったが。あの黒狼はどう見繕っても最低難度200はある。もつと言えばそれほど魔獣を従える強者が存在しているということだ。そこまで考えれば、一番賢いのは触らぬ神に祟りなしとしか言いようがない」

手詰まりだった。率直に言ってしまうえば、カルネ村がどういう手段を取るかは未知数だが少なくとも独立することは止められない。

どうしても止めるというのならば多くの血が必要になるだろう、十分な血を用意しても止められる確証は無いが。

「まあ俺達の仕事は報告することまでだが」

「後はラクユースの判断に任せる……が、ある程度準備する必要はあるだろうな。政治に介入しないって冒険者のルールはうちにあまり関係がないわけだし」

ちらりと眠っているラクユースへと仮面越しに視線を送るイビルアイ。

どう判断するだろうか？ 何の力にもなれないとは今回で理解できただろう、それでも介入すると決めるのは自殺しに行くようなものだ。流石にそんな決断はしないはず。

とは言え国がどう動くかイビルアイには見えないが、何かしらの決定はされるはずで。

「見届けたい、つてくらいは言うかもな」

「ああ」

ラクユースの想いは兎も角も。

今王国は大きく動くことになる、変化がどの様な未来を描くだろうか。

その始まりは、目にしておきたいだろう。

「……最悪、別の国へ避難することも考えるか」

「おいおい流石にそりや……なんて、言えねえ、か」

ガガーランもラクユースへ目を向けて、大きく大きく息を吐いた。

ある詰ませ方

ロコモコ達が蒼の薔薇との戦闘準備を進めていた頃、ソリュシャンは高揚感を持って網の管理を行っていた。

一時的かつ一部限定されていることがあるとはいえ、ほぼ全権を任せられたのだ彼女にしてみれば功績をあげる絶好の機会に違いはない。

「……とはいえ、どうするべきか。それが問題ですわね」

まず現状維持に務めるか、何か変化を招くだろう一手を打つか。

前者の考えはソリュシャンに無い、ここでより良い成果を手に入れロコモコの右腕に足ることを証明してみせるといふ気概故に。

ナザリックの皆よりも先にロコモコの教えへと触れているからこそ余計にとも言えた。

自分の仕事ぶりが目覚ましいものであればあるほどロコモコの教え、その価値が高まると理解していたから。

自身の功名心といえはやや俗になってしまいがそういったものも含めて今こそが切所と認識していた。

「プレアデスの皆は……難しいですわね、それぞれの仕事がありますし」

協力を得られる存在は少ない。

ロコモコがプレアデスの一部と連携しているし、それ以外の者も己の仕事以外に割ける余力は無いだろう。

だが同時に自分ひとりの手には余ることもはつきり自覚していた。

一人でできることは限られている、それこそ巡回の頻度を高める位しか出来ることがない、トブの大森林周囲に侵入者を感知するアイテムは設置済みだ。巡回と言っても都市や村、集落に近づくことは作戦を台無しにしてしまう可能性がある以上厳しい。

要するに実務的、あるいは新たな視点と言う意味の知恵でも良いが協力を得る必要がある。

その発想に行き着くことこそがロコモコの教えの成果とも言えるがソリュシャンはそれにまだ自覚してはいない。

「アウラ様は……ダメね、アインズ様とトブの大森林に行くと話されていましたし」

東の巨人、西の魔蛇へアクションをかける。

その邪魔は出来ないと言った考えを消す。

ならばと考えるのは。

「マール様、ね」

浮かんだ考えに大きく頷く。

協力を得られれば実務的な部分、地形操作等で大きな助力となつてもらえるだろう。まして現在ロコモコの創造NPCアサイーもついている、何か知恵といった部分でも力を得られるかもしれない。

「お話しすれば……協力頂けるでしょう、なら」

元々諜報部隊を補佐する位置にアウラとマールはいる、求めれば協力は得られるだろう。

そして戻ってくるかどうかの部分。

あくまでも求めるのは協力なのだ、丸投げではない。

こうしたいと思ってるからこれを手伝ってほしい。

ロコモコから教わった内容の一つであり、基本とも言われた教え。

それが明確さだった。

それぞれの役割を明確に、質問内容を明確に、実行内容を明確に。

言い換えれば迷いなく注力出来る環境を設定すること。

今の自分に置き換えてみればその明確さからかけ離れた位置にいるとは思わなかった。

「それこそが指示するものの立ち位置」

そう、これこそが誰かに命を与えるものの役割だと気づいた。

同時にロコモコやアインズがどれほど難しいことを常々行っているかにも触れて敬愛心を高めてしまおうが、今すべきことでは無いと心を鎮める。

改めて考えれば王国も帝国もそれぞれトブの大森林を管理するとは名ばかりで、ほぼ放置に近い状態だった。

確かに先に行われたコキュートス、もといアンデッドと蜥蜴人の模倣戦は何処かに情報として流れているだろう、しかし少しの時が経過

したにも関わらず何のアクションも見られていない。

あれ以降トブの大森林へと入ってきた人間はそれこそ林業というか、木材を求めてやってくる者や森の恵みを得に来た者程度。

つまり、仮説ではあるが模擬戦は調査に値しない出来事である可能性がある。あるいは、人間達の警戒に値しないといった所。

「……やはり頭が足りていない」

そこまで考えれば小事だと放置したことに食い殺される人間へ哀れみすら感じてしまうが、浅慮だと自分を諫める。

警戒は高いレベルで設定するものだ。やりすぎは良くないが質は高い位置で保てるなら保つべき。

つまり、調査を放置しているのではなく念入りに調査部隊を選定していると捉えるべき。情報の流れるスピードだつてナザリックより遥かに劣っているだろうことも考えればこれが外における普通の流れなのだ。

「ならばそれ相応の調査部隊が組織されていると考えて」

行き着いたのはより高度な捕獲態勢を整えるべきという発想。

そうしてソリュシヤンの背中に冷たい汗が流れた。

もしここまで考えきれていなければ、自分一人でそれなりの相手を全て確保しなければならなかったと。

ソリュシヤン一人であつても全員捕獲は出来るかもしれない。

しかし、出来ない可能性が生まれることを看破できない。

「……よし」

考えはまとまつたと、ソリュシヤンは椅子から立ち上がり、マールを探しに歩みを進めた。

時同じくして。

「ビーストマン達ノ動向ハ？」

「はい、まもなく竜王国に向けて出立かと」

コキュートスの隣に立つザリユース・シヤシヤが答える。

「エントマ、デミウルゴスヨリ連絡ハ？」

「まだありませんー。ですがあ、到着したとの連絡は先程お。今は交

渉の最中か」と

もう片隣に控えていたアントマもまたコキュートスへと答える。

目立たないよう竜王国の動向、ビーストマン達の動向を観察できる中間位置に陣を立て、様子を伺うコキュートス率いる多種連合軍。

一時的にコキュートスの副官としてザリユースが、現場を纏めるはハムスケ。

いつでも、ぶつかることが出来る。

それはどちらに向けても。

デミウルゴスが交渉折衝をしているのだ、コキュートスに失敗という言葉は浮かんでいない。

しかし備えることの重要さは身を持って知っている。

万が一交渉が失敗し、ドラウデIRON・オーリウクルスがナザリツクの提案を蹴るのであれば……槍は竜王国へと向けられるだろうビーストマンと共に。

「ザリユース」

「はっ」

「怖クハナイカ？」

そんな中不意にザリユースへ向けられたコキュートスの言葉。

思わず目を丸くし沈黙してしまうザリユースだったが、やがてすぐに一笑し。

「あのアンデッド軍団に比べれば」

「ソウカ」

ザリユースの返答は他の蜥蜴人全員の総意でもあるだろう。

観察しているビーストマンは単なる蹂躪者であり略奪者、欲に突き動かされた集団であり軍なんてとも言えない。

数の上で負けていてなお勝利はナザリツクにあると確信していた。

「ソレハ——」

「俺たちだけでも十分って意味で、です」

先回りした言葉にコキュートスは心地よさげに息を吐く。

強くなった。

ハムスケ含めてだが、コキュートスの配下となった戦士たちは強く

なった。

レベルで換算してしまえばまだまだナザリックの者と言うに不足はあるものの、コキュートスが胸を張って自分の部下だと言える程に。

ナザリックの支援。

装備や物資というものが彼らの力を高めた要因の一つに違いはないが、何より彼らはそれに驕らなかつた。それも当然だ、仮に最高級の装備を与えられたとて守護者達はもちろんプレアデスにすら及ばない自分たちなのだから。

それでも今の彼らは、間違いなくこの世界における最高クラスの戦士たちだ。個の力ではなくある程度の規模、群であり軍として。

コキュートス自身、ビーストマンとの戦いで力を振るうことは考えていなかった。

蜥蜴人達の仕上がりを確認するといった意味もあるが、何より彼らで十分だという確信も淡くある。

無論後詰めや万が一に備えてもいるが、それでもである。

「オマエ達ハ、マダマダ強クナル。コンナトコロデ消耗スルナ？」

「ははっ、もちろんです。ありがとうございます」

強くなった、そしてまだまだこれからも強くなる。

才能と呼ばれるものは確かにあるだろう、限界という天井だってあるのかもしれない。

しかし、コキュートスは思う。

「ソノ輝キ、コレカラ尚輝カセロ」

「畏まりました」

命の輝き、それは強さに左右されるものではないと。

「——コキュートス様。交渉完了、ビーストマンを殲滅してくれとのことですよ」

「承ツタ——聞ケツ！ 戦士タチヨ!!」

コキュートスの声に全員が立ち上がる。

「コレヨリビーストマン達ヲ殲滅スル！ 奴ラハ欲ニ塗レ輝キ放テナクナツタ屑石ツ！ 輝キ誇ル我ラノ敵デハナイ！ 一気呵成ニ攻メ

込ミ光デ埋メ尽クシ、ナザリックガ威ヲ示セ!!」

「おおおおおおおおおつ!!」

「全軍ッ! 突撃ッ!!」

「負けた、な。いや、これを勝利と言うべきか」

「……陛下」

デミウルゴスが置いていった遠視アイテムを覗きながら、力なく言ったのは女王。

「この程度であれば、国力が回復すれば再起を——」

「出来ないとわかっていているだろう? 確かにあの蜥蜴人達であればなんとかなるかもしれない。だが、ナザリックとか言う奴らはそれを待ってもいる、なんて」

敢えて少数でビーストマン達を殲滅する理由。

宰相が言うように、あの程度の戦力であれば国力回復後に戦いを挑み勝つことは出来るかもしれない。

しかし、そうしてしまえば今度は大手を振って竜王国を攻めてくるだろう。待っていましたと。

そして突きつけられるのだ、良くて表立った隷属を、悪くてあつけない滅亡という選択肢を。

実に鮮やかな手並みであった。

デミウルゴスは熟知と言って良いだろう、人……あるいは王の逃れ方と詰ませ方を容易く示してきた。

威力的でもなく策略的にでもなく、ただただ救われたければ死ねと伝えてきた。

「今日が、竜王国の滅んだ日……ですか」

「うむ。国としてはこれ以上無い詰みであり敗北だ。これからは単なる玩具でしかないだろう、だが」

戦いが起こっているだろう方角へと目を移す女王。

その姿を宰相は涙越しに眺める。

「玩具になるのは私達だけで十分だ。民は……どうか健やかに」

「……はい」

手にとつたのは救いなんかでは無いことを正しく理解していた。

いや、あるいは救いにつながるかもしれない腕だろう言つたように、自分たちが有用な玩具であるうちは。

「それが最後の仕事。ふふ、喜べ、少女の姿が役に立つぞ？　もしかしたらこんな童を玩具にするなんてと熱り立つ特殊性癖者が現れるかもしれない」

「まったく……ならばこれからはもっと幼女らしい振る舞いに磨きをかけてもらいませんと。性格最悪幼女なんて誰も美味しいと思わないですから」

「何、需要はある。そう、これからの未来を願って酒を嗜むなんて如何にもで良いだろう？」

遠くに響く戦の音にかぶせるよう。

ドラウディロン・オーリウクルスは静かにグラスを鳴らした。

作戦の間

蒼の薔薇との戦いは終わり。

ルプスとユリはそのまま二人でカルネ村へ、シズを転移でナザリックへ送った後。今はゼロと王都に着いた所。

「さてゼロ。お前は仕方なかったとはいえ顔が割れてしまった、王都で働くにしてもやりづらくなってしまうだろう、すまないな」

「と、とんでもありません。むしろあんな場を用意してもらってありがたかったです」

厳ついヤツがこう、両手をパタパタと慌てる様子を見せても可愛くないんだが？

まあそれは良い、道中で少し話もしたけどゼロが言うように……何ていうんだろうな、やりがいとでも言うんだろうか、久しぶりに暴れられて多少はスッキリ出来たみたいだ。

深読みするならこれで用済み扱いされることを警戒してるのだろうか？

確かに使い捨て扱いしてもいいが、今回ゼロが居てよかったと思える点は少なくない。

敵戦力に目処を立てるって部分にしてもそうだし、単純な人手としても申し分ないとまでは言えないがそれは磨けばいいだけの話。

外でナザリックのために働ける人材は少ないんだ、もったいないお化けに取り憑かれるのも嫌だし多少ゼロの扱いは変えなければならぬな。

「蒼の薔薇は王都が活動拠点なんだ、面が割れた以上今までの活動をこれまで通りにさせるわけにはな。そこで、だ」

「は、はい」

いやそんな警戒しなくても。

自業自得とはいえここまで怯えられるってのもなあ。

「あの屋敷を覚えているな？ あそこはお前らがかつて睨んだ通りナザリックのいわば王都で活動するための拠点だ。ゼロには今後あそこに駐留してもらう」

「ええと、それは構わねえですが……あつと、申し訳ありません。言葉遣い——」

「構わない。それに理由を聞くこともいいさ、お前はメイドじゃないからな。あの時はむしろ悪かったよ、ちゃんと後で言っておくからあまり気にしないでくれ」

ルプスの立場からするとやっぱ俺を軽んじられるのはたまらなく嫌だつてのは理解できる。

最近人間嫌いを加速させてもいるし、気持ちの上では今回肩を並べたことを我慢できただけ十分とも言える。

うん？ つていうか大口開けてどうしたよ。

「何だ？」

「い、いえっ！ その……し、失礼になるのかもしれないねえですが、思っていたロコモコ様よりも、こう、随分と……」

あ……なるほど？ 人が良さそうとでも言いたいのかな？

そりやまあ勘違いってやつだ。正直特別何か感情を向けているわけじゃない。

「自分の部下へ恣意的とでも言うか、意味もなく怯えさせる趣味はない。お前がそれなりに働けるヤツだとわかった以上、それが崩れない限り簡単に切り捨てることもしない」

「――」

安心したか？ それとも気を引き締められたか？

まあそれはどっちでも良い。使える、もしくは使えるようになるかもしれない存在を振る舞いごときで潰すのはバカだ。

むしろ屋敷に囲うつてのは逆に言えばいつでも処分を容易に出来るって意味には気づいているのかね？ ともあれ今後次第ではあるか。

そう、単純、単純な話だ。

人の扱い方を教えている俺が、まだ一番上手く使える存在でいなければならぬがためっただけだよ。

「話を戻すぞ？ 何にせよお前は王都での裏活動からはお役御免だ。今後は自分の腕を磨きつつ、今回のような使い方をメインに考えるよ

うにする。他の八本指の奴らに引き継ぎの準備をしておけ、機会は作る。またお前が居なくなつたことで生じる不都合も挙げるように」

「畏まりました」

「屋敷には知っているかもしれないが一人の執事がいる。やつもまた凄腕だ、俺から声をかけておくから稽古をつけてもらえ」

「はい！」

おっと、良いお返事なこと。

そういや一人門番見習いを雇つたみたいだし、二人で切磋琢磨してもらいましようかね。

んで、だ。

「よろしく、お願いします！」

「……おう」

どうしてこうなった？

「ロコモコ様、お疲れの所申し訳ありません。ですがやはり実際に直接と」

「いや、いいよセバス。お前の頼みだ、むしろ喜んでと言っておく」

「ありがとうございます」

とは言うものの、うーん。

「門番、用心棒……ええと？」

「ブレイン・アングラウス。です」

生睡を飲む音が二つロビーに響く。目の前で腰だめに、鞘へ刀を収めたまま中々の気迫を向けてくれるブレインと、様子を見守るゼロのもの。っていうかゼロ、そのポジションなんか鬱陶しいぞ、お前は戦いの行く末を見守るヒロインか。

屋敷に着いた俺とゼロだったけど、出迎えてくれたセバスから頼みが一つとお話がありました。

雇つた人間の仕上がりを確認してほしいってことでこうなっている。

王都にいる人間を雇えと指示したのは俺とモモンガさんのものだ。

出来るだけ屋敷の存在を王都に溶け込ませて意図だけど、まあ平

たく言えば実験。

セバスを思えば成長の一つだろう、こうして最終決定というかある種の相談をしてくれるようになったのは。実に素晴らしいといえはそうだ。

だからこそ却下せずに受け入れたわけだけど。

「ゼロ」

「あ、はい。御前試合であのガゼフといい勝負を繰り広げた剣士です。結果負けはしましたが、強いですよ」

なるほど、つてことは先の蒼の薔薇と同等かそれ以上の力量はあるか。

丁度良かったといえはそうかもな、話を聞く限りイビルアイが抜きん出て強すぎた感があるみたいだし。

とはいえ。

「……っ！」

何をそんなに怯えているやら。

呼吸はまだ始まったでもないのに荒いし、身体は少し震えてすらいる。

強者に対する怯えて話ならセバスに稽古をつけてもらっていただろうに、ましてやこいつが選ばれた理由はセバスの殺気に耐えられたからと聞いている。これじゃあその話を疑ってしまうぞ？

それともあれか？ 俺が今素の自分にいるからか？

セバスの上役が人間じゃないってことに怯えているとか？

ありえない話じゃねえか。

まだ人間に近い姿ではあるんだけどな、他のギルメンに比べたら。

「ブレイン」

「はい」

でも肝は座っているな。

ちゃんと俺の目を見返してくるし、なら武者震いのセンか。ただ。

「何を乗り越えたいんだ？」

「っ！」

どうにも俺を見て、相手をすると決まってるから。
俺を見ていない。

「失礼だ云々は気にしないで良い。だが、今お前の相手は俺だぞ？」
「申し訳な……ありません。ですが、どうか、ご容赦頂きたい。貴方からは、俺が超えなければならぬモノと同じ匂いがするのです」
強い目だ。

セバスへと視線を向けてみれば、頭を下げられてしまった。

一度何かを失敗したんだろうなこいつは、もしくは壁にでもぶち当たったか。自分で言ってるようにそれを克服するために俺を利用しようとしているわけだ。

なんというか人間って、本当に面倒くさいと改めて思う。

クライムにしても、こいつにしても。

何から何まで背負わなくていいだろうことを大事に大事に背負い込む。

かつての自分を思い出さなくもない。

ギルメンを守る為に一部人物の情報を工作してみたりしていた頃はあつたんだし。

「あまり派手にしても片付けが面倒だ、メイド達の仕事を増やしてしまうのもな。だからこうしようブレイン」

「……」

メイドの言葉を出せば周りを囲んでいたメイドが肩を震わせる。動じなかったのはツアレだけだ。

まあ、この調子で頑張ってくれ。せめてルプスがブチギレない程度を目標に。

「一撃。ありつただけの全力で来い」

「——はいっ！」

ブレインの震えが止まる、集中力が高まっていくのがわかる。

やれやれ、本当に。

スポ根なんてとつくに廃れたジャンルのハズなのにな。熱血なんて時代遅れも甚だしい。

だが。

「悪くない」

あのリアルでは持ち合わせてなく、ロコモコとなった俺からは消え去ってしまった概念。

ただどころして誰かを通して感じられるのなら、本当に悪くない。人間という種を、取るに足らないと決めつけなくて済む程度には。

「――領域」

「……」

雰囲気が変わった。

ブレインの口から細く鋭く息が吐かれる。

それでも動かないのは……カウンター？ 露骨な待ちの姿勢だ。

だが気を抜けばすぐさま飛び込んでこられるような気配が伺える。

台無しなことを言えば、何をされたとて痛くも痒くもないんだろうけど。

「まあ、いいか」

悪くないと思ったんだ。

熱に浮かされる程度にはまだ人間性が俺にも残っているみたいで。実に滑稽だとは思うけれど、今この時だけは甘んじておこう。

一歩近づく――ブレインの腰が僅かに沈んだ。

もう一歩――柄が握られた。

そして、その距離およそ3メートル。

「――っ!!」

鋭いのだろう斬撃が放たれてきた。

終了の合図は無い。

ただ、俺の髪の毛一本が床に落ちた。

「じゃあ、合格ってことで。セバスもいいな？」

「もちろんでございます。お手を煩わせてしまい、誠に申し訳ありませんでした。そしてありがとうございます」

「え、あ……？」

まあ、残念と思わなくもない。

彼の剣は俺の斬撃耐性を突破できなかった。手応えでそれはブレインも理解しているだろう。

「な、なんで」

「合格の理由か？ それなら話は簡単だ。受けてみたいと思ったんだよ今の技をもう一度。ここで強くなれ、それでまた自信がついたらセバスに伝えろ。オツケーが出たらまた相手してやる。ゼロ」

「は、はい」

「お前の当面の過ごし方はこいつと一緒に腕を磨け、共に切磋琢磨しろ。ツアレ、この片付けを頼む。セバスは今後のことについて話があるからきてくれ」

「畏まりました」

本当に悪くない。

王国は腐っているにも程があるが、どうやら王国王都、この屋敷には俺が失った人間性が残っている。

泡沫の夢と消えていくかもしれない場所だが、それでも享受できるうちは存分に。

口元がニヤけるのを必死で我慢しながら、セバスを連れて応接室へと足を運んだ。

「ロコモコ様、改めてありがとうございます。これで彼も間接的にではございますが、ナザリックへと忠誠を誓うでしょう」

「うん？ ……ああ、いや。ブレイン、だったか？ あいつはそういう奴じゃないと思うぞ」

一息、ではないけれど。教科書が出来上がった以上この屋敷は王国がどうにかなるまでの間、その役目を変える。

今まではセバスが人間のポジティブな意味での利用方法を検討するための実験場という意味合いが強かったが、これからはゼロにも言ったようにナザリック諜報部隊王都支部的な扱いへ移行する。そういう部分の打ち合わせる為にセバスへ会いに来たわけだし。

もちろんモモンガさんに許可は貰ってるしぬかりはない。

王都の動向や扱いが決定するまではセバスをここに駐留させるこ

ともなっている。

「……申し訳ありません。幾つか質問を許して頂けますか？」

「構わないぞ」

「ではなぜ彼を合格と？ 不合格として放逐してしまった方が機密性の維持は容易かと思われませんが」

ふむ。処分と言わず放逐なんて言うあたりが実にセバスらしい。

「実験の意味合いが強いな。相手をしてみて思ったが、ブレインはゼロよりも強い。共に競わせることでゼロはブレインの実力を超えられるのかを確かめたいんだ」

正直に言えば確実にブレインの方が強いとは言えないかもだが。俺にしてもセバスにしてもその差がはつきり掴める程ではないだろう。

なんとというか、モモンガさんの意見も絡めて考えてだけど。

この世界では言ってしまうえば個々にレベル上限が定められてる様に感じるんだよな。

才能限界というか、生まれた瞬間から天井が設定されているというか。

ただ、蜥蜴人の仕上がりを見るに、多くの存在が天井へはまだまだ行きついていないとも思う。

そういつた部分を確かめる為の実験だ。

「なる、ほど……では」

「忠誠を誓わないだろうってヤツか？ 勘の部分が強いけど、あいつは誰かの為に生きるタイプじゃない。自分の目的や目標にしか生きられないタイプだと思う」

リアルで働いてた時に培われた勘だからこっちでも活かせられるか微妙な所だけど。

「そうだな、言ってしまうえば支配。シャルティアなんかは無言を言わず隷属させることは可能だろう。だが、感情をコントロールして忠誠を植え付けたり、恩義に忠義を返してもらうってのはあいつに望めるもんじゃないと思う」

まさに面識がなかったとは言えセバスの上役という存在である俺

を利用してきたように。

あいつの中で最大優先事項は自分の想いなんだと思う。

「ロコモコ様のお考え、理解できました。では彼はナザリツクへいずれ敵対する可能性がある」と認識して接するよう致します」

「あいつ一人が敵対した所でどうにもならんだろうがな、根拠も俺の勘でしかないから別の可能性に繋がるかもしれん。だがまあ当面はゼロを育てる為にうまく使ってくれ、言うまでもないだろうがセバスや俺じゃあ効果的じゃないという意味で相手にならん。その過程で——おっと、すまん伝言だ」

セバスはこれから一つ上の難しい仕事に着手することになるだろうって話をする前に、断りを入れてから伝言を受けてみれば。

『ロコモコ様、網に獲物がかかりました』

「……まじか」

ソリユシャンからの驚きの伝言だった。

秀の証明

組織が成される。

これには当たり前だが順序がある。

目的があり、目的を達成するために適した人物や道具といったパワーを集わせる。

工程を言ってしまうえばそれだけではあるが、目的にたどり着くためのルートは多岐に渡りいずれかの道筋が達成へとつながれば良いと可能性を複数持つことが常道と言えるだろう。

ナザリツクで言うのならばアインズの目的。世界にアインズ・ウル・ゴウンの名を轟かせるものになるが。

現段階での最終目標が世界征服、そしてそのための第一歩として国作りに着手している最中だ。

ロコモコはその目標を達成するために情報戦という道を切り開き前にも後にもスムーズに運べるよう動いているし、デミウルゴスやセバスは国を成した後人間を上手く使えるように教科書作成に精を出した。

多角的、多面的にアプローチすること。

それは達成をより現実的という言葉に落とし込むための条件である。

その条件を前提に置くならば当然目的が多くなればなるほど必要な人員も増えるのは当たり前。

さて、ではここでトブの大森林の調査というものを考えてみよう。調査といえはややふんわりしているだろう、少なくとも帝国は調査という名前の中に複数の目的を設定した。

一つ、アンデッドと蜥蜴人が戦った後それぞれがどうなったかの確認。

一つ、アンデッドが発生した原因の確認と蜥蜴人の集団がなぜトブの大森林に居たのかの確認。

そして可能であるならばアンデッドの殲滅だ。

重要性で言えばアンデッドの殲滅が高いだろう、トブの大森林から

アンデッド達が近隣の村や集落を襲う可能性がある以上急務とすら言える。

「だって言うのに、なんで冒険者じゃなく請負人ワーカーに？」

「そりやもちろん後ろ暗い何かがあるからだろう」

トブの大森林調査団。

複数のワーカーチームが集い始めた仮拠点にてヘツケランはジト目を向けてくるイミーナに対して肩を竦める。

フォーサイト含めたワーカー達、全員が知らないことではあるが、アンデッドの名前がまづかった。

フルーダ・パラダイン。

彼はカルネ村を救った魔法詠唱者アインズに関しての調査を行ったが、痕跡をつかめず失敗している。

故に今回の騒動、可能性の濃い薄いとは別に何かしらのつながりを期待はしたいと思っていた。

唐突にアンデッドの集団が現れた理由にしてもそうだ、アインズにつながる情報はなくとも何かしらの魔法道具があるかもしれないし別の力を持つ人物が存在しているかもしれない。それを森を丸裸にしても情報を得たい、確認したいと。

結果。フォーサイト、ヘビーマツシャー、竜狩り、天武と善か悪かはさておき名高いチームに加えて無名であろうと多くのワーカーが集まった。

届けられたアンデッドの情報はさほど高い危険性を伺えなかったにも関わらず高い報奨金が設定されていたし、裏に何の思惑があるうとも見逃せない依頼となった。

つまり、多角的、多面的にという条件は達成されたのである。

「けど、近隣の村にアンデッドが現れたとかの話は聞いていない」

「ですなあ。本当にアンデッドと蜥蜴人が戦っていたのか疑ってしま
うほどです」

アルシエ、ロバーデイクも言葉を続ける。

フォーサイトは調査突入慎重論を唱えていた。

自身達と言うようにあまりにも静かすぎるトブの大森林に罠のよ

うな危険を嗅ぎ取っていたから。

「おいおい、だからと言ってこれ以上時間をかけても仕方ありませんよ。何だったらコイツらを実つ込ませて見ますか？」

「ヒツ」

天武のリーダー、エルヤー・ウズルスが後ろに控えていた一人のエルフの胸を乱暴につかみ自身へと引き寄せる。

その光景へイミーナは僅かに眉を顰めながら。

「無駄にせっかく集まった戦力を分散させても仕方ないでしょ。けどいつまでもこうしてるわけにはいかないってもわかるわ。ヘツケラン」

「ああ、トブの大森林帝国側……まずは集まった全員で一箇所から侵入。そして安全を確保しながら広がっていく形が一番手堅いか」

地図に目を落としたながらヘツケランが言う。

「トブの大森林そばへ拠点を作ってから昼間に調査し、日が落ちる前に戻る。そうしてまずは蜥蜴人とアンデッドが戦ったって場所を確認。その後蜥蜴人がまだいるかの確認とアンデッド発生の原因を調査」

「最後にアンデッドの殲滅、ね。その場合は夜に？」

「いや、蜥蜴人とアンデッドが戦っていたのは昼らしい。時間帯は関係ないだろう、なら徹底して明るいうちの調査が安全だ」

フォーサイトの面々が頷く。

少し面白くなさそうにエルヤーは顔を歪ませ、掴んだままの胸に力をいれ聞こえる苦悶の声へ苛立ちを鎮める。

「話はまとまっただろうか」

「そろそろ動かんと、先走るモンも出かねん」

集まって来た人物達へと打ち合わせを行うため、静かにヘツケランは苦笑いを浮かべながら頭をあげた。

「で、その結果がこれと」

「はい、いかが致しますか？」

ヘツケランが打ち立てた作戦に穴があったわけではない。

むしろ慎重性に富んだものであったし、大凡否定的な意見も生まれなかった。

そして全員で一つの場所から森に入り。

「網つつうか、一網打尽って言葉通りだな」

その瞬間をマーレの魔法にて捕らえられた。

ワーカー達が作った拠点から、やや呆れた様子を見せながらロコモコは、森の入口に突如として現れた岩のドームを眺める。

中には今回トブの大森林調査に集まったワーカーが囲い囚われていた。

既にドーム内に充満しているソリュシヤンお手製の麻痺毒により大地へと身を伏せているだろうワーカー達、そして拠点維持のために残ったワーカーは既にナザリック送り。

「あの、何か問題がありましたでしょうか？」

「あーいや……すまん、あんまりにもな大収穫でな、ちよつと驚いた。ソリュシヤン、実に素晴らしい手並みだ。お前に任せて良かったよ」

「もつたいなきお言葉！」

さつと頭を下げるソリュシヤンを苦笑いしながら褒めるロコモコ。

正直な所、多くの意味で想像以上だったのだ。

たかがこの森を調査するというだけでこれほどの人数が集められたことも。

そこまで見越し、マーレやアサイーへ助力を求めた上で備えこの結果を出したソリュシヤンにしても。

そして。

(どんだけ侮ってんだか、俺)

自分がどれほど甘い見積もりをしていたのかを。

「……ロコモコ、様？」

「いや。少しどころかかなり反省した。本当に助かった、ありがとうソリュシヤン」

何処と無く泣きそうのまま笑うロコモコ。

その表情の意味をソリュシヤンは理解できない。だが、その顔はと

でも澄んでいて。

ロコモコは心底己の慢心を呪ったのだ。

仮にソリュシャンと自分の役目が逆であったのなら、恐らくこうして全員生け捕りといった結果は出せなかっただろう、逃しこそしないかもしれないが確実に誰かを殺してはいた。

だからこそこの結果を出したソリュシャンに対して一種の尊敬といった感情を覚えている。

発展途上であったがため油断や慢心が無かっただけなのかもしれない、長くこうした仕事をしていればあるいは自分と同じようにミスの可能性を生んでいたかもしれない。

「お前が部下で、本当に良かった」

だが、それらはただの言い訳に過ぎない。

改めて、いずれ自分より遥かに優秀な存在となるだろうソリュシャンをととても大事に思い、大事に育て自分も見直そうと心に誓える。

「……改めて、ルプスレギナを羨ましく思います」

「ん？ なぜだ？」

ロコモコの言葉にソリュシャンは今までとは少しだけ違う何かで心を満たされた。

今の言葉は、紛れもなく自らの主人、その一人としての言葉ではないと理解できる。

そしてそんな言葉をルプスレギナは、誰よりも多く向けられているのだろうから。

「ありがとうございます。これからもより一層の忠勤を捧げたく思います」

「う、うん？ こちら、こそ？」

首をかしげるロコモコへ笑顔の一つ。

その笑顔は従者としてでも副官としてでもない、ただのソリュシャンとして浮かべられた笑顔だった。

この結果を受けて。

「なるほど。それは確かに大収穫ですね」

「ええ、ソリユシヤンがやってくれましたたよほんと」

先からソリユシヤンべた褒め状態のロコモコへ流石にそろそろ苦笑いが浮かんできたモモンガ。

悪い気もせず、止めることもしなかったがそろそろと声をかける。

「ともあれそうですね。ワーカー……それだけ捕まえられたのなら別の利用方法を考えて良いかもしれないですね」

「つと、すいませんっす。そう、むしろ考えなければならぬっす」

改めて今回の結果は予想以上の想定外だった。

功績という面では両手放しではあるものの、迅速に行動へ移さなければそれをよくないものに変えてしまいかねない。

そう、元々の予想であればここまで大規模に捕らえられることを想定していなかった。

多くて十人程度の捕獲。捕獲した人間から情報を得て、記憶を操作して放逐する。

そして得た情報からどうするかを考えるといった順序になるか。

「これだけの人数が一齐に消える、もしくは何かしらを変えてしまうと不自然がすぎる」

「はい、隠匿の方向性で進めるのは少し無理があるっすね。ですので今の所考えているのは二つ」

得た情報をどうするか段階ではない。

今の状況は少し巻き戻って捕らえた人間をどうするかという問題になっている。

「聞きましよう」

「まるつと攫うか、まるつと戻すかつすね」

最早規模を問わずの変化、変革は止められない。

一部の人間だけを帝国へ戻したり、ナザリックで困うなんてしてしまえばそれこそ不自然に繋がるし、綻びが広がってしまう。

「全員を処分するか、全員をナザリックに帰属……いや、ナザリックで利用するものに変えるという意味ですね？」

「はい。全員処分すれば帝国は警戒を強めるでしょう、代わりに相手の動きに呼応しやすくなるっす。トブの大森林含めた一帯に対する

調査もより高次元のレベルで行われると思うっす」

ワーカー、それもそれなりに名の通った人物達が一齐に消える。まさに事件、大事件だ。当然何かがあったと調査する、しなければならぬ。規模問わずある種の戦争態勢をもって。

そうなれば改めて帝国にとって重要度の高い人物を捕獲出来るだろうし、あるいはその場で帝国の戦力を大きく削ることが出来る。

大きく削れば副次的に王国との戦争に影響を与えるだろう、王国有利といった影響を。

「王国を活かす方向を取るならこの案は生きてくるかと思うっす。帝国を完全に敵としてしまうっすが」

「……戻すならどうです？」

「ワーカーはどちらかと言えば裏の存在です。言うなら表に認められた裏つて感じですが。ともあれわかりやすく置き換えるなら王国で暗躍を続けさせている八本指と似た動きを取らせることが出来るっすよ。まあ恒久的な支配を要するので、手間がかかるっすが」

方法としてはシャルティアの眷属化であったり、ラナーのようにナザリックに着くことが得であると認識させ強い忠誠を植え付けるか。

「ふむ……」

そこでモモンガは長考の姿勢を取った。ロコモコは黙って思考が終わるまで待つ。

今回の件は紛れもなく自分のミスと認識していた。

自分の考えが至ら無かった結果、初動の遅れを招いてしまったのだ。

だがここでさらなる失敗へ結んでしまえばソリュシヤンに申し訳どころか上司と二度と言えなくなる。

(怪我の功名にしてみせる……)

静かに心を燃やすロコモコ。

既に考えつくあらゆるパターンを頭の中で吟味している。決してソリュシヤンのやってくれたことを無駄にしないと、かつて今ほど思考を巡らせたことはないというレベルで。

「ロコモコさん」

「はいっす」

「王国はカルネ村にそろそろ動きますか？」

「丁度司政官が向かったところですね。ラナーから聞けば同時に兵もまとめ出したと言っていましたし、司政官が戻り次第すぐに王都を発つでしょうから……十日あればカルネ村に軍が到着するかと」

王国に関しては想定通りの動きを見せている。

むしろ蒼の薔薇が手ひどくやられたという結果を見て、司政官派遣は形だけでどのような結果であろうとも兵は出されることになった。「ワーカー達はトブの大森林調査にどれくらいかかると見立てていたんでしょうか」

「規模、人数から考えて……長くて一週間ってところだと思っす」

このロコモコの予想はあたっていた。

どれだけ長くても一週間で区切りとして進捗を報告するという形になっている。

「……よし」

「モモンガさん？」

何かを決定したのかモモンガは座っていた椅子から腰をあげて、しっかりとロコモコの目を見た。

「これでもナザリック最高責任者は俺なんですよロコモコさん。そう心配しないでください、むしろたまには良いところ見せないとつてなものです。その機会をくれて嬉しいくらいですよ」

「は、はい？」

骸骨じゃなければ笑っていただろう、清々しく。

そんな風にロコモコが感じた後。

「まずは捕らえたワーカー達から情報を洗いざらい攫ってください、余すことなく知っていること全て」

「了解っす」

それは当然とロコモコは頷く。

「それが終われば教えて下さい。記憶操作します」

「え？ 記憶操作っすか？ それだと結構な無茶が——」

時間経過からの記憶操作では矛盾が生まれると言葉を返そうとし

た時。

「大丈夫です。信じてください、これでも俺はギルマスですから」
モモンガは自分の胸骨を叩いてそういった。

主の道筋

モモンガ。

いや、鈴木悟という存在について話さなければならぬと思う。
一般家庭、というべきだろうか？の世界では。

彼の情報概要上羨ましいと思ってしまう自分が居たことに否定はできない、それくらい鈴木悟という人物はまだ恵まれていた……いや、ありふれた家庭で生を育んだ。

比較対象として自分を挙げるなんて僻みのように感じるかもしれないが、少なくとも俺のように一芸に秀でていたおかげで、他人を陥れて最底辺を辛うじて生きていたと言えるくらいの人間から見れば、たっち・みーさんのような勝ち組で眩しいことを実感出来ない人よりも身近な眩い人だと思う。

不幸自慢をしたいわけでもない。

ただ、多くの交流をモモンガとロコモコとして重ねた俺はそう感じているんだ。

そんな彼は良く言えば温厚であり悪く言えば臆病と言えるだろう。
癒やしキャラ認定されていた彼はギルド内で目立った主張をするわけではなく、基本的に聞き姿勢かつ出揃った意見をまとめて決定するというポジションを徹底していた。

ある時間いたもんだ、何かこうするべき等の意見はないかと。

そうすればただ曖昧に笑って皆のほうがしつかりしていますからと言う。

なんとも自己評価が低いものだと付き合いの浅い頃には思ったもんだ。

でもその評価はすぐに改める事になった。

敢えて言おう、彼は異様だと。

彼の一步引いた中立的な立ち位置のおかげでギルメン含めた色々なことが円滑に回っていた事実。

ギルドマスターであれば当然と思われるかもしれないが、アインズ・ウール・ゴウンだ。平たく言ってしまうえば曲者揃いのDQNギル

ド。

仮に俺がモモンガとなれなんて言われたら一週間持たずギルドは瓦解していただろうと確信している。

最終的にほぼ事実上の解散状態となってしまったが、それは隆盛期があればその逆もあるわけで永遠に栄え続くものなんて存在しない。仕方のないことだ。

そう、そんなギルドの長で居続ける難しさもそうだしPVP勝率の高さもそう。

鈴木悟という人間は、極めて情報を総じるに対して異様な適性を持っている。

俺も当然含めて、ギルメンは彼の最終決定へ決して異を唱えなかった。もちろん多少なりの不満はあったりもしただろう、だが最終的にモモンガさんが決めたならで納得していた。

彼の人間性が納得を加速させた面はあるが、何よりギルメンが出した情報をほぼ納得できる形に方針へと落とし込む。

徹底してモモンガさんは自分のことを普通だ、一般人だと言うけれど、それを誰もがそうだと思っていなかった。

もちろん俺も。

異世界なんていう場所にたどり着いて尚、彼は必要な情報が集まれば最善を導くと固く信じている。

故に俺の仕事は中間管理であり、彼が彼にとってより良い答えを導き出せる材料を集めることなのだ。

そんな彼が、任せろといった。

聞いた時は言葉にできない感動があった。

あのモモンガさんだぞ？ と、耳を何度も疑った。

夢じゃないことを確認したあとにようやく背筋が震えた。

だってそうだろう？

つまり今ある情報で、彼は最善を生み出せると確信したんだ。

だからこそその言葉だ、僅かにでも失敗する可能性があれば決して口にしな。

少なくとも俺が知っているモモンガさんはそういう人だ。

……複雑な気持ち、といえぼそうなのかも知れない。
少しの嫉妬はあるし、来た当初感じていたナザリックは俺が来なくとも完結しているという確信を深めたなんて面もある。

でもそれ以上に嬉しかった。

成長を感じられてなんて言えば烏滸がましい、ただ彼は新しい世界の自分を確立し始めた。

「俺も……負けてられねえや」

ミスもした、今回は完全にモモンガさんにケツを拭いてもらう形だ。

ギルマスが先陣切って歩み始めたんだ、俺もちゃんと続かないとな。

「ルプス、ソリュシヤン」

「はっ！」

最終確認を始めよう。

いつもよりも緊張感を増して膝を着いている二人。

我ながら少し固めの声が出たと思う、そこらへんが伝わったんだろうなほんと出来すぎるくらいによく意を汲んでくれる。

「顔を上げてくれ、まずは確認から。ソリュシヤン」

「はっ、捕らえた人間たちより帝国に関して、依頼人に関して。そしてその他個が有している情報、自身と他者について等、聞き出せる全てを取得完了しています」

頷く。

上がってきた情報をいくつか改めて確認しなければならない部分はあるが、上出来だろう。

少なくとも今回の作戦を遂行するにあたって不足はない。

「ああ、ありがとう。取得したものの周知化は？」

「はい、現在守護者格の方々にはロコモコ様へと提出しました物と同じものをお渡ししています。また、守護者様各位が必要と思った配下に対してなら開示しても良いとお伝えもしています」

よし、シャルティアやアウラ、マールレに対してはやや余る情報かも

しれないがアルベド、デミウルゴスなら既に把握しているだろう。とりあえず動き出す前に今回動いてもらわなければならぬシャルティアにフォローはしないとな。

「ではルプス」

「はい。捕らえた人間たちはアインズ様含めた記憶操作能力のある者達により操作完了、また治療も終え既に指定の場所へと運び込んでおります」

迅速な行動だ。

スピード勝負というわけではないが、遅れはあまり歓迎できない。むしろ今回はタイミング勝負だ、早すぎても遅すぎてもダメ。

今頃捕らえた人間たちはどうしているだろうかねと考えれば少し愉快な気持ちにもなるが……まあ今は置いておこう、どの道後で会うことになるんだし。

「よくやった。まずは二人へ今回の作戦における実働内容について説明する。質問があれば話し終わった後まとめて答えよう。まずは座ってくれ」

「はっ！」

至極真面目な顔で椅子に座る二人。

十分な意気込みを感じる、王都での試用と言うか試験の時に比べれば適度な緊張感を纏っていると言えるだろう。あの時は若干気負い気味ではあったし。

そう考えればこの短期間でこれだけ成長したことにやっぱり驚きを隠せない。

本当に、何度も思うけど俺よりよっぽど優秀だ。

「まずはソリュシャン。お前には今回の作戦における追い込みの指揮を任せる」

「……！ 謹んで拝命致します」

緊張感を少し高めながらもすっかり頭を下げるソリュシャン。

網の管理といい、本人にしてみればやや重責に思えるだろうが正当な評価だ。

俺としてもソリュシャンが指揮を取ってくれることで自分の仕事

に専念できる。

「適度に傷を与えろ、その中でも殺しても良いリストはこれだ。奴らにしっかりと全力を出させるのに必要であれば殺しを許すという意味だ」

「畏まりました。一切の興を交えず必ずや遂行致します」

うん、遊びはなしだよってのはしっかりと伝わっている。

「加えて俺の動線指示も頼む。タイミングがシビアだが、しっかりとルスと連携を取るように」

「はっ！」

リストを渡す。その時ソリュシヤンの手が震えていることに気づいた。

「ソリュシヤン」

「も、申し訳——」

「慣れる。お前なら出来る」

じつと目を見つめる。

本当に難しいポジションになったと思う。彼女に言った明確さを大切になんて言葉を守れないくらいに。だけど難しいと理解できるソリュシヤンなら大丈夫。

そうだと信じられる、信じていると伝わればいいんだけど。

「——はっ！」

「よし……次にルプス」

「はっ！」

リストを抱きながら瞑目し、再び目を開けた時にはしっかりと返事をしてくれたソリュシヤン。

本当に、いいノリ具合だ。

「お前はユリと共にカルネ村防衛支援だ。ガゼフ・ストロノーフが出張って来ない限りだが、敵戦力的には先に戦った蒼の薔薇以上の存在はいないと思われる。はつきり言ってお前やユリなら一人でも殲滅出来るレベルだろうが……直接手を出すなよ？ あくまでも籠城することが正解だと思わせる程度に回復等での支援に努めろ」

「畏まりました」

「ガゼフとやらは民に刃を向けることは絶対にしないとラナーからの言もあるからまずないだろう。敵戦力は3000だそうだが、カルネ村防壁裏門にユリ、前門にルプスを配置する形で頼む」

今回のキモ、というよりは絶対条件は防壁の扉が突破されそうできない状態を維持することだ。

されそうでされない。

つまり優勢になっても劣勢になってもダメだということ。カルネ村の人間たちが撤退を選択しても、王国軍が撤退を選択してもダメだ。

難しいって点ではソリュシャンと大差はないが、役割という点では明確である分十分にこなせるだろう。

ユリには王国軍を率いるバルブロが選択するだろう戦術をまとめたものをユリに渡してもいる、二人で上手くやってくれるはず。

フォローとしてアサイーもつけたし、難しそうであればプランの一部変更をするとはモモンガさんも言っていたし、その辺は任せてもいいだろう。

直接俺は俺の仕事に注力して欲しいなんて言われたし、それはつまり余計な情報を知らないほうがいいってことだ。それくらいわかる。

「上手く状況が進めば、防壁門は開かれることになる。開かれたタイミングを持ってソリュシャンは王国軍の動向監視に移行、恐らく指揮官……バルブロは撤退を選択するだろう、上手く戦場から撤退出来た頃捕らえろ、バルブロ以外は殺していい」

「戦場から撤退後、行方不明扱いにせよということですね？ 畏まりました」

バルブロ自身に価値は無いが、これは王国に対する保険でもある。

いや、対ラナーと絞って言うべきかも知れないな。まあどのみち保険だ。用済みが確定すれば処分する。

「ルプスは防壁門が開かれた以降お前も前線に出てくれ。基本的には味方の支援だ」

「味方、ですか？」

「ああ……いや、俺にも誰が味方かとは言えない、というか教えても

らってない。モモンガさんがかなり情報を絞っていてな、少なくともその場に会せばわかるとは言っていたけど」

軍事用語で言うところの Need To Know、アインズ・ウール・ゴウンで言うところのぶにつと萌えさんの教えではあるが。ある意味今回の作戦はモモンガさんの実験といった意味合いもあるんだろくな、俺に対してはある意味テストになるんだろくな。まあ効果測定。

それだけに失敗は許されない。

俺はどれだけ泥を被つても構わないが、ギルドの旗に泥は被せられないし被らせない。

「まあそうだな、喜んでいいと思うぞ。モモンガさん、いやアインズ・ウール・ゴウンのパズルピースとなれた。それはつまりそれに足ると認められたということだ」

「っ！ 畏まりました、機を逃さないよう注視、注力致します」

よし。それでこそ俺のメイドである……なんてな。

頼りにしてるぞ、ほんと。

「以上になるが、何か質問は？」

「村の損害はどれほど認められるのでしょうか？」

おっと、良い質問だねルプス。

「最優先で守護するべきはエンリ・エモット新村長、並びにインファイレア・バレアレ、ネム・エモットだが可能な限り人間は死なせるな。ゴブリン、オーガに関しては気にしないで良い」

「畏まりました」

「作戦上私はトブの大森林からですが、人間たちの逃亡支援はロコモコ様達への攻撃という手段を取ってもよろしいでしょうか？」

「っ!？」

おっとー、ソリユシャンいいねえいいねえ！ はいはいルプスはそこまで驚かないの。

「ソーちゃ——!」

「構わない。ただトロール……いや、トロール・ゾンビは殺すなよ？ ルプス、これは必要なことだ。いやむしろ作戦の出来と現実性を向上

させるとすら言える。気持ちには嬉しい、だから後で慰めよろしく」

「う……最近のロコモコ様は意地悪つす……畏まりました」

「申し訳ありません。閨に余計な問題を起こしてしまいました」

ニヤニヤしてまあソリユシヤンさん？ 何気にしてやったりですかね？

やれやれ、まあこれくらい気軽なほうがいいよ、やりやすい。

「責任取れって言ったらどうするよ」

「その時は誠心誠意ご奉仕させていただきますわ」

「ソーちゃん!？」

あはは、ルプスいじられキャラ路線開発かー？ それもありだな？

「はいはい、緊張もほぐれたところで各自準備に動くぞ。俺はこれからシヤルティアのところへ寄ってからトブの大森林へ向かう。二人の精勤に期待してるからな」

「畏まりました!」

事、動く

エンリ・エモット、いや。カルネ村は混乱の渦中にいた。

なぜ王国軍が村を取り囲んでいるのか、なぜ揃って刃を向けられているのか。

確かに数日前に訪れた司政官は言った、反乱首謀者を差し出せと。いと断定してそう言った。

そう言われてもそんなこと、考えてすらいないのだからわけがわからない。

日々の暮らしに暗い影は何もなかった。ゴブリン達が村の一員として馴染み少しずつ難しいと思っていたことが出来るようになっていって、ンフィーレアのポーション開発も順調で。

緩やかに、穏やかにだが発展を迎えつつあったのだ、幸せな暮らしと言って何も間違いなかった。

「姐さん……どうしやすか」

「どうするって……どうしたら……！」

ゴブリンの一人が聞く。

愛着も、信頼も、名前さえ付けた頼もしい自分の部下……いや、友人。

王国軍、バルブロに告げられた言葉は最終通告。

この場で反乱首謀者、並びに新村長であるエンリの身柄を差し出せば退くというもの。

「お姉ちゃん……」

「大丈夫、大丈夫だからね」

足元にしがみつくネムの頭を抱きながら、エンリはまともらない頭を働かせる。

一つの考えとして。

まったくの無実であるが自分が首謀者であると身柄を差し出せばどうにかなるのではないかと思っではいる。

「わかっているとはいやすが……姐さんがでちやまずいつすよ。もうあんたは村長だ、そんな人間が首謀者なんて言ったら……まず間違いな

くこの村も攻撃対象になる」

「っ……い」

だがそれは当然のようにやめてくれと釘を刺される。
ならば誰かを生贄に捧げるか。

エンリにその考えはなかったが、村人達はそうエンリが決定すれば
すぐにでも自分の手を挙げる覚悟はあった。

カルネ村には笑顔があった。

人間だけではない、異形種であるゴブリンもそうだ。ここには種を
超えた命の笑顔が共にある。

今まで築き上げてきたものは自分たちが望んだ暮らしそのもので、
崩れ去ってしまうのであれば命などと心の底から思っている。

だが同時にエンリはその選択を決して選ばないだろうとも理解し
ていた。

ならば残されているのは。

「俺……戦うぞー」

「なっ!?」

徹底抗戦。

元より王国に対して期待は持ち合わせていない。

この村を救ったのはアインズで、発展を迎えたのはアインズの力に
加えて自分たちの力以外にないのだ。王国は何もしてくれなかった。
税の免除が何だというのか、共に汗を流し泥に塗れたわけでもない
し、まさしく大地に落ちた血に報いることをしてくれたのか。

正確に言うのであれば、戦士長ことガゼフは動いていたがそれが個
の意思によるものだということくらいはわかっている。

「そうだね、僕も。こんなわけがわからないままエンリを失うなんて
出来ない」

「ンファイー!?!」

どんどん上がっていく声。

音に目を丸くしながら信じられないと呟くエンリだったが。

「姐さん、やるしかねえ」

「ジュゲムさん……」

少しだけ呆れた色を滲ませながらゴブリンはエンリに言った。

「援軍ってやつが期待できねえ以上、乾坤一擲真正面からぶつかってあの指揮官を討てば可能性は……低いですが生まれる。猶予は後一日、なら準備が終わり次第……覚悟を決め、いや覚悟はもう決まってるやすね。やるだけですわ」

「……」

援軍の言葉に一瞬アインズの姿が脳裏に浮かぶ。

カルネ村を一度救ってくれた人で、大きな力を持つ人。

だが。

「わかりました……やりましょう！」

ハナから頼りにするなんて出来ない、都合のいい展開を期待なんてただの現実逃避。

それしか手段が無いのであれば、やるしかない。

自分はもうただの村娘の一人ではない、村長なのだ。

理不尽に奪われるを待つのはもう沢山で、後悔だっけしたくない。

そんな想いがエンリの瞳に闘志を灯らせ、王国との決別を決断させた。

「よっしやあ!!」

沸き起こる声。

そんな盛り上がりを消火するように。

「あらら、お困りみたいっすね」

「随分と大変な様子。メイドの手で良ければ、お貸し致しますが」

二人のメイドが現れた。

「ここ、は……」

鈍痛が響く頭を軽く振りながら、覚醒し始めた意識と共に周囲を見渡すのはヘッケラン。

周囲は薄暗い、そして僅かに血の匂いが漂っている。

「そうだ、俺は、俺達は——ぐっ」

鈍痛が増してこめかみを押さえる。

思い出したのは森へと踏み込んだその瞬間。

「俺達は……捕らえられた……！ そうだ！ イミーナ！ ロバー！ アルシエ！」

声が反響した、しかし返ってくる声は無い。

暗闇に目がなれ始めてきて、今いる場所が洞窟のような場所だと理解できた。

一瞬浮かぶ疑問、捕らえられ運ばれたのはこんな場所だったのだろうか？

しかしそれを今考えている場合ではない。

浮かんだ疑問を封じて自分の身を探ればダメージを負った様子はない。

「……罠に嵌ったのはわかってる。だが、殺されていない、目立った傷もないし装備もある」

自分の立場が不確定だ。

捕らえられ生きている以上、何かがあるのはこれからだとわかってしまう。

生唾を飲み込む音さえも反響し、先の見えない暗闇へと吸い込まれる。

「いくしか、ない」

そうして一歩踏み出した。

進んでいけば進んでいくほどに大きくなっていく空洞。

ワーカーとしての経験から、ここはモンスターの拠点と言うべき場所なのかも知れないと察する。

(つまり、この先にはモンスターがいる可能性が高い)

やれるだろうか。

真つ当に生き残るすべを考えるのなら、まず仲間と合流、その後モンスターを相手にしながらここから脱出。

(厳しい、だが)

順当に厳しい。しかし捕らえられたワーカーは自分のチームだけではない。

あれからどれほどの時間が経過しているかわからないが、自分がまだ生きているように他にも生存している者がいる可能性もある。

死んだものの中に、親しい人間が居ないことを願いながら慎重に歩く。

既に背中には冷たい汗が流れているし、指先は緊張で冷たく硬い。願わくば。

(あーいや、ほんっと死を覚悟した時つてのはな)

一瞬浮かんだ女の影。

振り払うようにして、更に一步。

そして。

「」

自分の顔を横切っていった胴がつながっていない頭。

遅れてやってくる血しぶきが身体にかかる感触と共に。

死を、実感した。

「ああ、やる前から汚してしまつてすまないな」

「は……はは……」

膝を折らなかつたのは奇跡。

圧倒的すぎる死の気配を纏う黒い獣。

(死んだ)

それしか考えられなかつた。

先程通り過ぎていった頭はエルヤーだったことも忘れた。

こんな存在がここに居て、誰が生き残れるというのか。

やりたいこともあつた。

自分だけじゃなく、チームの全員も恐らく集まつたワーカー達も。

だがそれはもうこの獣に塗りつぶされてしまうだろう毛色のよう

に真つ黒へ。

「諦めるにはまだ早いぞ人間。今丁度一人ゲームオーバーになつてしまつたが、お前にも可能性はある」

「げー、むっ」

何を言っているのか理解はまだ出来ていない。

それどころか獣が理解できる言葉を口にしていているという事実にする気を向けられない。

ただただ諦めるには早いという言葉に光を感じた。

「そう、ここにいるトロール達に勝てば見逃してやろう。先程まで戦っていたヤツはな、不思議とパーティを組んでいるのに一人で……ああ、なるほど」

「？」

黒狼が目を向けた方へ視線を向けてみれば、エルヤーだったものの胴体だろうそれを寄って蹴り潰そうとしているエルフ達がいいて、満足したのだろうか不意に動かなくなりその場へ倒れた。

「……パーティ、と言ったな」

「言ったとも」

「イミーナ達がまだ生きているのなら、俺もまた組んでそのゲームとやらの挑戦してもいいのか」

「構わないとも。私は少し飽きていてね、最初こそ一人でしか認めていなかったがあまりにも弱すぎるからルール変更したのさ。先のソレは言ったのにも関わらず自分ひとりで十分だと言ってくれたから期待したんだが……いやまあそれはいいか。こちらに来るまで待っているといい」

——ナめやがって。

内心毒づくヘツケランだったが、黒狼の周りに控えるよういるトロール達は自分ひとりでは難しい。いや、難しいどころかまさしく命をかけた勝負になるだろう。

待つ。

まずは生きていてくれと、生きていると教えてくれと願いながら。

そうしている内に。

「ヘツケラン殿」

「グリーンガム……さん？　生きていて良かった」

「こりやまた僥倖……とは言えんようだの」

集まり始めるワーカーチーム。

それなりの数が揃いつつあるにも関わらず黒狼は涼し気な雰囲気
を放っている。

「ヘツケラン！」

「無事で……良かった」

「でも、そう言ってる場合でも無い」

祈りは通じてヘツケランのチームが揃い、アルシエを最後にしてしばらく誰も現れない。

メンツを見渡せば天武以外にいくらか見えない顔があるが、恐らく。

「これで全員だな」

「……っ」

予想は的中していた。これで、今生きている人間は全員だと。

「一つ、聞きたい」

「どうぞ?」

「お前は手を出さないのか」

ヘツケランが進み出て問う。

グリーンガム、パルパトラはまだしも、他の人間は全員怯えていた。まだ黒狼と対したことによる恐怖に慣れはじめてきたからこそ一番最初に動けた。

「少なくとも、この洞窟では手を出さないさ」

「本当か」

「何だ、瞬殺をご希望か? それはよくない、私は飽きているといっただろう? 少しでも長く楽しませてくれ」

ヘツケラン以外の何人かがゴクリと息を呑んだ。

本当、だろう。

このメンツ相手に瞬殺という部分も含めて。

「作戦会議をしたい。楽しませるためにも」

「その言い方は実に好ましい。いいだろう許可する」

こくりと頷きヘツケランは仲間達の下へ。

ヘツケランを囲むように格チームリーダーが集まり始める。

「こつちの人数は……二十、つてどこか。ここから見えるだけでもトロールの数は十一体、やれないことはないが」

「あの黒狼の目的が見えんの……トロール達を倒した瞬間殺される可能性はある」

「念の為聞いておくが、あの黒狼に勝てるって可能性は?」

揃って面白いように首を横に振る。

誰もが同じだ、中にはあの黒狼を見た瞬間失神したものすらいた、そしてそれは正しい反応の一つだ。

「ならやっぱ」

「戦いながら……あの出口へ抜ける、か」

その意味を言わずともわかっていた。

つまり。

「恨むなよ?」

「言うまでもない」

誰かは絶対に逃げ遅れるということ。

可能性として全員逃げられないほうが高いことはもちろん理解していたが、それでも逃げられるという希望を消したくはない。

「後は……チーム単位で」

「うむ……武運を祈る」

絆があつたわけではない、ただ偶然同じ依頼を受けたに過ぎないのだ。

それでもここはまさしく鉄火場だった、共に戦うものとしての信頼を預けなければ話にならない。

それを利用して、自分たちを置き去りにされたとしても、それは。

「……いいの?」

「ああ、そういうものだろう?」

ヘツケランに駆け寄ってきたイミーナ、続いて来たロバーディグとアルシエ。

そのまま小さく輪を組む四人だったが、ヘツケランはイミーナへ、そしてロバーディグへと目をやる。

ヘツケランの視線へと二人は黙ってうなずいた。アルシエはその領きの意味がわからない。

「アルシエ」

「何?」

「手を出してください」

言われるがままアルシエは手を出し……その手にロバーディグか

ら金貨の詰まった小袋が乗せられた。

「なっ!?!」

「あなたは先に逃げなさい。妹さんがいるんでしょ」
わけがわからないアルシエ。

確かに状況は不味いどころか最悪だろう、誰かは確実に犠牲になる
どころか全滅のリスクのほうが高いのだ。

だからこそワーカーチームそれぞれを利用してこの場から脱
出する。

少なくとも、アルシエの認識はそうだ。

「何故!? さっきの話じゃ——」

「ああ、他のワーカーを信頼してるさ。だが、信用してない。だから信
用できるイミーナとロバーで、お前を逃すんだ」

「——」

「大丈夫です。ちゃんと後で合流しますから」

「その時は一杯奢ってね」

アルシエの言葉が紡がれる前に、覚悟を示された。

故に。

「理解……した……先に、待っている……!」

「ああ、頼んだぜ」

声を震わせながら、必死に唇を噛み締めて。

「そろそろいいか?」

「ああ、待たせちゃまってすまないな! 早速ゲームってやつで遊ばせ
てくれよ!!」

ヘツケランの威勢のいい声。

呼応するように全員が各々の武器を握りしめる。

「では……精々楽しませてくれ!!」

「オオオオオオオオオオ!!」

黒狼の声に従い動き始めるトロール達。

そんな中。

(伝言——ソリュシヤン。見ているな?)

(はっ。ワーカーの撤退をカルネ村方面へ誘導する準備は整っていま

す)

(よし。タイミングを間違えるなよ?)

(畏まりました)

漆黒という英雄

バルブロは苛立ちの極地にいた。

最終宣告より丸一日、外壁の門は開かれることなく沈黙を保ったまま。

(何をもちもたと……！ 私はバルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフだぞ！ たかが平民、開拓者如きが待たせるなんぞ……！)

傲慢であり不遜だろう彼の怒りは。

元々の人柄から考えても、実にらしい怒りではあるがバルブロはここにカルネ村の行く先を決定できる権利を有するものとして立っている。

故に怒りのまま村を攻撃することが出来ない、流石にそれくらいを意識はある。あるが、それだけに立場が自身の怒りに拍車をかけていることには気づいていないが。

だがそれももうすぐ終わり。

約束の時間はもう目の前で、それはつまりあの村を攻撃すること、反乱等という愚かな決断を裁くことが出来るということ。

「おい、時間は」

「はっ。もう間もなくです」

近くに控えている部隊長へと確認。

(もうすぐ、もうすぐだ……)

出立前には欠片ほどではあるが有していた自国民へと槍を向けるなどと言った感情。

それは容易く愚かな怒りに飲み込まれ、バルブロは今攻撃開始を心待ちにしている。

「寄せ始めておけ、前門にだ。最後の最後に攻撃開始を宣誓する。それを以てまずはその邪魔な門をぶち破る。後門は開けておけ、逃げるだろう者たちを捕らえられるよう備えておけよ」

「……畏まりました」

返事をした後顔を背けて眉を顰める。

それもそうだ。兵士、それも多少立場のある身ではあるが情情的には平民へ寄っていた。

出来れば刃を向けるなんてしたくはない。

だがそういつたところでもどうにもなるわけがない、最悪その刃が自分に向けられてしまうとすら思える。

この場にいる誰もが、自国民へと刃を向ける意味を深く理解していなかった。

ある者は保身、ある者は野心に心を委ねて。

「時間です」

「よし——。聞けっ！ カルネ村の者達よ！ 貴様達を国に仇成す反

逆者集団として、これより攻撃を開始する！ 抵抗することなくその

身を捧げよ！ さすれば慈悲を考えなくもない！」

村は、沈黙を保っている。

何よりの返事だとバルブロは口を歪めた。

「火矢を用意せよ！ 同時に門へと槌だ!!」

「はっ！」

蒼の薔薇より齎された情報。門破りの破城槌のようなものを寄せ始め、同時に矢に火が点けられる。

矢の狙いは露骨に飛び出た櫓、まずは開戦……いや、蹂躪開始の合図だと言うかのように。

「放てっ!!」

そして風切り音と共に、矢は——櫓に突き刺さらなかった。

「なっ!?」

「——これが、国を統べるものの選択か」

矢を遮ったのは黒。

漆黒のフルプレート、赤くたなびく赤い外套。

「き、貴様はっ！」

「答えるバルブロ!! これが王に連なる者の選択かっ!!」

アダマンタイト級冒険者、モモン。

ヘルムの奥から憤怒の意を放ちながら、大剣を構え言い放つその姿。

「冒険者風情が！ この私に剣を向けるか！」

「冒険者風情だと？ そうだな、確かにそうだ……アダマンタイトが何だ、英雄級が何だ……ならば私はこのようなモノはいらぬ!!」

首から下げられた冒険者である証を引きちぎり捨て去る。

「これで私はただのモモン!! 政治不介入という鎖で縛られない！」

ただただ国を、人を憂い！ 腐敗と横暴を許さぬ漆黒のモモン也!!」
モモンの一喝、そして破城槌をその剣風で叩き壊す。

舞う兵士達、自分の目の前に現れた者が何かを理解した途端に奔る
動揺と怯え。

「お、王子！」

「ぐっ……ええい！ アダマンタイト級とはいえ相手は一人だ！ 数
で押し潰せっ!!」

「は、はっ!!」

無理だ。

兵士は直感どころか実感する。

槌と共に吹き飛ばされてきた兵士達は虫の息、まさに辛うじて生き
ているなんて具合。

ただの一振りだ。

ただモモンはあの大剣を一振りしただけで十人以上をこの有様に
した。

そんな相手にどうしろというのか。

しかし、しかしだ。

ここで無理だと進言したところでバルプロは怯えではなく激情に
駆られている。

言った瞬間にどうなるかわかったものではない。

前門の虎、後門の狼。

どちらに進んでも絶望的。

故に彼の選択は。

「全軍、漆黒に向かって突撃ーー!!」

絶望的ながらもあつただらう無数の選択のうち、最も愚かなものを選んだ。

「い、一体何が……?」

防壁の中、外の状況が掴めず先とは別の混乱に包まれているカルネ村。

ゴブリン達とて同じだ、ルプスレギナが治癒の魔法を使えるということ。相手はすぐに反乱鎮圧なんて済むだろうと兵糧の準備が少ないのに対してカルネ村には十分にある。ならば突破口は籠城にあるとユリの意見を聞いて頷き、改めて戦い方の覚悟を決めた瞬間だったモモンが現れたのは。

何故冒険者、それも高名な漆黒のモモンがこんな村を助けるためだけにその立場を捨ててでも現れたのか。

「……英、雄」

誰かがポツリと呟いた。

外の状況は櫓に登ったゴブリンから伝えられている、そしてその内容はモモンが兵士たちの突撃を防ぐ光景。

打算なんて無い、彼はただただ無辜の民を守るためだけに戦っているのだと否応無しに信じられた。

不思議な確信があった。

こうしてまたカルネ村は守られるだろうと。

あの時と、同じように。

「……村長! 門を開けてくれ!!」

「えっ!?!」

一人の若者が声を上げた。

「このままじゃ同じだ! アインズ様に守られた時みたいだ! 俺たちはずっと同じなんだ!」

「――」

言われた意味が分からない、だがエンリの心が何か反応している。そうだ、守られる者だから守っている人に命を握られる。

王国に何も期待できないなんて十分に理解した、自分たちの力で発展と幸せを掴めることも理解した。

ここで、また守られれば、一生自分たちはこのままだ。

「……好機、かもしんねえです姐さん」

「ジユゲムさん……」

血は流れるかもしれない、自己満足に過ぎるのかもしれない。

「今ならあいつらの攻撃は漆黒に釘付けた、俺たちにまで気を向ける余裕はねえでしょう。上手くいけば横っ腹をぶち破れるかもしれないです」

さもすればモモンの足を引っ張るだけなのかもしれない。それで自分たちの首を絞めるだけなのかもしれない。

それでも、ここで立ち上がらなければ一生変わらない。

二度あることは三度あるという、ならば三度目を正直に変えたい。その時立ち上がり立ち向かう人間になりたい。

「ジユゲムさん、村の男の人を率いて……ごめんなさい、戦い方なんてわからないけど、お願いしていいですか?」

「姐さん……合点だ! 任せてくれ! おう行くぞお前ら! 何人かは村に残つとけ! 観察の目を緩めるなよ! 男連中は俺の指示にちゃんと従え!」

「おお!!」

今、カルネ村の前門は開かれた。

「私も出るつすよ、支援するつす」

「ルプスレギナさん……お願い、出来ますか?」

すつと前に出るルプスレギナ。

一瞬ジユゲムの目が細められるが、元より今から捨てるといつて良い行動をとるのだ裏切られたとて悔いはない。その覚悟の上で考えるなら回復魔法は喉から手が出るほどに欲しい。

「ルプスレギナさん、土壇場でやらかさねえてくださいや?」

「失礼つすね。こう見えてやるときややる女つすよ」

そういうルプスレギナの目を見据えるジユゲム。

「申し訳ねえ……頼みます」

「ふふ。任されたつすよー!」

何故だろうか。何故過去の自分はこの人を油断ならぬと思つていたのか。

思わず省みてしまうほどに、ルプスレギナの目は信頼できるものだった。

「く、そがああああ!!」

大方はヘツケランの予想通り。

アルシエを含めたワーカーチームは上手く脱出できた、この場に残るのはイミーナ、ロバーデイクそしてヘツケランのみ。

最初からアルシエだけは逃すと決めていた故に、それを他のチームに利用される事も織り込み済みで。

「イミーナ！ ロバーは大丈夫か！」

「ここで大丈夫だと言えたら……良かったんだけど」

既にロバーデイクは片足を潰され、意識もない。辛うじて呼吸をしていることから生きている事はわかるが。

「このままじゃ……!」

ロバーデイクを庇いながら矢を放つイミーナ。

言葉の先をヘツケランは言われるまでも無く理解できている。

先にこの場から逃亡できたワーカー達を追う為に何匹かのトロールはいない、今相手をしているのは四匹だが庇いながらの戦闘で勝てる程ではない。

幸いと言うべきなのは黒狼がまだこの場において、自分たちを楽しそうと言うべきか観戦に興じている為少なくともまだアルシエが生き延びる可能性は高いということだろうか。

「きやあつ!」

「イミーナ!」

しかしもう限界。

ついにイミーナが捉えられ、地面に身体を伏せる。

倒れた二人を庇う様に立つヘツケラン。その目は強い。

(人、その友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。か)

この場にフォーサイトの面々を残す事は作戦概要上決まっていたことだが、思いがけず良いものが見れたと感嘆するのはロコモコ。

つい最近、人間の価値を改めた所でもあった。こうも続けば認めざるを得ないのかもしれないと。

「待て。お前達は逃げた奴らを追え」

黒狼の一言でトロールたちの攻撃が止まり、従順に出口へと移動し始める。

「……はは、あんたは手を出さないんじゃない？」

「獣ではあるが礼儀は知っているつもりでね、ゲームなどと言って悪かった」

じわり、と初めて黒狼が一步進んだ。

ここまで来るとある種光栄とすらヘツケランは思った。

この明らかに人の世に存在してはいけないレベルの化け物に認められたことを。

何が琴線に触れたのかは分からないが、今殺意ではなく敬意を向けられている事を心地よく思えるのは何故だろうか。

「ああ、なるほど、な」

「言い遣す事があれば聞こう」

不意に理解できた。ただ金が好きだからなんてくだらない理由でなったワーカーだから、くだらない理由で死ぬと覚悟していた。

だがこうして、仲間以外に初めて価値ある人間だと認められたことが心地よいのだと。

利用し利用されるという意味での価値を認められる事はあった。だが、本質的な部分を全くの他人に認められたことは無かったんだと。

「汚いこともやってきた。矜持はあったがそれでも後ろ指を指される事の方が多かった。だからワーカーとして死ぬときはそこら辺のゴミと同じく捨てられるように死ぬと思っていた。……こんなことを言うのはおかしいと分かっているが……助かったよ、ありがとう」

「名は？」

「ヘツケ——いや、名を残していいのなら……フォーサイトという名を」

「覚えておく」

そうして黒狼は口を開けた。

覗くのは鋭い牙、首元にでも噛みつかれたら一瞬で絶命するだろう、痛みすら感じることは無いかもしれない。

認められた。なら最後まで自分らしく。

「武技！ 限界突破！ 剛腕剛撃！ 肉体向上！ 双剣ン……斬撃ツ！！」

捨て身の攻撃、その刃が黒狼に向けられる。

だが。

「邪魔です。盾壁」

シールドウォール

「つつお!？」

黒狼とヘッケランの間を割る様に乱入してきた影。

「あ、あんた、は?！」

「漆黒、ナーベ。モモンさ——んより言われています。疾く逃げなさいゾウリ——人間」

手のひらの上

撤退支援とは名ばかりの撤退管理。

元トロールたちの拠点ともいえる洞窟から蜘蛛の子を散らしたように人間たちが出て来る様をソリュシヤンは笑顔を浮かべながら眺める。

自身の姿は陰に潜ませ相手からは感知できない、つまるところ目の前の命は自分の胸先三寸で決まるこの状態に愉悦を感じていた。

「ですが……今回は遊びなし」

かつての自分であれば少し残念にも思ったのだろうが、今は不思議とそう思わなかった。

それ以上に自分の役割を果たし、主であるアインズ、ロコモコに認められたいという気持ちが強く、より高みを目指したいがために。

さてソリュシヤンに見守られながらもワーカー達は流石と言うべきか撤退にそつがない。

的を絞らせないように分散して逃げる様などは実に慣れていると言えた。

しかしながら。

「ぐおっ!?!」

「なっ!?! ト、トラップ!?!」

逃がさない。正しく言うのであれば管理範囲外へと向かわせない。

事前に設置していた罠とソリュシヤンの手並みによりワーカー達は凶らずともある程度の集団で撤退しなければならない状態に。

「くっ!?! トロールは!?!」

「ま、まだ後方!?! だ、だ、だ、だ、だ、だ!?! いちいちトラップ看破なんてしていたら追い付かれる!?!」

「森を調査させなかったのはこのため!?! 狩り気分ってか!?! くそが!?! 俺たちや獲物じゃねえぞ!?! 誰か飛行を使えねえか!?!」

ピクリと反応するのは共に逃げているアルシエ。

心に過るのは仲間を囮扱いして逃げている自分を含めたワーカー達へ協力したくなくてないという想い。

「っ！ 使える！ どうすればいい！」

「現在地がわかんねえ！ 逃げる方角を決めてえから空から教えてくれ！」

だが頷く。

そう、ヘツケランは言ったのだそういうものだ。

互いを利用して生を繋ぐのだ、空へと無事に飛べるのならば方角を示して自分だけは飛行で逃げてもいい。

「対空への罾があるかもしれない！ 支援を！」

「わかった！ おい！ トロールたちの足止めと嬢ちゃんに支援魔法だ！」

即席とはいえ見事な連携と言える。

ぐつと奥歯を噛み締めた後アルシエは飛び上がるが。

「あぶねえ！ 盾壁！！」

「——っ！！」

木々から頭が少し覗けただろうかその位置で、魔法の矢のようものが飛んできた。

防御魔法が無ければ確実にアルシエを命ごと穿っていただろう。

「嬢ちゃん!? 大丈夫か！」

飛行の魔法を制御できず落下してきたアルシエを受け止めたワーカー。

防御魔法は突破された、その証がアルシエの目から赤く流れている。

「う、ぐ……あ……あああ！ 問題、ない！ それより一瞬砦のような場所が見えた！ 方角は……今の矢が飛んできたほう!!」

アルシエが一瞬見たのはカルネ村の防壁。

中を見ればただの村である事に驚くだろうが、外から見れば何かの拠点である。

情報に一瞬顔を見合わせるワーカー達。

果たしてそこは人間がいる、いや自分たちを守ってくれる存在がいるのだろうか。そもそもこんな場所に砦なんて何故存在しているのか。

「賭けるしかねえ……よし、行くぞ!! 嬢ちゃんは……」

「私は……ワーカーだから……! そういうもの、だから……!」
アルシエの顔を血が伝う。その雫は大地を滲ませた。

「……あばよ」

小さく頷いたアルシエを背にワーカーは走り出す。

ソリュシャンが導く茨道を命がけで。

「死ぬものか……! 絶対、死んでやるものか!!」

地面を響かせる足音は直ぐ側に。

震源地に向かって吠え叫ぶ。

「クーデ……ウレイ……皆……!!」

その決意は。

揺れの原因とは別の者に攫われた。

「っ!? も、森から!? な、なんだありや……トロール!?」

「何だ!? 何があった!」

ゴブリン達がざわめく。

櫓から見えた光景は。

「と、トロールでさ! その前には……人間!? 人間がトロールに追
い回されてこっちに——ひっ」

必死の形相で逃げてくる人間、後方から迫るトロール。
そして。

「ダメだ俺たちや死ぬ!!」

「おい!」

更に背後に、黒狼。

後門側に配置されていた王国軍兵士で血の噴水を作り遊びながら
迫って来ている。

遠目でもわかる圧倒的な死の気配。

状況を観察していたゴブリンはいとも容易く怯えに感情を染め錯
乱した。

「何……何が……」

「くっ……! ただ事じゃありません、あいつがあんなに怯えるなん

ぎ——」

「助けてくれっ!! ここを開けてくれ!!」

トロールたちは鈍足だ。黒狼もまずは兵士を殺したいのかまだ近くない。

そんな中、なんとかだろうたどり着いた人間たちは藁ワーカーにもすがる思いで村の裏門を叩き叫ぶ。

「ど、どうしやすか!?!」

慌てたようにゴブリンはエンリを見る。

「急いで入れてあげてください!」

今を逃せば見殺し。反射的にエンリはそう指示し、ワーカー達を迎え入れる。

「た、たすか……った」

そうして村に入った瞬間に失神するワーカー達。

見れば身体はボロボロで、五体満足の者は少ない。まさしく気力だけだったのだろう、村の防壁を見てそこに希望を見出し全力で逃げた。

状況は混迷を増し始めた。

村人はもちろんエンリ、ゴブリン達ですら冷静でいられない。

一体何が起きているというのか、あらぬ濡れ衣だろ被せられてから動き始めた状況は一般人やそれに多少毛が生えた程度の存在では処理できない。あえて言うのであればジュゲムならまだ思考を巡らせられただろうが既にこの場にはいない。

そう、まだまだ危機は終わらない。

「貴様達! 何故逃げる!?! 争っている場合ではない! 民を守るために戦わないのか!!」

「その村は最早国のモノではない! 自分たちでなんとか——なあ!?!」

「今だ! 突っ込めえええええええ!!」

「おおおおおおお!!」

外から聞こえる宣告。モモンの怒りに染まった声とジュゲムの号令に続く男たちの雄たけび。

どうやら、王国軍はこの状況を前にして、撤退を選びそこを村人に捕まったようだ。

「っ！ 漆黒が黒狼に向かいやした！ 黒狼も漆黒に気づいたみたいですよ!!」

「……姐さん、今が切所でさ。今なら前から逃げられやす。漆黒がどれだけ黒狼とやれるかはわからない、突っ込んだ村の男連中もどうなるか分からない。ただ漆黒がやられちまえば次に俺たちへ向かってくるでしょう」

冷静になりきれない頭でも、エンリは理解できた。

言っているのだ、ゴ布林達をここに残し、逃げろと。

「く、う……!」

「なあに、あのべっぴんメイドのユリさんもいる。もしかしたら勝つちまうかもしんねえですぜ? ……姐さんに呼ばれて、よかったです。行ってくださいえ」

別れ、だろう。

もう一つの角笛はある、しかしそれで召喚出来るのは目の前のゴ布林ではないのだ。

震える唇で、それを受け入れると紡ごうとした時。

「遅くなった。皆、生きているかね?」

「——っ!」

虚空より、死の超越者^{オーバーロード}が現れた。

「なんという、戦いだ」

——この結末を見届けたい。

ラキユースはパーティが予想した通りのことを口にした。

予想に反したのはそれをイビルアイに頼んだという点のみ。

ラキユースは自身の力が遠く及ばないことを理解した。理解したが故にたとえどのような結末になろうとも受け入れられる自信が無かった。

心が折られたのだ、自分の願いが身に余るものだと実感した。

およそ彼女らしくない状態だとはラキユース自身含めてわかって

いた。それでも、壁にぶつかるとは必要で彼女ならそれを乗り越えられるという信頼もあった。

故にイビルアイは頷いた。

彼女とてこの件がどういう形で決着を迎えるのか知りたかったのだ。

僅かに臭う謀略の香り、このまま実態の見えない何かの駒でいたくないという思いもあったが、何より大きな力が動き始めたという感触があった。

そうして事の顛末を見守ってきたイビルアイが今、遠目に見る黒狼と漆黒のモモンの繰り広げる戦い。

それはまさしく自身の想像を遥かに超えたものだった。

自分の魔法では僅かにさえ傷つけられなかった黒狼の身体を大剣が切り裂く。

黒狼もまたその大剣を操るモモンの腕へ噛みつき鎧を砕く。

イビルアイの目であって追いつけない展開。

「ちい……フロストペイン、改!!」

純粋な身体能力は僅かに黒狼が上だろうか、やや翻弄され気味のモモンは魔法道具マジック・アイテムでその差を埋める戦法。

だが同じく黒狼もまた——未だにイビルアイは信じられないが——道具を駆使して対抗する。

フロストペインが放った冷気を何のアイテムだろうか、発生させた熱気で相殺。生まれた蒸気の中、再び黒狼の牙と黒き大剣がぶつかり合う。

イビルアイの頭にあるのは、人智を超えているという言葉。

英雄、魔神、神人……いずれに当てはまるのか検討はつかない、だが自分の域を遥かに超えた場所に位置していることはわかる。あの場で自分なら一呼吸存在出来るかどうかだろうと。

一人と一匹、どちらが勝つかわからない。

願わくはモモンの勝利ではあるが、あの黒狼の強さは身を持って知っているだけに祈るだけ。

激しきは増していく、天井知らずに。

まだ上があるのか、何処まで及ぶのか。
息をすることすら忘れ、見入っていたその時。

「ここは危険ですが」

「っ!? お、お前は……?」

「漆黒のナーベ」

「……噂の美姫様か。お前こそこんなところで何を? 相方はあそこで戦っていると言うのに」

イビルアイの言葉に眉を顰めるナーベラルではあったが、自制になんとか成功。

イビルアイ自身も、漆黒の片割れが遊んでいたわけではないなんてナーベラルの姿を見れば理解している。恐らく激戦の後、身体に傷はなかったが装備はボロボロだったが故に。

「私の役目はトブの大森林奥にあったトロールの巢へ向かうこと。それに、あの戦いになんて……とても入れない」

「ふ、アダマンタイト冒険者の名が、いや。漆黒の名が泣くぞ?」

まあ、正しい判断だが」

何処まで苛つかせるんだこの^{ソウリムシ}下等生物はとイライラ絶好調を迎えるが、アインズからの厳命もある。本当に辛うじて剣を抜きたくなくなった衝動を抑えた。

イビルアイからすれば遠回しな労いの言葉であったのだが、残念ながら通じることは無かった。

「煩い下等生物ですね。それに……」

「み、みじんこ……? いやまあ、うん?」

「感じませんか? この偉大なる——いえ、大きすぎる魔力の波動を」
不意に指さされる方向へと視線を向ければ。

「な——」

「ええ、本当に……思わず跪きたくなってしまいますね」

いいながらナーベラルは本当に片膝をついた。

しかしイビルアイはそれを不思議に思わなかった。自分とて、許しを請うという意味で膝を付きかねないと。

「まだ、やるかね?」

」

現れたのは死そのもの。

いや、もしも当てはまる言葉があるのなら。

(あれは、神様とか、そういうヤツだ)

二対一。

黒狼はモモンとアインズを前にして動けない。

いや、僅かにジリジリと後退しようとしている。

「それでいい。覚えておけ黒狼、ここにはこの私、アインズ・ウール・ゴウンが居ると」

共栄圏

「剣を向けるのはやめてくれよ？ 漆黒のモモン。私はアンデッドだがここに在る命を弄びに来たわけではないし、君には礼を言いたいと思っているのだから」

「……アンデッドが礼、だと？ いや、先程にしてもそうだがにわかには信じられないな」

戦闘状態が終わったカルネ村。

王国軍の姿はもう見えないし後門を脅かしていたトロールたちはアインズが一瞬で殲滅した。

黒狼を前として共に退けた二人ではあったが、改めてアインズへモモンが警戒を向けることは正しい。

「あ、あの！ も、モモンさ——様！ 助けて下さったところ失礼だと思えますが！ アインズ様は本当に、えっと、良い人なんです！」

エンリとしては二人共恩人に変わりない。そんな二人がいがみ合って欲しくないという気持ちからの言葉。

「む……」

その言葉と、アインズの足にしがみついているネムを見てモモンは警戒を解き剣を下ろした。

「失礼しました。謝罪させて頂きたい」

「いや、構わないとも。むしろその警戒は当然だ。アダマンタイト級冒険者、漆黒のモモンは名ばかりではないと実感できた。私はアインズ・ウール・ゴウン。改めて、この村への助力感謝する」

「もう元冒険者です、今の私はただのモモン。こちらこそ、助太刀感謝致します」

握手を交わす二人にエンリは胸を撫でおろす。

自分たちは確かにアンデッドとはいえ恩人故に嫌悪感等欠片もないし、そもそもこの村にはゴブリン等人外存在もいるため薄れていったもの。とはいえやはり他の人間からみれば当然の反応なのかもしれないと改めて認識する。

「失礼いたします。戦いにでた村人の治療が終わりました。並びにユ

りより報告、周囲に敵性存在は見えずとの事です」

「うむ、ご苦労ルスレギナ。一旦下がって良い」

そんなルスレギナの言葉にエンリはようやくと言っただろう安心することが出来た。

犠牲者はなし。

村長になったとはいえ、まだまだただの村娘としての気持ちは強いエンリ。

慣れないどころか触れたことの無い緊張に晒され続けた彼女は自分が思っているよりも遥かに疲労している。

「あ、あれ？」

力が抜けたのだろう尻もちをついてしまった。当の本人はわけがわからず目を瞬くのみで。

「ああ、済まなかったな。このまま代表者で話をとっていたが……まずは休息するべきか。モモン殿は？」

「私は大丈夫です。いや、確かに黒狼との戦いで疲労やダメージはありますが……先程頂いたポジションのおかげで随分と良いです」

「ならば先に何か礼をお渡ししたい。ナザリック……いや、私の家へと案内したいが構わないかね？」

「ンなんて恐れ多……いえ、折角のご厚意ですが。また直ぐにここへ王国軍が来る可能性もある、故に暫く私はここへ滞在したいと思っっています。構いませんか？ 村長」

何やら話が進行しているらしいとぼんやりその様子を眺めていたエンリは急な水向けに反応できなかったが、慌てたように。

「……へ？ あ、わ、私だ！ ははは、はい！ 是非休んで行って下さい！ えと、恩人様をおもてなしさせて頂きますー！」

わたわたと答える。

恩人であり救世主が二人並んでいるのだ、無理もない。

「ははは、そう肩肘張らずとも。私にとっては皆さんが無事である事が何よりのお礼であり、元気な姿を見せてもらえることこそがもてなし。気になさらずそうですね、空いている家を一つ貸して頂ければ」

「ははは、ひゃい！ あり、ありがとうございますー！」

——何言ってるのこいつ。

アインズが演出過剰にも程があるとモモンに扮したパンドラズ・アクターへ存在しない眼球を丸くしている中。

エンリは慌ただしく駆け出した。

「アルシエ!!」

「へ……ケラ、ン?」

一人で帝国へ帰るといふ選択肢もあつたが仲間を置いていけないと痕跡を辿つてヘツケランはカルネ村へと辿り着き、ワーカー達がまとめられた一つの家屋へとヘツケランは連れられた。

尤も一人で帰ろうとすればロコモコかソリユシヤンが改めて処分する手筈になつていたためある意味幸運を掴んだとも言えるが。

片腕を失つたもの、足を失つたもの等ほぼ全員が満足な状態ではない中、目に包帯を巻いたままボンヤリとイスに座っているアルシエへとヘツケランは声をかける。

「お前……目が……?」

「しくじつた……何も見えない、けど。無事で、良かった。他の皆、は?」

「そりやこつちのセリフだ……!　だが、まあ、イミーナもロバーも生きてる。フォーサイトは、全員生きてるよ。知ってるか?　漆黑つてアダマンタイト級冒険者。そのナーベつてヤツが助けてくれたおかげだよ」

そういつた後ヘツケランは中にいる同業者たちを確認する。

フォーサイトを除けば四名、合計八名。これが、あの悪夢から逃げ出せた人数。

「そう、それは残念。これでもう一杯奢らないといけなくなった」

「……はは、それだけ言えりや十分か。そうだな、傷が治ったら……しつかり奢つて貰うからな?」

小さく笑いあう二人。

フォーサイトだけで言わなくとも、五体満足でいられたのはヘツケランのみ。

イミーナは腕を、ロバーデイクは足を、そしてアルシエは目にそれぞれ重症を負った。

だが命あつての物種ではあるのだ、ワーカーという職業に就いているもの共通の認識でもある。

「もちろん。……それで？ 私たちは、これからどうなる？」

「まだ、わからない。まあ俺たちは完全に部外者というか、第三者から見れば素性の知れない奴らが厄介ごとをこの村に持ち込んだ格好だ。いい扱いを受けられるとは思わない」

村人はルプスレギナによつて治癒されたが、ワーカー達はその魔法を受けられることは無かつた。

ヘツケランが言う様にそれは当然だろう。むしろこうして屋根のある場所を用意してもらえただけありがたいとすら思っている。

治癒魔法を使えるものはロバーデイク以外に見当たらない。彼が目覚ませば傷は癒せるかも知れないがここから出られるかはわからない。

尤も、ヘツケラン個人の考えとしてはここから出られようが出られまいが筋を通さなければと思っている。

だが彼らはまだ知らない事ではあるが、いわばここに居る生き残つた者たちは選別を受けた後なのだ。既にそれぞれへ役割が設定されている。生きて帝国へ帰ることを許可、あるいは設定されている者もいる。

フォーサイトの面々にしても同じこと。イミーナやロバーデイクに関してはトロールがやったこと故に運が悪かつたと本人たちは思うだろうがアインズの指示通り。

特にアルシエの目を潰すことは中でも優先事項の一つだった、それは彼女が持つタレントが理由で。

発動が容易であり誰にも悟らせる事無く識別出来てしまうのだ、やろうと思えばだが。

もちろん魔法探知妨害を行える者がナザリックには多い。多いがこれから人間を使っていくという道筋の中アルシエのタレントで計画が破綻してしまう可能性があつた為だ。

一旦捕らえられあらかたの情報聞き出されたと同時に、そういったタレントに関する実験も行われておりそれは完了した。もう敢えてリスクをそのままにしておく理由はない。

アルシエの受けた傷は単なる傷ではなく低位の魔法では解呪できない呪い、一種の封印に近いものが刻まれていることを、まだ彼らは知らない。

「そう……」

「まあ何とかなるだろう。今生きてるってことは、これから生きられるってことだ。処分するつもりならとつくに処分されているさ」

ヘツケランがそう言い、アルシエは安心したように再び眠りにつく。

アルシエと同じように眠るイミーナとロバーデイクをもう一度視界に収めた後、静かにヘツケランも目を閉じた。

「きょうえいけん、ですか？」

「そう、共栄圏。私は世俗を離れ魔法の研究に没頭していたがゆえ世事に疎い。疎い上にアンデッドだ、命の価値というものへ理解が及ばない。噛み砕いて言ってしまうえば人間であろうとゴブリンであろうと……もつと言ってしまうえば先程のトロールであってもその命の価値は等価であると思っている」

カルネ村、村長宅。

改めて集まり直したアインズ、モモン、エンリと――

「ちよつと待つてくれないか」

「どうされましたかイビルアイ殿」

イビルアイ。

「何故私がここにいる？ いや、ほんと、なんでだ？」

「ははは、私はもうアダマンタイト級冒険者は辞めた所です故。高名な蒼の薔薇、その一人イビルアイ殿に見届けてもらうためと説明したではありませんか」

「だからそれが何故だと聞いている！ あ、いや、聞いて、いるんです？」

「あ、あははー……そんな事言うなら私、ただの開拓村の村長だし、気持ち的には一般人ですし」

笑いながら言うのはモモン。未だに混乱している様子のイビルアイへ同情的な目を向けるのはエンリ。

「見届けるだけで結構。無論、ここで暴れていただいてもな。あまりオススメはしないがね」

「む、う……」

そのつもりは無いと立ち上がったばかりのイスへと座り直す。

混乱してはいるがイビルアイ自身この場に自分がいる意味は理解している。

先の戦闘でカルネ村は完全に王国と袂を分かった。

今後、真つ当な外交以外で情報のやり取りは出来ないだろう。しかしイビルアイがここに居て、今のやり取りを王国へと報告すればと言った狙い。

少なくともここでのことをラキユースには全て報告するつもりだったし、元々それがラキユースの頼み事。話したことをラキユースがどうするかを制限するつもりもない。双方にとって益がある。

「わかった……いや、わかりました。もう口は挟みません」

「感謝致します、イビルアイ殿」

頭を下げるモモン。

その様子を見届けてアインズは指……いや骨を鳴らして仕切り直しの体を示す。

「何処まで話したか……そう、共栄圏を敷きたいと考えている。この村は状況的に王国から独立する形になった。エンリ、今後どういことが起こるか想像できるかね？」

「え、えっと……せ、戦争になる、とかでしようか？」

ようやく落ち着いてきた思考。

とは言えエンリに政治的な推移等考えられるわけもない、スケールが大きすぎる話。

「そうだな、今のままではそうなる可能性もある。というのも独立した以上王国とは政治的なやり取りを経る必要があるからだ。良くて

戦争、悪くて悪条件を突きつけられた上での併合となるか」

「上手く、想像できませんが……はい。そうなるのかな、って思えます。でもそれを何とかする政治なんて、私も村の皆も出来ないと思います」

ゴブリンのまとめ役、ジュゲムにしてもそうだろう。

戦いが起きた上での判断は出来るかも知れない、ある程度の思考はめぐらされるかも知れない。だが彼はあくまでも戦争屋なのだ。

「かと言ってもう誰かに支配……いや、国の一部となることも抵抗があるだろう。そこで私はエンリ、君たちと取引をしたいのだ」

「と、とりひき!?!」

今回の件、全てがアインズの手のひらの上ではなかった。

全て、というよりはカルネ村の住人たちが自ら戦いの場に出てくることは想定外だったのだ。

この場を設けられることまでは予想していたし、同じ流れで自分たちの支配下に入れと告げるつもりだった。

「村の発展と維持に協力する、その代わり多種多様な種族の受け入れ皿となってもらいたい」

「受け皿……」

しかし彼らは立ち上がった。守られる立場を嫌ったのだ過去より今までの経験から。

そういった相手に対して支配下に入れと言うことは難しい、恩人の言う事ならで素直に全て従うか考えた時頷けなかった。

よしんば受け入れられたとしても、いずれ再び独立を目指すだろう、彼らはその刃を手に入れたのだから。

「お察しかも知れないが私の配下達の多くも異形種だ、提供できる人材もそう。村への協力を受け入れてくれることが多種多様な種族を受け入れることと同義であると考えて欲しい」

「……」

「無論だが、こちらからああしろこうしろといった指示や命令はしない。君たちが考え実行することに対しての助力に留めよう」

この会話を見ているイビルアイは冷たい汗が流れた感触を覚える。

(独立……どころか一大国家の設立、だな)

エンリはまだ言われたことを必死で考えているのだろう。

だが領くまで時間はそうかからないと思えた。魅力的すぎるのだこの話は。

支配下ではなく保護下。

アインズの言う共栄圏、その第一号として選ばれたのだカルネ村は。そして方が一何の問題もなく発展していくようなことがあれば。(こぞつて人材が集まってくる、言うように多種多様な種族が。世界の形が、変わる)

「まあよく考えてから結論を出して欲しい、村の皆に説明だつてしなくてはならないだろう」

「は、はい」

そこまで話してアインズは一步引いた、自分たちで選択したという体を取り付けたかったからだ。

ここで一気に話を決めてしまうことも出来ただろうが、やはり周知した上での賛同を引き出せるなら引き出したい。

そしてそれはアインズ……ナザリック側にしてもそう。

「モモン殿」

「何ででしょうか？」

話の矛先が変わる。

パンドラズ・アクターと事前に行っていた打ち合わせ内容から少し変わってもいるのだ、改めて。

「冒険者を辞められたのなら……うちで冒険者をしないかね？」

「それは、どういう意味でしょうか？」

「先の戦いでもそうだが、私はこの世界の冒険者を冒険者と考えていない。イビルアイ殿には悪いが、ただの傭兵団とでもいうかお使い係に思える」

「——っ」

侮辱の言葉だろう、少なくともイビルアイにはそう聞こえる。

「私の考える冒険者とは未知を切り拓く者のことを指す。未踏に挑み、未知を既知に変えるもの。私は今共栄圏という未踏に足を入れ

た、貴殿のような存在が欲しいのだよ。私の思う冒険者としてね」
「なるほど……」

だからこそ余計にモモンがどう返答するのかに興味を覚えた。

反論をしなかったのは大なり小なり心当たりというべきか、今の冒険者組合の本質を思っていると改めてしまったのだ。

蒼の薔薇での活動を考えてもそうだが、王女の依頼を個人的にという形で引受けることもそうだし、組合で受ける依頼にしてもある程度の情報があつた上で吟味できるという意味で未踏へ挑むなんて言葉からはかけ離れている。

自分より遥か格上に存在するだろう漆黒のモモン。

先に会ったナーベにしても引けを取らない実力を有しているのだろう、今この場には居ないが。

もしもアインズが言う冒険者とやたらに賛同を示すのであれば、自分たちは。

「私はその考えを支持申し上げます。そして、よろしくおねがい致しますとご返答しましょう」

「良かった。嬉しく思うよモモン殿」

「よして下さい。これより漆黒のモモン、ナーベは貴方の力です。呼び捨てにして下さい」

交わされる握手。

その裏でイビルアイは静かに唇を噛んだ。

「ただ一つ条件を」

「聞こう」

「先の王国軍が取った横暴。ああ言ったことを私は許せない、貴方はあの者たち、並びに王のような愚を犯さぬと信じたいですが——」

「うむ。モモン殿のような人物がいるならば逆に安心だ。愚を犯すものと私になったのなら遠慮なく裁いて欲しい」

パンドラス・アクターはようやく安心したように息を吐いた。

やや紆余曲折あつたがこれで当初の予定通りの形に収まったと。

「エンリは先も言ったようによく考えるといい。だが私は共栄圏を敷くという目標に足踏みするつもりは無い、どのような形であつても行

動はするだろう。その時君やこの村が近い位置にいることを願っている」

「は、はい……ありがとうございます……」
こうして。

アインズ・ウール・ゴウンは世界という未踏へと一歩踏み出した。

ナザリツク進出編 支配的融和

「顔を上げ、アインズ様、ロコモコ様の御威光に触れなさい」
守護者達、プレアデスに加えてナザリツクでも上位に位置する皆の顔が上げられて。

「うむ、まず一段落と言った所だ。一度全体の進捗確認、並びにこれからの方向性を伝えるために集まってもらった。皆、忙しい中感謝しよう」

そんなモモンガさんの声にすかさずデミウルゴスが何をおっしゃいますと返すこのやり取り。

最早テンプレではあるが、そうだけになんとか安心する感覚がある。

モモンガさんが言った通り一段落だろう、この場でようやく実感が湧いてきた。

なんというか気を張ったという意味で疲れたよね、他の皆はなんかつやつやしてるけどさ。

ともあれ今回のカルネ村に関する出来事は落ち着いた。

色々となるほどなど思える部分も多く十分に理解が及ぶ範囲。

「ではデミウルゴス。竜王国についてはどうだ？」

「はっ。女王、ドラウディロン・オーリウクルスは全面的なナザリツクに対する表向きの協力、事実上の従属を誓わせています。それを違えた時どうなるかを想像できる程度に頭は働くようですし、監視は要しますがひとまず裏切りの心配などは無いかと」

うんうん、俺は報告書だけでしかまだ見てなかったけど流石の手並みだよな。

直接面識は無いけれど、女王もまずまず国を統べるものとしての器量はあるみたいだし。ビーストマンって言う脅威がなければこちらに対する呼応はしつかりやれるだろう。

「よくやってくれた。今後竜王国に関しては私が築く共栄圏へ積極的

参加を促し指示に従わせる予定だ」

「勿体なきお言葉。畏まりました、監視兼常駐している配下のものと伝えます」

「と？ 配下を派遣してるのか。へえ、ちよつと変わったなデミウルゴス。てつきり自分で行くかとも思ったが……教育の成果、と言うには早すぎるかも知れないけどいい兆候だね。」

「共栄圏に関しては全員の報告を聞いてから説明しよう、では次にコキュートス」

「ハッ」

「蜥蜴人達……というよりはコキュートス隊だな。損害は無しと聞いている、良くやった」

「アリガタキオコトバ」

コキュートスはあのアンデッド達を率いた時と同じく自分では手を出さず指揮に徹していたらしい。その面だけを見ても随分な成長だと喜べる。

蜥蜴人達もナザリックの装備支援があるとは言え随分と強くなつたみたいだな、ハムスケに関しては元々この世界では強いって話だしわからないわけではないが武技を習得したって話も聞いている。

「やっぱり俺たちにしてもそうだがまだまだ成長出来る希望はある、か。」

「ピーストマンの一部を捕獲したとも聞いている、奴らに関しては使えそうならお前の自由にして良い。竜王国の忠誠維持にも利用できるだろうその辺りはデミウルゴスと連携しろ」

「カシコマリマシタ」

「抜け目ないよねほんと。」

あの白い蜥蜴人……なんだっけ、クルシユ、だっけか？ あいつを事前にモモンガさんの近くに呼んでいた時も思ったけど何気に細かな気配りが出来る。

「いやはや、出来る男はデミウルゴスだがやれる男はコキュートスだね。」

「エントマもコキュートスのフォローへよく務めた。お前の負担は理

解しているがこれからも頼ることは多くあるだろう、引き続き頼んだぞ」

「も、もったいなき……御言葉です」

お。まさか水を向けられると思っただけなのね？ 動揺がわかるよ、表情は動かないけどさ。

「先も言ったが、今後竜王国は都合のいい存在として扱う。とは言えある程度の国力を保たせる必要はある、その部分については追って話そう」

「はっ！」

竜王国に関する出来事は実にスムーズに帰結した。

今後どんな形であってもあいつらは俺たちに協力しなければならぬ。

これが救済などでは無いなんてことは流石にわかってるだろう、それだけに少しでも良い形を維持したいと思っただけだ。

当面、竜王国は都合のいい駒として扱える。不安が出るとしたら世代交代が行われた時期になるだろうがそれまでは。

「では次にカルネ村独立作戦、お疲れさまでしたロコモコさん」

「いえ、俺はモモンガさんの指示に従っただけですよ」

いやほんとにね。

今回俺ってばただの噛ませ犬しただけだし、特に苦勞してないし。

「またそんなこと言って……まあいい。ユリ、ルプスレギナはよく呼応と調整を行ってくれた」

「勿体なき御言葉です」

そうそう、むしろそっちですすごいのは。

「特にソリュシャン。お前の活躍は目覚ましいものだと言っているし、私もそう思う。この調子で励め」

「も、勿体なき御言葉です！」

あ、ちよつとプルプルしてる。プルプルプレアデ……いやまあそれはいいか。

後にも先にも考えて結構な仕事を割り振られてたんだよな、ワーカー達をカルネ村に誘導しながらタイミングの調整を行って。

終わったと思えばバルブロの捕獲だ、ほんとに忙しかったはず。ちなみにバルブロ捕獲は案外すんなりといったらしい。

カルネ村の住人に一当てされたのもあってだいぶボロボロだったとか。

いや、たかが村人の奇襲でボロボロになるって……まあよそう。

「では次にカルネ村そのものに関してだ。アルベド」

「はい。アインズ様のご提案なされた共栄圏への参加を表明いたしました。先立ってお伺いしていました新しい形の冒険者組合……クランに関する説明。並びに防衛維持戦力としてハムスケと蜥蜴人の一部を向かわせています」

クラン、ね。

いつだったかモモンガさんと話してたっけ、この世界の冒険者は冒険者じゃないっての。

大筋でモモンガさんの言う冒険者に対して賛同しているしその通りそれこそがと思う。

まあ個人的にはもうちよつと刹那的と言うか破滅的というか、死んで覚えるよろしく死ぬことを楽しむなんて考え方が俺にはあるけれど、それはユグドラシルってゲームだったからこそその考え方なんだろう。

「また、村で身柄を管理していましたワーカー達。ロコモコ様の推薦もあり、フォーサイトというチームへクランの勧誘を行っていますが愚かにも条件を提示しています、そのことについては後ほど、またその他のものに関しては帝国へと帰しています」

「うむ、ご苦労アルベド。条件とやらはまた聞こう。王国からは何かあったか？」

「第一王子、バルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフの身柄引き渡し要求。王国兵団に対する賠償請求。並びに即時武力の一切を放棄し、独立を撤回しなければ再び攻め入るとの勧告が来ております」

まじ？ え、まじで？

バカじゃねえの？ あ、アルベドもそう思う？ うん、こめかみピ

クピクしてる所見るにフォーサイトの条件とかどうでもいいレベルでキレてるなこれ。そりや事実上カルネ村はナザリック直下のものになったんだ、ひいてはモモンガさんのもんになった。それに対してその反応は、なあ。

と言うかまだ自分達の傘下にあるって思ってる節があるな？ 交渉のテーブルをまずは用意するべきだろうほんとは何考えてんだ？

あ。モモンガさん口開きっぱなしでこっち見ないで下さい。

「……そ、そうか。まあまずは今後のことを話してからだな、うん」
「畏まりました」

というかアルベドはよく直面して何もしなかったな？ モモンガさんの代理としていったから我慢できたのかな？ ……自制、効くようになったのね、ほろり。

「ご、ごほん。ともあれ共栄圏について、並びに今後のことについて話そう。共栄圏はその名の通りだ、まずはカルネ村を発展させると共に、ナザリックの一部を表に進出させる。そして以降ナザリックを中心とした多民族が集う国を作る。この共栄圏が魅力的なものになればなるほど大きな国となり、ナザリック、アインズ・ウール・ゴウンの名声は高まることになる」

将来的にはカルネ村が多民族が住むことができる中立地帯となるだろうか。

文化や文明が違うだろうし完全な共存は不可能だろうし、ナザリックの周りにそれぞれの種族村、街が集う形が未来予想図。

この話を先に聞いた時は思わず手を打ったもんだ。

カルネ村が類を見ない発展した都市となれば各地から多くの人、物資が集まってくるだろう。

敷く法的なものにもよるが、それぞれの安全や権利が脅かされないのであればそれこそ世界中から。

加えて。

「なるほど……そういうことでございましたか！」

「え？ ど、どうしたでありんすデミウルゴス」

まあ、気づかないわけがないよね。アルベドは代理の役目があった

から先に知っていたけど、知っていただけに当然ねと言った顔でデミウルゴスを見てる。

「ふむ、デミウルゴス。掴んだようだな、皆に話してみせよ」

「はっ！ アインズ様の深慮遠謀に遠く及びはしないと存じています
が——」

そして唐突に始まるテスト。

いや、これは俺たちにとってのテスト、だ。

「戦う前に勝つ。お教え頂きましたこの状況を作るためには些か遠回りかとも思っていました、先のカルネ村での件。言葉は不敬になつてしまいが特にロコモコ様……黒狼の存在を利用するのだよ」

「ロコモコ様を……？」

ピクリと反応するのはルプスレギナ。はいはい、ステイスティ。全然悪いことじゃないからね。

ともあれここまではオツケー。

「黒狼はこの世界にとって危険な存在。それは強者と言われている蒼の薔薇が確認しているし、その危険な存在と互角に漆黒のモモンが戦えることも確認している。しかしそのさらに上をいくのがアインズ様という事実を作り上げそれを示した」

そう、黒狼噛ませ犬プランだ。

しかし当然それだけではない。

「そのことでアインズ様が管理する共栄圏の安全性は格段に高まった。少なくとも王国やこの出来事を知る人間はそう思えるだろう。そして同時に黒狼による他国襲撃を行い、黒狼の危険性を高めるとどうなるかわかるかい？」

「え、えつと……漆黒のモモン、アインズ様の力を借りようとするであ
りんす？」

おお、シャルティアもいい感じじゃないか。いや、バカにしてるわけじゃなく。

「その通りだよ。助力を要請されるなら様々な条件をこちらに都合よくつけられるし、何より黒狼という存在が憚られる事なく各国へと敵対行動が取れる。危険であったり従属まで取り付けられないだろう

国を表立って滅ぼせる。人間という種に限らず多くの者は自分たちの繁栄を願う。共栄圏に属したほうが繁栄が叶うと知ればこちらから何もせずとも勝手にすり寄ってくるでしょう」

……よし。

モモンガさんと視線を合わせてみれば頷いてくれた。

そう、これは俺たちにとってのテスト。

守護者達と考えのすり合わせがしっかり行えているかというテストだった。

言い換えるなら勘違いが生まれないかの確認でもある。

「流石アインズ様……！」

アルベドやデミウルゴスが別の方向へ考えを飛ばす可能性もあった。

しかし今回は違う、完璧にモモンガさんが想定した中に収まった。

「うむ、デミウルゴスその通りだ。完璧だな」

「何をおっしゃいますアインズ様。ですがこのデミウルゴス、さらなる高みを目指しよりナザリツクへ貢献出来ますよう忠義に励む所存です」

……まあこの辺りの持ち上げはもう諦めようね、うん。

「今後ロコモコさんは黒狼としての活動、そして従来どおりの諜報部隊としての活動を兼任する。また、黒狼としての活動時はアウラ、マールは優先的にバックアップ出来るよう動け。戦力を必要とした場合はタイムした魔獣を応援に出すなどな」

「かしこまりましたアインズ様！ ロコモコ様、よろしくおねがいますー！」

「かか、かしこまりました！ よろしくおねがいますー！」

「ああ、よろしく頼むよ二人共」

王国だけで見るなら俺一人で十分だったりするが、慢心や油断はよくない。

それで反省したばかりなんだ、しつかりやろう。

でもなあ……さっきの要求内容を考えるにそこまで考えが至って無い感じなんだよな。ラナーの差し金？ ありえるけど、こういう場

面にまで力が及ぶわけでもなさそうなんだよな、うーん。

「ソリュシヤン」

「はっー!」

そしてソリュシヤンだ。

俺が兼任になるって言われた瞬間ちよつと動揺してたよね、不安はあるんだろうけど……だ。

「聞いている通りロコモコさんは兼任となる。諜報部隊と黒狼としての活動は確かに兼任出来る部分も多いだろうがやはり負担は大きい」

「はい、恐れながらも理解の及ぶ所で御座います」

出来ないことはない。が、やっぱりどうしても雑になるだろう。

今まで俺が部隊長に専念していたとは言えそれでも反省することばかりなんだ、先を考えれば我ながらゾツとしてしまう。

故に。

「ソリュシヤン、お前を諜報部隊の長とする」

「……?」

おつとソリュシヤン珍しく何言われているのか理解できないのか首を傾げたー! かわいいー!!

「ロコモコさんは諜報部隊の副官……というか相談役になる形だな、存分に頼るが良い」

「お、お待ち下さいアインズ様!!? そ、その! 私が、え……あの!?!」

はい、貴重なソリュシヤンの混乱シーンがこちらです。

いやまあバカやってる場合じゃないか、モモンガさんから目配せも来た。

「ソリュシヤン」

「ろ、ロコモコ、様」

はつきり言っつて。

まだ俺には及ばないだろう、不安もある。

「ソリュシヤン、俺の下じゃお前は腐る」

「そ、そのようなこと! 私は! ロコモコ様に遠く及びません!

これからも私をお導き下さい!」

わかる、わかるさ。

確かに俺の下にいてこのまま仕事を続けければ、俺のコピーにはなれる。

けどそれが腐るっていうもんだ。

「弟子は師匠を超えるもんだ。ソリュシヤン、思う存分やってみろ。お前が俺に相応しくないんじゃない、俺がお前の器を満たすに足りないんだ」

磨けば俺よりも光るだろうナザリックの皆だから。

そしてそう一番自信を持って言えるのがソリュシヤンだから。

「頼んだぞ」

「」

目を真っ直ぐ見据える。

視界の端に映ったルプスの一瞬嫉妬したような表情が見えたけど、まあそれは後で。

超えてくれ、ソリュシヤン。

お前が一番最初に俺へ忠誠を捧げることが出来た存在なら、一番最初に俺を超えられると証明出来る存在になってくれ。

それこそが、俺に忠義を示すことだと知ってくれ。

「――畏まりました」

「うん」

そんな想いを目に込めて。

「これよりソリュシヤン・イプシロン！ 至高の御方様達へと遠く及ばぬ身ではありますが！ ナザリックへの忠義を諜報部隊長として示すことを誓います！」

「うむ。励め」

短く簡素なモモンガさんの声。

だけど俺と同じだろう、胸にはきつと喜びの感情。

「おめでどう御座います」

「おめでどう、ソリュシヤン」

――おめでどう。

――おめでどう。

玉座の間に響く万雷の拍手。

こうして今、俺の一つの役目が終わった。